

平成25年度版

平成24年度採択 産業界のニーズに対応した教育改善・充実体制整備事業

「地域産業界連携教育力改革プロジェクト」

成果報告書

学校法人藤ノ花学園
豊橋創造大学

目次

巻頭言	1
はじめに	2
1. 『地域産業界連携教育力改革プロジェクト』概要説明	3
2. 文部科学省申請概略	9
3. 事業グループ活動報告	15
3. 1 4つの教育事業	17
(1) メンタルタフネス講座グループ	19
(2) 自己理解促進プログラムグループ	23
(3) 地域企業連携プロジェクトグループ	27
(4) 3者間協働インターンシップグループ	33
3. 2 教育体制・産業界ニーズ把握体制の整備・連携推進	39
(1) 連携事業推進グループ	41
3. 3 教育体制・産業界ニーズ把握体制の後方支援	45
(1) ユビキタスキャンパスグループ	47
(2) 大学コミュニティグループ	53
4. 補助資料	61
① プロジェクト活動成果報告書（教員）	63
② プロジェクト活動成果報告書（学生）	85
③ 社会人基礎力評価の集約結果	135
④ 2013年度中部圏大学人材育成チャレンジ報告	153
⑤ 大学教育改革フォーラム in 東海2014発表資料	159
⑥ プロジェクト活動 協力企業・団体一覧	169
⑦ 各種発行パンフレット	173
⑧ 行事実績一覧	179



巻頭言

「地域産業界連携教育力改革プロジェクト」
事業推進代表者

学長 伊藤 晴康

豊橋創造大学・豊橋創造大学短期大学部は、地域密着型の高等教育機関として、藤ノ花学園の伝統である実践的教育を受け継ぎ、地域に貢献できる職業人を育成している。

「地域産業界連携教育力改革プロジェクト」に参画している情報ビジネス学部キャリアデザイン学科及び短期大学部キャリアプランニング科は、共に幅広い専門的職業人を育成することを目的として設置された学科である。各学科の教育目標は下記の通り学則に定められている。

情報ビジネス学部キャリアデザイン学科

生涯にわたっての高い就業能力をつけさせるため、健全な職業観と就業意識を育成し、経営学と情報学を基盤として時代の要請に沿った専門的職業教育を施すことを目標とする。

短期大学部キャリアプランニング科

短期大学部の教育理念に則り、社会人として求められる教養やマナーを身につけさせると同時に、健全な職業観、就業意識を育成し、情報学を基盤として時代の要請に沿った職業的教育を施すことを目標とする。

上記の教育目標に沿い、学生の就業能力を高めるために、地域の産業界と連携した実践的な教育プログラムとして実施された教育活動をまとめたものが本誌である。就業力育成のための実践的な教育の取り組み事例として、多くの方々に情報を提供できれば幸いである。このような地道な教育の積み重ねにより、地域に人材育成の面で貢献する大学として、今後も努力を継続したい。

2014年3月



はじめに

「地域産業界連携教育力改革プロジェクト」

事業推進責任者

豊橋創造大学情報ビジネス学部長 佐藤 勝尚

本報告書は、平成 24 年文部科学省にて採択された『産業界のニーズに対応した教育改善・充実体制整備事業』の活動とその成果を取りまとめたものである。この事業は、三重大学を代表校とした中部圏 23 大学による「アクティブラーニングを通じた教育力」および「地域・産業界との連携力」を通して、教育改革力を強化する取組である。本学情報ビジネス学部ならびに短期大学部キャリアプランニング科は、東海 A チームに属して幹事校と副幹事校からなる中部地域大学教育改革推進委員会の調整のもと、連携 FD を通して教育改革の実践過程で生まれる成功と失敗を共有しつつ教育力を高め、中部圏産学連携会議を通して大学が育成しようとする資質と地域・産業界のニーズに関する対話を行うために『地域産業界連携教育力改革プロジェクト』を展開するものである。このプロジェクトでは地域・産業界のニーズに対応した能力を育成するため、学生参加型授業、共同学習、課題解決学習や PBL などを教育現場に取り入れ、就業力に関わる学生の能動性を高める改革を進めるとともに社会現場での実践教育としてのインターンシップを高度化するものである。

本学では『大学生の就業力育成支援事業』として、これまで情報ビジネス学部・経営学部と同短期大学部キャリアプランニング科が共同で取り組んできた「持続型職業人 SOZO プロジェクト事業」を発展させ、『地域産業界連携教育力改革プロジェクト』として次の 4 事業を柱とした事業展開を進め、学生の総合的な「就業力」の育成を図るものである。

本報告書をご覧いただき、忌憚のないご意見をいただければ幸いである。

豊橋創造大学

地域産業界連携教育力改革プロジェクトの概要

I. 4つの教育事業

- ① メンタルタフネス講座
- ② 自己理解促進プログラム
- ③ 地域企業連携プロジェクト
- ④ 三者間協働によるインターンシップ

II. 教育体制整備・産業ニーズ把握体制の整備

- ① 社会人基礎力育成体制の整備
- ② 他大学との連携事業による教育方法の改善

III. 教育体制整備・産業ニーズ把握体制の後方支援

- ① ICT 環境整備による学生の ICT 能力育成と各事業内省環境の整備
- ② 大学コミュニティ形成による学生支援

2014 年 3 月

『地域産業界連携教育力改革 プロジェクト』概要説明

地域産業界連携教育力改革プロジェクトの概要

1. 産業界ニーズに対応した教育改善・充実体制整備

本補助事業は、産業界ニーズに対応した人材育成を大学や短期大学などの高等教育機関で実施するための体制整備を進めるための補助事業として、平成24年度に文部科学省に創設された事業である(以下「産業界ニーズ補助事業と呼ぶ」)。中部圏では、「アクティブラーニングを通じた教育力形成」「地域・産業界との連携力形成」を目的とした事業を中部圏23大学の共同事業として申請して採択されている。中部圏23大学では、主に教育力を探求する「東海A(教育力)チーム」、産業界ニーズ把握方法を探求する「東海B(産業界ニーズ把握)」、「北陸地域チーム」、「静岡地域チーム」の4グループに分けて、教育方法や産業界ニーズ把握方法について考え方や方法論を取りまとめるとともに、それらを共有することによって、教育力向上を目指す事業になっている。豊橋創造大学並びに豊橋創造大学短期大学部は「東海A(教育力)チーム」に所属して、アクティブラーニングによる教育の実質化を目指す教育体制整備を目標に事業展開することになっている。

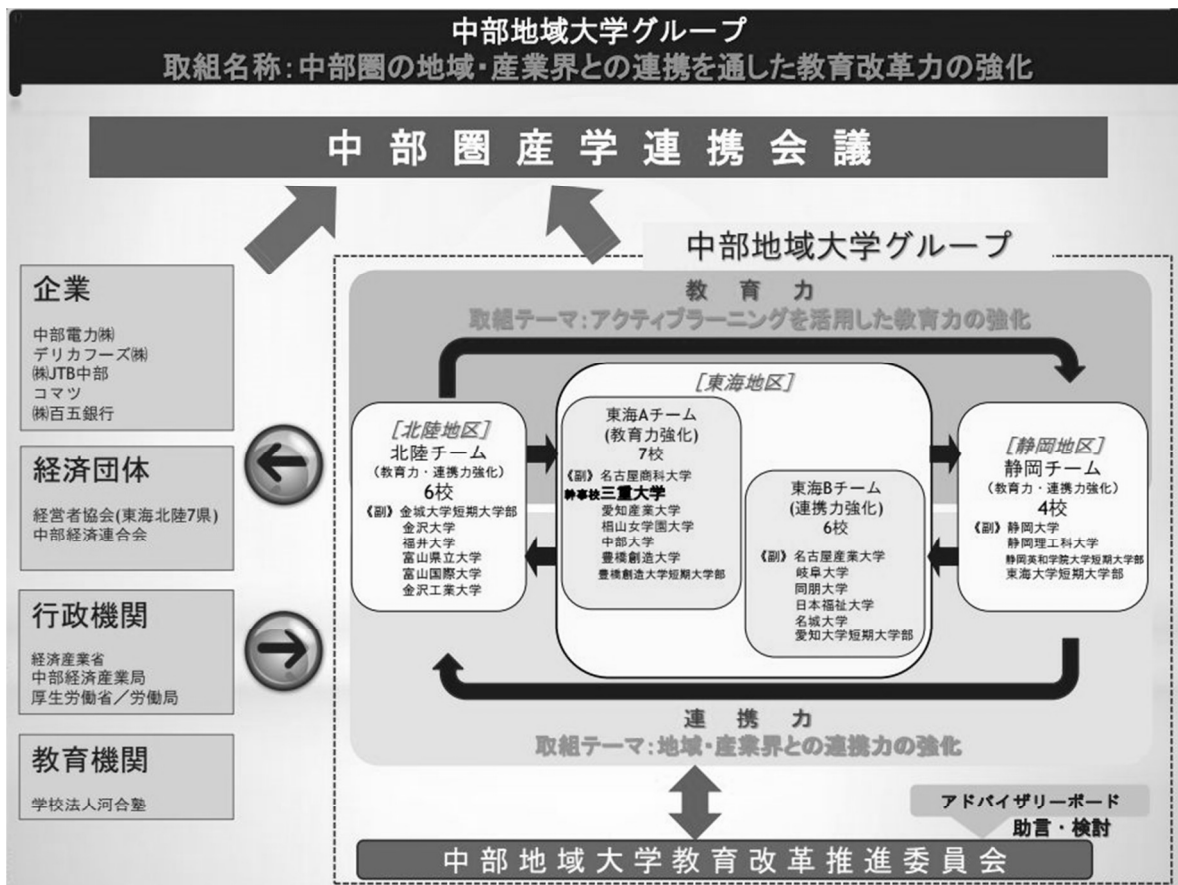


図 1.1 中部地域大学連携産業界のニーズに対応した教育改善・充実体制整備事業
 関連WEBページ <http://s-needs-chubu.pj.mie-u.ac.jp/>

2. 地域産業界連携教育力改革プロジェクト

豊橋創造大学では、「産業界ニーズに対応した教育改善・充実体制整備」(産業界ニーズ補助事業)への参加にあたって、育成すべき資質とその教育体制および産業界ニーズ把握方策について検討し、「地域産業界連携教育力改革プロジェクト」(以下、CKP と呼ぶ)として、教育体制整備・産業界ニーズ把握体制の整備を推進することになった。

豊橋創造大学では、ディプロマポリシーで定める就業力育成を目指す。具体的には、社会人基礎力を養成できる教育システムの構築を行う。また、人材養成に関する産業界ニーズを把握する体制整備を行う。そのために

(I) 4つの教育事業

- (1) メンタルタフネス講座
- (2) 自己理解促進プログラム
- (3) 地域企業連携プロジェクト
- (4) 三者間協働によるインターンシップ

(II) 教育体制整備・産業界ニーズ把握体制の整備

- (1) 社会人基礎力育成体制の整備
 - ・教育効果測定・指導方法検討 WG
 - ・教育力向上研修会 (3回)
 - ・キャリア形成科目群などでの教育展開
- (2) 他大学との連携事業による教育方法の改善

(III) 教育体制・産業界ニーズ把握体制の後方支援

- (1) ICT 環境整備による学生の ICT 能力育成と各事業内省環境の整備
- (2) 大学コミュニティ形成による学生支援

の3つの機能を実行するグループを組織化した。これらの担当教員と事務職員で「地域産業界連携教育力改革プロジェクト(CKP)」とその運営のための委員会を設置して、事業実施することになった。これらの機能全体を以下の図 1.2 にまとめる。

具体的な学生に対する教育展開方法を図 1.3 に示す。上記の3年生で実施する4つの教育事業に加えて、キャリア形成科目などからなる14科目においても社会人基礎力養成に取り組むことになっている。社会人基礎力に代表されるように態度、志向に関する育成には、学生生活における自身の内省が不可欠である。そのため、育成資質に関する評価を定期的に行い学生にフィードバックする機会を提供している。図 1.3 に教育プログラムと評価のタイミングがまとめられている。

地域産業連携教育力改革プロジェクト(CKP)全体機能図 v400

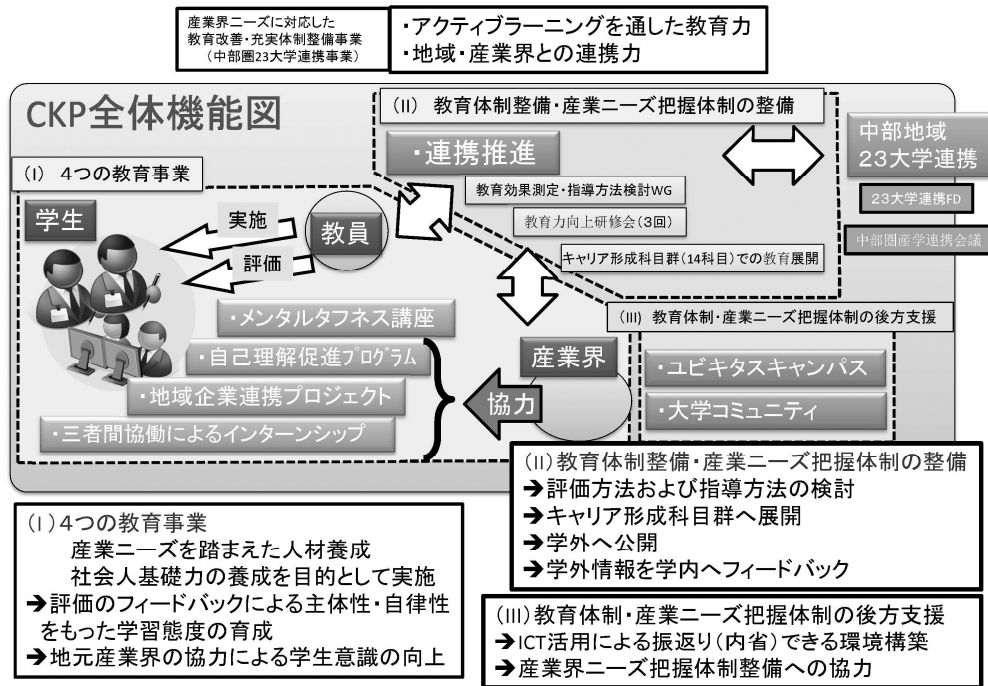


図 1.2 地域産業連携教育力改革プロジェクト (CKP) 全体機能図

経営学部における社会人基礎力養成の過程(評価のタイミング)

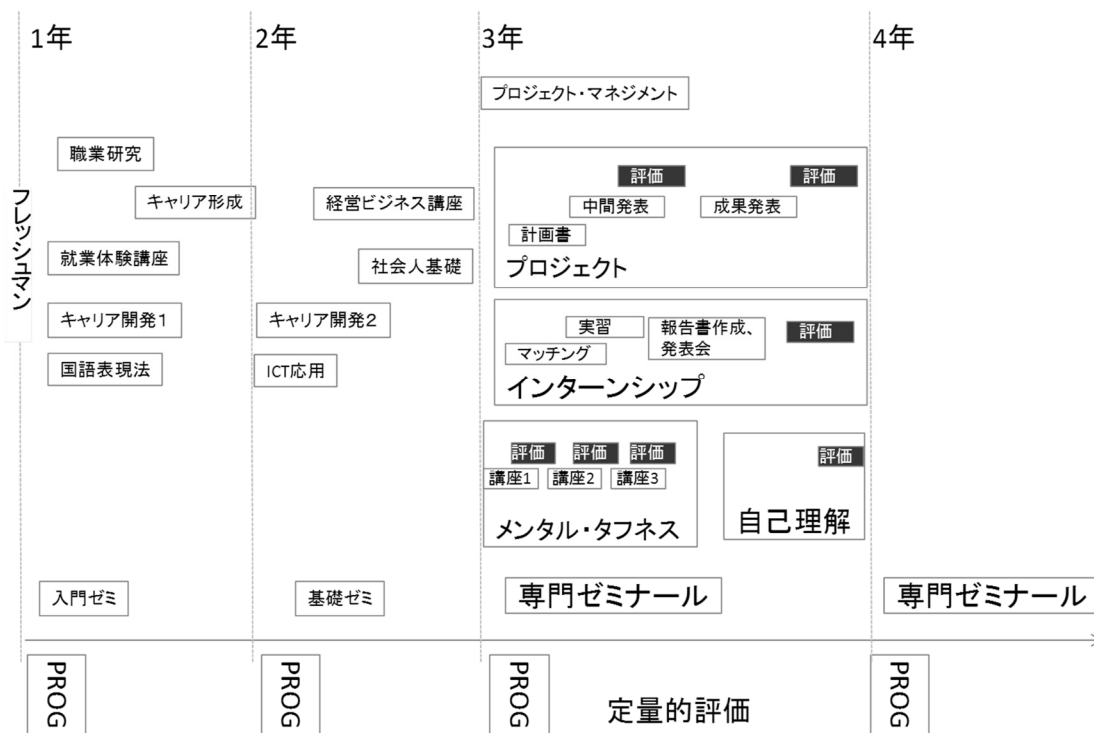


図 1.3 社会人基礎力養成のための教育プログラム

3. 地域産業界連携教育力改革プロジェクト実施体制

本学では「産業界ニーズに対応した教育改善・充実体制整備補助事業」を「地域産業界連携教育力改革プロジェクト（CKP）」として実施する。「アクティブラーニングを通じた教育力形成」「地域・産業界との連携力形成」を目的として育成すべき資質の明確化とその教育体制整備および産業ニーズ把握方策のために、3つの機能を有したグループの役割を分離して組織化して事業展開を行う。

（Ⅰ） 4つの教育事業

- ・メンタルタフネス講座
- ・自己理解促進プログラム
- ・地域企業連携プロジェクト
- ・3者間協働インターンシップ

（Ⅱ） 教育体制整備・産業ニーズ把握体制の整備

- ・連携推進

（Ⅲ） 教育体制・産業ニーズ把握体制の後方支援

- ・ユビキタスキャンパス
- ・大学コミュニティ

これらの事業詳細は、次節以降で説明する。

文部科学省申請概略



中部圏の地域・産業界との連携を通じた教育改革力の強化 本学取組について

本学取組名称	地域産業界連携教育力改革プロジェクト
選定年度	平成 24 年度
<p>○学生の社会的・職業的自立のための取組のこれまでの実績について</p> <p>・これまでどのような方針・視点を持って取組を実施してきたか</p> <p>豊橋創造大学経営学部(2012 年に情報ビジネス学部から改組)における教育目的は、学生の就業力の育成である。ビジネス社会で求められる経営学、会計・財務領域、ICT 領域の基礎的専門知識の教授に加えて、主体性やコミュニケーション力などの態度・志向性を養成することを目標にした教育を展開している。例えば、産業界での動向についての見識を深めたり、就業のあり方を思考する機会を提供するために、<u>産業界の第一線で活躍する経営者による講義(総合講座)の開講やインターンシップを正課科目として実施している</u>。また、学生の就業感を形成するための教育プログラムとして、<u>厚生労働省の Yes プログラムに準じた科目の創設や学生に近い卒業後 5 年程度の OB による就業についての講演(キャリア形成)を開講している</u>。これまでの専門知識教育に追加する形で、<u>就業力に関する正課授業を運営している</u>。これらの授業では、<u>座学だけでなく、学生のアクティビティが向上するような参加型の講義運営を試行している</u>。</p> <p>さらに、学生参加型活動もしくは学生の主体的活動として、一部の学生による企業と協働する様々なプロジェクト活動(※1)を支援して、学生の総合的な就業力育成に尽力してきた。例えば、東海ラジオにおける番組企画、制作を実際に行うプロジェクト、B 級グルメ開発を企業と共同で行うプロジェクトなどの指導と支援を行った。地元企業と協働する中で学生自身がプロジェクト運営を学ぶとともに、就業について見識を深める活動になっている。2005 年には、長年の駅前チャレンジショップ運営が評価され都市再生本部都市プロジェクト第十次決定にも選定された。学生に対する教育が地域にも貢献する活動として評価されるとともに、学生自身が、自治体や商工会議所や商店街などの地元企業と協働した事業を行ったことで、自己の就業感の形成が支援できたと評価している。以上のように、学生の専門知識教育に加えて、就業観を形成するために、主として産業界からの協力を得た教育活動を展開してきた。</p> <p>学生の社会的・職業的自立には、基礎的知識に加えてコミュニケーション力や主体性などをもって状況に応じて対応できる能力が不可欠であり、大学においてもその養成に努力が必要である。この様な認識のもと、<u>本学部では、上記に示したような地域社会や産業界での活動を学生自らが体験できる機会を提供してきた</u>。企業の協力の下、学生は企業との協働を通して、<u>社会人としての役割やコミュニケーションのあり方、仕事への取り組み方などを体感でき、その結果、自らの就業力の醸成がなされることを期待している</u>。</p> <p>また、全学生の就業に係る総合的基礎能力育成を目標に、平成 22 年度大学生の就業力育成支援事業への採択を契機に、<u>地元企業との協働プロジェクトを全学生参加の教育プログラムとして拡張して取り組んでいる</u>。平成 23 年度には、情報ビジネス学部約 80 名が 13 の企業協働プロジェクトに取り組み、8 月の中間報告会、12 月の成果報告会を実施し、協力企業からも評価を頂いた。また、メンタルタフネス講座は平成 23 年度に 4 回実施し、就業のあり方や集団での行動についての考察などを通して、様々なストレスに対する対処方法を体得できる講座になった。</p> <p>※1 2003 年 静岡 FM との共同プロジェクト(路上ライブの紹介・参照 web 頁の作成)、2006 年結納店滝崎との共同プロジェクト、2007 年 フリー紙 Planets との共同プロジェクト、2008 年 東海ラジオとの共同プロジェクト 仕事探究番組「オシゴトーク」の制作、放送プロジェクト、2010 年 B 級グルメ開発プロジェクト など。</p>	

・これまでの取組の成果を、どのようにカリキュラム・ポリシーに反映させてきたか。

これらの活動を学生の社会人基礎力並びに主体性や協調性を涵養するために、経営学部並びに情報ビジネス学部では、全学生に展開する教育プログラムとして下表に示す正課授業を開講している。専門領域である経営学、会計・財務、ICT 関係の専門科目に加えて、態度志向の養成や協調性を養成するために「職業観・就業観養成」、「就業基礎能力」、「協働活動力」、「意見形成力」の 4 つの項目に分けて、正課授業を割り当てた教育を展開している。4 つの領域は、それぞれ独立したものではなく、相互に補完して学生に総合的な能力育成を目標において、教育展開することになっている。

特に、3 年時に 1 年間をかけて地元企業との協働作業を進めるプロジェクト演習は、平成 22 年度大学生の就業力育成支援事業への採択を契機に正課授業として開講している。これらの正課授業は、学内で教育を進める専門知識と企業社会で必要とされる能力を学生自ら体験の中で学ぶ実践的教育として位置づけている。さらに、正課外の教育プログラムとして開催するメンタルタフネス講座やキャリアセンターが担当する学生支援を進めることで、教育目標である就業力の育成を支援する体制を整えている。このように、カリキュラム・ポリシーの整備とその具体化された正課授業に加えて、課外授業やキャリアセンターの学生支援を通して、学生の主体性や協調性の醸成とともに、就業後、継続した就業を可能にする教育に取り組んでいる。学生就業力を中心的課題に位置づけ、教育プログラムの具体化を進めている。

表 就業力養成のためにカリキュラムに組み込まれた科目

	職業観・就業観養成	就業基礎能力	協働活動力 (グループ活動)	意見形成力 (少人数教育)	キャリアセンタ 学生支援
1 年	職業研究 (半期) キャリア形成 (半期) 就業体験講座 (企業見学 4 回)	キャリア開発 1 (半期)	フレッシュマンセ ミナー (*)	入門ゼミ (通年)	進路就職面談
2 年	経営ビジネス講座 (半期)	国語表現法 (半期)	パソコン応用 (半期)	基礎ゼミ (通年)	
3 年	インターンシップ	キャリア開発 2 (半期)	プロジェクト・マ ネジメント プロジェクト演習 (通年)	専門ゼミ (通年)	インターンシッ プのサポート 就職ガイダンス
4 年		社会人基礎 (半期)		専門ゼミ (通年)	就職活動支援

(*) は正課授業外で実施

○本事業において実施を計画している内容について

・大学における人材育成と産業界ニーズとのギャップ、その対応について

大学における人材育成と産業界のニーズとのギャップについて、最も指摘される点の1つは「学生の主体性・創造性の欠如」である。これは、企業入社後において、与えられた仕事しか出来ない、仕事上の問題点を自ら発見し、目的を設定し、仮説を立て、創造的に解決していくという社会人として必要な姿勢が欠如している状態である。この問題は、学生の能力が欠如しているのではなく、彼らがこれまでの人生経験において、目的を持って主体性と創造性を発揮する機会が十分に備わっていなかったことにあると考えられる。大学全入時代において各大学の学生サポートが非常に手厚くなる中、学生が「自らの力」で主体的に活動する機会や、創造的に物事を解決していく経験が減少してしまっていることが原因として推測される。そこで、この問題に対応するため、本学では『大学生の就業力育成支援事業』としてこれまで情報ビジネス学部と同短期大学部キャリアプランニング科が共同で取り組んできた「持続型職業人SOZOプロジェクト事業」を継続的に推進していくことを決定した。今回は、新たに「産業界のニーズに対応した教育改善・充実体制整備事業」として、本学は東海A

チームにおける取組みにおいて「アクティブラーニングを活用した教育力強化と検証」の具体的展開を他大学と連携を取りながら、以下の4事業を柱とした事業展開を進め、学生の総合的な「就業力」の育成を図ることとする。

なお、この「産業界のニーズに対応した教育改善・充実体制整備事業」は、情報ビジネス学部が主体となって実施するものであるが、平成24年3月に情報ビジネス学部を募集停止としたため、終了年度まで継続的に行うとともに、平成24年4月より開設した経営学部にて継続をするものである。

① メンタルタフネス講座の正規科目化への取り組み

今回は、平成 22 年度「大学生の就業力育成支援事業」に採択された「メンタルタフネス講座」を改編し、更に以下の事項②の「自己理解促進のための採用面接官の擬似体験（バーチャル人事体験）」との連携を図ることで、総合的な就業力の育成と産業界ニーズとのギャップを埋めるプログラムを委託業者と共同で開発する。これまでの「メンタルタフネス講座」は、学生の「メンタル面の育成」を通して、就職後の早期離職などを防止するための講座である。本講座において、学生はストレス対応、モチベーションコントロール、目標設定などの理論的背景と、それを活かす「場」の発見や就職活動における活用方法を学んできた。今年度以降は、これまでの実施経験と学生からの要望を講座に反映させて、内容の改編を行う。具体的には、運営方法(実施時間、場所等を含む)の改善や内容の改善(効果測定を基にしたプログラムの精査など)、そして新たに事項②の「実践講座」を追加することによって、直近の目的である内定に至るまでの総合的な「就業力」の育成を図る。また、本講座の大学内での位置付けと学生の意識付けを強化するために、①と②を連携させた新しい「メンタルタフネス講座」として位置付けて、キャリア科目群の実習科目の1つとして「正規科目」とする。

②自己理解促進のための採用面接官の擬似体験（バーチャル人事体験）

ここでは、アクティブラーニングによる学生の主体性・創造性を育成し、自己理解を深める活動として、学生が採用面接官を擬似体験するバーチャル人事体験を行う。このプログラムの大きな特徴は、学生が面接者と面接官の両者を体験できることにある。特に通常経験することの出来ない「面接官」の役割をオブザーバーとして体験することによって、企業の人事の視点からどのような学生が求められ、何が評価の対象となるのかについて、企業側のニーズの理解と、自己の職業観を理解することが可能となる。具体的には、まず学生に志望企業に対する志望動機(なぜその業界を志望するのか、なぜその企業を志望するのか、その企業でどのような仕事をしたいのか、など5、6問程度)を事前に考えさせ、模擬面接を実施する。面接官は協力企業の人事担当者や外部の新卒採用有識者、もしくは教員によって行い、実際の面接試験に近い形で実施する。学生はこの活動を通して、志望業界や志望企業、志望職種に対する理解を事前に自主的に進めることになる。次に、模擬面接が終了した学生は、面接官として面接官側に着席し、他の学生の面接をオブザーブする役割となる。基本的な質問や進行は協力企業の人事や外部の有識者、もしくは教員が行うが、学生はオブザーブをしながら、他学生の良い点や改善点を面接官の視点から体験的に学んでいく。他学生の面接を面接官側から観察するという体験を通して、自分自身に何が足りていないのか、座学では学べない体験ベースのアクティブラーニングを提供することによって、学生の自主性と実践を通じた創造性を涵養して総合的な就業力の育成を図る。プログラムの全体像としては、学生を対象とした面接に関する事前準備セミナーと実際の模擬面接を予定しているが、連携大学や協力企業による相乗効果をより大きなものとするため、関係者を対象とした事前説明会を実施するなど、柔軟な運用に努めることとする。

③ 地域企業と連携した プロジェクト体験

実社会におけるプロジェクトベースでの仕事の増加状況を鑑み、プロジェクトの体験を通して産業界ニーズとのギャップを埋める「プロジェクト演習」科目を展開する。具体的には、地域企業と連携し、学生が企画・立案・運営するプロジェクトを立ち上げ、そのプロジェクトの1年間の運営を通して、学生自らが学ぶ「創造プロジェクト」として推進する。また、それを補佐する講義科目として、プロジェクトの運営方法を学習する「プロジェクトマネジメント」講義科目を展開する。本「創造プロジェクト」は、担当教員と協力企業のサポートを受けながら、学生がゼロから企画を立ち上げ、自主的に運営を行い、試行錯誤を繰り返して創造的に成果物を生み出していくプロセスを体験させる。答えの用意されていない課題に複数人で取り組むことによって、学生は自主性や創造性、さらにはリーダー

シップや他者との協働がいかなるものであるのかを実地体験を通して学ぶ。また、同時に、企業の仕事の進め方や、ウェブサイト、携帯情報端末の活用方法など、就業後に直面するであろう実務的な仕事能力の醸成を図ることが可能となる。

④ 学生、連携大学、地元企業を含めた3者間の協働によるインターンシップ実施

学生自らが行動を起こすアクティブラーニングをコンセプトとして、それを達成するための5つの要素(グループワーク、ディベート、フィールドワーク、プレゼンテーション、振り返り)を包括的に含むインターンシップ活動を実施する。本学においては、これまでも地元企業と協働し、学生の主体性や創造性を育成する取り組みを実践してきた。本年度はこの活動を連携大学間にも拡大し、学生、連携大学、地元企業の3者間の相乗効果によって更なる成果を狙う。具体的には、学生グループに特定のテーマ(例:インターンシップ先の企業紹介を、インタビューや職場体験を通して学生が作成する、など)を与え、アドバイザーとして協力企業の社員を1名付けて貰う。この成果物の作成を通して、学生は自然とフィールドワーク、グループワーク、ディベートなどの活動を主体的かつ創造的に行うことが要求される。次に、連携大学間のインターンシップ活動合同報告会において、各大学の代表グループがプレゼンテーションを行い、教員や協力企業の社員が成果物の評価とフィードバックを行うことで、アクティブラーニングを伴った主体性・創造性育成の総合的な達成を狙う。更に、報告会の資料を年度ごとにストックしていくことにより、就職活動時の資料としての活用や連携大学間、地元企業との繋がり強化などの効果を得ることが可能となる。

・支援期間終了後の運用について

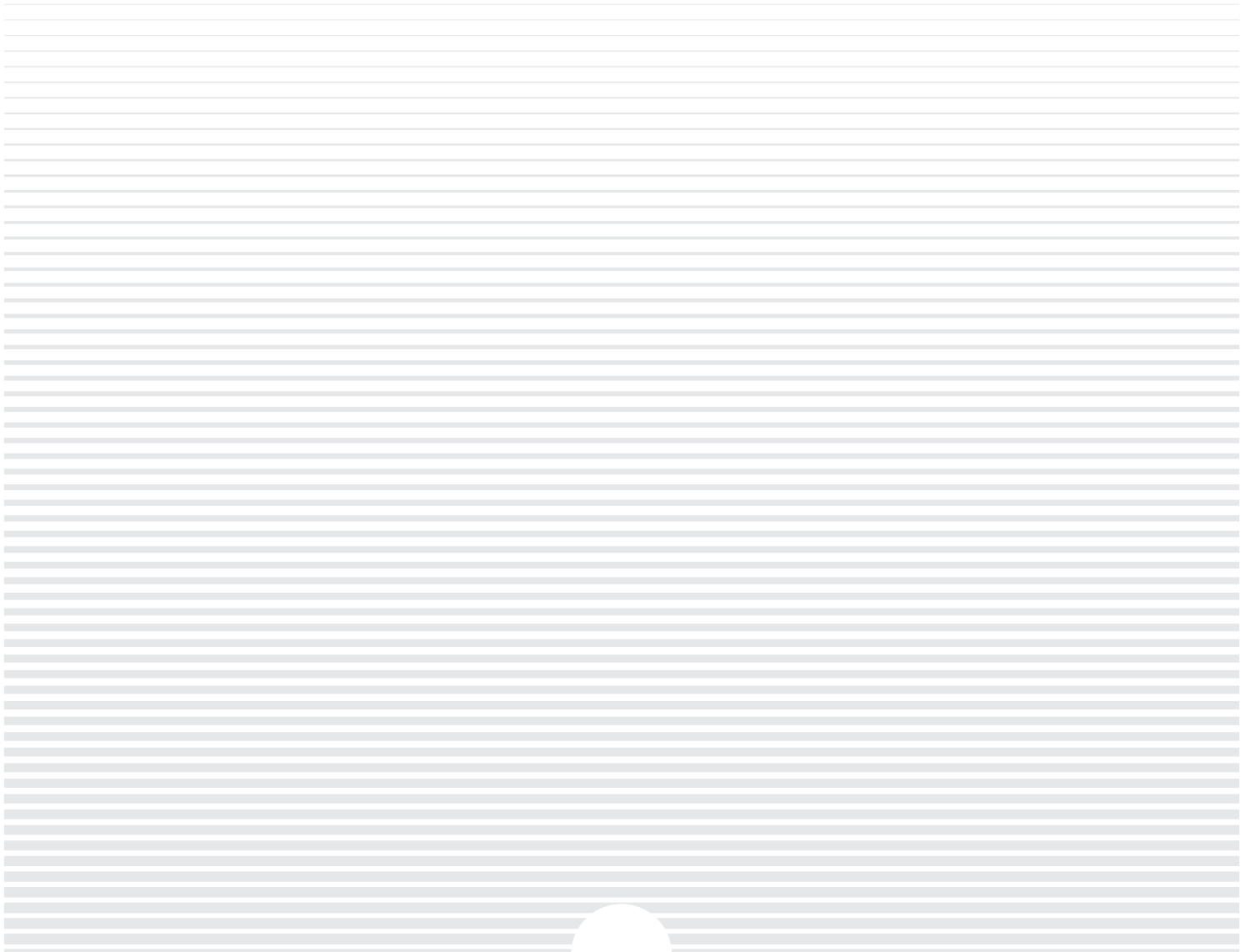
支援期間終了後の運用は、連携大学間、協力企業との関係を一層深め、地域内における自立的な運用の継続によって、ナレッジの更なる蓄積やブラッシュアップ、他地域への情報公開による貢献を第一の目標とする。また、本事業を通して教職員の教育力の強化・検証と評価を行い、学生の大学生活を充実させる。

事業グループ活動報告

3

3.1

4つの教育事業



(1)メンタルタフネス講座グループ活動報告

1. グループ事業の取組

メンタルタフネスグループでは、ストレス耐性や我慢の欠如などメンタルタフネスの不足に対応するため、セルフモチベーション、リーダーシップ、目標設定・目標達成などの理論的背景と実践的演習を組み合わせ、学生自身の経験知を高める教育プログラムであるメンタルタフネス育成講座を実施した。2年生3月に「第1回メンタルタフネス育成 ベーシック講座」(平成24年度事業で実施済み)、3年生の6月に「第2回メンタルタフネス育成 セルフモチベーション講座」、7月「第3回メンタルタフネス育成 メンタルタフネスを活かすビジネス研究講座」の計3回の講座を実施した。

『産業界のニーズに対応した教育改善・充実体制整備事業』の取組として本学が進める4つの事業のうち、「①メンタルタフネス講座の正規科目化への取り組み」「②自己理解促進のための模擬面接講座(自己理解促進講座)」を連動させるため、総合的な就業力の育成を目的とした運営方法・プログラム改善等を行い年3回実施とした。平成25年度の各回の講座の概要を以下に示す。

<<主なスケジュール>>

日程	実施事項
6月	第2回メンタルタフネス セルフモチベーション講座
7月	第3回メンタルタフネス メンタルタフネスを活かすビジネス研究講座
3月	第1回メンタルタフネス ベーシック講座(平成26年度新3年生対象)

<<主な行事>>

(1)「第2回メンタルタフネス セルフモチベーション講座」

開催日:平成25年6月8日(土)

会場:豊橋創造大学 A22 教室

参加人数:学生 59名、教職員 4名

講師:キャラメルソース(株) 代表取締役 初見 康行 氏

内容:セルフモチベーション

モチベーションに関する基本的な知識、モチベーションの代表的な理論(良く知られている考え方)、自分自身のモチベーション「持論」の研究



図 3.1.1 セルフモチベーション講座の様子

(2)「第3回メンタルタフネス メンタルタフネスを活かすビジネス研究講座」

開催日:平成25年7月30日(火)

会場:豊橋創造大学 A22 教室

参加人数:学生 59名、教職員 2名

講師:キャラメルソース(株) 代表取締役 初見 康行 氏

内容:仕事理解と企業研究

企業研究の必要性と考え方、ボードゲームを用いた企業研究(アパレル業界)、ケーススタディを用いた仕事理解(タイプ別アドバイス法)

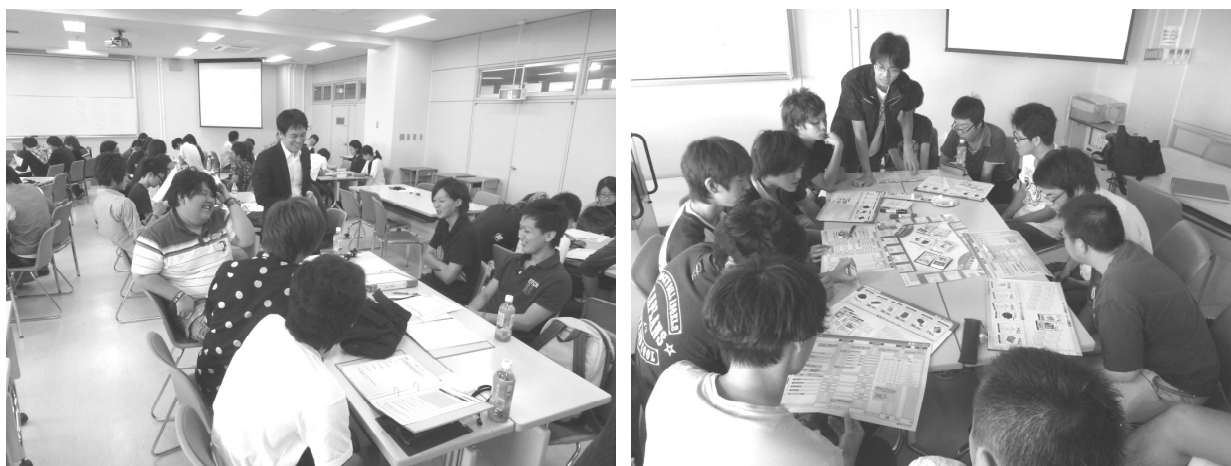


図 3.1.2 ビジネス研究講座の様子

(3)「第1回メンタルタフネス ベーシック講座 (平成26年度新3年生対象)」

開催日:平成26年3月27日(木)

会場:豊橋創造大学 A22 教室

参加人数:学生 31名、教職員 4名

講師:キャラメルソース(株) 代表取締役 初見 康行 氏

内容:自己のメンタルタフネス

メンタルタフネスの基礎知識、ストレスとは、自己のストレス状況の把握(ストレス度チェック、ストレスサー、)、ストレス対応のための資源、リラックス法などストレスに関する基本的な考え方をグループワークを通して学ぶ。

2. 活動成果

メンタルタフネス育成講座では、自己のメンタルタフネス、セルフモチベーションから初めて、仕事理解と企業研究、自己分析と就職活動というような内容で実施したが、各回の講座の学生アンケートの結果をまとめると以下の様になる。アンケートは5段階評価(評価 5. 非常に満足 4. 満足 3. 普通 2. 不満足 1. 非常に不満足)で実施した。全3回の講座を受講した学生からは、「就職内定までの道のりは長いですが、ストレスと上手く付き合いながら乗り切りたい」、「自分の事なのに自分では気づかないような発見があり、就職活動では自己分析がいかに大切なのかがよくわかった」等の感想が寄せられている。また、出席については全日程3日間について全員が受講できるよう各回の欠席者に対して補講を行い、

全講座について全員の出席となっている。

表 3.1.1 アンケート評価(概略)

	質問内容	第1回	第2回	第3回	平均
Q1	講座の満足度は?	4.0	3.6	3.6	3.7
Q2	講座の内容は、今後の日常生活や就職活動、働いていく上で役立つと思いますか?	4.2	4.0	3.7	4.0
Q3	講師の話は分かりやすかった	4.3	4.0	3.9	4.1
Q4	パワーポイントは理解しやすかった	4.1	3.9	3.8	3.9
Q5～	各種ワークの平均値	3.8	3.6	3.5	3.6
	平均	4.1	3.8	3.7	3.9

さらに本年度第2回セルフモチベーション講座、第3回ビジネス研究講座において、学生アンケートに社会人基礎力に関する項目を追加して事前事後アンケートを実施した。社会人基礎力に関する部分の集計結果のグラフを以下に示す。各回の講座の事前事後アンケートの差異から、講座ごとに効果が高い項目に差はあるものの、社会人基礎力(前に踏み出す力、チームで働く力)に関する押し上げ効果があることが分かる。

また、第2回セルフモチベーション講座と第3回ビジネス研究講座のアンケートにおいて、第2回の事後と第3回の事前の比較、あるいは第2回と第3回の事前アンケートの比較から、時間の経過で元に戻る項目が多いものの、社会人基礎力(前に踏み出す力、チームで働く力)に関連する項目について効果が見受けられる。

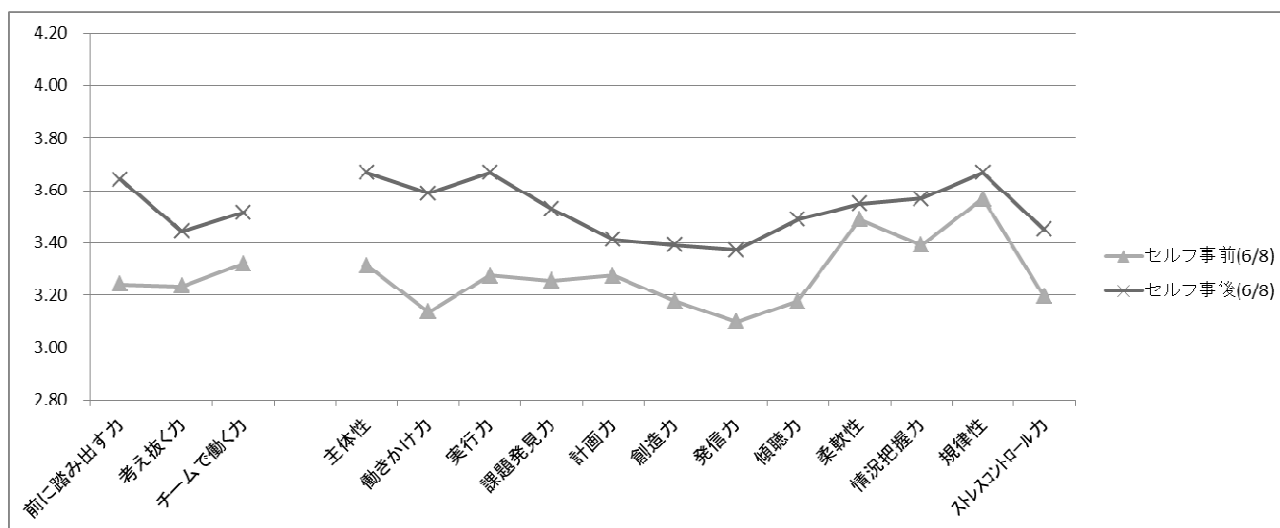


図 3.1.3 社会人基礎力アンケート評価(セルフモチベーション講座)

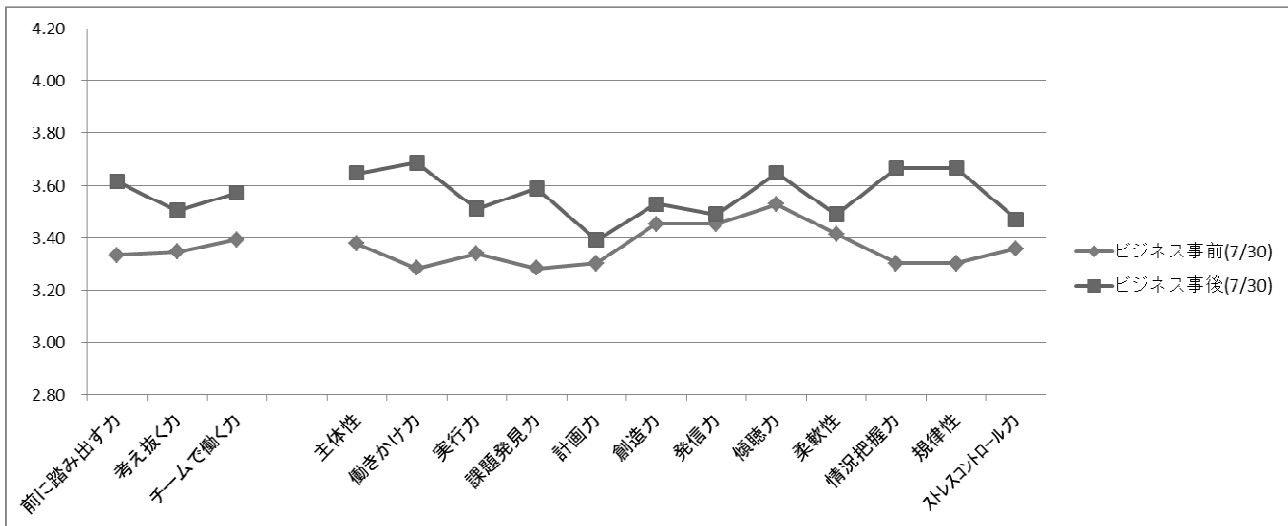


図 3.1.4 社会人基礎力アンケート評価(ビジネス研究講座)

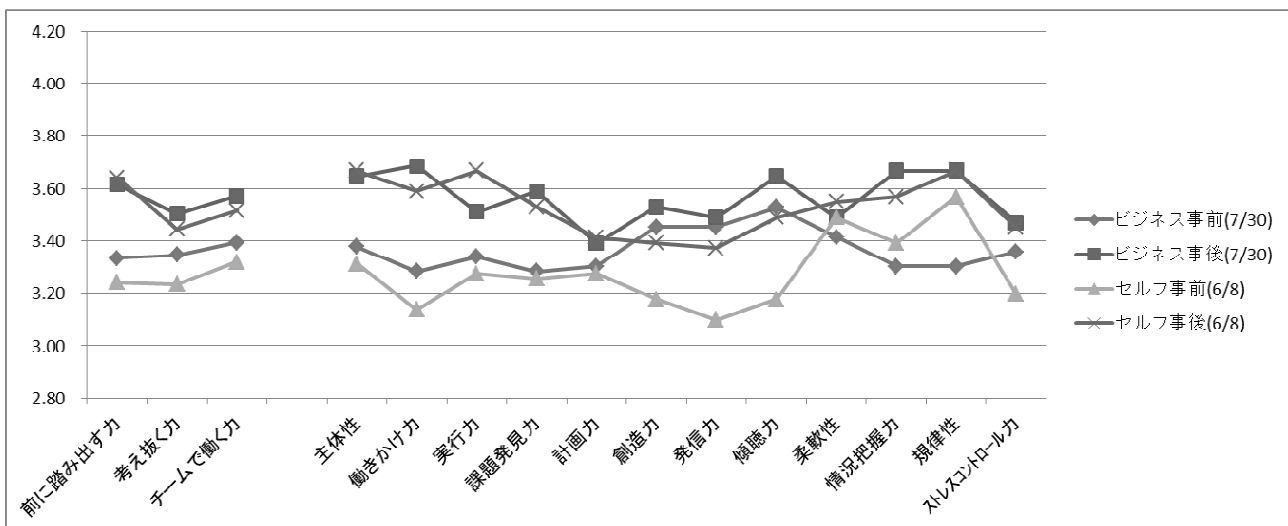


図 3.1.5 社会人基礎力アンケート評価(ビジネス研究講座)

3. 今後の課題点

アンケート評価の概略からは、おおむね3後半から4前後であり、多くの学生が講座の内容を理解し、メンタルタフネスへの意識付けも出来ていると考えられる。Q2 内容や Q3 講座の分かりやすさに対して Q1 講座全体の満足度や Q5 各種のワークの値が低い傾向がみられる事、第1回おもしろ村のような相互作用関連やボードゲーム関連は評価が高い様子である事などを考慮し各回のワークなどについては改善を行う必要がある。

以上の事から、メンタルタフネス育成講座については講座の意味付けと評価の低いワークについて改修を行うとともに、スケジュールについてはインターンシップおよび就職ガイダンス、2月の自己理解促進のための模擬面接講座と連携する形とする。就職ガイダンスと連携する事により、メンタルタフネス育成講座から始まり、インターンシップ、就職ガイダンス、自己理解促進のための模擬面接講座へと、学生の関心と行動をスムーズにつなげる事が出来る事を期待している。

(2) 自己理解促進プログラムグループ活動報告

1. グループ事業の取組

自己理解促進グループでは、アクティブラーニングによる学生の主体性・創造性を育成し、自己理解を深める活動として、学生が採用面接官を擬似体験するバーチャル人事体験を行う「自己理解促進のための模擬面接講座(自己理解促進講座)」を実施している。このプログラムの大きな特徴は、学生が面接者と面接官の両者、特に通常経験することの出来ない面接官の役割をオブザーバーとして体験することによって、企業の人事の視点からどのような学生が求められ、何が評価の対象となるのかについて、企業側のニーズの理解と、自己の職業観を理解することが可能となる事である。

言い換えると、学生に、面接を受ける学生の立場と、企業側の面接担当者の立場の両者を体験させ、企業側のニーズを理解させ、自己理解を深め、自らの職業観を形成させる。この体験により、学生は、他学生の良い点や改善点を自分の立場に照らし合わせて学んでいくことになる。H24 年度事業の集団面接および個人面接の面接ワークを体験する教員向け講習会の実施を踏まえて、H25 年度は2日間にわたり学生向けの「自己理解促進のための模擬面接講座(自己理解促進講座)」を実施した。

また、本学では既の実施しているメンタルタフネス育成講座と自己理解促進講座を一体化し、将来的には正規科目化(単位化)を目指している。その中で受講前後の学生の成長度を把握することを目的に、PROG(コンピテンシーテストのみ)を導入した。経営学部 2 年生については、事前測定として2月に受験、3月に解説会を行い、自らが持つ現時点でのジェネリックスキルを理解するとともに、さらなる成長に繋げる方法を探った。3年生については、2月の自己理解促進講座の後に事後測定として実施した。また、導入初年度である事から、学生への結果返却および指導のための教員向け PROG 講習会を行った。講座の概要を以下に示す。

<<主なスケジュール>>

日程	実施事項
4月	PROG 受験(学部1年生、2年生) 教員向け PROG 講習会
2月	PROG 受験(学部1年生、学部2年生事前測定) 自己理解促進講座
3月	PROG 受験(学部3年生事後測定) PROG 解説会(学部2年生)

<<主な行事>>

(1) PROG 受験(学部1年生)

開催日：平成 25 年 4 月 3 日(水)

会場：豊橋創造大学 A24 教室

対象：経営学部 1 年生 29 名

(2) 教員向け PROG 講習会

開催日：平成 25 年 4 月 11 日(木)

会 場：豊橋創造大学 3F 会議室

参 加 者：経営学部教員 12 名

講 師：リアセック 田辺明博 氏

内 容：学部 PROG 測定結果のデータ傾向解説と学生配布資料の見方および指導のポイント解説を実施。

(3) PROG 受験(学部 2 年生)

開 催 日：平成 25 年 4 月 20 日 (土)

会 場：豊橋創造大学 A24 教室

対 象：経営学部 2 年生 31 名

(4) PROG 受験(学部 2 年生事前測定)

開 催 日：平成 25 年 2 月 22 日 (木)

会 場：豊橋創造大学 A24 教室

対 象：情報ビジネス学部 2 年生 (事前測定) 60 名

(5) 自己理解促進のための模擬面接講座 (自己理解促進講座)

開 催 日：平成 26 年 2 月 27 日 (木) 28 日 (金)

会 場：豊橋創造大学 A24 教室

参 加 者：情報ビジネス学部 3 年 35 名

協力企業担当者 5 名

学部教員 12 名

講 師：学研メディコン 宗村善隆 氏、大藤律子 氏

内 容：協力企業の人事担当者には面接官として参加してもらい、集団面接および個人面接、グループディスカッションワーク部分の評価を依頼。

協力企業：医療法人整友会 総務課長 伊奈昌宏 氏

野島保険 (アメリカンファミリー生命保険代理店) 代表 野島啓 氏

甲羅グループ (株甲羅) 人事総務部 中尾紘康 氏

(株)エーアイエー (アイセロ化学グループ) ドコモショップ豊橋店

店長代理 大羽良尚 氏

医療法人豊岡会 部長代理 布村直人 氏

(6) PROG 受験(学部 3 年生事後測定)

開 催 日：平成 25 年 3 月 6 日(木)、10 日(月)

会 場：豊橋創造大学 D21 教室

対 象：情報ビジネス学部 2 年生 (事前測定) 59 名

(7) PROG 解説会(学部 2 年生)

開 催 日：平成 25 年 3 月 28 日 (木)

会 場：豊橋創造大学 A22 教室

対 象：経営学部 2 年生 31 名



図 3.1.6 自己理解促進のための模擬面接講座の様子

2. 活動成果

自己理解促進のための模擬面接講座では、協力企業人事担当者、学生と共に教員も面接官として参加し、集団面接と個人面接のワーク教材の質問シートと評価シートを用いて、人事担当者の立場を理解した上で、質問や評価を行う。1日目の講座において基本的な事項を学び、2日目に実際に集団面接および個人面接のワークを行う。協力企業担当者から気が付いた点や意見等を述べてもらう事によって、企業の人事の視点からどのような学生が求められ、何が評価の対象となるのかについて体験的に理解する。このように企業側のニーズの理解と、自己の職業観など自己理解を深めさせることが出来たと考えられる。また、この体験により、学生は、他学生の良い点や改善点を自分の立場に照らし合わせて学んでいくことになり、自己理解および内省をさせることが出来たと考えられる。

講座のアンケートの結果をまとめると以下の様になる。アンケートは5段階評価（5役に立ちそう、4やや役に立ちそう、3普通、2あまり役に立たなそう、1役に立たなそう）で実施した。アンケート評価の概略からは、学生は自己理解促進講座について理解し有益なものとしてとらえていると考えられる。また、協力企業担当者および教員の聞き取りからは、自己理解促進講座の模擬面接およびグループディスカッション等のワークについて良い評価が得られている。

表 3.1.2 アンケート評価(概略)

	質問内容	評価
Q1	講座の満足度は？	4.4
Q2	講座の内容は、今後の日常生活や就職活動、働いていく上で役立つと思いますか？	4.2
Q3	講師の話は分かりやすかった	4.3
Q4	パワーポイントは理解しやすかった	3.5
Q5	講座資料(ワークブック)は理解しやすかった	4.0
Q6～	各種ワークの平均値	3.9
	平均	4.1

また、学生アンケートの社会人基礎力に関する項目の集計結果を以下に示す。各回の講座の事前事後アンケートの差異から、講座の実施によって社会人基礎力に関する項目にも押し上げ効果があることが分かる。各項目をみると、相対的に自己理解促進プログラムの目的に沿った前に踏み出す力に関する項目が押し上げられていることが分かる。

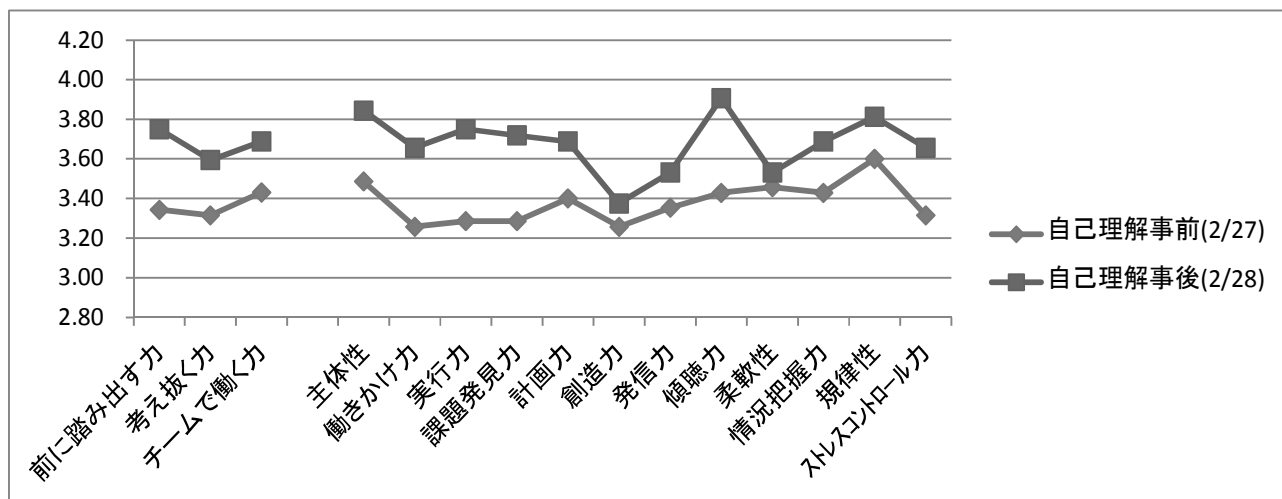


図 3.1.7 社会人基礎力アンケート評価

3. 今後の課題点

今後の課題は、次年度からの協力企業担当者との協働体制の整備と実施内容及び時間配分等についての検討である。また、自己理解促進プログラムは、メンタルタフネス講座と連携するものであるため、年間を通した全体スケジュールの調整が必要である。以上の事から、自己理解促進のための模擬面接講座については、実施内容、計画についての検討と共にスケジュールについてもメンタルタフネス育成講座から始まり自己理解促進講座、PROG による測定とフィードバックにより、学生の関心と行動をスムーズにつなげる事が出来るよう十分に実施内容の検討、内外に対する講座の意味付けの周知等について徹底するよう留意したい。

(3) 地域企業連携プロジェクトグループ活動報告

1. グループ事業の取組

(1) 実施事業の目的と活動内容

大学生の就業力育成支援事業においては、社会から求められる人材育成を行うため、これまでの学士課程教育に加えて地域産業界との協働事業を展開し、その中で学生が自ら行動して就業力を学修することを目的としている。ここでいう就業力としては、社会人基礎力とも言われている能力を想定しており、

- ・多くの年代を含んだ企業人やグループ内メンバーとのコミュニケーション能力
- ・グループの中で役割を果たすことができる協調活動についての能力
- ・グループの中で事業を推進するための主体的に行動できる能力

を含む総合的能力の育成を目的としている。本事業では地域企業との協働プロジェクトにおいて、企業側の担当者と学生との協働作業をおこない、設定した目標が達成できるような活動の計画・実行・評価を繰り返し行う。プロジェクトにおけるミーティングは学生が上記に関する自らの能力を認識できる場となっており、その気付きを指導教員が促す。その気付きの中で、学生の自己成長やグループメンバーを模範として成長できるような学習環境の提供を目指している。本学では、インターシップやビジネスプランコンテストへの参加を前提とし実践教育を正課授業の中で運営してきたが、本事業では、学年全員が外部企業との協働事業に参加することを前提に実施し、学生全体の就業力向上を目指している。

(2) 評価方法と学生指導方法の構築

地域企業連携プロジェクトでは、連携企業との協働作業を通して、学生の社会人基礎力養成を行うことになっている。学生が行うべきことを自律的に認識しそして行動できるような教育体制を形成しなければならない。上記にまとめた活動における行動規範に近接できるように指導教員並びに連携企業の担当者から適宜助言や指導を与える。プロジェクト活動中間の9月とプロジェクト活動終了後の1月に社会人基礎力シートを用いて、自己評価、教員評価、メンバー間相互評価を行い、学生本人にフィードバックする。学生にとっては、養成すべき能力が明示的に提示され、また、その改善に必要な事柄をこれまでの行動に対して助言されるので、次の行動計画や改善項目の理解が容易な教育体制になっている。学生活動の支援や助言などの指導方法について、連携グループ内でアンケート、考察、周知を行うことになっている。

(3) 実施事業の年度経過

平成24年度はプロジェクト活動に対する指導方法や企業協働方法の検討を行い、実際にプロジェクト活動を運営した。その指導結果を踏まえて、上記目的を達成するための指導方法や企業との協働方法の改訂を行いながら学生プロジェクトの推進体制を整備した。また、学生が活動に対して内省できるように学生の社会人基礎力の評価方法とそのフィードバック方法を定めて実践した。平成25年度は、整備した運営体制を踏まえて、学生の自律的成長を促進できるよう教員側のアプローチ方法を探究した。1年間のプロジェクト活動において、9月と1月の2回評価、面談指導を実施し、学生の内省できる機会を増加させた。

プロジェクト活動では、種々の情報の収集、共有、それらの加工と意見形成に取り組まなければ

ならないが、これらを効果的、効率的におこなうためには、ICT活用が不可欠である。平成25年度は、プロジェクト・マネジメントシステムを整備しプロジェクト活動支援を行った。また、ユビキタスキャンパスグループで整備 Sozo Passport に社会人基礎力シートの結果を掲載し、学生が身につけるべき能力に対する認識を高め、改善努力できる環境を形成した。平成26年度以降は、これまでの活動の充実に努力する。

<<主なスケジュール>>

日程	実施事項
4月	キックオフ講演会 プロジェクトメンバーの決定
5月から 7月	プロジェクトテーマの決定 プロジェクト計画の策定 目的, 協働企業の選定, 確定, プロジェクト計画書の作成
8月	中間発表会(プロジェクトテーマ, 目的, 行動計画, 春学期実施内容)を パワーポイントによる発表 配布資料(A4 1枚 2段組)の作成
9月	社会人基礎力評価シートによる評価 社会人基礎力評価シートに基づく, 教員面接と助言, プロジェクト活動後半に向けて自己行動計画の作成
9月から 12月	プロジェクトの推進
12月	プロジェクト成果発表会 パワーポイントによる発表 配布資料(A4 1枚 2段組)の作成 レジюме形式
1月	社会人基礎力評価シートによる評価 社会人基礎力評価シートに基づく, 教員面接と助言, 自己行動計画の作成 成果報告書(学生)、成果報告書(教員)の作成
2月	成果報告書(教員)をもとに, プロジェクト活動の総括会議(教育力向上 研修会)の開催 次年度計画の策定 プロジェクト実施に関する改良 自己内省支援方法の検討

<<主な行事>>

(1) キックオフ講演会「豊橋を知る」

開催日：平成25年4月16日(火)

会場：豊橋創造大学 A23 教室

講師：豊橋市企画部政策企画課 鈴木裕二氏

参加人数：情報ビジネス学部3年生 56名、キャリアプランニング科2年生 52名
教職員 14名

内容：豊橋市政策企画課 鈴木裕二氏を講師に迎えて、豊橋市における産業全体の特徴や推進事業についての講演を聴講した。また、「豊橋市のプロモーション」をテーマとしたグループ活動により、協働作業のために必要な主体性やコミュニケーション能力についての意義を認識した。



図 3.1.8 キックオフ講演会の様子

(2) プロジェクト活動中間発表会

開催日：平成 25 年 8 月 6 日（火）

会場：豊橋創造大学 B14 教室

参加人数：情報ビジネス学部 3 年生 57 名

教職員 20 名

内容：4 月から始めたプロジェクト活動の目的や実施計画をプロジェクトグループ内でまとめて発表することにより、今後の計画の確認とその意義を再認識した。自らのプロジェクトのプロモーションを行うことの重要性を考える機会とした。



図 3.1.9 中間発表会の様子

(3) プロジェクト成果発表会

開催日：平成 25 年 12 月 17 日（火）

会場：豊橋創造大学 B14 教室

参加人数：情報ビジネス学部 3 年生 57 名

来賓 5 名

教職員 20 名

来賓	：株式会社アイエスエル システム部	伊藤弘尚 氏
	豊橋市企画部政策企画課 主事	鈴木裕二 氏
	豊橋鉄道株式会社 鉄道部運輸営業課	織笠真至 氏
	豊橋市企画部シティプロモーション推進室	鈴木豪 氏
	国立大学法人三重大学 学生総合支援センター特任講師	後藤綾文 氏

内容：4 月から始めたプロジェクトのテーマや意義など全体像を要約して約 10 分で発表し、5 分の質疑を行った。協力企業の担当者や代表取締役にご参加いただき、講評をいただいた。優秀なプロジェクト活動に対して学部長賞と学生が互選するプロジェクト賞を選出し表彰した。



図 3.1.10 成果報告会の様子

(4) 社会人基礎力評価と学生へのフィードバックミーティング

開催日：平成 25 年 9 月、平成 26 年 1 月

会場：豊橋創造大学 プロジェクト室など

内容：プロジェクト活動では、グループで決定したテーマの遂行のために、協力企業担当者や学生メンバー間での意見調整を行い、行動計画や役割分担を決定した。他者との協力、意見調整などを適切に行い、自らの役割を遂行する自律性や主体性に就いての意義を理解した。そしてプロジェクト活動の中で、意見表出や役割分担どの程度成し得たかを自省して、自らの長所・短所について熟考する機会とした。指導教員から社会人基礎力の達成度に関するフィードバック与えて、改善行動についてのミーティングを実施した。9 月と 1 月の 2 回実施することによって、プロジェクト活動中の内省の機会を増やしたことで、育成すべき資質について学生、教員とも再認識でき改善すべき事項の明確化が可能になった。

社会人基礎力レベル評価基準表

に対する自己評価

3つの力	12の要素	定義	評点	発揮できなかった (どうしてもできなかった)	通常の状況では発揮できた (何とかできた)	通常の状況で効果的に発揮できた (見事にできた)	発揮できた例(※)
				レベル1	レベル2	レベル3	
前に踏み出す力	主体性	物事に進んで取り組む力	1	○			自分がやるべきことは何かを見極め、自発的に取り組むことができる 自分の強み・弱みを把握し、困難なことでも自信を持って取り組むことができる 自分なりに判断し、他者に流されず行動できる
	働きかけ力	他人に働きかけ巻き込む力	2		○		相手を納得させるために、協力することの必然性(意義、理由、内容などを伝えることができる 状況に応じて効果的に巻き込むための手段を活用することができる 周囲の人を動かして目標を達成するパワーを持って働きかけている
	実行力	目的を設定し確実に行動する力	2		○		小さな成果に喜びを感じ、目標達成に向かって粘り強く取り組み続けることができる 失敗を怖れず、とにかくやってみようとする勇気を持って、取り組むことができる 強い意志を持ち、困難な状況から逃げずに取り組み続けることができる
考え抜く力	課題発見力	現状を分析し目的や課題を明らかにする力	2		○		成果のイメージを明確にして、その実現のために現段階でなすべきことを的確に把握できる 現状を正しく認識するための情報収集や分析ができる 課題を明らかにするために、他者の意見を積極的に求めている
	計画力	課題の解決に向けたプロセスを明らかにし準備する力	2		○		作業のプロセスを明らかにして優先順位をつけ、実現性の高い計画を立てられる 常に計画と進捗状況の違いに留意することができる 進捗状況や不測の事態に合わせて、柔軟に計画を修正できる
	創造力	新しい価値を生み出す力	3			○	複数のものもの、考え、技術等を組み合わせ、新しいものを作り出すことができる 従来の常識や発想を転換し、新しいものや解決策を作り出すことができる 成功イメージを常に意識しながら、新しいものを生み出すためのヒントを探している
チームで働く力	発信力	自分の意見をわかりやすく伝える力	2		○		事例や客観的なデータ等を用いて、具体的にわかりやすく伝えることができる 聞き手がどのような情報を求めているかを理解して伝えることができる 話そうとすることを自分なりに十分に理解して伝えている
	傾聴力	相手の意見を丁寧に聴く力	3			○	内容の確認や質問等を行いながら、相手の意見を正確に理解することができる 相槌や共感等により、相手に話しやすい状況を作ることができる 相手の話を素直に聞くことができる
	柔軟性	意見の違いや立場の違いを理解する力	2		○		自分の意見を持ちながら、他人の良い意見も共感を持って受け入れることができる 相手がなぜそう考えるかを、相手の気持ちになって理解することができる 立場の異なる相手の背景や事情を理解することができる
	状況把握力	自分と周囲の人々や物事との関係性を理解する力	1	○			周囲から期待されている自分の役割を把握して、行動することができる 自分だけでなく、他人ができることを的確に判断して行動することができる 周囲の人の状況(人間関係、忙しさ等)に配慮して、良い方向へ向かうよう行動することができる
	規律性	社会のルールや人との約束を守る力	1	○			相手に迷惑をかけないよう、最低限守らなければならないルールや約束・マナーを理解している 相手に迷惑をかけたとき、適切な行動を取ることができる 規律や礼儀が特に求められる場面では、相手がいないように正しくふるまうことができる
	ストレスコントロール力	ストレスの発生源に対応する力	2		○		ストレスの原因を見つけて、自力で、または他人の力を借りても取り除くことができる 他人に相談したり、別のことに取組んだりする等により、ストレスを一時的に緩和できる ストレスを感じることは一過性、または当然のことと考え、強く受け止めないようにしている

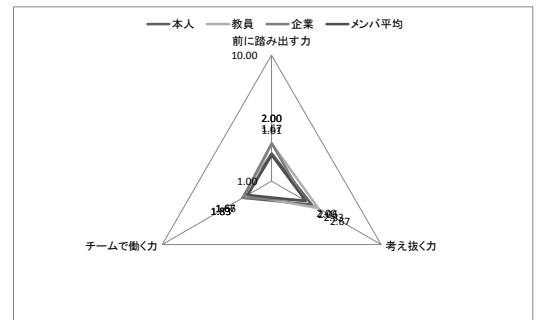
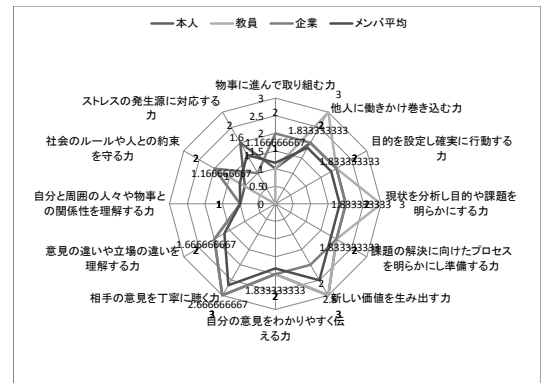
※各能力要素を発揮できた例は、この内容に限るものではない。

図3.1.11 社会人基礎力シート (評価のための行動規範)

社会人基礎力レベル評価基準表

学籍番号	氏名		
実施回数	回目	実施年月	H 年 月

3つの力	12の要素	定義	評点	評点												本人	教員	企業	メンバ平均
				本人	教員	企業	1	2	3	4	5	6	7	8	9				
前に踏み出す力	主体性	物事に進んで取り組む力	1	1	2	1	1	1	1	1	2								1.17
	働きかけ力	他人に働きかけ巻き込む力	2	3	2	2	2	1	2	2	2								1.83
	実行力	目的を設定し確実に行動する力	2	2	2	2	2	1	2	2	2								1.83
考え抜く力	課題発見力	現状を分析し目的や課題を明らかにする力	2	3	2	2	2	1	2	2	2								1.83
	計画力	課題の解決に向けたプロセスを明らかにし準備する力	2	2	2	2	2	1	2	2	2								1.83
	創造力	新しい価値を生み出す力	3	3	2	3	3	1	3	3	2								2.5
チームで働く力	発信力	自分の意見をわかりやすく伝える力	2	2	2	2	2	1	2	2	2								1.83
	傾聴力	相手の意見を丁寧に聴く力	3	3	3	3	3	1	3	3	3								2.67
	柔軟性	意見の違いや立場の違いを理解する力	2	2	2	2	2	1	2	2	1								1.67
	状況把握力	自分と周囲の人々や物事との関係性を理解する力	1	1	1	1	1	1	1	1	1								1
	規律性	社会のルールや人との約束を守る力	1	2	2	1	1	1	1	1	2								1.17
	ストレスコントロール力	ストレスの発生源に対応する力	2	0	1	1	1	1	2	2	2								1.6
集計	前に踏み出す力		1.67	2.00	2.00														1.61
	考え抜く力		2.33	2.67	2.00														2.06
	チームで働く力		1.83	1.67	1.83														1.66



この評価を元に担当の教員と面談し、改善すべきことの助言を求めてください。そして、上記評価を受けて、これからの行動に対して考えたことを自由に記述してください。これは現段階で考えたことや感じたことを記録することが目的ですので、今後の行動をしばるものではありません。

記入欄:

図3.1.12 社会人基礎力シート 集計表

(5) プロジェクト実施総括会議 (第3回教育力向上研修会として実施)

開催日：平成26年2月19日

会場：豊橋創造大学 D棟 3会会議室

参加者：専任教員全員

内容：プロジェクト活動の対する成果報告書を教員がまとめた上で、学生の社会人基礎力育成方法について以下の次第で協議した。

第3回教育力向上研修会 次第

- 1) 補助事業のあらましの確認
- 2) プロジェクト運営における教育効果 (全体総括)
社会人基礎力シートの集計と考察
：教育効果測定・指導方法検討 WG
- 3) 各プロジェクト運営上の工夫と課題
：担当教員からの口頭発表
- 4) 次年度運営について： 協議

2. 活動成果

(1)参加学生の社会人基礎力育成の観点における成果:地域産業界と連携したプロジェクトとして平成24年度は11テーマ、平成25年度は8テーマのプロジェクト活動を計画、実施した。その活動において学生が主体的、自律的、協調的にグループで行動して、テーマの決定、行動計画、作業の実施、進捗管理を行った。これらをグループの協議を通して決定するなど、グループ活動の運営の経験を積むとともに、これらを効率的に進めるために必要な能力や行動について認識を深めた。

(2)教育充実に関する観点の成果:本補助事業においては、学生の社会人基礎力を養成できる教育体制の構築や充実が目的である。プロジェクト活動は、学生がグループで作業を進める中での気づきや行動改善を行うための活動である。本補助事業の中心的事業であり、これらをカリキュラムに組み込み教育の実施、評価方法などを推進させた。具体的に事業展開することにより実施方法の改善ならびに改良を進めた。また、プロジェクト運営に従事することによって指導者の教育技量の自己研鑽を進めるとともに、総括会議での問題点の共有化による教育体制の改善を進めている。

(3)産業ニーズ把握に関する観点の成果:人材育成に対する意見だけでは、抽象的で理解し難い。そのため、プロジェクト活動の中で、必要な視点や行動を明示して学生の理解を深めている。プロジェクト活動では、活動中に連携企業の企業人からも直接助言があるため、学生も実践の中で求められる能力について学修している。

3. 実施事業を踏まえた次年度の方策

本事業の目的は、学生の社会人基礎力を養成することである。そのための教育体制や指導方法について検討実施した。プロジェクトのテーマ設定、活動計画の立案などの学生生活活動を支援する方法についての改善をすすめ、教育体制整備をより一層推進する。

(4) 3者間協働インターンシップグループ活動報告

1. グループ事業の取組

インターンシップは、学生が企業における就業体験を通して、①現場での実務から大学での学びの意味および意義を再確認して積極的な学びの姿勢を身に付けること(学びの往還)、②就業に対する意識を高めるとともに、職業・職種に対する理解を深めることを目的とした産官学連携の教育プログラムである。

インターンシップにより、学生には仕事上の問題点を自ら発見し、目的を設定して仮説を立て、創造的に解決する機会を提供する。また、就業体験に関する発表資料および報告書を、教員・企業からの指摘をフィードバックしながら作成することで、アクティブラーニングを伴った主体性・創造性の育成を目指す。そのために、本年度は以下の内容を実施した。

- ・事前指導(実習企業の事業概要の理解、インターンシップへの参加目的の明確化)
実習先企業の事業概要の理解を深めるとともに、インターンシップへの参加目的を明確にするために、発表とその内容に対する議論を中心としたグループワークを実施する。
- ・実習(就業体験)
各自が実習先に企業にて、1～2週間の就業体験を行う。
- ・報告会の実施(発表資料の作成)
プレゼンテーション資料の作成を通して、実習内容を振り返りながら自身の設定したテーマの内容・発見した問題点に関する考察を教員および企業担当者の指摘をフィードバックしながら深める。
また、発表練習をグループ単位で実施することにより、学生自身にどのような発表をすべきかを考えさせる。
- ・報告書の作成
報告会の実施同様、報告書の作成を通して、実習内容を振り返りながら自身の設定したテーマの内容・発見した問題点に関する考察を教員および企業担当者の指摘をフィードバックしながら深める。

なお、本年度は情報ビジネス学部3年生7名が5企業・事業所のインターンシップに参加した。参加者の内の1名は、2年次でもインターンシップに参加しており、今回も前回と同じ事業所・部署で実習を行った。実習期間は、4事業所では2週間(10日)、1事業所では1週間(5日)であった。

<<主なスケジュール>>

平成25年度の主なスケジュールは、以下の通りである。

日程	実施事項
6月	前指導(実習先のマッチング・自己紹介書の作成指導)(担当:キャリアセンター)
7月	事前指導(自己紹介書の校閲指導)(担当:科目担当教員)
8・9月	実習(1～2週間) 実習先の訪問(担当:キャリアセンター、就職委員会教職員、専門ゼミナール担当教

	員)
9・10月	報告会資料の作成指導・発表練習(担当:科目担当教員、専門ゼミナール担当教員)
10月	インターンシップ報告会の実施 企業との座談会の実施
10～12月	報告書の作成指導(担当:科目担当教員、専門ゼミナール担当教員) ※学内での校閲終了後、企業担当者による校閲を受ける
3月	報告書の完成・印刷

<<主な行事>>

(1) インターンシップ報告会

開催日：平成25年10月21日(月)

会場：豊橋創造大学 A23教室

参加人数：インターンシップ実習先企業・事業所、近隣3高校の教職員、
経営学部2年生 7名

内容：本年度のインターンシップの実施スケジュールおよび実施状況を説明し、その後実習生7名による報告が行われた。報告の中で、実習生からは「インターンシップにはできる限り早い時期に参加した方がよい。」「参加するまでは大変に感じるが、参加して他大学の学生と交流もできる。自分の意識を変える大きな機会となるので、是非参加して欲しい。」といった声が聞かれた。また、昨年度と同じ事業所(部署)のインターンシップに参加した実習生からは、「2年目ということで、昨年度より高度な仕事に携わらせて頂くことができ、より充実した実習を行うことができた。」との感想が聞かれた。

その後、実習先企業・協力企業から学生の報告内容に対してコメントを頂くとともに、各社のインターンシップの取り組み、およびインターンシップに参加する際の心構えなどのコメントを頂いた。

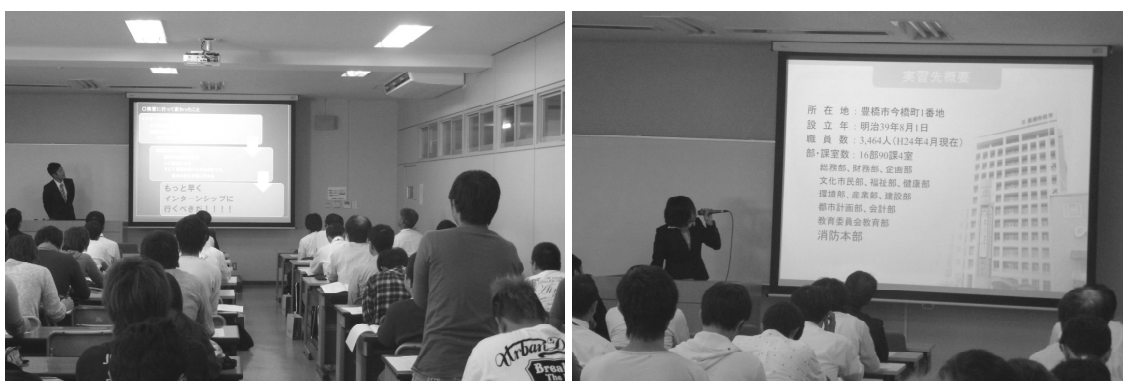


図 3.1.13 インターンシップ報告会の実施風景

(2) インターンシップ座談会

開催日：平成25年10月21日(月)

会場：豊橋創造大学 3階会議室

参加人数：インターンシップ協力企業、本学教職員

内 容：本学の今年度のインターンシップの実施状況を説明し、続いて企業・事業所の方よりインターンシップにおける学生の実習状況、問題点、今後の課題などについて様々な意見を頂いた。

学生の実習状況について、企業側からは、「全般的に、表現が乏しく、主体的に意見を述べる姿勢がない」、「大学の事前指導では、接客業として最低限必要な挨拶はできるように意識させて欲しい」、「自ら挙手して発言するような積極性が不足している」という声が聞かれた。

このような社会人基礎力に関わる産業界ニーズの把握のために、実習生の社会人基礎力の評価への協力を各社に打診して了承を得た。



図 3.1.14 インターンシップ座談会の実施風景

2. 活動成果

インターンシップが産学官連携の教育プログラムであるという観点から、本学では従前より実習中の学生の評価を実習先企業に依頼している。この評価を通して、学生に不足している点を明確にするとともに、企業が学生に対してどのようなものを求めているのか、そのニーズの把握に努めてきた。

また、その評価内容を学生にフィードバックしながら実習報告書の作成に取り組み、作成した実習報告書に対しても実習先企業に校閲評価を依頼している。

それら評価の記入票を図 3.1.15 に示す。なお、各評価票の主な評価項目は以下の通りである。

- ・実習評価記入票(図 3.1.15:左)

職務規律の遵守、職務に取り組む姿勢、実習テーマへの取り組み等の評価結果を記入

- ・報告書原稿の校閲評価

報告書の「テーマ」の設定、報告書本文の記述内容(実習先事業所の概要、実習概要、実習内容、図表および解説内容、考察)について、評価結果を記入

豊橋創造大学インターンシップ実習評価

事業所名		記入者氏名	
部署名		実習学生名	
実習日時	平成 年 月 日 () ~ 平成 年 月 日 ()		

Ⅰ 評価

(1)職務規律の遵守について

(2)職務に取組む姿勢について (意欲・積極性・協調性・責任感)

(3)実習テーマへの取組み等について

(4)その他この学生についてご意見をお書きください

Ⅱ その他

本学インターンシップ委員会についてご意見・ご要望
(実習学生が複数で、記入者が同一の場合はいずれか一部にお書きください)

(実習先事業所→大学)

本様式は、本学「個人情報保護に関する規程」の定めに従い、取扱いをさせていただきます。
なお、本様式の記載事項(個人情報)はインターンシップ以外の目的では使用いたしません。

豊橋創造大学 キャリアセンター

2013年度

インターンシップ報告書原稿の校閲評価 記入票

1. ご担当者様についてご記入ください

実習先 事業所名			
校閲 ご担当者	部署名		
	役職名	お名前	
実習学生	学籍番号	氏名	

2. 上記学生の報告書原稿を以下7項目について評価してください

報告書原稿の評価項目	該当する評価番号を○で囲んでください			
1) 報告書「テーマ」の設定	1. 訂正を要する	2. 普通	3. 適切	4. 良好
2) 日程表(1ページ)	1. 訂正を要する	2. 普通	3. 適切	4. 良好
3) 「はじめに」の内容	1. 訂正を要する	2. 普通	3. 適切	4. 良好
4) 実習先事業所の概要	1. 訂正を要する	2. 普通	3. 適切	4. 良好
5) 実習概要または実習内容	1. 訂正を要する	2. 普通	3. 適切	4. 良好
6) 図表および解説内容	1. 訂正を要する	2. 普通	3. 適切	4. 良好
7) 考察の記述内容	1. 訂正を要する	2. 普通	3. 適切	4. 良好

3. 報告書原稿の修正の程度を該当する番号を○で囲んでください

修正の程度	学生およびインターンシップ委員会の対応内容
1. 全面的に修正してほしい	学生およびインターンシップ委員会を全面的に修正させ、委員会の教員点検の後、貴事業所へご高懸をお願いたします
2. 訂正箇所が多く有り、指示にしたがって全て修正してほしい	全ての訂正箇所をご指示にしたがって学生に修正させ、貴事業所へ高懸を再度お願いたします
3. 訂正箇所が随分あり、指示にしたがって修正して大学内で点検してほしい	訂正箇所をご指示にしたがって学生に修正させ、委員会の教員による点検の後、報告書原稿を校了とします
4. 修正する必要なし	本学キャリアセンターで点検して校了とします

4. 初校原稿に対する総合評価の該当番号を○で囲んでください

総合評価	5. 大変良い	4. 良い	3. 良い	2. 報告書として可	1. 不可(要訂正)
	0. 全面的に修正				

5. その他、学生へのご指導または報告書編集などに関するご意見などをご記入ください。

注)上記の個人情報は、本学のインターンシップ以外の目的で使用することはいたしません。

豊橋創造大学 キャリアセンター

図 3.1.15 実習評価票(左:実習評価記入票、右:報告書原稿の校閲評価記入票)

こうした評価に加えて、本学では従前よりインターンシップ座談会を通して学生に対する産業界ニーズの把握に努めてきたが、今年度は新たに社会人基礎力レベル評価表(図 3.1.16)の記入を実習先企業に依頼し、その把握に努めた。

社会人基礎力レベル評価表では、社会人基礎力に関する3つの力、12項目について、実習配属先の指導担当者に学生の到達レベルを評価頂いた。なお、評価に際して基準が必要であるとの企業側からの要望から、今年度は他大学の学生と比較して当該学生の到達レベルを判断頂くこととした。

以上のような取り組みの結果、学生に対して多くの実習先企業から主体性、実行力、課題発見力の強化を望む声が聞かれた。その一方で、傾聴力、柔軟性、状況把握力、規律性については、概ね高い評価が与えられていた。

ただし、社会人基礎力のどの力が不足していると判断されるかは、学生個々の状況に依存しており、例えば主体性や課題発見力で高い評価を得ている学生もいる。

このように、今年度は学生の社会人基礎力に対する産業界ニーズをより細かく把握することができた。今後、各学生に対する社会人基礎力評価の内容を精査して、大学全体で指導すべき内容と学生個々の状況に合わせて指導する内容を区別し、事業全体の指導体制・方法の改善を検討する。

3つの力		12の要素	定義	できていなかった 評価 1	あまりできていなかった 評価 2	同等のレベルでできていた 評価 3	他の学生よりもできていた 評価 4	行動(実施)できていた例
前に踏み出す力	主体性	物事に進んで取り組む力						自分がやるべきことは何かを判断し、自発的に取り組んでいた
	働きかけ力	他人に働きかけ巻き込む力						相手を納得させるために、協力することの必然性(意義、理由、内容など)を伝えるなど、働きかけていた
	実行力	目的を特定し確実に行動する力						目標達成に向かって、強い意志を持ち、困難な状況から逃げずにねばり強く取り組み続けていた
考え抜く力	課題発見力	現状を分析し目的や課題を明らかにする力						現状を正しく認識し、現状でなすべきことを的確に把握して課題を明らかにしていた
	計画力	課題の解決に向けたプロセスを明らかにし準備する力						作業のプロセスを明らかにして、実現性の高い計画を立て、また状況に合わせて柔軟に計画を修正していた
	創造力	新しい価値を生み出す力						複数のもの、考え、技術等を組み合わせ、新しいものや解決策を作り出していた
チームで働く力	発信力	自分の意見をわかりやすく伝える力						聞き手がどのような情報を求めているかを理解し、事例や客観的なデータ等を用いて具体的にわかりやすく伝えていた
	傾聴力	相手の意見を丁寧に聴く力						内容の確認や質問等を行いながら、相手の意見を正確に理解していた
	柔軟性	意見の違いや立場の違いを理解する力						自分の意見を持ちながら、他人の良い意見も共感を持って受け入れていた
	状況把握力	自分と周囲の人々や物事との関係性を理解する力						周囲の人の状況(人間関係、忙しさ等)に配慮して、良い方向へ向かうよう行動していた
	規律性	社会のルールや人との約束を守る力						相手に迷惑をかけないよう、最低限守らなければならないルールや約束・マナーを理解して行動していた
ストレスマネジメント	ストレスの発生源に対応する力						ストレスの原因を見つけて、自力または他人の力を借りて取り除くことができていた	
		実習中の挨拶・言葉遣いなど						

※ 各項目につきまして、他大学の学生と比較して当該学生の達成度がどの程度であると感じられたか、該当する評価レベルに ○ を記入下さい。
 ※ 記入が困難と思われる項目につきましては、空白のまま構いません。

図 3.1.16 実習生の社会人基礎力レベル評価表

3. 今後の課題点

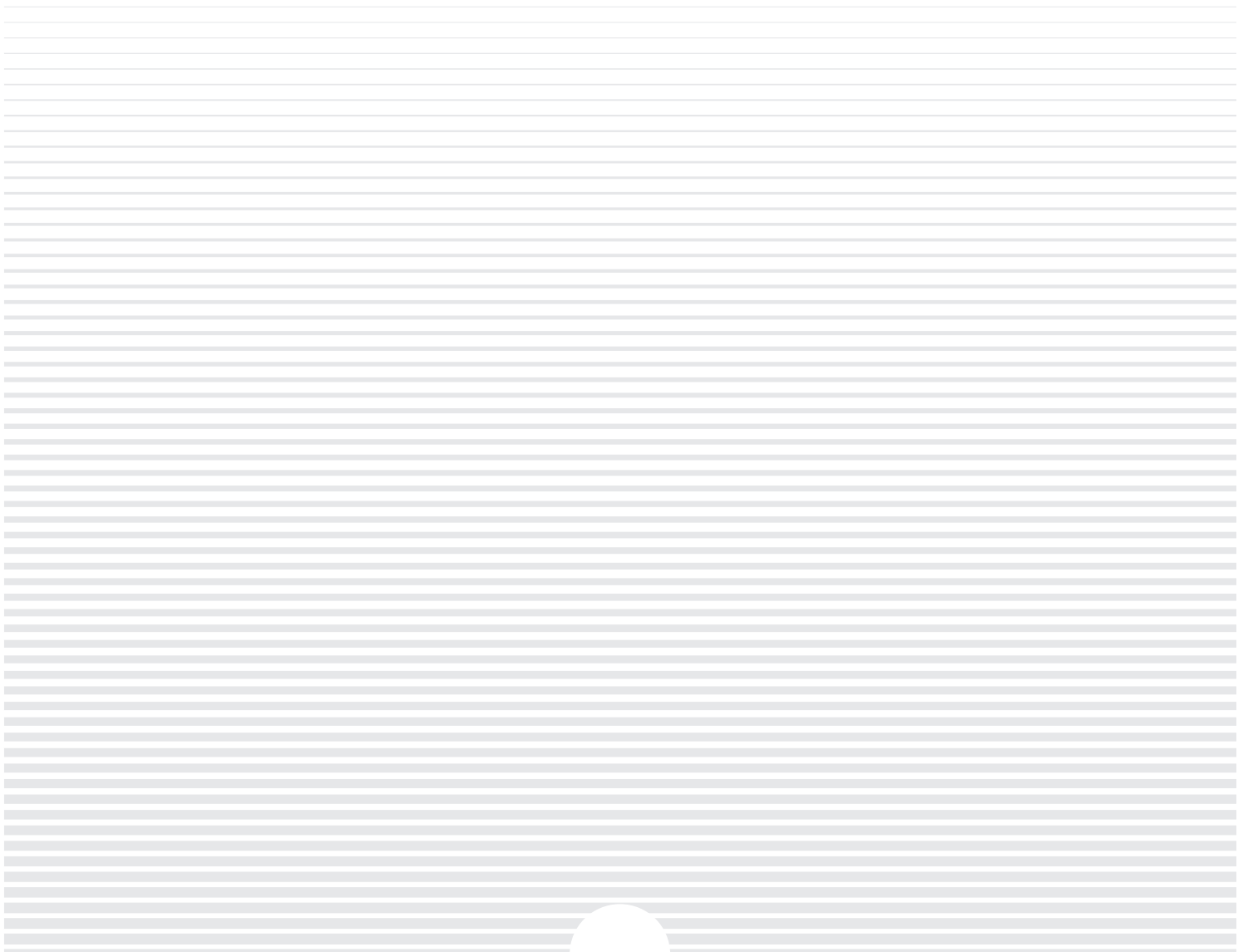
本事業の実効性を高めるために、今年度は従前以上に①インターンシップ活動を通じた学生の気づき(考察)を深化させる、②教員・学生・企業の共同を活発化にする新たなインターンシップ・プログラムの構築を検討することを念頭に、事業を展開してきた。また、学生に対する産業界ニーズをより詳細に把握するために、実習先企業には従前の実習評価票に加えて社会人基礎力レベルの評価を依頼した。

今年度の取り組みから、学生に対して産業界が、主体性、実行力、課題発見力の強化を強く望んでいることが示された。今後、インターンシップ実習前の事前指導の中に、これらの力を引き上げるような方策を織り込む必要がある。

また、学生の主体性を育むという観点からは、2年次学生のインターンシップへの参加機会を本格的に増やすことも必要である。従来、インターンシップの参加対象学生は主に3年次学生としてきた。一方で、今年度のインターンシップ座談会では多くの実習先企業が2年次学生の受入に前向きであった。そうしたことも踏まえ、1年次学生に対してインターンシップへの興味を喚起する機会を新たに設け、2年次でのインターンシップ参加者の増加につなげる必要がある。

3.2

教育体制・産業界ニーズ 把握体制の整備・連携推進



(1)連携事業推進グループ活動報告

1. グループ事業の取組

産業界ニーズに対応した教育改善・充実体制整備事業では、中部地域 23 大学と連携して、「アクティブラーニングを活用した教育力強化」と「地域・産業界との連携力強化」が行える教育プログラムを形成することになっている。豊橋創造大学では、社会人基礎力を養成すべき資質として位置づけ、そのための4つの教育プログラムを実施する。そして、その成果や失敗を広く開示するとともに他大学と共有することにより、よりよい教育体制を構築する。連携事業推進グループは、このような実施事業の成果と失敗の公表と他大学との連携を図り、本学における教育体制の整備を進める。また、実施する教育プログラムを教育効果の高い教育プログラムに改善するために、連携事業推進グループでは、学生の社会人基礎力の評価方法と教育への展開方法を検討し実施する。さらに、社会人基礎力養成プログラムの実施成果を他の授業に展開して、学生に早期の意識付けや態度・志向の養成を進める。

<<主なスケジュール>>

日程	実施事項
4月26日	第1回東海A（教育力）チーム 時間：10：00～12：00 場所：名古屋商科大学大学院伏見キャンパス E21 教室
5月18日	ワークショップ「教育改革の壁を破るチャレンジ」参加
5月23日	第2回 東海A（教育力チーム）会議 参加
6月7日	教育力改革フォーラム（第1回教育力向上研修会）実施
6月17日	教育効果測定・指導方法WG 第1回ミーティング
7月1日	教育効果測定・指導方法WG 第2回ミーティング
7月8日	教育効果測定・指導方法WG 第3回ミーティング
7月30日	第1回就業体験講座 実施
8月26,27日	東海A（教育力）チーム 連携FD合宿運営、参加
9月3-5日	平成25年度 教育改革ICT戦略大会参加
9月12日	第2回就業体験講座 参加
9月10日	東海A（教育力）チーム連携FD 「社会のニーズに対応した教育改革に向けて」 参加
9月17日	産業界ニーズに対応した人材育成研修会（主催：中部経済産業局） 参加
10月2日	「産業界ニーズ事業特別セミナー」（主催：中部大学） 参加
10月21日	インターンシップに関する企業担当者との座談会
10月24日	第3回 東海A（教育力チーム）会議 参加
10月28日	第2回教育力向上研修会 実施
11月14日	平成25年度 第1回中部圏産学連携会議（主催：中部地域大学教育改革推進委員会）参加
11月27日	"教育効果測定・指導方法WG 第4回ミーティング"
11月28日	産学協同就業力育成シンポジウム2013(主催：Future skills)

	project 研究会) 参加
1月31日	シンポジウム「産業界ニーズに対応した初年次教育のチャレンジ」(主催:東海 A (教育力) チーム) 参加
1月31日	平成 25 年度達成目標に係る評価報告提出
2月3日	第 3 回就業体験講座 実施
2月6日	第 4 回 東海 A (教育力チーム) 会議 参加
2月12日	"教育効果測定・指導方法WG 第 5 回ミーティング"
2月19日	第 3 回教育力向上研修会
2月18日	シンポジウム「PBL で育む教・職・学 -同志社大学プロジェクト科目の事例から-」(主催:東海 B チーム) 参加
3月7日	H25 年度報告書提出
3月8日	大学教育改革フォーラム in 東海 2014 参加発表

<<主な行事>>

補助事業の全体を俯瞰して、教育効果を高めるための他大学連携や学内事業の調整や教育方法・評価方法の検討を行う。具体的に行う活動を他大学連携に係る活動と教育体制整備に係る活動に分けて示す。

(1) 他大学連携に係る活動

東海 A チーム (教育力チーム) 会合参加
 連携 FD の開催や参加
 平成 25 年度 第 1 回中部圏産学連携会議
 (主催:中部地域大学教育改革推進委員会) 参加
 他大学、他組織開催シンポジウムへの参加
 大学教育に係るフォーラムや学会での本学成果の発表

(2) 教育体制整備に係る事業

教育力向上研修会 (3 回)
 教育効果測定・指導方法WG の開催
 1, 2 年生などの下級学年での育成すべき資質の養成方法の検討
 就業体験講座 (1 年生) の開催 (3 回)
 経営ビジネス講座の開催 (15 回)

2. 活動成果

上記のように、連携事業推進グループの役割は、実施される 4 つの教育プログラムの成果を踏まえて教育体制の整備と産業界ニーズの把握体制を構築することである。また、成果や失敗を他大学と共有することにより、学生事業の推進や改善を図ることが本グループのもう一つの役割である。

平成 24 年度は、連携事業推進グループの補助事業全体における役割を明確化した。その役割に基づいて、学内の成果および失敗を取りまとめ連携大学に報告するとともに、他大学の状況の報告を受けて学内事業の考察を進めた。連携 FD や中部圏産業界ニーズ把握会議に専任教員が参加して、事業目的やその実施意義や方法についての認識を深めた。高い割合で、専任教員がこれらの事業に参加した。また、補助事業で展開する教育プログラムのみならず、他科目への展開方法や社会人基礎力の評価方法の検討を始めることができた。また、社会人基礎力の評価については、プロジェクト活動やインターンシップなど学生の



図 3.2.1 教育力改革フォーラム
(第 1 回教育力向上研修会)



図 3.2.2 東海 A(教育力)チーム 連携 FD 合宿



図 3.2.3 第 2 回教育力向上研修会

活動にもとづいて評価する仕組みと学生にフィードバックする方策を検討した。事業実施内容を大学教育改革フォーラム in 東海 2013 で発表報告した。

平成 25 年度は、育成すべき資質に関する評価のタイミングと総合的な活用方法について検討した。また、学生が自らの状況を評価内容に基づいて自省できるように、評価についての説明会や教員との面談機会を設けた。自らの行動計画についての考察する機会も設定し、自己理解を深化できる体制を形成した。複数実施する評価結果にもとづき教育効果の評価や次年度への活用を検討するために、教育効果測定・指導方法WG 開催した。また教員の指導力向上のために 3 回の教育力向上研修会を開催した。さらに、科目展開のためにキャリア形成科目群やゼミナール中心に、科目選定し学修マップをまとめた。これらをまとめると以下のようなになる。

- ・ 育成すべき資質の育成を補助事業を含むキャリア形成科目等 14 科目で展開するために該当科目における学修計画を立案し集約した。一部の科目においては、教育方法の改善を図った。

- ・ 育成すべき資質養成は、種々の教育プログラムの中で活動と評価・内省を繰り返すことで展開することになっている。教育効果測定・指導方法WG で育成すべき資質の行動規範を定めてそれと照らして評価する方法を検討・改善した。その検討結果を専任教員へ周知した。

- ・ 3 回の教育力向上研修会を実施し、本補助事業の目的の徹底や学生指導方法について

の学習を進めた。ベネッセコーポレーションの FSP（Future Skills Project）の主催者を招聘し、学生指導方法の探求を行った。

- ・学生が直接社会（企業）と接する機会創出のために、就業体験講座、経営ビジネス講座を開催した。

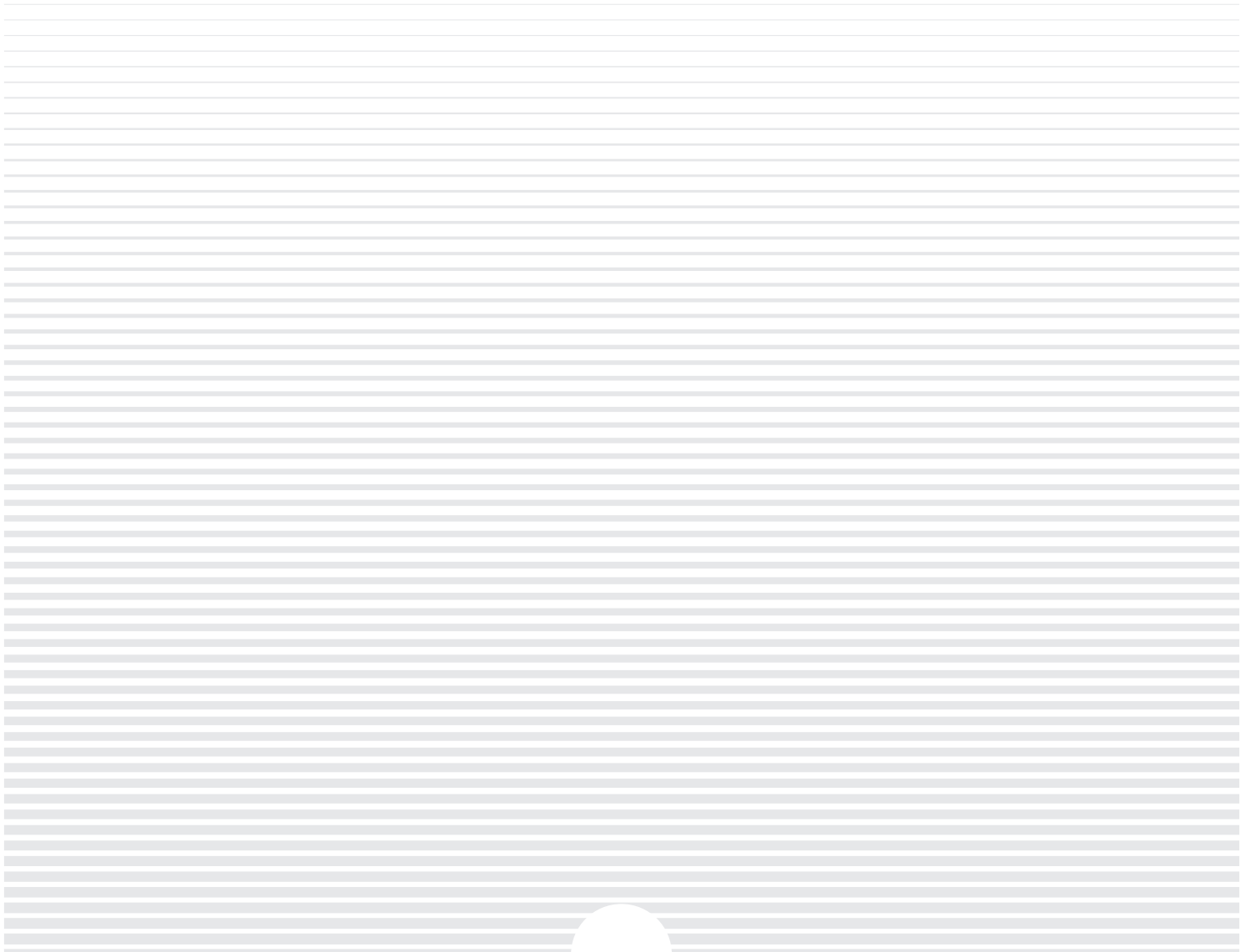
- ・本学並びに他大学の実施状況の確認のためのミーティングに参加した。特に、東海 A チームの連携 FD 活動として合宿研修会を開催した。

3. 実施事業を踏まえた次年度の方策

平成 24 年度および平成 25 年度で、補助事業で目標としている学生の就業力、特に社会人基礎力を養成する教育体制整備並びに産業ニーズ把握の体制・制度の整理を行った。具体的には、上記に記載した内容である。これら検討した体制で、平成 26 年度は 1 年を通じた教育プログラムを運営し、教育体制や制度の評価を行う。

3.3

教育体制・産業界ニーズ把握 体制の後方支援



(1) ユビキタスキャンパスグループ活動報告

1. グループ事業の取組

本グループ事業では、教育体制・産業ニーズ把握体制の後方支援を目的として、ICT環境の整備およびICT利活用推進を中心とした以下の活動を行っている。

- (1) 学内 ICT 環境の整備・充実(設備等の維持や利便性向上の検討)
- (2) 携帯情報端末の配布・諸説明等の ICT リテラシ指導、および、eラーニング推進
- (3) 「4 つの教育事業」で使用するアプリケーション・システムの開発・運用支援
- (4) 事業成果の広報等を目的とした Web サイトの構築・運用

平成 25 年度は、平成 24 年度の実施状況と評価結果を踏まえ、改善活動を中心に実施した。特に、スチューデントプロフィールシステム(Sozo Passport)・プロジェクトマネジメントシステムの追加開発・改修の支援、eラーニングシステム(Handbook、Sozo Platz)の改修・利用促進、本事業 Web サイトの改修と充実化、等に取り組んだ。

また、前年度に引き続き、6 月頃を目途に平成 25 年度入学生(学部・経営学科 1 年、短大部:キャリアプランニング科 1 年)に iPad を貸与し、導入支援をはじめとするサポートを行った。

<<主なスケジュール>>

分類	時期	内容
(1)	4 月	プロジェクト管理システムの情報更新や各種システムのアカウント作成など
	4 月～3 月	学内 ICT 環境の維持・管理・監視、充実化. 状況に応じて改善活動
(2)	4 月	プロジェクト管理アプリ導入支援(情ビ 3 年、キャリ 2 年)
	4 月～3 月	Sozo Platz 追加開発・改修と運用
	5 月	携帯情報端末の配布準備
	6 月	携帯情報端末の配布、利用方法に関する説明会(経営 1 年、キャリ 1 年)
	12 月～2 月	携帯情報端末の物品確認および回収 【確認】 12 月:情ビ 3 年・キャリ 1 年、1 月:経営 1 年、経営 2 年 【返却】 1 月:キャリ 2 年、2 月:情ビ 4 年
(3)	4 月～8 月	スチューデントプロフィールシステム開発支援
	9 月	スチューデントプロフィールシステムの導入支援(説明会やマニュアル作成など)
	4 月～3 月	プロジェクト管理システム開発支援
(4)	4 月～3 月	Web サイトの運営および改善

情ビ:情報ビジネス学部キャリアデザイン学科, 経営:経営学部経営学科

キャリ:短期大学部キャリアプランニング科

<<主な行事>>

分類	日付	内容	対象
(3)	4月9日(火) 4月11日(木)	プロジェクト管理アプリ導入説明会	情ビ3年
(3)	4月17日(水)	プロジェクト管理アプリ導入説明会	キャリア2年
(4)	4月30日(火)	Webサイト改修・公開	
(2)	5月30日(木)	Sozo Platz 機能改善(v1.2.0 → v1.3.1)	
(3)	5月31日(金)	プロジェクト管理アプリ機能改善(v2.1 → v2.2)	
(1)	6月11日(火)	iPad 充電ロッカー整備(新 iPad 対応)	
(2)	6月12日(水)	iPad 配布・説明会(+Handbook, Sozo Platz 導入説明)	経営1年
(2)	6月12日(水) 6月13日(木)	iPad 配布・説明会(+Handbook, Sozo Platz 導入説明)	キャリア1年
(1)	8月9日(金)	インターネット接続回線切り替え工事(最低保証帯域の改善) ※ 本学ネットワーク管理委員会・システム管理室を中心に実施	
(3)	9月11日(水)	スチューデントプロフィールシステム(Sozo Passport)利用説明会	教職員
(3)	9月13日(金) 9月17日(火) 9月19日(木)	スチューデントプロフィールシステム(Sozo Passport)利用説明会	経営1年 経営2年 情ビ3年
(3)	9月16日(月)	スチューデントプロフィールシステム(Sozo Passport)本稼働開始	
(3)	11月19日(火)	プロジェクト管理アプリ機能改善(v2.2 → v2.3)	
(3)	2月	Sozo Platz 機能改善	
(2)	2月	プロジェクト管理システム機能改善	

① iPad 配布・説明会(6月12日、13日)

平成25年度入学生(経営学部1年生、短期大学部キャリアプランニング科1年生)に対して携帯情報端末(iPad)を貸与するとともに、iPadの基本操作やeラーニングシステム(Handbook、Sozo Platz)の導入に関する説明会を実施した(図3.3.1)。



図 3.3.1 iPad 配布・説明会の様子(左:経営1年、右:キャリア1年)

- ② スチューデントプロフィールシステム(Sozo Passport)利用説明会(9月11日～9月19日)
教職員および学生を対象に、平成24年度末～平成25年度春学期にかけて開発を行った「スチューデントプロフィールシステム(名称:Sozo Passport)」に関する利用方法等の説明会を開催した(図3.3.2)。



図 3.3.2 スチューデントプロフィールシステム(Sozo Passport)説明会の様子(左:教職員、右:学生)

2. 活動成果

(1) 学内 ICT 環境の整備・充実(設備等の維持や利便性向上の検討)

- 平成23年度末に無線LAN環境の充実化をはじめとする学内ICT環境の更新を行い、大学の一般教室・PC教室のすべてにおいて携帯情報端末から無線LAN接続ができる環境を整えている。平成24年度は、更新後の学内設備に対してシステムログ等の観察を通じて不具合発生状況を監視した。平成25年度も同様の活動を行い、結果として、特に不具合の発生は確認されなかった。現状では安定した無線接続環境を提供できているといえる。
- ネットワーク端末の増加に伴い、学内からのインターネットトラフィックも増加傾向にある。これに適切に対応するため、本学情報システム部門(ネットワーク管理委員会、システム管理室)を中心に、インターネット回線の増速(最低保証帯域の改善)を行った。
- 本学では、学内におけるiPad活用の促進を目的として、学生のためのiPad充電用ロッカーを設置している。平成25年度から貸与するiPad(第4世代以降)は、本体で採用されているコネクタの形状が従来のものと異なるため、それらの端末に対応するよう充電ロッカーの再整備を行った。

(2) 携帯情報端末の配布・諸説明等のICTリテラシ指導、および、eラーニング推進

- 平成25年度入学生(1年生)に対してiPadを貸与するとともに、基本的な操作や管理方法に関する説明を行った。同時に、eラーニングアプリ(Handbook、Sozo Platz)の導入および利用に関する説明も併せて行った。
- 平成24年度後半にeラーニングシステム(Handbook)用サーバの増強を実施し、また、教職員に対してはより一層の利活用を検討するよう働きかけた。その結果として、平成25年度は前年度と比較してさらに授業や演習でのシステム活用が進んだ。図3.3.3はHandbookログイン数およびコンテンツ数を示したものである。図3.3.3より、年間を通してeラーニングシステムが活用されており、また、教職員が作成した教育用コンテンツも飛躍的に増加したことがわか

る。

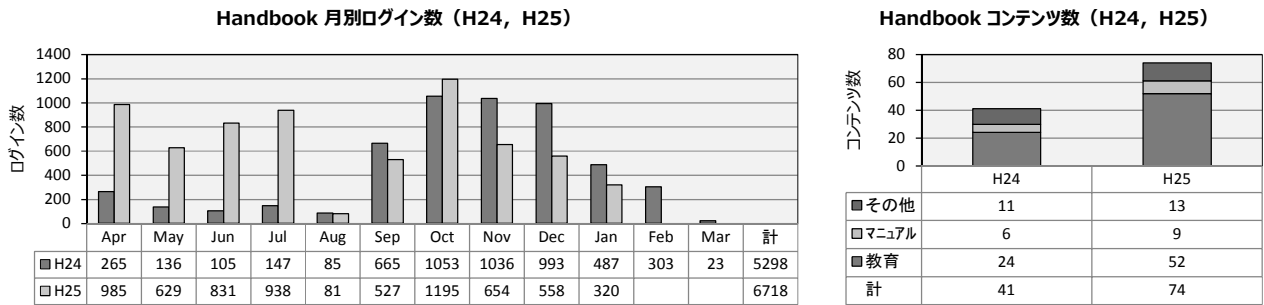


図 3.3.3 e ラーニングシステム(Handbook)活用状況

- 就業力育成支援を目的として開発した一問一答 iPad アプリ(Sozo Platz)について、不具合の修正を行った。また、問題再配信機能(配信予約機能を含む)を開発することで、過去のリソース(作成課題)を有効に利用できるように改修を行った。

(3)「4 つの教育事業」で使用するアプリケーション・システムの開発・運用支援

- 平成 24 年度は、自己理解促進プログラムグループ・地域産業連携プロジェクトグループと連携し、それぞれのグループで使用する『スチューデントプロフィールシステム』(学修ポートフォリオシステム、Sozo Passport)の仕様策定を行い、結果としてプロトタイプを完成させた。平成 25 年度前半はさらに詳細な作り込みを行い、後半(秋学期、9 月)から正式にシステムの運用を開始した。運用開始に当たっては、事前に教職員向け説明会を実施し、操作方法等についての理解を促した。同様に、学生向け説明会も実施し、システムの目的や利用方法について説明を行った。図 3.3.4 に運用を開始した Sozo Passport の画面例を示す。Sozo Passport の機能の一つである「課題作成(教員)」「課題提出(学生)」の秋学期利用状況を整理した結果、学部・短大あわせて 26 科目(課題数 69)で同機能を利用しており、運用開始からまだ日が浅いものの、積極的に活用されたことがわかる。
- 地域産業連携プロジェクトグループで利用する『プロジェクト管理アプリ・システム』について改修(新 OS 対応)作業を行った。また、これまでの同システムの活用状況を振り返りながらシステムのあり方について検討を行い、次年度以降(平成 26 年度以降)に取り組むべき課題や方針についてまとめた。



図 3.3.4 スチューデントプロフィールシステム(Sozo Passport)画面例

(4) 事業成果の広報等を目的とした Web サイトの構築・運用

- 本事業の Web サイト(対外的な広報、および、内部関係者向けのマニュアル揭示等の目的で設置)について、取り組む事業ごとの活動履歴や情報を参照しやすくするため、年度当初に大幅な改修を行った。図 3.3.5 に改修後の Web サイトを示す。
- 大学関係者(プロジェクト指導担当教員等)が情報を発信しやすくなるよう、学内における Web 記事掲載フローを整理した。結果として、平成 25 年度の掲載記事数は、前年度の 60 件から 119 件へと倍増した。図 3.3.6 および表 1 に Web アクセス解析結果を示す。この結果からもアクセス数が増加していることがわかり、大学関係者のみならず本学の取り組み(活動内容や教育手法等)を産業界・教育界に周知するひとつのツールとして効果的であったといえる。実際に、教育(就業力)関連の情報を整理しているポータルサイトから本事業の記事がリンクされ、そのサイトを経由した一定数のアクセスがあったことも確認された。



図 3.3.5 地域産業界連携教育力改革プロジェクト Web サイト <http://project.sozo.ac.jp/>

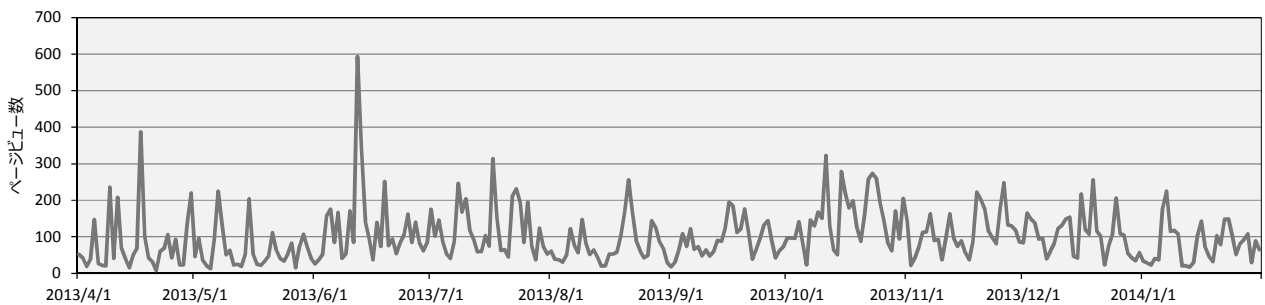


図 3.3.6 事業 Web サイトのページビュー数の推移 約 101 ページビュー/日 (2013/4/1~2014/1/31)

表 3.3.1 事業 Web サイトアクセス状況

年度	ユーザー数	訪問数	ページビュー数	訪問別 ページビュー
H24 (2012/4/1 - 2013/3/31)	2,706	9,059	19,894	2.20
H25 (2013/4/1 - 2014/1/31)	3,235	11,073	30,946	2.79

3. 今後の課題点

- (1) 継続して学内 ICT 環境の管理・監視を行い、適切な環境を維持できるよう努める。
- (2) 新たに本学に入学する学生に対して従来同様に iPad を貸与し、全員が iPad を所持し学習に利用できるよう準備する。また、そのための説明会の開催やマニュアル作成等を随時行う。引き続き e ラーニングシステムの利用促進策について検討する。
- (3) 関係事業グループと連携してスチューデントプロフィールシステム (Sozo Passport) に関する未作業分について開発・実装を行い、教職員および学生向けにサービスを提供する。随時利用者から意見を収集して機能改善を行い、より学生指導に有益なシステムに進化させる。
- (4) 前年度に引き続き本事業の活動内容を Web サイトに整理して掲載し、連携大学向け情報共有および一般の学外向け情報発信を行う。

(2)大学コミュニティーグループ

1. グループ事業の取り組み

本学では、『産業界ニーズに対応した教育改革・充実体制整備事業』の補助金対象外のコミュニティーグループ活動を、本学の費用負担で行っているものである。目的は『教育体制・産業界ニーズ把握体制の後方支援』である。平成25年度は卒業後3年間における卒業生の離職状況調査を中心に以下の活動を行った。また、この活動は大学と短大が連携した形で行っている。

平成25年度活動内容は

月 日	活 動 内 容	学部
4月～5月	平成22、23、24年3月卒業生 就業状況調査の集計、分析	○
5月	就業状況調査未回答者追跡調査実施	○
6月～3月	卒業生就職先に企業訪問 求人開拓 在学生への教育指導依頼	○
10/26-10/27	創造祭同窓会ブース開設 創造祭へ来た卒業生にアンケート調査を実施	○
10/28 (月)	学内企業説明会 OB 人事担当者参加による説明に実施	○
12/5 (木)	短大OG 交流実施 (先輩の就職体験報告会にOG 参加)	
2月	平成23、24、25年3月卒業生 就業状況調査の実施	○
2/9 (土)	学内企業説明会 企業アンケート調査	○
3月	就業状況調査未回答者追跡調査実施	○

2. 活動成果

■ 卒業生就業状況調査

過去3年間の卒業生に対して、就業状況を把握するアンケートを毎年実施している。アンケートは離職率を集計するだけでなく、離職に至った理由等を分析し、在学生の就職指導や各種対策講座へも反映し、安易な離職を防ぐためのノウハウの蓄積となり役立てている。

また、このアンケートでは卒業生との大学コミュニティーを活用した社会人基礎教育を展開させ、在学生が交流できる仕組み作りに役立てることを視野に入れた項目も設けており、卒業後の早期離職を防ぐことに繋げている。

課題としては、アンケートの回収率の問題がある。平成26年3月31日については、未回答の卒業生宅へ休日などに電話を掛けて、個別に調査を行う予定をしている。

2012年度調査より

【2012年3月卒業生の離職率】 大学 19.2% 短大 22.5%

【離職理由上位】

(大学) ・長時間労働・適性に疑問を持った・給与水準が低かった

(短大) ・人間関係が悪かった・長時間労働・適性に疑問を持った

という結果であった。

■ 創造同窓会総会におけるアンケート調査

8月3日(土)2年に一度の同窓会総会が開かれアンケートを実施した。

実施対象者：本学学部卒業生 50名 有効回答者数： 29名

1) 現在の勤務先の満足度

・大変満足 2 ・満足 15 ・普通 6 ・多少不満 2 ・不満 2 他

2) 勤務先のよいところを記入して下さい

<業務・企業について> ・安定している ・顧客訪問が多く、様々な個性に触れることが多い
・人の役に立つ仕事である ・モノ作り ・ゼロからの商品企画、展開が魅力
・最先端の技術にふれられる

<労働環境・待遇等> ・県外転勤がない ・とても仲が良く働きやすいです ・給与
・休暇 ・休日を拘束されない ・自分の予定に合わせて勤務できる
・長期転勤がない所 ・福利厚生がいい ・人の事を大切にできること
・1人1人の役割に対する責任が大きく、やりがいがある
・自分のものさしを拡大でき、視野が広がり勉強になる

3) 勤務先の問題があると思うところを記入して下さい(自由記述)

<業務・企業について> ・自由すぎる ・先が見えない ・業界がいつまで続くのか不安
・無意味な業務が多い ・現場の仕事、苦労をトップが知らない
・利用者の思いにこたえることができず、自立や生活機能動作の向上に目的を置きがち
・月末、大型連休前後の量が多い ・発送の量が安定しない
・若い人がすぐ辞め、年のいった人ばかりの逆ピラミッド

<労働環境・待遇等> ・多忙 ・報告が多い ・雰囲気为学校に近く、社会的な雰囲気が薄い
・出世しないとモチベーションが低下する
・サービス残業が多い所 ・利益が少なく賞与が少ない、または全くない

4) 平均の残業時間について 1日平均の残業時間数 回答者 23名

・なし 4 ・0.5~1.5時間 11 ・2~3時間 6 ・3~4時間 2

5) 残業代は支給されますか? 回答 17名

・支給される 12 ・支給されない 5

6) 今の勤務先を後輩に勧めますか?

・はい 12 ・いいえ 8 ・分からない 6 ・未記入 3

7) 今後、大学から授業や就職ガイダンスへの協力依頼があった場合、可能ですか?

・はい 9 ・いいえ 9 ・条件が合えば 6 ・未記入 6

8) あなたは働き続けるために必要な条件は何だと思いますか?

・給与面 8 ・人間関係 18 ・精神力 12 ・その他 3 ・未記入 4

(意見) ・給与面、人間関係、精神力のうち2つは必要、2つ欠けたら難しい

9) その他意見 ・人と人との関わりが人間の世の全てと知りました。教養ももちろん必要ですが、まず人として豊かな人材育成が必要かと考えます。豊橋創造大学からも人材を出していけるよう人間味ある教育を今後ともよろしくお願い申し上げます。

10) 転職された方理由

・会社に将来性がないと思った 6 ・労働時間が長すぎた(不規則であった) 3
・給与水準が低かった 3 ・人間関係が悪かった 2 ・キャリアアップのため 2 他

11) 在学生から就職相談のある場合は電話をしてもよいでしょうか

・はい 4 ・いいえ 9 ・未回答 16

【所見】 今回で同窓会総会開催時に実施する卒業生アンケートは2回目になるが、出席する卒業生は正規職員で働いている人が多く、勤務先の満足度も「大変満足」・「満足」が17名と約57%の卒業生が満足と答えている。また、回答者29名のうち9名が転職経験者と約3割が転職を経験しているが、1

期生が卒業してから 13 年が経ったことを考えると同窓会に出席する卒業生は多少なりとも現状に不満があっても最初に就職したところで頑張っており、7 割が定着している結果となった。最近の離職率調査の結果が 1 年で離職率 3 割を超えることを考えると働き続けるために必要な条件 1 位に人間関係、2 位に精神力、そして 3 位が給与面と答えていることから本学のキャリア教育で養成しようとしているメンタルタフネスは重要な教育である。また、給与面も 3 位に入っていることから求人票をしっかりと確認して、就職先を選ぶことが大切なことを在籍学生へ指導していきたい。さらに、OB・OG として母校への協力も前向きに考えてくれている卒業生が多いことも今回のアンケートの収穫となった。今後も引き続きアンケートを実施し、卒業生の動向を捉えていきたい。



図 3.3.7 同窓会総会アンケート実施



図 3.3.8 創造祭卒業生同窓会ブースアンケート実施

■ 創造祭学部卒業生同窓会ブースにおけるアンケート調査

『創造祭』（学園祭）の交流の場として学部卒業生を対象とした同窓会ブースを開設した。

開催日：平成 25 年 10 月 26 日（土）・27 日（日）

会場：豊橋創造大学 B22 教室 卒業生参加：50 名

勤務先に関する就職のアンケート調査を実施した。有効回答者は 18 名

- 1) 今の仕事で『満足・普通』で 15 名。『不満・多少不満』で 2 名であった。
- 2) 勤務先の『良いところ』は、安定している、人の役に立つが多く、
- 3) 『悪いところ』では、多忙・サービス残業、先が見えないとなっており、今回の調査では人間関係で良し悪しが決定されるウエイトが多いように思われた。
- 4) 平均の残業時間について 1 日平均の残業時間数 回答者 11 名
 - ・なし 4 ・0.5～1.5 時間 3 ・2～3 時間 4 ・3～4 時間 4
- 5) 残業代は支給されますか？ 回答 16 名
 - ・支給される 9 ・支給されない 5 ・役職になったので出ない 2
- 6) 今の勤務先を後輩に勧めますか？ 回答 17 名
 - ・はい 2 ・いいえ 5 ・分からない 10
- 7) 今後、大学から授業や就職ガイダンスへの協力依頼があった場合、可能ですか？
 - ・はい 4 ・日程が合えば 6
- 8) あなたは働き続けるために必要な条件は何だと思いますか？
 - ・精神力 8 ・人間関係 7 ・給与面 7 ・他 1
- 9) 転職者理由 ・家族や私的な事情（結婚を含む） ・長時間労働 ・給与水準 ・人間関係

10) 在学生から就職相談のある場合は電話をしてもよいでしょうか

・はい5名

そのほか、卒業生からの求人情報もあり、さらに卒業生を招聘する授業や就職ガイダンスへの協力賛同者が10名ほど発掘できたことは、今回の成果であった。

■ 学内企業説明会 企業アンケート実施



図 3.3.9 学内企業説明会 10月



図 3.3.10 学内企業説明会 2月

秋の『学内合同就職説明会 (10月28日 32社)』、春の『三河地区企業学内研究セミナー (2月8日 32社参加)』一部の企業の中には本学出身人事担当者の参加があった。本学学生の目線に立った、現実的で身近な説明は大変親近感もあり学生自身に大変意義のあるものであった。

また、各説明会において、本学学生の印象について、参加企業の皆様に簡単なアンケートを実施したのでご紹介させていただく。

【秋の『学内合同就職説明会 (10月28日)』】

- ・積極的でよい8社
- ・真面目な学生が多い2社
- ・明るく疑問にもった事をそのままにせず質問するという社会人として必要な要素を兼ね備えている子が多いと感じました。4社
- ・熱心に聴いている姿に好感が持てました。2社
- ・おとなしい印象だった3社 (営業職)。
- ・何がしたいのか、そのためにどのように就活を行っていけばよいか手探り状態。
- ・人柄がよく、素直でおっとりしている印象でした。2社
- ・会社の予備知識がもう少しあるとよい。
- ・礼儀正しい
- ・地元学生が多い・他校にも言えますが、会場入り口でなかなか入ろうとしない学生が気になりました。
- ・あまり積極的ではない (介護)
- ・学園祭実行委員を経験された積極的な生徒が参加してもらえてよかった。
- ・元気のある学生とない学生がいたように感じられました。
- ・どんな仕事をしたいのか、的を絞れていない学生が多く、この時期に的が絞れていないと難しいと思います。

【春の『三河地区企業学内研究セミナー (2月7日)』】

- ・真面目な方が多い13社。
- ・おとなしい学生7
- ・反応がない1
- ・内向的1
- ・礼儀正しい1
- ・友達と固まって企業ブースを回っている学生がいる。
- ・質問が少ない

- ・就職するのはあくまで自分です、もっと個を積極的にアピールして欲しい。
- ・笑顔が良い2社 ・明るく積極的な学生さんが多い3社
- ・話を聞く姿勢や質問に思っている以上に鍛えられている感じがした。・熱心な学生2社
- ・コミュニケーションがしっかりとれる学生が多い
- ・まだこれから職種を決めると感じる学生が多い

という回答であった。特に気になるのが、本学学生は、『真面目でおとなしい』という企業からの指摘で積極性、社会人基礎力で言う『前に踏み出す力（主体性）』がまだまだ不足しているように考えられる。

《昨年度2月7日参加企業に実施したGPアンケートより》

- ・『産業界ニーズに対応した教育改革・充実体制整備事業』の取り組みについては大変よい取り組みである、特にメンタル面での取り組みは先進的だと思う。
- ・学生さんが自ら立ち上げ運営までされることは、とてもよい学習になると思います。
- ・大学の講義を聞くだけでは学べないことを肌で感じられるよい機会である。
- ・最近の学生に不足している点は、個性、コミュニケーション能力、積極性、忍耐強さ。専門知識にこだわらず、幅広い知識、応用力が必要。
- ・10年前前と比較すると、「どんどん出世したい」というガッツのある方が少なくなった。サラリーマン、社会人に対して夢を持てるようにすることが必要と考えます。
- ・本学学生に不足しているものとして、明るさ、元気さ（特に男性）、目的意識。
- ・面倒見がよい学校が多いですが、ある程度「不自由さ」を経験することで、自ら動き発見する力が養われるのではないかと考えます。わざわざ大人が手助けしなくても社会を堂々と渡り歩いて行ける強さを身に付けられるような教育をお願いしたいです。

この結果から、企業が望む人材として『ガッツのある人材』『めげない精神力』『周りに配慮できる人材』などを求めており、おおむね本事業を評価したものとする。

■ 短大OG交流実施（先輩の就職体験報告会にOG参加）



『短大OGとの交流の場』として短大キャリアプランニング科1年生を対象とした「先輩の就職体験報告会」を実施した。

実施日：平成25年12月5日（木）4時限

会場：豊橋創造大学 B14教室 在学生参加：55名

OG講師：医療法人 光生会 天野磨美子氏（2006年度キャリアプランニング科卒業生）

1年生を対象とした「先輩の就職体験報告会」を今年度も実施し、卒業予定者6名による内定報

告に続き OG による講演を実施した。OG からは実際の医療事務の仕事についての話や社会人になって大変だったこと、学生時代に学んでいた方が良いことなど現役の後輩たちへアドバイスをいただいた。講演後、在学生との交流の場を設け、話を聞いた在学生からは「これを機に今の自分の生活を改め直さなければならぬと痛感することができました」「在学中にしっかりとビジネスマナーを身に着けておきたい」など現役の学生たちにとって貴重な場となりました。

■ 企業訪問

企業訪問は、55社（学部15社・短大40社）行った。特に短大では、昨年度卒業生が就職した企業を中心に訪問を実施し、採用した側の思惑や意見・配慮等を詳細な部分まで聴取することができた。また、訪問することにより卒業生が喜ぶ様子から状況を読み取り、また苦悩する表情に励ましの助言を行うこともできた。このことは、早期離職に至る防波堤となったことと言える。さらに卒業生に対するフォローアップ効果も大であった。

今後は、直前卒業生の就職先訪問に留まらず、過去・新規の就職先企業訪問に広げていきたい。

どんな人材が望まれているのか

- ・新しいことにチャレンジする勇氣・バイタリティが欲しい。
- ・思いやりのある、やさしい人材がほしい。（病院）
- ・積極的に声を出してほしい。
- ・元気で、明るいこと。人柄がよいこと。性格がよく、素直なこと。
- ・挨拶ができ、他人と会話ができて、まわりに興味が湧くこと。
- ・5年間かけて1人前にするつもりだ。厳しいがしがみついてきてほしい。（会計事務所）

直面している現状

- ・充実している商業高校の長期インターンシップとの差。
- ・メンタル面が弱い。「働くということ」に対して甘い考えがあること。
- ・「頭」と「体」のバランスが要求されている。考えていることをすぐ行動に移せる。口先で言うだけでなく、実際に行動できる。相手の言うことを理解し（場合によっては先取りし）、行動できる。
- ・採用試験の際、資格はあってもよいが、なくても支障がない。
- ・就職してから社内研修など、活動に積極性が見られない場合がある。
- ・自己肯定感の弱い卒業生がいる。高校生より自分の能力不足を自覚し、気弱になる。
- ・医療事務職は、基本的に欠員補充なので、計画的な採用が少ない。
- ・一度、本学の卒業生の採用で懲りると、戻るまでに時間がかかる。
- ・企業は、「大人の対応」をするので、我々に対して直接文句を言うことは少なく、無言で本学から離れ、求人票を送ってこなくなる。
- ・女子学生においては事務志望が多いが、実際には事務職採用企業は少なく、営業や販売、介護などの専門職で働ける人材を望んでいる。

上記が、卒業生の就職先訪問から得られた状況の一例である。今後は情報を掘り下げ、マッチングの質を高めること、これからの学生に必要なグローバルな考え方や自分の考えを人に伝える力（コミュニケーション力）を伸ばすことなどは、一人一人の学生を見つめ指導する側の重要事項と考え、更に今後の課題として取り組んでいくことである

3. 次年度に向けた改善

本活動は『教育体制・産業界ニーズ把握体制』の後方支援を行っているが、結果を分析して教育改善を行うため学部、短大に積極的にフィードバックしていきたい。今後の課題としては、現状の大学コミュニティ活動だけでは限界があり、範囲も限定されていることから、三遠南信地域産学官人財育成ワーキングへの参加等へも広げてゆきたいと考えている。



図 3.3.11 名古屋 企業セミナー



図 3.3.12 名古屋「女子学生のための就職フェア」

補助資料

4

1

プロジェクト活動成果報告書 (教員)

PB競争時代における地元スーパーの生き残り戦略.....	65
担当教員:石田 宏之	
携帯端末向けアプリ作成.....	69
担当教員:今井 正文	
SOZOショップコラボプロジェクト.....	71
担当教員:川戸 和英	
豊橋エコタウンプロジェクト ～豊橋市内小中学校に設置された太陽光発電システムの状況調査～.....	73
担当教員:見目 喜重	
アカウミガメ保護啓発活動.....	75
担当教員:中野 聡	
高校生と学ぶ会計学☆彡.....	76
担当教員:野口 倫央	
トヨハシ♡(ハート)ヨシプロジェクト.....	78
担当教員:三好 哲也	
We ♡ NONHOI ～のんほいパーク盛り上げ隊～.....	81
担当教員:三輪 多恵子・山口 満	

P B 競争時代における地元スーパーの生き残り戦略

石田プロジェクト

1. プロジェクトメンバー

安藤 祐輝・21123202、酒井 裕輝・21123112、
井上 晃成・21123207、井上 高彰・21123208、
久米 佑典・21123214、柴田 和樹・21123217
牧野 広季・21123901

2. 協力企業等と調査個所

・ 協力企業等

①サンヨネ本社（三浦本部長よりヒアリング）

②豊橋農協及び高橋農園

・ 調査個所

①コンビニ：セブンイレブン、ファミリーマート、ローソン、サークルKサンクス

②スーパー；マックスバリュ、イトーヨーカ堂、サンヨネ、クックマート

3. プロジェクトの概要

(1) 調査目的

調査の目的は以下の点を明らかにすることである。

①NB 商品と PB 商品との違い

②NB（ナショナルブランド）商品に比べて PB 商品は、なぜ価格が安いのか

③コンビニは、なぜスーパーより高いのか？

④PB 商品を製造するメーカー及び野菜の P B 商品を生産する農家・農協の対応は

⑤これら PB 商品を供給するロジスティクスシステム

⑥PB 競争時代の地域スーパー（東三河）の生き残り戦略は

大野尚弘「PB 戦略—その構造とダイナミクス—」（2010年2月）

富士通ロジスティクスソリューションチーム・編「中間流通はだれが担うか—小売業・卸売業・メーカー・運輸倉庫業：18社の先進事例—」

②日本経済新聞、日経産業新聞、日経流通新聞等の新聞記事

③ヒアリング及び実態調査（本プロジェクトでは、主として食品・野菜を対象）

・スーパー（マックスバリュ、イトーヨーカ堂、バロー、クックマート、サンヨネ）

・コンビニ（セブンイレブン、ファミリーマート、ローソン、サークルKサンクス）

・豊橋農協及び高橋農園（それぞれヒアリング）

・サンヨネ本社（店舗調査と三浦本部長よりヒアリング）

(3) 実施結果

① ブランドの定義と PB 競争時代

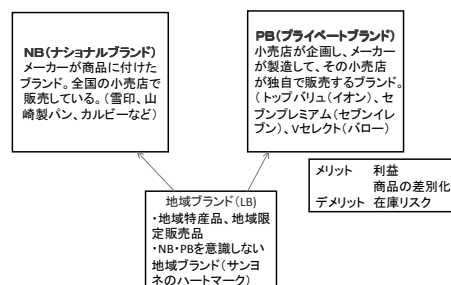
ブランドには、NB(ナショナルブランド)、PB（プライベートブランド）、LB（ローカルブランド）の3種類があり、NBとは、雪印、山崎製パン、カルビーなどの大手メーカーが商品に付けた商品名で全国の小売店で販売されている商品を指す。PBとは、トップバリュ（イオン）、セブンプレミアム（セブンイレブン）、Vセレクト（バロー）などのように小売店が企画し、委託メーカーが製造して、その小売店が独自で販売するブランドを指す。

NB・PB・LBの定義

(2) 調査方法とスケジュール

	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
文献調査	←	←	←	←	←	←	←	←	←	←	←	←
ヒアリング及び実態調査	←	←	←	←	←	←	←	←	←	←	←	←
報告書作成						中間報告				本報告		報告書作成

① 文献調査：日本経済新聞社・編「PB・格安・高品質競争の最前線」（2009年11月）



地域ブランド（LB）とは、地域特産品、地域限定販売品などや今回調査したサンヨネのハートマークのようなNB・PBを意識しない商品をここでは指す。

PB 競争時代は、長期デフレの影響で、消費者の節約志向が強まり低価格商品のニーズが高まったことから始まった。

低価格化のニーズは、NB 商品の価格低下としては見られず、こう売り商品の価格決定権をもつ小売り側から手がつけられた。それがPB 商品の開発に取組みと低価格商品を提供する戦略である。

大手スーパーが90年代後半から始めたPB戦略は、2000年に入り大手コンビニにも波及し、その後、地域スーパーでもPB開発を手掛けるようになった。

その結果、これまで別市場であったスーパー、コンビニ、生協、100円ショップなどの市場の境界を不鮮明にし、これら業種での競争が激化している状況が、「PB 競争時代」といえる。

PBとNBの価格比較と高級PB商品 従来からの低価格のPB商品は、スーパー及びコンビニでは、NB商品と比べて30~50%と安いことが店舗調査によって検証された。しかしながら、昨今では、NB商品より高い価格の高級PB商品が出回ってきている。

スーパー・コンビニの高級PB名

会社名	プライベートブランド	特徴
ファミリーマート	ファミリーマートコレクション(プラチナライン)	素材や製法のグレードを上げた高付加価値商品
サークルKサンクス	PrimeONE	高価格帯のPB
イオン	トップバリュセレクト	素材、産地、製法、昨日にこだわった高品質ブランド
イオン	トップバリュプレミアム	上質な素材と製法、衣料ブランド
セブン&アイ	セブンゴールド	高価格帯のPB

このように、従来のNB価格>PB価格の概念が壊れつつあり、また、NB商品に関してこれまでコンビニ販売価格>スーパー販売価格といった概念も代わりつつあり、NB、PBの差別がつきにくくなっている。店舗調査では、コココーラについては明確な差異が見られた

が、その他の商品では、店舗によっては販売しておらず、NB類似の商品がないなど、NB商品とPB商品の販売戦略が変化していることも判明した。

② PBを生産するメーカーの特徴

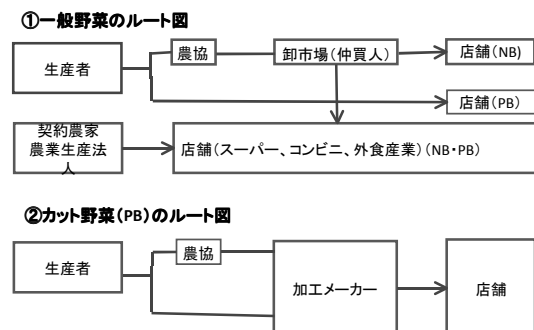
PB商品を生産している企業にはさまざまな規模の企業が委託を受け生産している。大手スーパーの3社（セブンアンドホールディング、イオン及びユニーグループ）の特徴を見ると、セブンとイオンは大手企業との共同開発が盛んであり、それに続くユニーグループのサンクスを見るとこれら2社との差別化をはかり、低価格の独自（プラス one）PB商品をさまざまな規模のメーカーに生産委託している。ただ、その中で、共同開発をしている企業には大手企業が多くみられる。これはサンクスでもそうであった。

共同開発には生産側も販売側も双方に利益があるが、デメリットとして、NB商品と味、質の差をどう解消できるかである。

③ PB商品に対する農家・農協の考え

「産地ブランド」がNB商品だということが判明した。一方、農家が卸市場を通さずにスーパーやコンビニなどに販売する商品がPB商品である。たとえば、大葉、ネギ、しいたけ等についてスーパーでPBマークを付け販売している。また最近では、「カット野菜」がPB商品としてスーパーおよびコンビニで回っている。

野菜に関するNB商品とPB商品の流通ルート図



売り場でPBとするかどうかは、買手のスーパーなどで決定しており、農協ではどちらでもよいと考えている。

市場に頼っていると、中間に仲卸業者が介在するの

で、最終的にどこに販売されるかがよく見えない。また最近では、「いいものを安く販売したい」とのスーパーも増えてきているので、市場に頼らない経路を持つていれば生産農家にいくらかでもメリットがあると考えている。産地ではなく農園の名前の青果物として扱ってもらいそれが浸透していくうちに PB→NB というオリジナル商品になる可能性があることを期待している。また、農家では、従来の NB 商品の野菜より比較的安く、そして確かな品質と食の安全を届けたいとの思いで PB 商品を導入している。健やかな人や社会、地球環境作りへ社会貢献することを願い、農家とスーパーが共に協力し合い作り上げている商品と考えている。

このような農家と契約するメリットには 1) 安く仕入れられる、2) 農家の顔が見える、出所がはっきりできる、3) 他の店にはないオリジナル商品になるなどがあるが、デメリットとして 1) 良い農家に出会える可能性が低い、2) 一年分を確保しなければならない、3) 高く買い入れてしまうかもしれないなどがあげられる。

④ 縁の下の力持ち・・・「ロジスティクス」

ロジスティクスとは、顧客ニーズに合わせ、必要なときに必要な商品を必要な店舗に届けること。その仕組みがロジスティクス・システムであり、システムの核になっているのが物流拠点である。物流拠点設置の目的は、1) 時間通りに、どんな単位でも、指定した場所に届けるなどの顧客ニーズに応えること、2) ロジスティクス・コストを最小にすること(物流の6つの機能ごとの削減とトータルコストの削減)にある。

この仕組みのおかげで、PB 商品も、NB 商品同様に各店舗にスムーズに支障なく納品されている。しかしながらこのような仕組みを構築し維持できるのは大手・中堅スーパーと大手コンビニである。

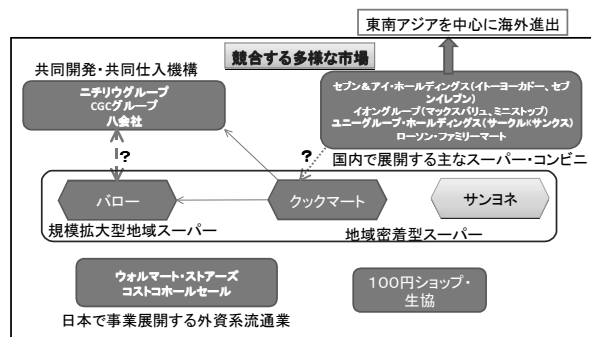
これに対して売上規模が小さく店舗数がそれほど多くなく規模の経済性が発揮できない地域密着型スーパーにおいてはこのような仕組みづくりよりも商品の品質と売上が重視する傾向が強い。

⑤ 地域スーパーの生き残り戦略

すでに述べたスーパー、コンビニによる PB 競争時代の中で、東三河を中心にした地域スーパーの生き残り

りには、3つのパターンが存在する。その第1が中部圏を中心にさらに店舗拡大を図り、CGSグループのような共同開発・共同仕入れ開発型を目指す中堅スーパーバロー型、第2が地域密着型で、今後は、バロー方式の規模拡大を目指すか、大手スーパー・コンビニに吸収されるかのクックマート型、第3が地域拡大や店舗拡大ではなく、「食の安全と食の楽しさを大切にすること」をコンセプトにした地域密着型のサンヨネ型の3種類があることが判明した。

地域スーパーなどを巻き込んだPB競争時代の幕開け



プロジェクトではこの第3の地域密着型のサンヨネ型を取り上げ、その特徴を述べプロジェクトのまとめとする。

サンヨネが提供するハートマーク商品のコンセプトには、1) 食で地域に恩返しする(食へのこだわり、お客様から信頼される安心、安全な食品を提供する) 2) 「おいしい物、安心な物をできる限り提供していき、明るい家庭を作ってください」というメッセージを発信する規模拡大よりも、地域密着型スーパーを目指すことが上げられる。サンヨネの販売商品 に対する思いには、

- 1) 安心でおいしくて健康に値する食品の提供すること(サンヨネのコンセプトに共感する生産者などとの共同開発)、
- 2) 生産者の利益を確保する価格設定すること(生産者の立場に立った商品開発による価格設定)、
- 3) 顧客から販売人に「ありがとう」と言ってもらうサンヨネの食文化を地域でかくりつすること、
- 4) 価値が高い商品として見てほしいこと(PB商と

いうより、お客様のことを考えたハートマーク商品の提供) などがあげられ、
これらを実現することが今後地域で生き残るための戦略である。

4. プロジェクト活動の教育効果

環境や時代の流れとともにこれまでの常識というのが変化していき、一つの考えやその時の状況だけでは全ては分からないということを感じました。また、調査の中でヒアリングだけでなく、各店舗に行って調査をすることの難しさなどを理解させることができた。

調査結果をまとめるにあたって、一人ひとりで担当したテーマを3枚のパワーポイントにまとめることによってそれぞれで理解してまとめた内容を報告する練習をしながら、チームが一丸となってやり遂げることの重要性を理解させることができた。

5. 指導上の工夫や困難性

当初予定していた対象企業を中心に関連する事項を調査することにしていましたが、相手先の都合によりヒアリング調査しかできなかったため、学生の取組み意欲が減退してしまった。そこで、テーマの内容を、地域スーパーに広げ、結論を導くためには、各店舗およびPB商品を委託しているメーカーならびに農家・農協に対する実地調査に変更してもプロジェクトで取り組んでいる内容が大きく変更されたわけでないことを理解させた。

意欲の減退を回復させるために、複数のコンビニの店舗に担当を決め、PB商品とNB商品を買って味比べをすることにより、興味を持たせることにした。

その後本格的に、各自の調査内容および実地調査箇所の分担を決め、実態調査や相手先との連絡等を開始したが、各自の問題意識や意欲に差があり、なかなか全体を通して議論することが困難であった。

最終的には、すでに述べたように、各自の分担を最低3枚のパワーポイントに取りまとめさせ、各自2分間で報告する練習をし、テーマ全体の内容と結論をみ

なで共有することができた。



携帯端末向けアプリ作成

今井ゼミプロジェクト

1. プロジェクトメンバー

亀之内順也 (20923707)、水野翔太 (21023120)、
石川真次 (21023201)、壁谷竜輝 (21023712)、
勝見拓矢 (21123108)、田頭和也 (21123120)

2. 連携先企業・組織

プロジェクトにご協力いただいた連携先企業は、以下の通りである。

株式会社 SRA 名古屋事業所様
株式会社アイエスエル様
小坂井高校様

3. プロジェクトの概要

経営学部では全学年に iPad が無償貸与され、無線 LAN 環境を通して大学内どこからでもネットを利用することができる。電子教材配布だけでなく、レポート作成のための情報収集やゼミナールでのプレゼンテーション作成、就職活動などに利用されている。

本プロジェクトでは、本学の学生の携帯端末の活用を考え、アプリ制作や LMS の構築をテーマとした。アプリ作成を通じて開発技術を学ぶとともに LMS の構築を中心に学習ツールとしての効率的な活用を考える事を目標として活動した。

具体的には、アプリ制作にあたっては、本学の学生の利便性の改善を議論の中心とし、まず、本学のバス利用者向けにバス時刻表アプリを制作する事とした。また、並行して携帯端末活用の観点から、e ラーニングの実施に必要な学習管理システム (LMS : Learning Management System) の一つである Moodle を用いて小テストシステムを作成し、iPad との連携についての検証も行った。

アプリの制作方法や開発環境の検討にあたり、協力先企業様への見学やアドバイスを参考とした。株式会社 SRA 名古屋事業所様からは学校教学システムの概要と開発環境等を、株式会社アイエスエル様からは HTML, JavaScript, jQueryMobile 等による Web アプリ開発環境等について助言頂いた。実際の開発にあたって、

クラウド上にありブラウザ上で動作する Monaca という開発環境を使用した。

併せて、授業内での iPad 活用についての協力要請が小坂井高校様からあり、プロジェクト活動として対応した。要望は多岐にわたるが、今回は、体育における各グループの iPad によるビデオ撮影とそれらの無線 (Wi-Fi) 経由での教員 PC への提出システムの構築を行った。

アプリ制作やシステム構築を行う事を通して、チームによる活動の基礎を学び、各自の性格的な特性や技術的に不足する点等を自覚、内省できたと考えている。

4. プロジェクト活動の教育効果

社会人基礎力では、前に進む力、考える力、チームで働くことのできる力の3能力12分類の資質が取り上げられている。本プロジェクトでは、本プロジェクトでは、本学の学生の携帯端末の活用を考え、アプリ制作や LMS の構築という制約から、実際にはどのようなアプリを作るのか、どのようにチーム分けするのかあるいは分担するのか、開発を実行するかという活動がある事から、3能力すべてが求められる

本プロジェクトでは、作成するアプリの機能について集約し、アプリ作成方法については学生個々のスキルや役割分担を含めての議論が必要になる。この段階では、考える力、チームで働くことのできる力が主に必要となる。スキル別、アプリ作成方法別にチーム分けしてからは、考える力、チームで働くことのできる力はもちろんであるが、さらに前に進む力が必須となる。協力企業との関係としては、情報提供、意見を貰うレベルから、外部である企業とのチーム作業までの発展が目標となる。

5. 指導上の工夫や困難性

本プロジェクト活動では、出来る限り学生に任せる事とし、毎週のミーティング時間の調整と中間発表および成果発表等のスケジュール伝達以外は、特段の指導はせずにおいた。ただし、プロジェクト活動のための技術

的な質問等があった場合や必要機材・試験環境については出来る限り対応した。見学時の各種の配慮やプロジェクト進行上必要となるライセンス購入、開発したコンテンツの iOS Developer Program のアカウント名義等については相談に応じ、支障の無いよう心がけた。

初期段階の作成するアプリの機能についてはブレインストーミングや図形表現による意見集約法によって集約し、アプリ作成方法については学生個々のスキルや役割分担を含めての議論に時間をかけていた様子である。会議法については適宜ヒントを与えたが、この段階では、考える力、チームで働くことのできる力ともに様子がかがいがながら各自できていたように見えた。

初期の段階より、プロジェクト進行等も含めて学生に任せため、作業分担から始まって、個別作業、チーム作業のスケジュールまで、全ての段階で遅延等、色々あったようだが最終的にはチーム作業を出来ていた様子であったので学生の活動としては評価できると考えている。また、独自アプリケーション開発では2チームに分かれて作業していたが、それぞれのチームにおいて技術的な意味でも相応の学習効果もあったようである。

小坂井高校様からの授業内での iPad 活用の協力要請については、聞き取りした多岐にわたる要望から対応可能なモノへの絞り込み、高校生グループごとの iPad によるビデオ撮影とそれらの無線 (Wi-Fi) 経由での教員 PC への提出システムの構築を行った。限られた時間の中での要請に対して、柔軟に対応出来ていた点等も評価できると考えている。

以上の点については、学生の活動報告書や評価シートからも各自の達成度には違いがあるもののチームとしての活動はおよそ同様の前向きな評価をしているようである。一方、社会人基礎力における、計画力、実行力、チームで働く力 (学生は連携と表現) では各自反省点を挙げて内省している。これらの項目については、担当教員としては途中で何度か気づき思いはしたが各チームごと作業に追われているようであったので意見収集の場の設定を能動的にする事をしなかった。しかし、学生の活動報告から改めて振り返ってみると、担当教員として反省すべき点である。

対外的な評価については、協力企業からは学生の活動に対して一定の評価を頂けている様子であり、学生自身の印象も興味深いとの意見を頂いた。また、高校教員の方々からは感謝の言葉もいただいているのである程度評価している。対外的なスケジュール遅延等については、前に進む力に該当するが、対外的に迷惑をかける事はなかったもののまだまだ改善点が多く見受けられる。また、協力企業との関係としては、外部である企業とのチーム作業まで発展できれば理想的であるが、情報提供、意見を貰うレベルから脱していない。学生のアプリケーション開発に関する知識的技術的な問題でもあるので仕方がない面もあるが、指導教員として今後の課題としたい。

6. まとめ

プロジェクト活動は、社会人基礎力養成の教育プログラムである一方、学生の動機づけの機会と考えているが、できる限り外的要因でなく内的要因を誘発するものになるよう配慮したいと考えている。そのためできる限り教員の関与を意識させないようにしているつもりであるが、前節で反省点、課題としたように関与度合いについては私自身まだまだ考慮する点も多く常に悩ましい部分であると考えている。

本年度のプロジェクト活動を踏まえた次年度以降のプロジェクトの進め方について以下に示す。

(1) プロジェクト内容について
プロジェクト内容については、上記理由により特定することなく行いたいと考えている。

(2) プロジェクトの進め方について
同様にプロジェクト活動では、出来る限り学生に任せる方向で対応したい。教員の関与については議論の余地があり、今後も考慮しつつ運営したいと考える。

(3) プロジェクト運営の制度について
制度的なものについては特にないが、あえて言えば、3年次の学生の動機づけと達成できる目標には、学生個々の知識的な問題もあり、一考の余地があるように思う。2年から4年、各学生個々それぞれに実行可能なレベルがあるため、前後の導入的、実践的プロジェクト等があれば、さらに効果があるように考えられる。

SOZOショップコラボプロジェクト

川戸プロジェクト

1. プロジェクトメンバー

松本教史(20923122),伊豫田英将(21123105)

浪崎祥平(21123125),廣中佑紀(21123127)

馬 駿(21123130),伊藤奨麻(21123205)

佐々木智至(21123216)

2. 連携先企業・組織

1)NPO 団体「パルク」

2)コラボ：ほの国百貨店

：松山小学校

3. プロジェクトの概要

1)4/26 開店の「笑輪」を発展させる

2)ほの国百貨店や松山小学校とコラボすることによって

1.現実の百貨店のマネジメントを体験する

2.笑輪のPR

3.地域の人との交流により、接客力が向上

3)その間に企業のマーケティング戦略に関する企業見学を実施。今回は中部国際空港株式会社で、同社のマーケティング戦略と空港見学を行った

※実際の活動～



4/26 SOZOショップ「笑輪」開店



6/21 中部国際空港会社見学



7/27 松山小学校夕涼み大会・出店



12/23 ほの国百貨店コラボ

「親子ふれあい広場」

4. プロジェクト活動の教育効果

1)毎週金、土、日営業のSOZOショップの企画・運営を通じて、日々商品の売り上げ状況、顧客の動向等、ショップの営業・マーケティングの実地体験を蓄積する。

2)松山小学校、ほの国百貨店でイベントを開催するに関して、イベント・セールスの企画、及び仕込み、当日のイベント進行、そして予想できない事態に対する対応や、現場での即効性のある取り組みや後始末等を臨機応変に、かつ、コラボ先の関係者、事業者に対して迷惑をかけずに実施することで、企画から現場までの一貫した事業遂行が体験できたことは、高い教育効果があったと確信できる

5. 指導上の工夫や困難性

1) SOZOショップ「笑輪」の運営は、4年生と3年生共同で当らせたが、3年生のモチベーションが全体として低く、ショップ出勤のローテーションを組んでも、開店後の第2週は3年生全員が欠席というスター

トだった。彼らにモチベーションを構築するのが難しかったが、少しずつ構築できてきた。とはいえ、まだまだ「店のためにできることをする」という気構えまでには至っていない。

2) 工夫としては、「自分が動かないことでどれ程他の人に迷惑をかけるか」、「こんこんと」言い続けた。

3) 困難性としては、教員がいろいろと「アドバイス」をすることを、学生たちが、「説教された」、「文句言われた」などと解釈する気風が抜け切れていないことである。そのための教育の仕方について、粘り強く、説得を繰り返すことを積み重ねる以外にない。

6. まとめ

1) いろいろと課題を残しながらも、本プロジェクトは、予想以上の成果をもたらした。何よりよかったのは、現場で学生たちが臨機応変に対応できたことである。別の言葉でいえば、「現場に強かった」ことを改めて学生も教員も認識できたことである。

2) 当初は、コラボの内容やイベントの企画に少し物足りなさを感じられる面もあったが、それでも、そのイベントの顧客はどういう人たちで、そのために何をすべきかについて筋道を立てながら企画できたし、コラボ先からも支持されたことが成果である。

3) ただ、課題も見えた。

① コラボ先との連絡、交渉、日程確立などの仕事が十分任されなかったことが教員として悔やまれる。

内容に関しては、学生たちの企画を前面に追い出し、それがコラボ先から支持を得られたが、恐らく学生たちにももう少し詰められたのではという感があったと思われる

② 一般企業や関係組織との連絡・折衝のほかに、企画を常に検証しながらより良いものに仕上げることを追求できるようになれることが、実社会でも必要となるので、ぜひこのことを意識しながら、あとの勉学を励んでほしい。

以 上

プロジェクトテーマ豊橋エコタウンプロジェクト

～豊橋市内小中学校に設置された太陽光発電システム状況調査～

見目プロジェクト

1. プロジェクトメンバー

田辺俊希 (20923215)、鈴木涼太 (21123117)、
惣門健人 (21123118)、眞子 匠 (21123132)、
杉元篤史 (21123220)、鈴木啓吾 (21123221)、
中川千加 (21123228)

- ・各小中学校への調査協力のお礼 (お礼状の送付)
- ・調査情報のとりまとめと分析
- ・報告書の作成
- ・調査結果の報告 (豊橋市教育委員会)

2. 連携先企業・組織

- ・豊橋教育委員会教育政策課
(担当: 渡会小枝子)
- ・豊橋市市内各小中学校の校務主任

3. プロジェクトの概要

近年、資源の枯渇化、地球温暖化といったエネルギー・環境問題への対応から、太陽光発電の普及促進が進む中で、太陽光発電システムの故障や発電性能の劣化などの長期信頼性に関する問題が指摘されている。

太陽光発電の長期信頼性の評価には、ある地域において複数のシステムの長期的なデータ収集・分析が望まれる。しかしながら、民間施設に設置された太陽光発電のデータを長期的に収集することは困難である。一方で、公共施設に設置されたシステムについては、データの提供・収集が比較的容易であると思われる。

以上のことから、本プロジェクトでは豊橋市内の小中学校 (全 74 校) に設置されている太陽光発電システムを対象に、システムの稼働状況を調査し、その長期信頼性に関する基礎データを収集して分析する。

プロジェクトの実施にあたっては、以下のような作業を実施する。

- ・豊橋市教育委員会への調査実施の依頼
- ・各小中学校への調査実施の依頼
- ・訪問調査の担当校の分担決定
- ・訪問調査の日程調整 (電話で担当者と調整)
- ・調査項目の検討
- ・訪問調査の実施

本年度は 73 校の調査を行うとともに、過去 3 年間のシステムのトラブル状況を発電量への影響から 3 段階にレベル分けしてまとめた。その結果、本年度は 9 件のトラブルを確認し、その中には発電停止などシステムの運転への影響が極めて高いものが 7 件あった。また、昨年生じたトラブルが改善されていないものも 2 件確認した。

また、吉田方および豊城中学校を対象にして、太陽光発電システムの性能劣化評価を変換効率の推移から試みた。これまでに得られた結果の分析から、吉田方中学校のシステムについては変換効率の若干の低下が見られた。ただし、その低下の度合いは太陽電池メーカーの性能保証範囲内であり、大きな問題とは思われないと思われる。今後、より詳細に定量的な分析を試みる予定である。

4. プロジェクト活動の教育効果

社会人基礎力 (前に踏み出す力、考え抜く力、チームで働く力) の育成に対して、本プロジェクトでは次のような教育効果を想定している。

(1) 前に踏み出す力

各自が調査分担校と日程調整を行い、訪問調査を実施することで、主体性・実行力を育成する。

(2) 考え抜く力

訪問調査の結果から、現状とその問題点を考察することで、課題発見力と創造力を育成する。

また、調査校の予定、各自の受講スケジュール、プロジェクトのスケジュールを念頭に入れて、効率的に訪問調査を実施しなければならない。このことから、計画力を育成する。

(3) チームで働く力

各小中学校の担当者によって太陽光発電システムに関する興味は大きく異なる。こうした状況で、調査の際に自分が何を聞きたいのかを相手にわかりやすく伝えることが必要である。ここでは、発信力が必要となる。また、相手の意見を丁寧に聞き出すことにより、傾聴力を育成する。

訪問調査の実施にあたっては、決められた日時に訪問することは絶対である。また、調査結果のとりまとめ、報告書の作成などグループでの作業には、やはり日時を決めて作業を協働で進める必要がある。こうした活動を通し、規律性が育成できる。

これまでに実際に自身で日程調整をし、また訪問を行うという行動をしたことがない学生にとって、これらの作業を行うことは非常に大きなストレスである。こうしたことから、ストレスコントロールが育成できる。

5. 指導上の工夫や困難性

プロジェクトを進める上で、プロジェクト実施の意義・価値、ならびに実施の効果や必要性を認識させることが重要である。そのため、春学期はエネルギー・環境問題、太陽光発電などの最新トピックを交えながら、基礎知識の修得に努めるとともに、ディスカッションを通してプロジェクトに対する意識を深める取り組みを行った。その結果、全員が「このプロジェクトは意義がある」との意識を持って活動に取り組むことができた。

本年度は7名と、これまでと比較して多人数でプロジェクトを実施した。そのために、一つの仕事を複数人で分担する場面が増えた。その際、グループによっては密に連絡を取り合って効果的に作業を進めるケースも見られたが、多くの場合は各自の責任が不明瞭になり、リーダー不在の中で目標とした期限内に作業を終えることができなかった。

作業毎にリーダーとなる人物が自発的に現れることを期待したが、特にプロジェクトの初期の段階では、作業分けをした段階でリーダーを決める(決めさせる)

などの指導も検討すべきかと考えている。

また、学生の理解力・スキルの違いから、特に報告書作成や発表資料の作成の際に、一部学生の負担が大きくなることも見受けられた。毎回の打合せの際に全メンバーがこれらスキルを身に付けられるように、議事録の作成、発表資料の作成などを課しているが、学生の自主性の差もあり、全メンバーに最低限目標とするレベルのスキルを修得させることは困難であった。この点については、上級学生の指導補助なども活用しながら対策を検討していきたい。

6. まとめ

本年度は、市内小中学校の全74校を訪問し調査を実施した。調査をやり遂げたこと自体から実行力の育成には効果があったと思われるが、目標とした期日を大幅に遅れたことを考えると、主体性、計画力の育成には課題を残したように思われる。

訪問調査によって計画していた情報収集についてはおおむねできており、こうした結果を見ると発信力・傾聴力の育成にもそれなりの寄与があったと思われる。また、訪問時の様々なプレッシャーを経験したことで、ストレスコントロールの育成も行えたと思われる。

しかしながら、基礎知識不足もあるものの、得られた情報分析は十分に行えていない。何が問題なのか、何を考えるべきなのかという課題発見力ならびに創造力をどのように育成するのかは、今後の大きな課題である。

アカウミガメ保護啓発活動

中野聡プロジェクト

1. プロジェクトメンバー

内藤規文 (21123227)、白濱祥輝 (21123218)、
浅井昭宏 (21123201)、田中皓也 (21123222)、
石部広貴 (21123102)、佐々木勇太 (21123113)
高瀬竜也 (21123614)

2. 連携先企業・組織

ご協力いただいた、豊橋市役所環境部環境保全課
兵藤様、田中様に改めて謝意を表したい。

3. プロジェクトの概要

私たちは、日本の環境保護活動の一端を担うことを
試みた。特に、豊橋市の表浜海岸は、日本有数のアカ
ウミガメの上陸・産卵地であり、また豊橋市役所もウ
ミガメの保護活動に取り組んでいる。その保護活動理
念に賛同し、このプロジェクトの目的を、①保護活動
を通してウミガメの生態の理解を深め、②自らの保護
啓発活動を通して市の取り組みに協力することに定め
た。自主的保護啓発活動は、保護啓発リーフレットの
作成とサーフショップ、市内高校などでの配布、他県・
世界の保護の取り組みの調査に基づく報告書の作成、
映像作品の制作を中心に据えた。啓発活動を展開し、
市民のウミガメ保護に関する認知と理解を深めてもら
えれば幸いである。

4. プロジェクト活動の教育効果

環境問題は、現代資本主義経済が解決を求められる
基本課題のひとつである。2013年度には、東日本大震
災と原発事故の経験の風化が早くも始まった感がある
が、C.ロイドの「137億年の物語」のように生き物の
多様性を訴える著作も社会的関心を集めた。

このプロジェクト演習では、学生は直接的には、①
教室での学習を通してウミガメの生態と自然環境問題
を認識し、②豊橋市が主催するセミナーや夜間調査へ
の参加を通して環境的課題に対する取り組みとその困
難さを学び、③保護啓発活動のための資料(リーフレッ

トや動画)を自ら作成し(ムービーは1月末現在、なお
作成中)、④それらを用いた社会的働きかけを通して、
微力ながらも環境保護の努力に協力することを学んだ。

また、今期のプロジェクトは、プロジェクトリーダ
ーを中心に学生が進めたため、間接的にはチームとし
て協働することの楽しさと難しさ、適切な指導の難し
さなどを経験できたのではないかと。学部長賞とプロジ
ェクト賞の受賞も、個人的には必要以上に華美と感じ
るが、学生の達成感を高める上で資するものがあつた。

5. 指導上の工夫や困難性

社会科学系教員の視点からは、学生が取り組まなか
ったことが、取り組んだことと同様に重要である。①
学生たちの短期間の試みは、地道な保護活動に遠い。
例えば、この地域の産卵数データは、複数の地元自然
保護団体のメンバーが、約13.5kmの表浜海岸を4月末
から11月上旬まで毎日、分担調査することによって得
られている。学生は、こうした活動の様子に数日間触
れたに過ぎない。②次に、今回の試みは、学習成果(根
拠)と合理的思考に基づいて組織的意思決定をする、ア
カデミックな素養と余り関係しない。

例えば、アカウミガメは、絶滅危惧種IB類(EN)に指
定されているが、その原因は商品目的の乱獲、漁業に
よる混獲、ダムや防波堤による砂浜の浸食、海岸の照
明や騒音、捕食など多様である。こうした要因と対策
についての体系的考察は、ほとんどなかった。ウミガ
メの生態と保護に関する論文や書籍は、2000年以降の
日本語文献だけでも優に100を越えるが、HPには接
したものの、皆、輪読した1,2冊に触れたに過ぎない。

6. まとめ

学生には、プロジェクト演習を通して、組織や社会
の実際的課題について学び、そして考えて欲しい。こ
の点に鑑みれば、少なくとも一部プロジェクトは、ア
カデミックなアプローチそのものを実践的に学ぶ場と
して組織されることが望ましいと思う。(中野 聡)

『高校生と学ぶ会計学☆多』

野口プロジェクト

1. プロジェクトメンバー

井手 一希 (21123103)、斉藤 諒祐 (21123111)
曾越 崇史 (21123119)、糸数 隆佑 (21123206)
加藤 国靖 (21123212)、唐沢 龍介 (21123213)
中村 仁哉 (21123230)、
担当教員 野口 倫央

2. 連携先企業・組織

- ・ 藤ノ花女子高校・朝倉丈徳様
- ・ 犬山高校(商業科)・山口正彦様

3. プロジェクトの概要

3-1 背景と目的

現代の企業人には、英語・パソコン・会計学の能力が必要不可欠である。この中で、英語・パソコンに関しては、義務教育の中において学習する機会に恵まれている。その一方で、会計学に関しては、大学入学後でなければ、学習する機会はないに等しい。

企業活動の主たる目的が利益獲得である。その利益の測定するのは、会計学固有の機能である。多くの者が企業に携わるにも関わらず、企業の目的に関する基礎的な考え方が欠如しているのは、社会全体から考えて、大きな損失であろう。

そこで、野口プロジェクトでは、高校生に会計学の学習の場を提供することを目的とし、活動を行った。具体的には、高校生に興味のあるオリエンタルランド(ディズニーリゾート)に焦点を当て、ディズニーの財務分析を行い、その結果の報告を通じて、会計学に関する情報を発信することで、高校教育に欠けている会計学に興味を抱き、その重要性に気付いてもらうことを目的として活動を行った。

3-2 実際内容と実施結果

野口プロジェクトは、図表1で示すようなかたちで、活動をすすめた。夏休み前までは、基本的には、会計学の基礎的な知識の修得に時間を費やした。

中間報告では、現状での成果報告に終始したが、あ

図表1 プロジェクト活動計画

月	活動内容
4月・5月	プロジェクトテーマの選定
5月～8月	財務会計・国際会計・経営分析に関する基礎知識の修得 → 伊藤邦雄(2012)『現代会計入門』日本経済新聞出版社の輪読を中心に
8月6日	中間報告会
9月～11月	ディズニーリゾートの財務分析の学習 → 有価証券報告書やアニュアル・レポートの分析を中心に
10月17日	藤ノ花女子高校でプレゼン
12月10日	犬山高校でのプレゼン
12月17日	成果報告会

る程度、基礎が身に付いたと思われる夏休み明け以降は、高校でのプレゼンに備えて、分析対象企業であるディズニーリゾートについて財務分析を繰り返した。

この成果を発揮すべく、10月には藤ノ花女子高校で「ディズニーの企業経営を見てみよう ―会計学の視点から―」というテーマでプレゼンを約400人の生徒の前で行った。さらに12月には、犬山高校で「ディズニーの財務分析をしてみよう」というテーマでプレゼンを行った。

前者は大勢の前でのプレゼンであり、学生にとっては大変有意義なものとなった。加えて、プレゼン後に朝倉様より、プレゼンに関する種々のご指摘を頂いた。この指摘は、犬山高校でのプレゼンに活かされた。

野口プロジェクトは、高校生に会計学について興味をもってもらうことを目的としたプロジェクトである。その効果の測定方法として、プロジェクトメンバーで検討した結果、アンケートをとることとした。アンケートでは、次の3点について、4段階(A評価:とてもそう思う、B評価:そう思う、C評価:あまりそう思わない、D評価:そう思わない)での評価を依頼した。

- ① プレゼンを聞き、会計学に興味をもったか
- ② プレゼンを聞き、会計学は将来の人生において役に立つと思ったか
- ③ プレゼンを聞き、会計学を学びたいと感じたか

アンケート結果は、図表2で示す通りである。ここ

図表2 アンケート調査結果

	有効 回答数	A 評価	B 評価	C 評価	D 評価
質問①	339 人	48 人	158 人	101 人	32 人
		14%	47%	30%	9%
質問②	339 人	119 人	179 人	31 人	101 人
		35%	53%	9%	3%
質問③	339 人	54 人	155 人	101 人	29 人
		16%	46%	30%	8%

(注) 藤ノ花女子高校の有効回答数 301 人、犬山高校の有効回答数 38 人

からも明らかであるように、概ね、高評価を得ることができた。質問①に関しては、61%の生徒から、プレゼンにより会計学に興味を感じたという回答を得られた。これは、野口プロジェクトの主たる目的が達成されたことを示唆する。

加えて、質問②および質問③に関しては、それぞれ、88%および62%の生徒が肯定的に捉えてくれた。会計学の有用性および必要性を多くの生徒に伝えることができた。これらのアンケート結果より、プロジェクト活動により、野口プロジェクトの目的を達成することができ、かつ非常に大きな成果が出たといえる。

4. プロジェクト活動の教育効果

野口プロジェクトは、高校生に会計学を教えることで、その知識の重要性を知ってもらうことを目的としたものであった。これを実現するためには、プロジェクトメンバーに十分な会計学の知識が備わっていることが必要である。さらに、その知識を、丁寧に分かりやすく説明する能力も必要となる。

したがって、このプロジェクト活動をやり遂げるには、プロジェクトメンバー自身の会計学の知識およびプレゼン能力の具備が不可欠であった。

そこで、高校生のアンケート結果が高評価であったこと踏まえると、プロジェクトメンバーもある程度会計学の知識を修得し、かつ、適切なプレゼンができたと考えることができる。したがって、このプロジェクト活動は、高い教育効果があったといえる。

5. 指導上の工夫や困難性

野口プロジェクトは、7名のゼミ生により活動が行われた。各ゼミ生が責任感を持ちながら活動に取り組める環境をつくることを、指導上最も重視した。なぜならば、今年度の野口ゼミの学生の過半数は成績劣後者であり、状況によっては、全く活動に参加しない可能性も懸念されたからである。そのため、前述した環境づくりが必要とされた。

そこで、そのような環境を作るために、作業の分担を計画的に、かつ徹底的に行った。その結果、成績劣後者も、自身に与えられた任務は最低限熟そうという姿勢が見られた。

一方で、一部の学生において、自身の任務以外には積極性に欠けた一面も見られた。このことは、指導教員の指導不足によるものと考えられる。

指導する上で困難に感じた点は、作業の負荷を如何に均等にするかという点である。チームで作業を行う場合、負荷が多くなってしまふ、いわば、頼りにされてしまふ学生が生まれてしまふことは、致し方のないことである。しかし、それが極端なものとなることは適切ではない。そこで、それを避けなければいけないと考えたが、様々な局面において、そのような事態が生じた。幸い、そのような学生の忍耐に助けられたが、このような点への対応は今後の課題である。

6. まとめ

プロジェクト活動の目的は、社会人基礎力の育成にある。その社会人基礎力は、前に踏み出す力、考え抜く力、およびチームで働く力の3本柱から成る。さらに、その3つの力は12の要素からなっている。どれか一つの力でも要素でも向上することを希望して、プロジェクト活動を見守ってきた。

プロジェクト活動を通して、ゼミ生全員が何れかの力あるいは要素が確実に伸びていると感じ取れた。3つの力のうち、野口ゼミに関して言えば、前に踏み出す力とチームで働く力は確実に伸びた。その一方で、考え抜く力に関しては、満足のいく成長を遂げていないと考えられる。

トヨハシ♡(ハート)ヨシプロジェクト

チームみよっキー (三好プロジェクト)

1. プロジェクトメンバー

小濱竜 (21123110)、 夏目祐樹 (21123124)、
森下広樹 (21123133)、 大里将太 (21123210)、
小田康晴 (21123211)、 董立平 (21123226)、
飛田知寿 (21023802)

2. 連携先企業・組織

- ・豊橋観光コンベンション協会 鈴木恵子様
- ・豊橋市(企画部 政策企画課) 鈴木裕二様
- ・豊橋市(産業部 観光振興課) 鈴木誠也様
- ・豊橋鉄道(鉄道部 運輸営業課) 織笠真至様
- ・穂の国とよはし芸術劇場PLAT 飯田幸司様
- ・豊橋生菓子組合事業委員会の皆様

3. プロジェクトの概要

豊橋市は、産業、観光、文化などを広く伝える様々なプロモーション活動に取り組んでいる。本プロジェクトにおいて、学生の目線でできるシティープロモーションとして、豊橋にある自慢できる施設やグルメ紹介に取り組んだ。「ここちよい街」をキーワードにしてテーマを「トヨハシ♡(ハート)ヨシプロジェクト」とした。プロジェクト活動を具体化するにあたって、「地産地消グルメ開発チーム」と「ゆるキャラプロモーションチーム」に分けて展開した。

地産地消グルメ開発チームは、豊橋生菓子組合の協力を得て若者に認知されていない豊橋スイーツの紹介を「豊橋ボーイズ&ガールズコレクションマップ作成」というサブテーマにして実施した。豊橋生菓子組合へ企画提案し組合協力の下、和菓子、洋菓子、歴史文化関連菓子などのスイーツコレクションの調査および試食会を実施した。特長あるスイーツをマップにまとめることにより、若者への豊橋スイーツについての認識を深める活動に尽力した。

ゆるキャラプロモーションチームは、豊橋のキャラクターであるトヨッキーを同伴して豊橋の誇れる施設を取材し、それをYouTubeでビデオ紹介した。全国的にも希少な路面電車およびそのサマー子供企画、豊川で

表1 トヨハシ♡ヨシプロジェクトの活動内容

地産地消グルメ開発チーム		ゆるキャラプロモーションチーム	
日付	実施事項	日付	実施事項
5月16日	豊橋市企画調整課鈴木裕二氏よりシティープロモーションに関するヒヤリング・相談		
8月1日	市内洋菓子店にヒヤリング	7月19日	豊橋鉄道㈱営業企画課へ協力依頼
8月23日	豊橋観光コンベンション協会へのヒヤリング・相談	8月8日	豊橋鉄道㈱子供向けイベント取材
10月4日	市内和菓子店にヒヤリング	10月23日	シティープロモーションビデオvol.1をYouTubeにアップ
10月15日	豊橋生菓子組合への企画提案	11月9日	豊川B1グランプリ取材
10月18日	豊橋観光コンベンション協会へのヒヤリング・相談	11月28日	豊橋芸術劇場PLATへの協力依頼
11月26日	豊橋生菓子組合との協議1	12月3日	シティープロモーションビデオvol.2をYouTubeにアップ
12月	1月実施予定の試食会準備	12月10日	シティープロモーションビデオvol.3をYouTubeにアップ
1月16日	スイーツ試食会開催	12月12日	豊橋芸術劇場PLATビデオ取材
2月	セレクションスイーツマップ作成配布	12月20日	宮川彬良主催歌劇のリハール取材(予定)
3月	利用者の集計、まとめ	1月	取材ビデオの編集・アップロードとTwitterによる周知

※ビデオ公開をTwitterで拡散の努力を継続

開催されたB1 グランプリ、最近オープンしたばかりの豊橋芸術劇場 PLAT の取材を行いビデオ作成した。作成したビデオは、YouTube (<http://www.youtube.com/channel/UCxw05emVLHyT6CzXFfiGbzA>) へ動画を公開した。

4. プロジェクト活動の教育効果

本プロジェクトでは、2つのサブテーマを設けて活動したので、協力企業も多く学生が直接企業人とコンタクト取る機会が多く設定できた。プロジェクトにおける外部との交流を表1にまとめる。これ以外にも状況説明や質問などをメールや電話で繰り返しおこなっており、このような活動を通して、学生はコミュニケーションの方法を思考する機会を多く経験出来た。また、ミーティング資料を学生が準備して企業の方々のミーティングを10回以上開催しており、文書要約力や説明力の訓練にもなった。

プロジェクト活動では、社会人基礎力3能力12要素に対する評価を行い学生にフィードバックすることになっている。プロジェクト活動中間地点9月とプロジェクト活動終了後の1月の2回実施することになっている。その評価結果の集計結果として各項目のメンバー平均を表2に示す。表2は、2回の評価値の平均を集約し、その差を示している。教員の評価では、一

表2 社会人基礎カシートによる評価値の平均

	1回目			2回目			差分			合計の差
	本人	教員	メンバ平均	本人	教員	メンバ平均	本人	教員	メンバ平均	
全体平均										
主体性	1.8	1.8	2.1	2.0	2.5	2.3	0.2	0.7	0.2	1
働きかけ力	2.0	2.0	2.5	1.8	2.3	2.4	-0.2	0.3	-0.1	0
実行力	1.7	1.7	2.4	1.7	2.0	2.2	0.0	0.3	-0.2	0
課題発見力	2.3	1.8	2.3	1.5	2.2	2.1	-0.8	0.3	-0.2	-1
計画力	1.8	1.3	2.3	2.3	2.0	2.2	0.5	0.7	-0.1	1
創造力	2.0	1.7	2.2	1.7	1.5	2.1	-0.3	-0.2	-0.1	-1
発信力	2.2	1.8	2.5	1.8	2.0	2.1	-0.3	0.2	-0.4	-1
傾聴力	2.2	2.2	2.5	2.2	1.8	2.1	0.0	-0.3	-0.4	-1
柔軟性	1.8	2.0	2.4	2.0	1.7	2.3	0.2	-0.3	-0.1	-0
状況把握力	2.3	2.2	2.5	1.7	2.3	2.4	-0.7	0.2	-0.1	-1
規律性	2.0	2.0	2.5	1.8	2.0	2.4	-0.2	0.0	-0.2	-0
ストレスコントロール力	2.5	2.0	2.8	2.7	2.0	2.4	0.2	0.0	-0.4	-0
前に踏み出す力	0.6	0.6	0.8	0.6	0.8	0.8	0.0	0.1	-0.0	0
考え抜く力	0.7	0.5	0.8	0.6	0.6	0.7	-0.1	0.1	-0.0	-0
チームで働く力	0.7	0.7	0.8	0.7	0.7	0.8	-0.0	-0.0	-0.1	-0

部を除いて上昇傾向を示している（表2および図2参照）。メンバー間の評価や自己評価においては、ほとんどの評価項目に関して、プロジェクト終了後の評価の方が小さく、評価が下がっている（表2および図1参照）。対外活動を継続して行っているなど活動実績があるにも関わらず、メンバー間の評価が低下している（表2および図3参照）。教員の評価からみるとプロジェクト活動により、参加学生の社会人基礎力は向上していると評価できる。一方、学生の自己評価並びに学生相互評価においては、表面上各能力において退化したように見える。プロジェクト活動の終盤においては、実作業を伴う活動が増加し、社会人基礎力を意識する機会が増加する。また、一定の行動力や実践力がないと実作業を予定通り進めることが難しい。そのため、みずから求める能力水準が向上する傾向になる。そのため、自己評価や他者評価においての達成レベルが相対的に低く評価された結果になりやすい。実際、本プロジェクトでは、2チームとも協力企業の方々の意見聴取やその意見に基づく行動が求められており、それに対して良好に対処できなかつたことが何度があった。そのため、中間評価よりも厳しく評価された結果であると推察される。

5. 指導上の工夫や困難性

5.1 指導上の目標

プロジェクト活動の指導において、教育成果を高めるために

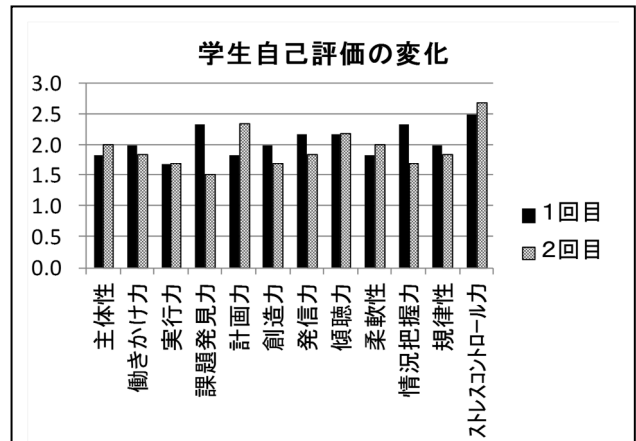


図1 2回実施した社会人基礎力に関する学生自己評価の比較

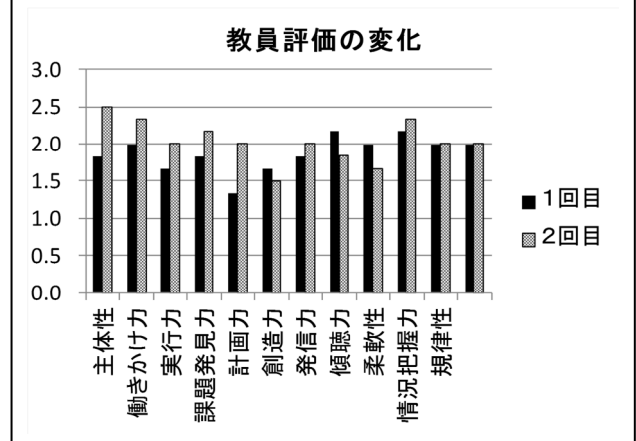


図2 2回実施した社会人基礎力に関する教員評価の比較

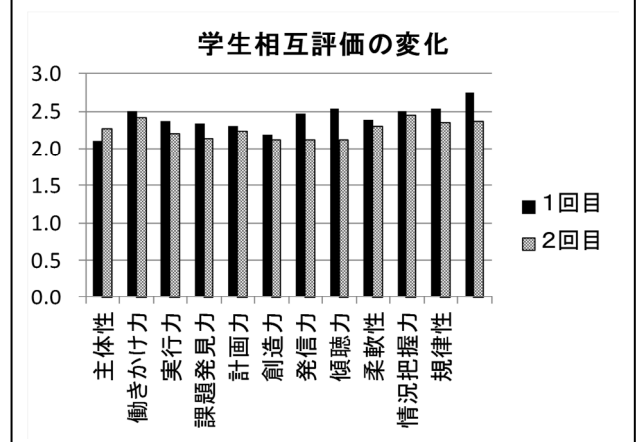


図3 2回実施した社会人基礎力に関する学生相互評価の比較

- 学生の活動量を多くする

・学生が自ら計画し自ら活動することを意識して指導している。

5.2 指導上の工夫

この観点を目標にして本年度は、以下に工夫を行った事項を箇条書きでまとめる。

(1) 学生の活動量を増加させ、自ら対処すべき機会を多く設けるために、テーマをサブテーマに分けてチーム構成を行った。このことによりそれぞれのチームのメンバーが対応すべき事項がおおくなり、それぞれのメンバーは、何らかの役割をはたさなければならない環境にした。

(2) 各チームメンバーの意思疎通やプロジェクト全体の意思疎通を良好にするため、情報の共有化出来る環境を形成した。具体的には、ミーティング最初には全体ミーティングをおこない、それぞれのチームの進捗報告を行った。

(3) 情報共有出来る環境形成のために google のファイル共有 (google drive) を利用してファイル共有を行った。また、プロジェクト用のメーリングリストを作成し、メールの内容を全体で共有化した。

(4) 学外への情報公開として、google サイトや YouTube などの CGM (Customer Generated Media) を利用した。

(5) 学生の主体性に対する意識向上のために、だれた何をするべきかについて常に問いかけを行った。

本年度の活動において、以上の工夫を行いながらプロジェクト活動を推進した。特に、2チームに分離したことにより、学生に対する負荷は、例年よりかなり大きくなった。そのような状況であったが、メンバーのほとんどが自覚を持って活動していたこととメンバー間の意思疎通が良好であったことから、プロジェクト計画のおおよそが実行できている。すなわち、所属学生の対処力が基本的な水準であったことによって、プロジェクトが遂行できたと思われる。

6. まとめ

本プロジェクトとは、学生目線でシティープロモーションを実施することを目的に、2つのサブテーマを設けて、活動に取り組んだ。2つのテーマに分化することにより、学生が主体的に取り組める学習環境を形成した。また、活動の効率化、学生のモチベーション維持など指導の工夫を行うことにより、学生の諸能力育成により効果があるプロジェクト活動を実践できた。

We ♥ NONHOI

～のんほいパーク盛り上げ隊～

三輪・山口プロジェクト

1. プロジェクトメンバー

味岡 美沙(21123101), 加藤 綾乃(21123109),
藤田 諭実(21123128), 辻井 友絵(21123225),
長坂 良恵(21123229), 村上 雄也(21123232),
沼倉由香理(21123624), 近藤 智基(21123215),
水藤 圭祐(21123219)

2. 連携先企業・組織

- (1) 豊橋総合動植物公園 (愛称: のんほいパーク)
- (2) 公益財団法人 豊橋みどりの協会
- (3) 豊橋市役所企画部シティプロモーション推進室
- (4) NPO 法人 ワライフ

3. プロジェクトの概要

本プロジェクトは昨年度からの継続テーマとして、豊橋総合動植物公園 (愛称: のんほいパーク) について様々な情報を発信し、活性化を図る目的で活動を行った。昨年度の課題であった情報拡散について改善を図るため、本年度は SNS (Social Networking Service) を活用すると共に、学内を中心として学生に向けた印刷物による情報発信にも取り組んだ。

プロジェクト期間を通じた恒常的な活動は、以下の通りである。

- (1) Facebook … 春学期は毎日、秋学期は週に1,2 回程度の頻度で、写真および動画を用いて園内の様子やイベント情報を紹介。
<https://www.facebook.com/Project.NonHoi>
- (2) Twitter … のんほいパークや動物園に関する情報を発信しているアカウントを積極的にフォローすると共に、活動の様子などを発信。
<https://twitter.com/ProjectNonhoi>
- (3) YouTube … Facebook 上で動画に対する反応が良かったため、取材等を通して録画した動物の動画を編集して公開。
<http://www.youtube.com/channel/UCOg8DMO OQOB6VBhSKEzQlbQ>

- (4) 三角柱 POP … 長期休業期間を除いて毎月作成し、学内複数個所に設置。

その他の活動としては、以下のようなものがある。

- ・ ナイトガーデン (8/13～18) について市内大学向けに広報、および、期間中のイベント協力。
- ・ 学園祭 (10/26,27) におけるアンケートの実施。
- ・ シルバー向けフリーマガジン「ワライフ」への記事掲載。

なお、情報の発信源はのんほいパーク、受信者は一般市民であり、我々はその間で情報の仲立ちをする立場である。間違った情報や、パークにとって不本意な情報を流したりしないよう、取材による情報収集を心がけた。また、SNS での言葉づかい等にも注意し、制作物については随時パーク側に確認してもらう等、細心の注意をはらって活動を行った。

具体的な実施スケジュールを表1に示す。

表1 プロジェクト実施スケジュール

月/日	活動内容
5/23	Facebook 稼働開始 Twitter 稼働開始
/30	協力依頼 … のんほいパーク
6/21	協力依頼 … 豊橋みどりの協会
/27	意見交換 … 市役所企画部シティプロモーション推進室
7/3	取 材 … 植物園七夕イベント
/6	参 加 … 行財政改革プラン公開プレゼンテーション
/12	取 材 … 暑さ対策 (フグミスト)
/21	掲 示 … 創造大学 (三角柱 POP)
/24	掲示依頼 … 愛知大学 (ポスター、フルーツ)
/26	掲示依頼 … 豊橋技術科学大学 (〃)
8/13～18	参 加 … ナイトガーデン
9/27	依 頼 … 学園祭協力依頼
10/8	掲 示 … 創造大学 (三角柱 POP)
10/17	取 材 … のんほいパーク内 打ち合せ … アンケート内容 チラシ・缶バッジ寄付
10/26・27	創 造 祭 … アンケート実施、学内展示
10/31	YouTube 稼働開始
11/7	掲 示 … 創造大学 (三角柱 POP)
11/21	打ち合せ … ワライフ
11/28	取 材 … トラ・ライオン
12/06	打ち合せ … のんほいパーク、みどりの協会
12/25	発 行 … ワライフ

4. プロジェクト活動の教育効果

4.1 社会人基礎力の養成

社会人基礎力における3能力12分類の資質について、本プロジェクトにおける体験項目を表2に示す。

本プロジェクトでは、昨年度の課題である効果的な情報拡散に取り組むことから、全体を通して『考え抜く力——特に“課題発見力”』や『前に踏み出す力——特に“実行力”』が必要になると考えられる。また、SNSを用いて継続的に情報を発信することから『前に踏み出す力——“主体性”』や『考え抜く力——“計画力”、“創造力”』が重要となる。

さらに、印刷物の制作は、各学生の技術力に依存する部分が多く、コンテンツの具体化・実現に向けては、『チームで働く力——“状況把握力”、“規律性”』、『前に踏み出す力——“主体性”』が必要である。

プロジェクト期間における社会人基礎力評価（学生自己評価）の推移について、図1に示す。

図1の結果から、規律性や傾聴力、主体性、等について自己の評価が上がっていることがわかる。これは、チーム内で役割を分担し、計画的に情報発信を行うことで、学生自身が成長を自覚できた成果だと考えられる。一方で、創造性、発信力、等が低下しているが、活動の状況や個人面談の様子からは「自分の能力が低い」という悲観的なものではなく、「もっとうまくやりたい（が、できなかった）」という反省の気持ちが表れたものだと感じた。

表2 プロジェクトにおける体験項目

3つの能力	12の能力要素	プロジェクト実施に必要な能力
前に踏み出す力	主体性	◎物事に進んで取り組む
	働きかけ力	○
	実行力	◎目標を設定し実現する
考えぬく力	課題発見力	◎現状分析/改善案の検討
	計画力	◎具体的な計画立案
	創造力	◎魅力的な記事の作成
チームで働く力	発信力	◎取材、インタビュー
	傾聴力	◎取材、インタビュー
	柔軟性	○
	状況把握力	◎作業状況や役割分担の把握
	規律性	◎作業分担に責任を持つ
	ストレスコントロール	○

◎：大いに必要，○：必要

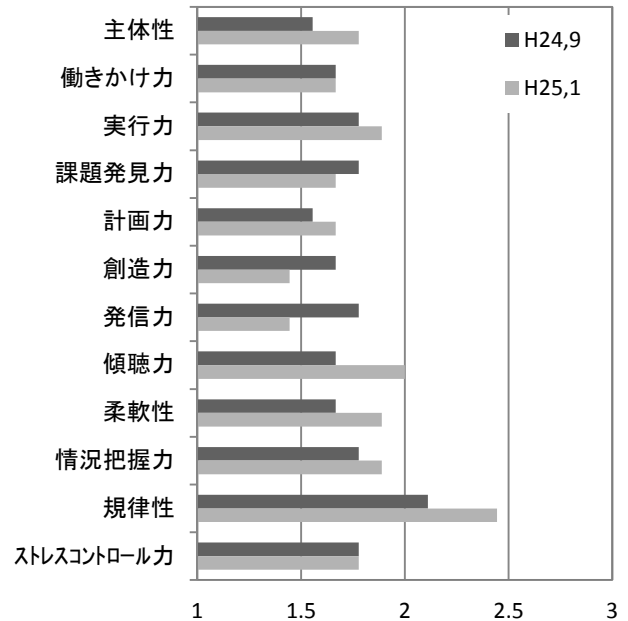


図1 社会人基礎力評価 (学生自己評価)

4.2 その他の教育効果

本プロジェクトでは、社会人基礎力の養成と併せて、

- (1) 自分に不足している知識・技術を見つめ直すことで、自己の発展の原動力とする。
 - (2) 大学で学んだ知識や技術を発揮できる“場”を設けることで、積極的な自己表現を促す。
- という2点を実現できるように全体像を計画した。

プロジェクト活動を通して学生の様子を観察すると、程度の差はあるものの、

- SNSの仕組みやそれぞれの連携方法
- ファン獲得のための効果的な記事の書き方
- 印刷物を利用した情報の発信

等について基本的な知識を習得できたように思える。また、印刷物の作成に関しては、ソフトウェアの操作スキルを持つ学生が中心となり、成果物として十分な完成度のものを複数作成することができた。これらのことから、大学の“カリキュラムの具体的な成果”としての結果は十分に得られたと考えている。

5. 指導上の工夫や困難性

本プロジェクトでは、SNS の活用、動画の編集といった授業では扱わない内容が含まれていた。また、印刷物の作成にはグラフィックソフトウェアの操作スキルが不可欠である。このため、各種コンテンツの制作について学生の ICT スキルに依存する部分が多く、一部の学生に負荷が集中する場面が多く見られた。また、一部の学生が行っている作業について、他のメンバーの関心が薄く、作業状況を全体で把握できていない場面に何度か遭遇した。この点に関しては、教員主導でミーティングを進めたり、進捗報告を報告・記録させたりすることで改善を図ったが、円滑な進め方については今後の検討課題としたい。

また、学生の作業分担の捉え方（責任感）に差があり、SNS の更新を忘れたり、手抜き（のように見える）記事を書いたり、といった場面が何度か見られたのは非常に残念だった。さらに、一部の学生が自己都合（アルバイト、家庭の事情）を優先することに対して、他の学生から不満の声が挙がることがあった。必修授業であり、外部との接触が多いという性質上、どうしても教員主導になる場面が多くなるため、学生から“やらされている感”を払拭するのは困難である。作業の分担に教員が手を加えたり、各学生に個別に声を掛けたりすることで、不公平感を無くし、学生の自発的な行動、責任感のある行動を促すような仕掛けが必要だと感じた。

女子学生が多いチームであり、雑談の際には非常に活発な意見交換がなされ、柔軟な意見が出されていることが多かったが、「今から議論せよ」と指示を出した途端に黙ってしまう学生が多かった。また、男子学生との情報交換がほとんどできておらず、教員が口を挟むことが多かったことは大きな反省点である。取材やインタビューだけでなく、メンバー内での意見交換を通して「発信力」や「傾聴力」を養うことができるよう、指導を改善したい。

6. まとめ

2年目の活動ということで、主な連携先であるのんほいパーク、および、豊橋みどりの協会からは昨年度以上の協力を頂くことができた。特に、今年度はメール等を通してパーク側から情報を提供して頂くことができたため、非常に円滑に活動を進めることができた。また、学生からの一方的な活動ではなく、パーク側からの依頼や提案等を受けることもでき、活動を行う上で学生が「やりがい」や「責任感」を持って作業を進めている場面が多く見られた。外部協力を得て進めるプロジェクトでは、信頼関係の構築が非常に重要であると考えている。その意味では、本プロジェクトは十分に成果を出せたと考えている。

なお、社会人基礎力の養成については、チーム全体を通して見ると、計画性や実行力について大きく成長を感じることもできた。一方で、プロジェクト開始時点での個人差が最後まで継続する点については、何らかの改善案を検討する必要があると考えている。特に、責任感や規律性といった“家庭のしつけ”から派生するような部分については、各学生の行動心理が異なっており、全員が同じ水準を満たすことは困難であると強く感じている。

2

プロジェクト活動成果報告書 (学生)

PB競争時代における地元スーパーの生き残り戦略.....	87
担当教員:石田 宏之	
携帯端末向けアプリ作成.....	96
担当教員:今井 正文	
SOZOショップコラボプロジェクト.....	100
担当教員:川戸 和英	
豊橋エコタウンプロジェクト ～豊橋市内小中学校に設置された太陽光発電システムの状況調査～.....	104
担当教員:見目 喜重	
アカウミガメ保護啓発活動.....	109
担当教員:中野 聡	
高校生と学ぶ会計学☆彡.....	113
担当教員:野口 倫央	
トヨハシ♡(ハート)ヨシプロジェクト.....	117
担当教員:三好 哲也	
We ♡ NONHOI ～のんほいパーク盛り上げ隊～.....	125
担当教員:三輪 多恵子・山口 満	

P B 競争時代における地元スーパーの生き残り戦略プロジェクト

石田プロジェクト

1. プロジェクトメンバー

安藤 祐輝・21123202、酒井 裕暉・21123112、
井上 晃成・21123207、井上 高彰・21123208
久米 佑典・21123214、柴田 和樹・21123217
牧野 広季・21123901

2. 連携先企業・組織

(協力企業等と調査箇所)

(1) 協力企業等 (ヒアリング箇所)

①サンヨネ本社 (三浦本部長よりヒアリング)、②豊橋農協及び高橋農園

(2) 調査箇所 (実態調査)

①コンビニ：セブンイレブン、ファミリーマート、ローソン、サークルKサンクス、②スーパー；マックスバリュ、イトーヨーカ堂、バロー、クックマート、サンヨネ

3. プロジェクトの調査内容と分担

- ①NB 及びPB 商品の定義とPB 競争時代 (井上高彰)、
- ②NB 商品及びPB 商品の価格比較と高級PB 商品の出現 (久米)、
- ③PB 商品を製造するメーカー及び野菜のPB 商品を生産する農家・農協の対応 (牧野、井上晃成、柴田)、
- ④これらPB 商品を各店舗に的確に供給するロジスティクス・システム (酒井)、
- ⑤PB 競争時代の地域スーパー (東三河) の生き残り戦略 (安藤)

4. 実施計画

調査方法とスケジュールは、以下の通り。

	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
文献調査		←	←	←	←	←	←	←	←	←	←	←
ヒアリング及び実態調査		←	←	←	←	←	←	←	←	←	←	←
報告書作成						中間報告				本報告		報告書作成

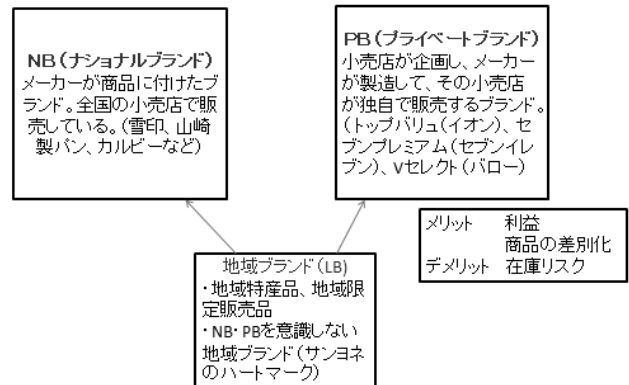
①文献調査：日本経済新聞社・編「PB・格安・高品質競争の最前線」(2009年11月)、大野尚弘「PB戦

略—その構造とダイナミクス」(2010年2月)、富士通ロジスティクスソリューションチーム・編「中間流通はだれが担うか—小売業・卸売業・メーカー・運輸倉庫業：18社の先進事例」、②日本経済新聞、日経産業新聞、日経流通新聞等の新聞記事 ③ヒアリング及び実態調査 (本プロジェクトでは、主として食品および野菜を対象とした)

5. 実施結果

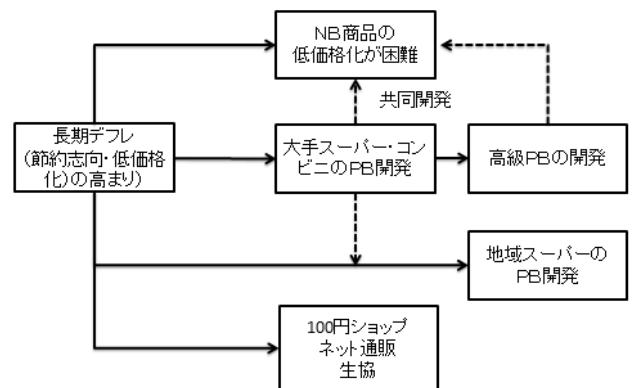
(1) ブランドの定義とPB 競争時代 (井上高彰)

図表1 PB・NB・LBの定義



ブランドは、大きく分けてNB・PBの二つに分けられる。また、これ以外にLBと分類できる地域特産品や地域限定販売品があり、NB・PBを意識しない地元スーパーのサンヨネのハートマークもLBと分類した。

図表2 PB 競争時代の概念図



PB 競争時代の背景には長期デフレによる影響で消費者の節約意識が高まったことが関係している。

この影響で、小売店は低価格帯の商品を販売する必要があったが、NB 商品を作る大手メーカーは、原材料費などの面で低価格化が困難なため、大手スーパー

やコンビニなどは PB を製造することで消費者が求める低価格帯の商品を開発した。

大手メーカーとの共同開発や、高級 PB を開発するなど NB 商品との差がなくなり始め、これに続いて地域スーパーなども PB 開発を始めている。

また、消費者の節約志向の高まりで低価格を主体とする 100 円ショップや、ネット通販なども巻き込んだ状況を PB 競争時代とした。

(2) PB と NB の価格比較と高級 PB 商品 (久米)

コンビニはスーパーより高いというイメージがあるが、実際どうなのか調査した結果、コンビニのほうが高い商品が多く見られた。しかしながら、コカコーラの商品以外は、該当しない店舗 (販売していない店舗) 商品も多く見られ、一概に比較することができなかった。

図表 3 NB 商品のスーパー・コンビニの価格比較表

	カルビー ポテトチップス スーパー: 60g コンビニ: 85g	スーパー: 森永 森永の おいしい牛乳 1000ml コンビニ: 明治	雪印 麦 舞 進 パ ター 200g	雪印 6Pチーズ 120g	コカ・コーラ コーラ 500ml	ヤマザキ ふんわり	グリコ ポッキー 70g
バロー	78	198	398	248	88	158	98
イトーヨーカ堂	98	228	398	147?	88	該当なし	98
マックスバリュ	78	198	378	248	98	該当なし	118
クックマート	98	168	338	198	88	158	該当なし
サンヨネ	88	188	388	240	88	167	128
セブンイレブン	148	254	100.250	338	147	該当なし	150
サークルK	148	該当なし	404	326	147	該当なし	該当なし
ファミリーマート	148	255	100g 250	該当なし	147	158	150
ローソン	148	該当なし	404	該当なし	147	該当なし	150

次に、PB 商品がどのくらい NB 商品より安いかを比較してみると、バロー、サークル K サンクスいずれにおいても 30~70%安いことがわかった。

図表 4 NB と PB の価格比較表 (バロー)

	ポテトチップス		牛乳		6Pチーズ		食パン	
NB	カルビー ポテトチップス 60g	78円	森永の おいしい牛乳 1000ml	198円	雪印 6Pチーズ 120g	248円	ヤマザキ ふんわり	158円
PB	ポテトチップス 134g	198円	バロー-3.6牛乳 1000ml	168円	6Pチーズ	158円	バロー 食パン	78円
	(PB 60g換 算89円)	(114%)		84.8%		63.7%		49.4%

図表 5 NB と PB の価格比較表
(サークル K サンクス)

	ポテトチップス		6Pチーズ		食パン	
NB	カルビー ポテトチップス 85g	148円	雪印 6Pチーズ 120g	326円	ヤマザキ ふんわり	147円
PB	ポテトチップス 134g	198円	6Pチーズ	178円	しっとりやわ らか食パン	108円
	(PB 85g換 算 125円)	(84.4%)		54.6%		73.4%

また最近では、NB 商品より高い高級 PB が増えており、PB といっても上質で高価値な商品 (NB 商品より高い商品) が増え、これまでのように、PB 商品は安く、NB 商品は高いという従来の NB・PB の定義は言えなくなる可能性が出てきていることが分かった。

図表 6 スーパー・コンビニの高級 PB

会社名	プライベートブランド	特徴
ファミリーマート	ファミリーマートコレクション(ブラチナライン)	素材や製法のグレードを上げた高付加価値商品
サークルKサンクス	PrimeONE	高価格帯のPB
イオン	トップバリュセレクト	素材、産地、製法、昨日にこだわった高品質ブランド
イオン	トップバリュプレミアム	上質な素材と製法、衣料ブランド
セブン&アイ	セブンゴールド	高価格帯のPB

図表9 中堅スーパー系列のメーカー
(サークルK サンクス)

商品ジャンル	商品名	製造社名(販売者)
駄菓子	クレープクッキーチョコ	旺旺・ジャパン株式会社
	ひとくちチョコ	株式会社大一製菓
	キティランド	江崎グリコ
	ピーナッツチョコ	株式会社でん六
	ミニマヨイカ	山栄食品工業株式会社
	いか姿フライ	北日本食品販売会社 A8
	ミニソースカツ	山栄食品工業株式会社
	チョコチュエル	カバヤ食品株式会社
	つぶピー	稲葉ピーナッツ株式会社
	チョコスナック	リスカ株式会社 RS23
飲料	しみこみショコラ	株式会社でん六
	コーンチョコ	株式会社正栄デリテイN
	ポテトチップス	カルビー株式会社
	天然水	HARUNA株式会社
6Pチーズ	低脂肪乳	雪印メグミルク((株))
	プロセスチーズ	六甲バター株式会社

(4) PBを生産するメーカーの特徴(牧野)

PB商品生産メーカーにはどのような特徴があるのか調査したところ、業界大手のセブンイレブン、ファミリーマートでは、色付けされている通り大手企業との共同開発が多く見られた。

これは、大手企業と共同開発することが、消費者のニーズに応えられるという点や、資金面・企画力という点において安心して信頼できるからだと考えられる。

図表7 PB商品生産メーカー
(セブンイレブン)

商品ジャンル	商品名	製造社名(販売者)
菓子	チョコレート	共同開発(正栄デリシィ)
	プレツェル	共同開発(カバヤ食品)
	準チョコレート	共同開発(ギンビス)
	準チョコレート菓子	共同開発(有楽製菓)
飲料	牛乳	共同開発(雪印メグミルク)
	成分調整牛乳	高梨乳業株(7&アイHLDGS.)
	フルーツ・オレ	共同開発(カルピス)
	緑茶	伊藤園(7&アイHLDGS.)
	ウーロン茶	共同開発(サントリ)
6Pチーズ	ほうじ茶	共同開発(ジャスティス)
	プロセスチーズ	明治(7&アイHLDGS.)
カップラーメン	〃	共同開発(サンヨー食品)
カット野菜	〃	プライムデリカ

図表8 PB商品生産メーカー
(ファミリーマート)

商品ジャンル	製造社名(販売者)
スナック菓子	共同開発(ブルボン)
	共同開発(ギンビス)
	共同開発(カルビー)
	共同開発(伊藤製菓)
	共同開発(明治)
飲料	ファミリーマートオリジナル
牛乳	共同開発(明治)
6Pチーズ	共同開発(六甲バター)
パックコーヒー	共同開発(東京めいらく)
カップラーメン	共同開発(日清)

しかし、サークルKサンクスのような中堅スーパー系列のメーカーでは下図の通り、共同開発は少ない。これは大手2社との差別化を図ろうとしていると考えられる。

(5) PB商品に対する農家・農協の考え(井上晃成・柴田)

青果物にもNBとPBは存在し、以下のように分類した。

NB・・・農産物の産地ブランドがNB商品だということが判明した。

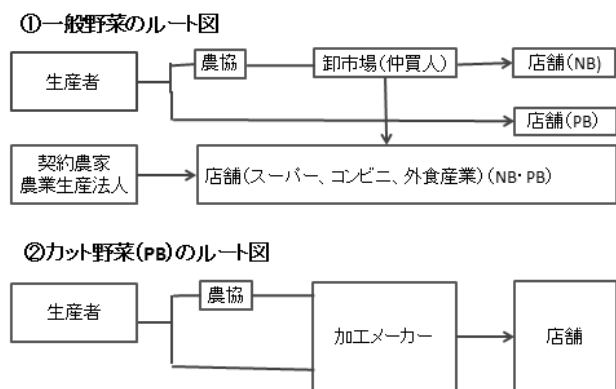
PB・・・農家が卸市場を通さずにスーパーやコンビニなどに流出する商品がPB商品である。また、スーパーが独自の判断でPB商品としてPB商品であるマークをつける商品。

大葉・ねぎ・しいたけなどのほか、「カット野菜」も青果物のPB商品と分類した。

カット野菜のような加工用野菜の値段は、卸売を通すよりも安い価格となる。

コンビニでの野菜販売には、限界があり、長続きしないことが予想される一方で、カット野菜やサラダセットについては、1人暮らしの方やお年寄りの方に、使いきれぬ量などが消費者の要望に合い、増加することが予想される。

図表 10 野菜に関する NB 商品と PB 商品の流通ルート



一般野菜では、NB は生産者から農協へ渡り、卸市場を介して店舗に届けられる。PB は生産者から直接店舗へ届けられる。

NB・PB は販売側が決められるようになっており、契約農家・農業生産法人からと、卸市場を通したルートがある。

カット野菜には、生産者から農協を通して加工メーカーで加工され店舗へ届くルートと、農協を通さないルートがある。

契約農家を利用するメリット・デメリット

スーパー・コンビニなどが契約農家を利用するメリットには、仕入れ原価を下げられる、商品の出所や流通過程、製造工程などを明確にすることで安全な取引ができる、農家と共に特徴のある商品として育てることができればオリジナル商品を作ることができるなど挙げられる。

デメリットには、多くの農家から本当に良い農家と出会うことが難しい、一括取引であるため仕入れのリスクが高い、毎年安定して買い入れるため出来が悪くても引き取ることになるなど挙げられる。

PB 商品に対して農協・農家はどのように考えているのか調査して結果、農協では、卸した先の売り場で PB とするかどうか決定しているため、どちらでもよいと考えている。その基準というのも売り場の基準で決められている。

また、市場に頼っていると、仲介業者がいるため、最終的にどこで販売されているかわからない。いいものを安く販売したいというスーパーが増えているので、市場に頼らない経路をもっていれば生産農家にメリットがあると考えている。

農家では、産地ではなく農園の名前で扱われ、オリジナル商品となり知名度を上げることにつながるということがある。また、従来の NB 商品より比較的安く、そして確かな品質と食の安全を届けたいという思いから PB 商品を導入している農家もある。

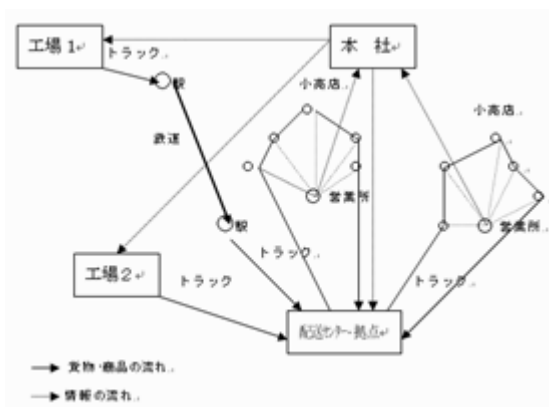
健やかな人や社会、地球環境作りへ社会貢献することを願い、農家とスーパーがともに協力し合い作り上げている商品となっている。

(5) 縁の下の力持ちーロジスティクス (酒井)

ロジスティクスとは、顧客のニーズに合わせ、必要ときに必要な商品が必要な店舗に供給する仕組みである。

原材料・仕掛品・製品および関連する情報の産出地点から消費地点に至る流れと保管を効率的に行う一連のプロセスのことをいう。

図表 11 ロジスティクスネットワーク図



消費者が店舗で商品を購入すると、販売実績データ

が小売本部に報告される。小売本部では各店舗の販売実績を集計して卸売業者に発注する。卸売業者は物流センターに各店舗への納品を指示すると同時にメーカーに発注する。

物流センターは納品指示された商品を出庫・加工して各店舗に配送・納品する。各メーカーは工場に物流センターへの納品を指示すると同時に生産を指示する。各工場は納品指示された商品を物流センターに納入すると同時に生産を開始する。

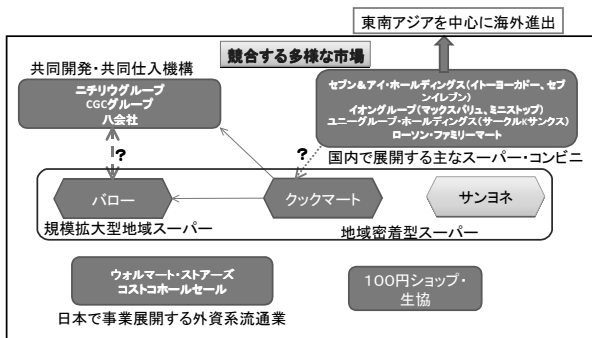
物流センターは納品指示された商品を出庫・加工して各店舗に配送・納品する。

この一連の物流活動を通じて、物流センターは需要と供給のバランスを調整する施設として、また、物流を効率化する拠点として、商品の保管による生産と消費の時間差調整機能、迅速な出荷および納品機能、流通加工機能、入荷もとから出荷先へのモノの組み替え機能、輸配送の効率化機能、物流の情報センター機能を果たす。

しかし、このような仕組みを構築し維持できるのは大手・中堅スーパーと大手コンビニであり、売り上げ規模が小さく、店舗数のそれほど多くない地域密着型スーパーはこのような仕組みよりも、商品の品質や地域の企業との連携を重視している。

(6) 地域スーパーの生き残り戦略 (安藤)

地域スーパーなどを巻き込んだPB競争時代の幕開け(安藤)



大手スーパー・コンビニから始まったPBの大きな動きは、共同仕入れ機構や外資系流通業、地域スーパーを巻き込むものとなった。この中から、地域拡大や店

舗拡大を行わない独自の展開のサンヨネを取り上げた。

サンヨネが提供するハートマーク商品には、食に対してこだわりを持ち、お客様から安心・安全で信頼される食品を提供して地域に恩返しをするというコンセプトがある。また、美味しいもの、安心なものをできる限り提供していき、明るい家庭を作ってくださいというメッセージを発信するというテーマがあり、規模拡大よりも地域密着型スーパーであるという思いから生まれたPB商品である。



さらに、サンヨネの販売商品に対する思いにはどんなことがあるのかと調査したところ、サンヨネのコンセプトに共感する生産者などとの共同開発を行い、安心でおいしくて健康に値する食品の提供をするという思いがある。

次に、低価格化が進む社会の中において生産者の立場に立った商品開発による価格設定から、生産者の利益を確保する価格設定を行っている。

顧客から販売人に「ありがとう」といってもらえる

ようなサンヨネの食文化を守り、低価格にこだわることもよりも、価値が高い商品として見てほしいという思いがある。

様々な生き残り戦略の中から、顧客のために、安心・安全であることにこだわり、地域・生産者とのつながりも強い地域密着型の考えを地元スーパーの生き残り戦略の1つとした。

6. プロジェクトの成果（自己評価）

プロジェクト調査を通して学んだこと環境や時代の流れとともにこれまでの常識というのが変化していき、一つの考えやその時の状況だけでは全ては分からないということを感じました。また、調査の中でヒアリングだけでなく、各店舗に行って調査をすることの難しさなどを学んだ。

調査結果をまとめるにあたって、一人ひとりで担当したテーマを3枚のパワーポイントにまとめることによってそれぞれで理解してまとめた内容を報告する練習をしながら、チームが一丸となってやり遂げることの重要性を学んだ。

7. メンバー各自の所見

井上 晃成・21123207

「発表会を終えて」

12月17日（火）に「情報ビジネス学部 プロジェクト活動成果発表会」がありました。プロジェクトの背景と目的、実施計画、実施結果とともに、プロジェクトの成果や自分たちが成長した点など、緊張しながらも堂々と発表することができた。

私たちは、「地域スーパーにおけるPB戦略とロジスティクス」の内容で発表しました。本プロジェクトの目的は、地域スーパーの中で豊橋地域をメインにしているサンヨネの事例を取り上げ、NBおよびPBの定義、メーカーとの共同開発、農家・漁業との連携、仕入れ先及び店舗への納品の実態などを明らかにすることである。

実施結果として長期にわたるデフレの影響による「低価格化のニーズ」は、1990年代後半から大手スー

パーが手掛け、2000年初めにコンビニ波及したPB商品の開発に始まったPB競争時代をもたらした。この競争は、今回対象とした食品及び野菜以外にもあらゆる産業・商品で展開されている。

その結果、NB商品より高い高級PB商品の出現により、従来から定義されている「ブランド」の内容とコンビニのほうがスーパーより高いという常識を変えようとしていることがわかった。

PB商品開発・生産を支えているのが、中小メーカー及び生産農家・農協であり、新しい流通経路を構築することになる。一方、NB生産メーカーもスーパーなどとの共同開発によるPB生産も始めている。新しい流通経路に対しても、不都合なく納品を可能にしているのが、ロジスティクス・システムである。

このようなスーパー、コンビニによるPB競争時代の中で、東三河を中心にした地域スーパーの生き残りには、3つのパターンが存在する。その第1が中部圏を中心にさらに店舗拡大を図り、CGSグループのような共同開発・共同仕入れ開発型を目指す中堅スーパーバロー型、第2が地域密着型で、今後は、バロー方式の規模拡大を目指すか、大手スーパー・コンビニに吸収されるかのクックマート型、第3が地域拡大や店舗拡大ではなく、「食の安全と食の楽しさを大切にする」ことをコンセプトにした地域密着型のサンヨネ型の3種類がある事が判明した。

今回のプロジェクトを通し、環境変化により従来の常識が変化することを学んだとともに、ヒアリングではなく、各店舗に出向いての実態調査の難しさを学んだ。調査結果をまとめるにあたって、担当ごとに分担し一人3枚のパワーポイントを作成することにより、それぞれ責任を持って作業することの大切を学んだ。制作物を作成していくなかで、自然と相手に「わかりやすく・伝わりやすく」を考えながら作成していくことができ、今後の成長につながったように思える。また、最後に、それぞれ発表要旨を作成し、代表が全体を報告する練習をしながら、チームが一丸となってやり遂げることの重要性を学んだ。

21123214 久米佑典

「ゼミ活動において大変だったこと」

12月のゼミ発表にむけて、それぞれの分担で一人ひとりやることを決め、調べてきて最後にまとめるという方法を採用した。自分の分担は、コンビニのPB商品とNB商品の価格比較調査、コンビニとスーパーのPB商品の価格比較調査をしました。

自らスーパーやコンビニに出向いて価格を調べるのですが、いろんなスーパーやコンビニに行かなくてはなりません。最初は分担してやっていたのですが、調べきれなかったところは自分が埋めなくてはならないのでやはり、いろんなスーパーやコンビニをまわりました。自分が調べた個所は、よっぽどうまっていたのですが、ゼミのメンバーが調べた所は半分ぐらいないものだらけでした。そこでまた自分で調べに行くというのも、大変だったことの一つです。

そこで値段を控えたり、値段がなかったら店員の人に聞いたりしました。ゼミのメンバーには途中で店の中に連れて行かれて何をしているか聞かれたメンバーもいます。豊橋の店舗をまわってなかったものは、豊川の店舗に調べに行ったりしました。ですがやはり、置いてないものはどこにも置いてなく、価格比較ができないものもありました。そこで分かったのがスーパーやコンビニでは、PB商品として作ってないものはどこに行っても置いてないということが分かりました。そしてやはり、コンビニの方が値段は高かった。それ理由はどこに行っても身近にあるという利点があることです。そしてスーパーは、24時間営業でなく店舗数も少ない代わりに値段が安いという利点があります。ですが、コンビニにもPB商品ができ、高級PB商品というのも開発されています。そのおかげで、近い将来コンビニとスーパーに差がなくなるのではという結論になりました。

21123202 安藤祐輝

「プロジェクトを通して」

今回のプロジェクトでは、テーマを「プロジェクト競争時代における地元スーパーの生き残り戦略」とし

て調査を行いました。

PB商品が多く出回っている現在ですが、どのような背景があつてのことなのか調べていくことから始め、言葉の定義なども調べ、自らの理解を深めていきました。調査を進めるためには、対象とする事柄の概要をまず知っておく必要があるということ学びました。

時代の流れと共に消費者の求める商品は変わっていき、低価格帯の商品が求められていた時代に発展したPBも、今後は高級PBのような安全性が高く、高価値の商品が求められる時代となりました。

この流れは、地元スーパーをも巻き込むものとなり、今回の調査では、地元スーパーの生き残り戦略について担当し、まとめをしました。

生き残り戦略として、地方のスーパーを子会社化、吸収合併をしながら店舗拡大を図り、CGCグループのような共同仕入れ機構型を目指すバロー型、地域密着型で今後はバローのような展開をするのか大手スーパー・コンビニに吸収されるのかというクックマート型、食の安全と食の楽しさを大切にするというコンセプトで、地域拡大や店舗拡大を行わない独自の展開のサンヨネ型にまとめました。

今回の調査を通し、それぞれ特徴を持った展開をしているということを感じました。どの形がいいということではなく、お客様のニーズにどう応えられるようにどうしていくかが大切だと思いました。

また、調査を進めるにあたっては、初めに仮説を立てることが重要だと学びました。今回は、いきなり結果ばかりをもとめてしまい、うまく調査ができない点があったため、今後は手順をしっかり理解し進めたいと思います。

プロジェクトは複数のメンバーで進めるものであり、担当箇所をはっきりさせ、責任を持つことでスムーズに進めることができると感じました。

21123217 柴田和樹「感想文」

今回、私は農協について担当しました。

まず、春学期では「地域スーパーの生き残り戦略」として、地域スーパーの商品を調べたり、アポを取っ

てヒアリング調査をするのですが、なかなか行動に移すことができずに人任せになってしまいました。

地域スーパーでのヒアリングは「サンヨネ」さんにご協力いただいて話を聞かせてもらいました。私はヒアリングでメモを取る作業は難しくメモを確実にとることができませんでした。また、PB・NBを調べていくうちに農産物（青果物）にも、PB商品がある事が分かり、農協さんにアポを取って、ヒアリングさせていただきました。

私は企業に自ら電話をしてアポを取る作業は初めてでした。たかが電話一本だと思っていたけれどいざ電話をしてみるとなかなか言葉がうまく話せませんでした。ヒアリングの日を決めるにも相手の都合、こちらの都合をうまく合わせないといけなかったのでよく考えて行動しないといけないと思いました。農協さんでのヒアリングは、サンヨネさんに続き、2回目だったのですが、話していることを頭に入れてメモするのは簡単にはいかず、ほとんど単語ばかりしかメモできず、話の内容をメモすることも、頭に入れることもできませんでした。

自分の未熟さが身に染みました。12月に近づくにつれパワーポイントの作成をしないといけなかったのですが、取り組むまでに、なかなか行動に移せなく皆に迷惑をかけてしまいました。

パワーポイントでも農協の担当となり、農産物のPBについてまとめました。当然、私が農協さんにヒアリングで取ったメモだけでは、まとめあげることができませんでした。しかし、先生、ゼミ生の協力作成した、ヒアリングメモを参考に、取り組んでいくことができました。

時間もかかったけれど終わったら達成感を感じました。一つのこと、達成感ができ気持ちよく感じました。発表では、立っているだけでしたが、私の担当の所に質問で出ました。しかし、わからず、また人に頼ってしまいました。ダメなところばかりでした。点数を表すと20点もないのではないかと思います。今後は、もっと前向きに取り組む姿勢を取り、挑戦心を取っていきたいと思います。

21123901 牧野 広季

「ゼミの課題を通じて」

今回、私は石田ゼミで「地域スーパーの生き残り戦略」をタイトルに調査を進めました。コンビニ、スーパーのNB（ナショナルブランド）商品とPB（プライベートブランド）商品の味、品質、価格の比較からはじめ、NBとPB商品を定義することから始めました。

その後、PB商品はなぜ安いのか、流通経路、メリット、デメリット、そしてこれからのNB、PB商品はどのように差別化を図っていくのかなど疑問が浮上したので、ゼミ生に各自に担当を決めて調査を進めました。

その中で私が担当したのは、セブンイレブン、ファミリーマート、サークルKの三社にターゲットをしばり、食品をメインにPB商品の種類、値段、製造者を調べ、PB商品を生産しているメーカーになにか共通点はないか、もしくは何が違うのかを調べました。

大きく分けると共同開発の在り方です。セブンイレブン、ファミリーマートは大手の食品会社と共同開発をしているのがほとんどでした。

一方、サークルKサンクスの共同開発はあまり名前を聞かない中小企業が多かったと思われます。ですが、サークルKサンクスは大手のコンビニ会社と差別化をはかるため、第3極と言われる対策をとっていました。期間限定、地域限定で企業やアーティスト、または地域と協力して商品の開発を行う新しい戦略です。

この戦略は安定した顧客の収入にはつながらないと思いましたが、ステークホルダーの増加には効果的ではないかと思いました。利害関係者との関係を広めて親近感をもたせることで顧客増加に繋がるのではないかと思います。

そして、最後に共同開発をする理由として3点あげられます。1つ目はマージンのカット、2つ目は安定した共有、3つ目は経費の削減です。一定の量を一定の期間に作るため上記3点が可能となった結果共同開発ができるのだとわかりました。

この課題を通して日頃の些細な疑問が解決されたとともに、自分の知識を深めることができたと思いました。今後のPB商品NB商品の価格の変動や新しいジ

ヤンルの商品にも注目していきたいと思いました。

ることができたのではないかと思います。

21123208 井上高彰

「自己の分担作業を通して感じたこと」

プロジェクトで発表用のパワーポイントの作成や、議事録のまとめをやった。パワーポイントは、各自が作成したものを発表用にまとめた。文章を短くしながら、伝えたい事を分かり易くするために、図表の作成をしたり、字のサイズやフォントを直したり、地味だけど大変だった。

自分が担当したPBとNBの定義では、調べていく内に現在のPB・NBの状況と差がある事が分かった。そこで、地域ブランドの分類を作った。PBやNBの定義がいろいろ変わっていて、その変化を分かり易く伝えるのが大変だった。

21123112 酒井 裕暉

「プロジェクト活動を通して」

PB・NBの商品調査はまず、どの商品がPB・NBなのかということから始まり概念を理解することからはじめたのでとても大変だった。この調査を通して自分が普段買っている物にはPB・NBが多いことを知った。

サンヨネのヒアリング会では自分の聴きたいこともわからず聞いているだけになってしまったが話を聞きながらメモを取るという練習ができたのでよかったと思っている。

合宿ではゼミ学生同士交流を深めることができ、発表会に向けて団結できたと思うしお互いどんな性格か少しながら知れた。

PPを作成するにあたって自分の所はロジスティクスについての所だったので他の人とは少し違い大変だったが、授業でやったことを応用すれば何とかかなと思っていたのだが上手いかず、ゼミのみんなに助けてもらいなんとかできたが自分で全部できなかったのは心残りだと思っています。

全体を通して感じたことは、先生のいったことをはじめからやっておけばこんなに苦労することはなかったと思うし、もう少しは自分自身でまともなものが作



携帯端末向けアプリ作成

今井プロジェクト

1. プロジェクトメンバー

亀之内順也 (20923707)、水野翔太 (21023120)
石川真次 (21023201)、壁谷竜輝 (21023712)
勝見拓矢 (21123108)、田頭和也 (21123120)、

2. 連携先企業・組織

プロジェクトにご協力いただいた連携先企業は、以下の通りである。

株式会社 SRA 名古屋事業所様
株式会社アイエスエル様
小坂井高校様

3. プロジェクトの背景と目的

AndroidOS 搭載端末や iPhone などの携帯端末の普及により、アプリを使用する機会が増えてきた。アプリは、個人で制作することも可能であり、現在では様々なアプリが生み出されている。体調管理支援のアプリや LINE などのコミュニケーションツール、Evernote などのクラウド技術を用いたアプリやサービスもある。

また、経営学部では全学年に iPad が無償貸与され、無線 LAN 環境を通して大学内どこからでもネットを利用することができる。電子教材配布だけでなく、レポート作成のための情報収集やゼミナールでのプレゼンテーション作成、就職活動などに利用されている。

本プロジェクトでは、本学の学生の携帯端末の活用を考え、アプリ制作や LMS の構築をテーマとした。

4. 実施計画

アプリ制作にあたっては、本学の学生の利便性の改善が議論の中心となった。まずは、本学のバス利用者がバスの時刻を調べるには大学から配布された手帳や豊鉄バス HP の PDF ファイルを見て確認しなければならず不便であることから、バス時刻表アプリを制作する事とした。また、並行して携帯端末活用の観点から、e ラーニングの実施に必要な学習管理システム

(LMS : Learning Management System) の一つである Moodle を用いて小テストシステムを作成し、iPad との連携についての検証も行った。

5. 実施結果

アプリの制作方法や開発環境の検討にあたり、協力先企業様への見学やアドバイスをお願いし、参考とした。株式会社 SRA 名古屋事業所様からは学校教学システムの概要と開発環境等を、株式会社アイエスエル様からは HTML, JavaScript, jQueryMobile 等による Web アプリ開発環境等について助言頂いた。株式会社 SRA 名古屋事業所様からの助言の様子を図 1 に、株式会社アイエスエル様からの助言の様子を図 2 に示す。



図 1 株式会社 SRA 様から助言の様子



図 2 株式会社アイエスエル様から助言の様子

実際の開発にあたって、クラウド上にありブラウザ上で動作する Monaca という開発環境を使用した。

Monaca の開発画面例を図 3 に示す。

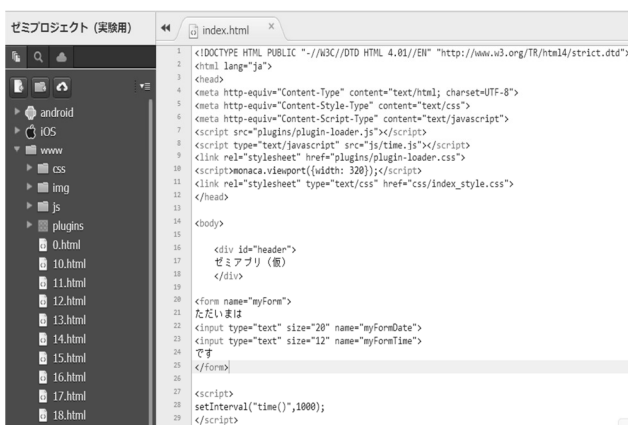


図 3 Monaca の開発画面例

Monaca を使用することによって作られたハイブリットアプリには、iPhone と Android の両端末で動作させることができ、開発環境を別々に用意する必要がないというメリットがある。実行画面例を図 4 に示す。まず、JavaScript を用いて、現在時刻の取得や、近時のバスの検索を容易にする機能等を実装した。

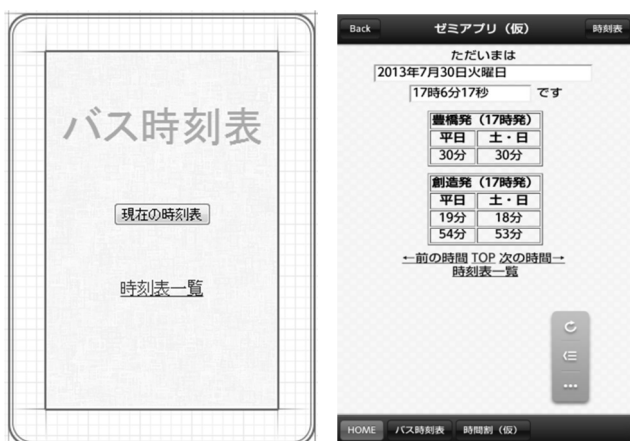


図 4 バス時刻表アプリの実行画面例

次に JavaScript コード記述の一部を簡略化する jQuery を導入し、図 5 のようなスライド機能を追加した。図 5 に示すように、左右にスライドすることで現在閲覧している時刻の前後を見ることができるようになった。

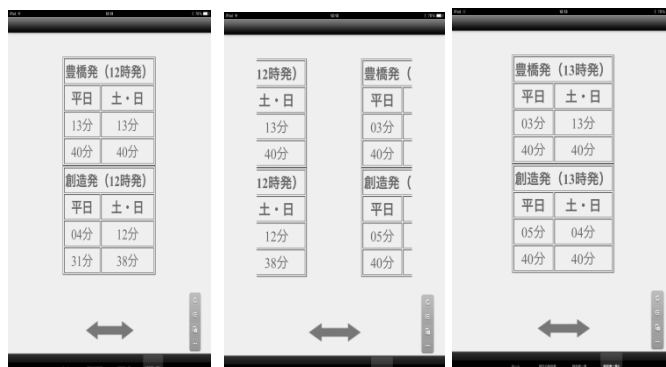


図 5 時刻表アプリ (スライド機能の実装)

この様に、Monaca を使用する事により、専用の機材を使用すること無く、HTML, CSS, JavaScript, jQueryMobile 等の標準の技術で作成した Web アプリを、iPhone や Android などのデバイスにインストール可能なネイティブアプリへと変換できる事を示した。

また、並行して e ラーニングの実施に必要な LMS の一つである moodle を利用して、小テストシステムを作成した。moodle 管理作業を簡単に学び、小テスト問題の作成をした。moodle の小テストの例を図 6 に示す。



図 6 moodle 小テスト例

授業内での iPad 活用についての協力要請が小坂井高校様からあり、プロジェクト活動として対応した。要望は多岐にわたるが、今回は、体育における各グループの iPad によるビデオ撮影とそれらの無線 (Wi-Fi) 経由での教員 PC への提出システムの構築を行った。ビデオ提出システムの概要を図 7 に、システム設定や使用法を小坂井高校様へ説明した

時の様子を図8に示す。

ビデオ提出システム概要図

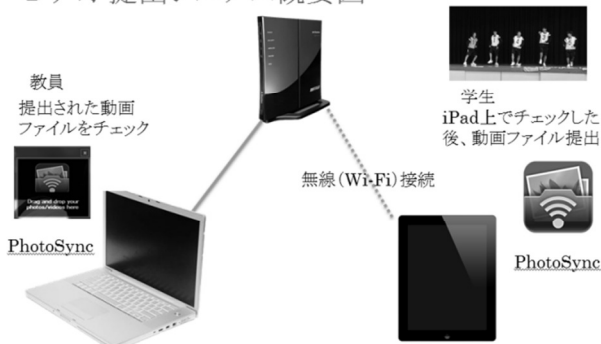


図7 ビデオ提出システムの概要



図8 小坂井高校様への説明の様子

6. プロジェクトの成果（自己評価）

まず、JavaScript を用いた基本機能を実装から始めて、jQuery の導入によって操作性の向上を図りながら、アプリの作成を行った。開発環境や制作方法の時点からを協力企業の方にご助言を頂き、アプリ開発の基礎や様々な制作方法を学ぶことができた。反省点としては、アプリ開発に関する役割分担が明確化できず作業のスケジュール調整にも支障が出た事や、アプリのデザインも望むようなデザインにすることはできなかった事等が挙げられる。

また、moodle の管理等の作業を学びながら小テストシステムの構築を行う事によって、サーバ側の開発過程の一部を学ぶことが出来たと考える。ただ、教育向けアプリ開発も視野に株式会社 SRA 名古屋事業所様の見学等も行い教育向けシステムについてご助言頂いたが、本格的なアプリ開発までは至らなかったと考えている。

今後は、試作アプリのテストや残りの作業を分担しスケジュールを調整しながら取り組む予定である。可能なら moodle 関連の実用化や更に高度なアプリ開発に取り組んでいきたい。

小坂井高校様については、今回のビデオ提出システム以外にもご要望を頂いているので、今後も担当者様と連携しながら、活動を継続していく予定である。

7. メンバー各自の所見

各メンバーの本プロジェクトに関する所見を、以下にまとめる。

・20923707 亀之内順也

今回のプロジェクトでの主な私の役割は発表資料作成とメンバーの活動を記す議事録作成であった。本プロジェクトの肝であるアプリの作成において私はそのアプリ作成に携わる知識がないため裏方に務め、これらが自分のできることと励んだ。

しかし議事録作成では問題なかったが、発表資料作成では作成に時間がかかってしまい、プロジェクト発表者、アプリ作成者達に負担をかけてしまったことがあった。反省点として発表資料作成する時間を十分にとっていなかったことで発表者に原稿を渡す時期が遅くなったことがあげられる。この反省点を受けチームプレイにおいて一人の遅れが全体に悪影響を与えてしまうことを学び、今後は資料作成などできるだけ前倒しに作り、後へ続く人への負担を減らすことなど、チームのことを考え行動できるようにしていくことを心掛けます。

・21023120 水野翔太

本プロジェクトで、私はHTML、CSS、JavaScript を使用し、アプリの体裁に関する作業を主に担当した。JavaScript は公開しているものを使用したが、もし自前でコードを作成することが可能なら、その方が実装できる機能に幅が広がるのに、と自身の知識不足を思い知った。

当初は、他のメンバーが活動しているのを遠目に見てばかりいたが、後半はアプリ作成に参加し、他

の授業で学んだ知識を活用して、チーム内での役割をある程度は果たすことができたと思う。また、アプリ作成中の試行錯誤を通して学んだ知識も多かったように感じる。しかしながら、メンバーとの連携を怠っていたので活動に加わるのが随分遅かったこと、力不足で断念した作業が複数あったこと、アプリ作成以外の活動には積極的でなかったことなど、反省点は挙げればきりが無い。全体を通して積極性や協調性の無さが目立っていたので、その点は特に反省している。以上の反省点を念頭に置きつつ、今後も日々精進したい。

・21023201 石川真次

今回のプロジェクト活動では、HTML、CSS、JavaScript を使用し、アプリの開発の担当をした。前半では骨組みを作成し、後半は他のメンバーと役割分担して作業を行ったが、分担や連携が上手く取れず、思ったように作業を進めることができなかった。しかしプロジェクト活動を通して自分にはない知識を得ることができ、経験を積むことができた。この経験を活かして、今後またこのような活動があったときしっかりと役割分担すること、連携を上手くとることを意識したい。

・21023712 壁谷竜輝

今回のプロジェクトの主な役割は、中間発表と成果発表の発表者であった。本プロジェクトのテーマであるアプリ作成において知識があまりなかったため、アプリ作成の活動において貢献することができなかった。また、発表要旨を試行錯誤した結果、予定より完成までに時間がかかってしまい、あまり発表の練習をすることができなかった。そのため当日の発表では、練習量がたりなくあまりいい結果をだすことができなかった。

反省点としては、自分自身の発表のレベルをもっと上げればいい成績をおさめることができたのではと思った。また、もっと発表の練習をして本番に向かうことができたなら満足のいく発表ができたの

ではないかと思った。今後はもっと聞き手にわかりやすいプレゼンができたと思います。

・21123108 勝見拓矢

プロジェクトの冒頭にプロジェクトテーマを決めるために、メンバー間で様々な意見を出し合っ、せつかく iPad があるのだから、アプリ製作とかできたら面白そうだなという発言で携帯端末向けアプリの作成に決まりました。

しかし、グループ全体の知識が著しく浅く、なかなか作業が進まず、悪戦苦闘していました。

・21123120 田頭和也

今回のプロジェクト活動では主にアプリケーションの開発を担当した。他の授業等で簡単なアプリケーション作成を学ぶことはあったが、自分で何を作るか考え作成することはほとんど初めてに近く、スムーズに作業を進めることができなかった。今回特に自分が反省すべきだと感じたのは、スケジュールの組み立てを曖昧にしまい全体的に作業が遅れたこと、上手く作業を分担することができなかった点だ。スケジュール調整や作業を人に割り振るといった経験がなく、上手く行うことができなかった。

プロジェクト活動を通して自分が今できることや得意なことを知ることができた反面、自分に今足りていない能力や知識がわかった。活動内では初めて経験することが多かったため、貴重な経験となった。今後また複数人で取り組む授業等があれば今回の反省点を活かし、積極的に行動したい。

【謝辞】

本プロジェクトの実施にあたり、ご協力いただいた株式会社アイエスエル様、株式会社 SRA 名古屋事業所様、小坂井高校様には大変お世話になりました。協力していただいた皆様へ心から感謝の気持ちと御礼を申し上げ、謝辞にかえさせていただきます。

SOZOショップコラボプロジェクト

川戸プロジェクト

1. プロジェクトメンバー

松本教史(20923122),伊豫田英将(21123105)

浪崎祥平(21123125),廣中佑紀(21123127)

馬 駿(21123130),伊藤奨麻(21123205)

佐々木智至(21123216)

2. 連携先企業・組織

1)NPO 団体「パルク」

2)コラボ：ほの国百貨店

：松山小学校

3. プロジェクトの背景と目的

1)4/26 開店の「SOZOショップ笑輪」を発展させる

2)ほの国百貨店や松山小学校とコラボすることによって

1.現実の百貨店のマネジメントを体験する

2.笑輪のPR

3.地域の人との交流により、接客力が向上

4. 実施計画

1)文献購読

1.P.ドラッカー (2011)「エッセンシャル版・マネジメント」、ダイヤモンド社

2.D.シュルツ (2005)「統合マーケティング」、ダイヤモンド社

3.F.コトラー (2010)「コトラーのマーケティング 3.0」、朝日新聞出版

2)店舗開店・経営

・2013.4.26 開店の「SOZOショップ笑輪」の運営に営業日にローテーションを組んで勤務する

・内容としては、接客、販売、仕入れ、売上管理、広報などの業務を通じて、店舗運営の実態を体験する

・できるだけ、一部の人に負担がかからないように公平にローテーションを実施する

3)企業見学

・豊橋だけでなく、名古屋地区まで範囲を広げて実際の

企業を訪問し、各企業のマーケティング戦略について話をしてもらい、知識を増やす

4)コラボ先を探す

・「SOZOショップ笑輪」開店して、店舗運営をすると同時に、地元企業とショップのコラボによる店舗の知名度を上げ、地域貢献への道を開く取り組みを目指す

5. 実施結果

★春学期：

①文献購読

・年間通じて上記3冊をゼミ生全員で輪読することで知識を増やし、店舗運営にも生かすようにする

②店舗開店、経営



—4/26 SOZOショップ「笑輪」開店—

・4/26～毎週金、土、日にローテーションを組んで店舗に出勤して仕事をする

③中部国際空港企業見学 6/21 (15:00～18:00)



—6/21 中部国際空港会社見学—

・同社のマーケティング戦略、主に企業の広報と路線拡大のための戦略の概要をレクチャーしてもらった
・担当は、同社総務部総務グループリーダー、高橋哲

也氏

・高橋氏講演内容：

*旅客数；年間449万人（2013は目標480万人）

*便数；国際線が伸び悩み（1日40便、北米敏減少）

*LCCの航路は拡大方針

*施設・サービスの充実とCS（顧客満足度）世界No.1を目指す

*広報では、公式Webサイトのリニューアル、イベント開催、「昇龍道」プロジェクトとして、名古屋から富士山、高山、立山、金沢をめぐる観光ルート開発、外国人向け観光情報開発

*航空会社へのセールスと路線開拓：

アジア、中国の旅客の取り込み、拡大

④ 松山小学校子供夕涼み大会、出店



7/27 松山小学校夕涼み大会・出店

・土曜日の夜、同小学校の生徒たちとその親御さんたちを集めて「夕涼み大会」といういわば「お祭り」を実施して地域の親睦を高める

・「SOZOショップ笑輪」は、地域への交流と激安のドリンクやお菓子を販売したり、「お菓子の掘み取り」ゲームをしたりと、親子連れのお客で賑わった。

・ただ、当初の観客動員見込みを過大評価したため、冷たいドリンクを多く仕入れすぎたため、多くの残を発生させた。

*学校側の予測では、子供・大人含め、約500名を想定していたが、実際は、350名の参加でしかなかった。

・夕涼み大会の最後に、余ったドリンクやお菓子の詰め合わせをプレゼントする「じゃんけん大会」を急ぎよ実施して、お菓子は全て処理したが、冷たいドリンクに約100本近い余りが出てしまった。

・だが、状況を把握して、予定外のイベントを急ぎよ実施したり、そのための動員をみんなで取り組めたりできたのは良かった。

・もう少し事前の予測をしっかりとすればよかった

★秋学期：

⑤笑輪、店舗レイアウトリニューアル

・開店当時から、店内のレイアウトが、当初の目的である「おやつを買って、セルフサービスでお茶を飲みながら備え付けの本でも読んでもらう」という狙いを持っていたが、店内に入ってきたお客さんは、品物を見たり、買ったりした後、すぐに出て行ってしまうのがほとんどだった。それは、テーブルに座ってもらにくい店のレイアウトが原因というのが、メンバーみんなの意見であった。

・それを変えるには、商品の位置と、新たに誰でも座ることができるイスとテーブルを買う必要があった。それで思い切って手を加えることにした。

・10月の初めのプロジェクト演習の時間にレイアウトを変更した。

・しかし、その成果は今のところ出ていないので、後は販売する商品を工夫して広げることが必要である

⑥ほの国百貨店とのコラボ企画決定

・秋学期にはもう一つのコラボ先として、ショップからすぐ近くのほの国百貨店とのコラボをすべく、企画に入った。

・幸い大学に同店と親しい先生がおられ、その先生からの口利きで、コラボを申し込んだら、「企画を見せて」と言われ、すぐ企画に入った。

・コラボの企画内容は、

*主要内容：同百貨店のフロアの一角を借りて、1日限りの共同イベントを開催する

*タイトル：「親子ふれあい広場」

ー親子で楽しめるイベントを、時間を区切って展開する

ー子供塗り絵大会…終日無料で子供に塗り絵をし

て遊んでもらう。できた塗り絵はショップでも展示する

ーポケモン非公式ゲーム大会（14時～16時）

子供たちにゲーム機を持ち込んでもらって、個人戦で試合をする。1位、2位、3位に図書券の賞品

ービンゴゲーム…16:15～17:30

当日同店での買い物レシート3000円以上で、1～2枚までのビンゴカードを配布。早くビンゴを達成した人から、クジ引きで商品を選ぶ方法

*同百貨店販売促進部長、中澤氏に全員で同店を訪れてプレゼンを実施。すぐにOKをいただき準備に入った

⑦創造祭にて笑輸出店 10/26～27

- ・創造祭で、ショップとして出店
- ・ペットボトル商品の販売は学生から禁止されているので、缶ドリンクを販売することで参加。
- ・1缶¥50という激安で販売したが、夏の納涼大会の教訓を生かし、仕入れ缶数を少なめに設定したことで、完売できた。
- ・土日でメンバーのローテーションで販売した。2日間で缶は缶完売することができた。
- ・土曜日のメンバーの発案で、当日缶ドリンク以外に出来立てのコロッケ販売も急遽実施し、60個用意したが、全部販売できた。



創造祭にて笑輸出店 10/26～27

⑧ほの国百貨店「親子ふれあい広場」実施 12/23

- ・12月23日の1日だけ、同店8階の催事場の一角で

特別に場所を提供してもらって実施した

- ・ショップで製作した「大学ののぼり」を持ち込み、8階へ来られたお客さんから目につきやすい仕掛けを試みた
- ・当日は、フロア全体が「北海道展」を開催中で、北海道のうまいものを買いに來るお客が多いはずだったが、クリスマスイブ前日にも関わらず、思ったほどお客さんは多くなかった。
- ・イベント内容は、上述の通りだったが、準備作業がなれないことばかりで大変だった。
 - *「ポケモンゲーム大会」は、著作権との関係でそのままの名前で実施することはできず、「非公式」という文字を加えることが必要と分かった
 - *参加者にわたす景品の企画と実際にそれを集めるのに手間がかかったが、うまく企画できた
- ・開店から14:00頃までは何とかお客はあったが、それからBINGO大会まで人が来なくなり、メンバーで手分けして動員を呼びかけた。
- ・それとともに北海道展のレジの人にもBINGO大会へ立ち寄るよう声掛けしてもらったおかげで、BINGOは予想外の入場者であふれた。景品も最後まで1等の東京ディズニー招待券当選者が出ず、最後になるとBINGOになった人が重なるものだが、ちょうど一人の当選者が出て、うまく収められた。
- ・反省としては、もっと事前のイベント広報を同店と共同で進めるべきだったことがあげられる
- ・百貨店の店員としてイベントに取り組むよう求められたことで、接客や、臨機応変の対応の重要性がまなべた。



12/23 ほの国百貨店コラボ

「親子ふれあい広場」のBINGO大会

6. プロジェクトの成果（自己評価）

- ①売り上げは伸びたが客足は少ない
- ②マネジメントに対しての認識が広がった
- ③空港のマネジメント方法の認識が広がった
- ④接客や臨機応変に対処することを学べた
- ⑤レイアウトを変える事で理想のショップに近づけることができた
- ⑥松山小の反省を生かし商品を完売することができた
- ⑦自分達の企画を採用してもらい、地域の有力企業とのコラボが実現
- ⑧コラボを実施する事により、接客力の向上ショップのPRができた

7. メンバー各自の所見

①伊豫田英将(21123105)

松山小学校とほの国百貨店とコラボして、利益の出し方や集客の難しさを知りました。

②松本教史(20923122)

SOZOショップ「笑輪」を運営し、様々な問題点が見つかったが、それらを分析し、一定程度改善させてくることができた。また地域企業と共同でイベントを行わせていただき、企画のポイントや接客について学んだ

③浪崎祥平(21123125)

この一年、プロジェクトを通じ様々なことを学んだ。経営やコラボといったことを体験することにより、現場独特の雰囲気や物事は、実際にその場にいなければ分からない。そんな中であったトラブルや問題点にどうたいしょするか、どうやって次に生かすかなどを実際に体験できたことは、座学では得られない貴重な体験だったと私は思う。

④廣中佑紀(21123127)

ほの国百貨店とのコラボでの「BINGO」は、「ガララクジ」のほうが良かったかもしれない。が、BINGOも満員だったのが何とも言えなかった。ただ、

大勢のお客様に楽しんでもらえるなら、ガラガラだと考えた。あと、BINGOのナンバーは、別の機械でやったほうがよかった

(※参考：Ipadで実行した)

⑤馬 駿(21123130)

ショップに対して商品の種類があまりわからない、知っている商品の種類は有限で、いつも商品を仕入る前になかなか発言できなかった。自分が勉強したことは、ショップをつくる前から営業、商品の仕入とかを勉強した。ほの国百貨店の集客行動で、どういう人たちに行くか、や、商品仕入れ活動の時間を計画し実施したことなどいろいろの体験を身に着けた。

⑥佐々木智至(21123216)

ゼミのプロジェクトを通じて、今までと違う人たちと多く関わることができて、成長できたと思う。

⑦伊藤奨麻(21123205)

全体を通じて、日々の活動の中ではうまくメンバーを纏められなかったと思うが、イベント等はうまくできていたと思う

ショップにおいても、その度にお問題点を解決するために話し合い、積極的に権をもって理想に近づけたと思うが、その中でもっとメンバーの意見、積極性を引き出していきかけた。

以上

豊橋エコタウンプロジェクト

～豊橋市内小中学校に設置された太陽光発電システム状況調査～

見目プロジェクト

1. プロジェクトメンバー

田辺俊希 (20923215)、鈴木涼太 (21123117)、
惣門健人 (21123118)、眞子 匠 (21123132)、
杉元篤史 (21123220)、鈴木啓吾 (21123221)、
中川千加 (21123228)

2. 連携先企業・組織

- ・豊橋教育委員会教育政策課
(担当：渡会小枝子)
- ・豊橋市市内各小中学校の校務主任

3. プロジェクトの背景と目的

近年、資源の枯渇化、地球温暖化といったエネルギー・環境問題への対応から、再生可能エネルギーの普及拡大が求められている。その中でも太陽光発電は、クリーンであることをはじめ、どこにでも設置が容易である、可動部がなく静穏であるなどの利点があり、注目を集めている。

太陽光発電の長期信頼性の評価には、ある地域において複数のシステムの長期的なデータ収集・分析が望まれる。しかしながら、民間施設に設置された太陽光発電のデータを長期的に収集することは困難である。一方で、公共施設に設置されたシステムについては、データの提供・収集が比較的容易であると思われる。

以上のことから、本研究では豊橋市内の小中学校(全74校)に設置されている太陽光発電システムを対象に、システムの稼働状況を調査し、その長期信頼性に関する基礎データを収集して分析する。

4. 実施計画

4.1 春学期 (太陽光発電の基礎知識の習得)

- (1) 太陽光発電の長所と短所
- (2) 太陽光発電の原理と太陽電池パネルの種類
- (3) 太陽電池製造メーカーによる出力保証の調査
- (4) 性能劣化の評価方法の検討

4.2 秋学期 (訪問)

- (1) 豊橋市内全小中学校の訪問
- (2) 故障・トラブルの状況確認
- (3) 性能劣化の分析

5. 実施結果

5.1 太陽光発電の長所と短所

太陽光発電の基礎知識修得のために、太陽光発電の長所と短所を検討してまとめた。

○長所

- ・可動部分がほとんどなく、メンテナンスが不要
- ・発電時に化石燃料を使わない
- ・屋根や壁等の未利用スペースを利用可能
- ・送電設備のない遠隔地の電源としても利用可能

○短所

- ・導入時のコストが高い
- ・発電が天候などの自然条件に左右される
- ・施設の屋根に設置した場合、屋根に負荷がかかる
- ・現状では発電コストが高い
- ・設置方法によって発電量が大きく異なる
- ・長期信頼性の問題が指摘されている

5.2 太陽光発電の原理と太陽電池パネルの種類

太陽光発電では、太陽電池を構成する半導体に入射した太陽の光エネルギーを電気エネルギーに変換して発電を行う。

多結晶は単結晶よりもコストが低い為、一般に普及されている。単結晶は他よりも製造コストが掛かるといふ欠点がある。化合物系は、高温時でも出力が落ちにくいという長所がある一方で、有害物質を使用している。有機系は、製造が比較的簡単で様々な場所に設置が可能という長所がある一方で、変換効率が低い事が短所として挙げられる。

5.3 太陽電池製造メーカーによる出力保証の調査

各メーカーの保証期間と保証条件を表1に示す。

三菱電気では、太陽電池の性能が保証条件を下回った場合には、問題の生じた太陽電池パネルを無料で修理する。シャープおよび東芝は、問題の生じたパネルを修理または、代替品と交換する。ソーラーフロンティアは、新たなモジュールの追加、もしくは問題の生じたパネルの修理か交換を行う。カナディアンソーラーは、その取り扱いについては販売店で詳細を説明するとのことであった。

表1 太陽電池製造メーカーによる保証条件

メーカー	保証期間	保証条件
三菱	20年	80%を下回った場合
シャープ	15年	10年で90% 11年以降は85%
東芝	10年	90%未満となった場合
ソーラーフロンティア	20年	10年で10%以上低下した場合 20年で20%以上低下した場合
カナディアンソーラー	25年	1年目 97%以上 10年目 90.7%以上 25年目 80.2%以上

5.4 性能劣化の評価方法の検討

太陽光発電の性能を示す重要な指標は、発電量である。しかし、この発電量は入射する日射量により変化する。そのため、日射量の変化の影響を取り除いた変換効率（発電量÷日射量）で評価する。

しかしながら、この変換効率は太陽電池温度の影響を受け、温度が上昇する低下する。そのため、変換効率の値を温度で補正下値を用いて評価する。

5.5 豊橋市内全小中学校の訪問

秋学期は、市内小中学校の訪問調査を本格的に行った。太陽光発電の長期信頼性を評価するためには、故障状況と性能劣化の両面からシステムを調査する必要がある。今回は、故障状況を確認する訪問調査を行っ

た。また、一部の小中学校からは発電データを提供いただき、そのデータをもとに性能劣化の分析を行った。

[訪問調査するために必要な準備]

アポイントメント・電話対応資料作成を分担して行った。

[訪問調査の流れ]

- ①豊橋市教育委員会から各小中学校の担当者に依頼状を送付
- ②本学より各校に依頼状を送付
- ③各メンバーが訪問のアポイントメントを取る
- ④訪問調査を実施
- ⑤訪問終了後、学校にお礼状を送付

⑥豊橋市教育委員会・各小中学校への報告書の作成
このように、訪問調査を行うために、電話対応マニュアルを作成するとともに、訪問担当校の分担の決定、質問項目の決定、訪問終了後の確認の連絡、お礼状の作成を行った。

[内容]

訪問調査では、太陽電池パネルのメーカー、パネルの設置枚数、方位、傾斜角度、パネル周囲の障害物の有無、インバータの場所など、システムの設置状況を確認した。また、表示板で発電状況を確認するとともに、システムの事故・トラブルの有無、蓄電池設置の有無について担当の先生に質問した。

5.6 故障・トラブルの状況確認

訪問調査では、豊橋市内全74校を対象に太陽光発電システムの稼働状況調査を行った。その結果、本年度は9件のトラブルを確認した。その中には、発電への影響が高いものが7件あった。また、昨年生じたトラブルが改善されていないものも2件あった。

一方で、一部の小中学校では太陽光発電システムの点検が行われていた。

表2および図1に、今年度の調査結果をまとめる。発電への影響に応じて、故障のレベルを以下のように3段階に分けた。

- レベル1：施設の異常、発電量表示パネルの故障
- レベル2：インバータ又はフィルターに支障（エラー）
- レベル3：インバータの停止又は故障、太陽電池パネルの破損・断線

表2 レベル別の故障件数

故障レベル	発電への影響	今年度の故障件数
1	なし	2
2	一時的に影響	7
3	大いに影響（修理の必要有り）	2

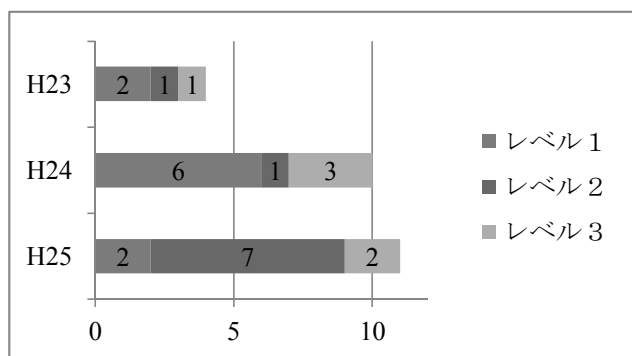


図1 各年の故障・トラブル件数

5.7 性能劣化の分析

吉田方中の変換効率の推移を図2および図3に示す。

吉田方中を対象に変換効率の推移から性能劣化の分析を試みた。図2の吉田方中の変換効率の各年のグラフを見た通り2009年に比べて2013年のほうが低くなっていた。

トラブルが無ければ夏場は発電量が減少し、冬場は発電量が増加している、トラブルがあった場合はこれに当てはまらない。図3を見てみると2013年の1月後半から4月頭までトラブルがあった事が窺える。

その詳細な分析については、現在も継続中である。

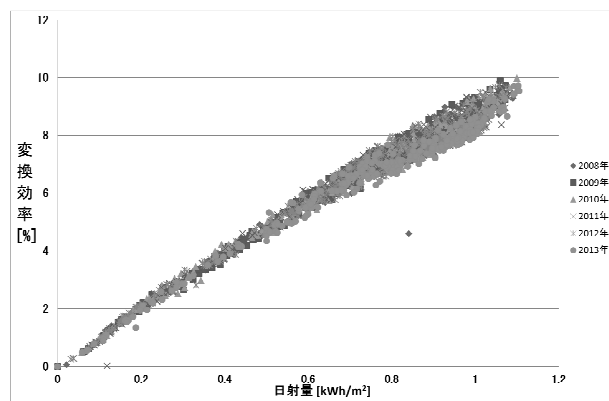


図2 12-13時の1時間の日射量と発電量との関係 (吉田方中学校)

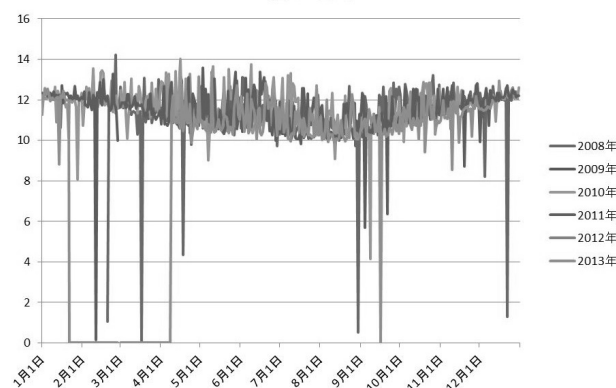


図3 12-13時の1時間の日射量と変換効率との関係 (吉田方中学校)

6. プロジェクトの成果（自己評価）

豊橋市内全小中学校の訪問調査は、分担して訪問することができた。一方で、分析・資料作成の際に役割分担がうまく機能せず、結果として一部の人間に作業が集中してしまった。また、訪問の際に取得すべき必要な情報を共有できなかった。

以上の事から、常に電話やメール等で連絡を行い、会議による意見交換やコミュニケーションを積極的に取ることが今後の課題となる。

7. メンバー各自の所見

・鈴木啓吾 (21123221)

このプロジェクト開始の頃は、太陽光発電システムは、価格という問題点のみだと思っていた。しかし、実際に基礎知識を学んで行く中で太陽電池製造メーカーの出力保証は、メーカーごとで様々ということがわ

かった。

太陽光発電システムは普及していますが、長期信頼性に関する問題が浮き彫りになっている。

訪問調査を行う際に電話によるアポイントメントを取りましたが、なかなか相手との都合の良い日が合わなかったり、授業などで電話に出られなかったりなどさまざまな状況があった。就職した後も電話でのアポイントメントは、行うと思うのでその時は、このプロジェクトの時の事を思い出して苦労しないように相手のことを考えて行きたいと思う。

・杉元篤史 (21123220)

私たちは、太陽光発電についての基礎知識習得や豊橋市内全小中学校への太陽光発電システムの稼働状況調査など様々なことを行ってきた。訪問調査では故障やトラブルが増加傾向であることが分かった。一方で一部の学校では、太陽光発電システムを定期点検していることが新たに分かった。そのため定期点検によって事故やトラブルが発覚し、修理を行った学校もあった。しかし、他の学校では定期点検が行われていないため、訪問調査によって故障が発覚した学校もあった。訪問調査で蓄電池の有無についても確認を行った。設置されている学校は多くはなかった。学校の立地によっては、津波などの被害を受ける可能性がある。しかしながら、災害用にもかかわらず津波などの影響を受けやすい場所に設置されている学校があった。このように訪問調査によって太陽光発電システムについての様々な問題が発覚した。この発覚した問題が改善され、太陽光発電システムが今後のエネルギー問題を解消する新たなエネルギーとして、より一層注目されることを願う。

・鈴木涼太 (21123117)

今回のプロジェクト活動では太陽光発電の基礎知識の習得から始まり、豊橋市内全小中学校の太陽光発電システムについての訪問調査、性能劣化の分析を行ってきた。

最初は、太陽光発電は太陽の熱をエネルギーに変え

て発電しているというイメージしかなかった。

太陽光発電の基礎知識を習得する事で、太陽光発電の原理を知り、メーカーや種類が色々あると知ることができた。メーカーによって保証内容や期間が異なっていると知った。

訪問調査では、訪問する小中学校を決め各自で担当する小中学校に電話をしてから訪問調査を行った。電話をした時に担当者が不在のため連絡が取れず、日程の調整をするのに苦労した。訪問時には、故障・トラブルの有無、設置状況などについて調べた。故障・トラブルは昨年に比べて増えていると分かった。設置状況は学校ごとに異なっている事が分かった。

・眞子匠 (21123132)

私たち見目ゼミナールでは、太陽光発電システムの長期信頼性について研究を行った。春学期は、太陽光発電システムについての基礎を学び、現在太陽光発電システムが抱えている問題点を知ることができた。秋学期には、市内の小中学校を対象に太陽光発電システムの設置状況を調査した。その結果、2012年より故障やトラブルが増加していた。また、2012年からのトラブルや故障を対処していない小中学校があったことが分かった。また、データを提供してもらった吉田方小学校、豊城中学校に関して、データの分析から性能劣化の可能性があったことが分かった。

この研究を通して、長期的なグループ活動や目上の方との交流の仕方など、今までやったことのなかったことを体験できて、とても有意義であった。小中学校の訪問の際に、小中学校側とのスケジュールの調整はとても苦労した。しかし、早い内にこういった体験ができたことはとても大きなメリットであると感じた。

・田邊俊希 (20923215)

今回私たちのプロジェクト活動は、太陽光発電の長期信頼性について研究を行った。

春学期に、太陽光発電に関する知識（長所や短所・種類と原理など）を習得し、国内外の企業が太陽光発電にどのような対応を取っているのか等をゼミ内で各

自発表を行い、メンバーの太陽光発電に対する基礎力向上を目指した。

秋学期は、前年度・前々年度にも太陽光の発電データ収集を協力して下さった豊橋市内の全小中学校にアポイントメントを取り、今年度も訪問調査を行った。

観測したデータを集計しグラフにして、各小中学校での3年間の性能劣化や故障・トラブルが無いのか、長期信頼性についての評価を行った。

1年間の研究を行い、感じた事は自分が太陽光発電についての知識が足りない事やアポイントメントでの対応など様々な力不足である。今回のプロジェクトで経験・実感した事を、自己成長や卒業研究に活かして、これから一つずつ補っていきたいと思う。

・中川千加 (21123228)

プロジェクトを通し、訪問調査を行うために必要なこと、太陽光発電システム、学校で積極的に行う活動等を学ぶことができた。

時間が限られている中で、発表することの難しさを学んだ。もう少し分担し、私も積極的に参加し協力すべきであったと感じた。

・惣門健人 (21123118)

今回のプロジェクト活動を行って豊橋市内小中学校に訪問した結果、太陽光パネルが壊れていることに気が付いていなかった学校や、多少調子が悪くても、そのまま使っている学校があった。

一般家庭に取り付けられているパネルの場合、不調になったことにより、太陽光発電システムで得られるはずだった発電量を失うことになるため、なるべく早く修理する。しかし、学校では予算の関係で修理できないという問題と、学校から市に報告をした場合に、市からの修繕費用等の予算が下りないなどの問題があるため、すぐに修理することはできない。

これから先、私たちがこの太陽光発電システムの課題についての調査を続けていく中で、性能劣化を分析する際に、太陽光パネルの扱い方の違いによる影響が出るのではないかと思われる。パネルを販売する業者、

設置する業者のアフターケアや保証期間の利用状況も考え、分析しないといけない。

アカウミガメ保護啓発活動

中野聡プロジェクト

1. プロジェクトメンバー

内藤規文 (21123227)、白濱祥輝 (21123218)、
浅井昭宏 (21123201)、田中皓也 (21123222)、
石部広貴 (21123102)、佐々木勇太 (21123113)
高瀬竜也 (21123614)

2. 連携先企業・組織

ご協力いただいた、豊橋市役所環境部環境保全課
兵藤様、田中様に改めて謝意を表したい。

3. プロジェクトの背景と目的

私たちは日本の環境保護活動を担いたいと思い、豊橋市の行っている活動を調査した。調べてみると、豊橋の表浜海岸はアカウミガメが上陸・産卵に来る日本有数の海岸であること、豊橋市がウミガメの保護活動を行っていることがわかった。また、豊橋市の行っているアカウミガメの保護活動の理念に賛同したため、プロジェクトのテーマに設定した。

特に、以下の諸点をプロジェクトの目的に定めた。

① ウミガメの生態に関する学習を通してその理解を深め、② 自ら保護啓発活動を担うこと。また、③ 他県・世界の保護の取り組みを調査し、その結果をフィードバックすることにより豊橋市役所の取り組みの向上に協力すること。そして、④ 独自の啓発活動を展開し、豊橋市内外の人々にウミガメ保護に関する認知と理解を深めてもらうことである。

4. 実施計画

★ 春学期

ウミガメの生態と保護に関する学習
学外団体のイベント参加
自主的上陸調査・保護活動

★ 秋学期

自主的上陸調査・保護活動
保護啓発リーフレット作成・配布
映像作品の制作

市役所に保護活動についての提案

出前授業

ホームページの作成

5. 実施結果

① ウミガメの生態学習 … テーマ設定後、アカウミガメの生態に関して学ぶため、「とよはし アカウミガメのあしあと」豊橋市環境部環境保全課 2012 年などを輪読した。

また、6月13日には豊橋市役所環境保全課を訪問して市の保全活動に関する説明を受け、7月20日には「竜宮探検～表浜のアカウミガメ調査委員養成講座～」に、7月27日と8月3日には「アカウミガメの来る表浜海岸の自然観察会」の参加した。写真1は、竜宮探検の際の、地元NPO担当者による表浜海岸での講義の様子。



写真1. 竜宮探検

② 保護啓発活動 … 9月から12月にかけて、次の活動を行った。

a. まず、ウミガメの生態学習をもとに独自の保護啓発リーフレットと三角ポップを作成した。三角ポップの印刷は外部に依頼し、幅広い年齢層の方々にウミガメ保護への認知を広めるために学内、市内サー



写真2. リーフレットの作成

フショップ、豊橋西高校などに配布した。

b. 表浜海岸清掃活動 … 月に数回、メンバーが自発的に表浜海岸に赴き、海岸の清掃活動などを行った。ウミガメの保護には資格が必要なため、直接的な保護活動の余地は限られている。だが、清掃活動などを通して間接的にウミガメ保護に貢献することはできる。

c. 豊橋市役所への報告書提出 … 豊橋市役所環境部環境保全課へ、他県と他国の取り組みをまとめた報告書を提出した。報告書には、HP の網羅的調査の結果や文献(亀崎直樹『ウミガメの自然誌』東京大学出版会2012年など)の記載を利用し、日本全国のアカウミガメの産卵地、産卵数を見やすく可視化したデータや米国漁業におけるウミガメ排除装置 TED(turtle excluder device)の利用、他県の特徴的な保護策などについて明記した。

具体的には、ウミガメ減少の主な要因として6項目を指摘した。

・**乱獲** 有史以来食用として、また皮革製品や剥製、宝飾品として利用するために捕獲されてきた。近世に市場経済が発達し、流通が大規模化するにつれて、ウミガメの存続そのものを脅かすようになる。日本では中国から伝来したべっ甲細工が江戸時代から発達、工

芸品として珍重され、20世紀には世界最大の鱗板消費国となった。1950-92年までに約200万個体分が輸入されたとされる。乱獲は、ワシントン条約(1970年の絶滅のおそれのある野生動植物の種の国際取引に関する条約)による国際取引規制により抑制されてきたが、わが国はタイマイに関しては留保し、1989年まで年間約30t(約3万匹分)を輸入し続けた。国際的批判から、1993年に実質的に輸入を禁止し、1994年に留保を撤回した。

・**混獲** 刺網、巻網、底引き網、定置網などにウミガメが混獲され、溺死するものが少なくない。40カ国の操業データと13の監視プログラムのデータによれば、2000年には世界全体で20万頭のアカウミガメ、5万頭のオサガメが混獲されたと見積もられている。

・**産卵地機能の喪失** 孵化脱出までの間、温度や湿度、ガス交換などが適切に保たれ、容易に地表に脱出でき、確実に海に到達できることが求められる。わが国では全国的に砂浜の侵食が進行し、こうした空間が急速に失われつつある。侵食は、砂利の採取やダム建設に伴う河川からの砂の供給の減少、港湾施設や離岸堤の設置による沿岸漂砂系の変化による。また、砂地があっても、利用できなかったり、好ましくない環境に変容していたりする。

・**被食** ウミガメの卵はさまざまな野生動物によって捕食される。2013年夏には、表浜海岸でもアカウミガメの卵が野犬の被食にあっている。産卵巣をフェンスで覆うことにより一時的に防除はできる。

・**汚染** 石油などによる汚染、人工物の誤食や絡まりなど。死体の消化管内容物の検査では、アカウミガメ、アオウミガメ、オサガメからしばしばプラスチック類が見つかる。

・**その他** 気候変動などの地球規模の変化のほか、観光客による踏みつけや幼体の放流会などのディメリットも指摘される。

また、他県における良く工夫された保護柵の事例やウミガメの里親制度、ウミガメ保護条例などを記載した。市の保護活動がよりよいものになるよう、貢献できれば幸いである。



写真3. 市役所報告書の作成

d. 映像作品の製作 … 映像は、インターネットなどを通じてたくさんの人に知ってもらえる手軽な方法であり、幼い子たちにも比較的抵抗なくウミガメ保護の大切さを理解してもらえると考えた。

映像とリーフレットを併用することにより、認知率の向上を図る。現在、ウミガメの成長回遊をベースにした映像作品はほぼ完成しており、年度内に豊橋創造大学の Facebook や Youtube 等にアップロード、広報活動のレポーターに加える予定である。

6. プロジェクトの成果（自己評価）

達成率は、60%とした。

理由は、秋学期当初に立てた目標をすべて遂行することができなかったからである。1つ1つの成果物の質の向上に努めたが、コンテンツが不十分であり、また期限内に終了することができなかった。

計画通りに進まなかった場合、柔軟に対応することができなかった。期日に間に合わせるためのチームの協調力と熱意が足りなかったのも一因だろう。毎回、進捗具合と該当作業に関してどのくらいの日数がかかるのかを共有して取り組めば、間に合ったのだろうと思う。

7. メンバー各自の所見

内藤規文 (21123227)

今回のプロジェクトで、私はゼミリーダーを務めた。プロジェクトは各賞を頂き、豊橋市職員の方達



写真4. 表浜海岸にて

(7月27日夜10:30頃撮影)

からもそれなりの評価を得られた。だが、自身の至らない所を痛感する機会だった。

電話でのアポ取り、ビジネスメール、言葉遣い、マナーなどから集団行動における協調性、傾聴力などこれから社会に出る上で必要不可欠な教養が欠如していると強く感じた。授業を通して自己分析ができ、自分を見つめなおすことが出来、自分の長所、短所を知ることができ良かった。この経験を今後の学生生活、就職活動に活かしたら幸いである。

プロジェクト内容については、自分達の行ったことに対する効果測定、検証が行えなかったため、みえる化ができず中途半端に終わってしまった。計画も持ってとりくめず、最後までちゃんとやりきる事が出来なかった。

リーフレットの配布、映像作品など作成したが、広く認知度を上げるために出前授業が出来たらよかったと思う。いろいろと問題点がありたくさんの改善点があった。最後に私達の活動を支援してくださった環境保全課の兵藤様と田中様に改めて謝意を表したい。

浅井昭宏 (21123201)

このプロジェクトで、私はウミガメの保護活動について様々な事を学びました。私は普段海に行くことが多いのでウミガメが来ることは知っていたのですが、市で保護活動をしていることなどは知りませんでした。

保護活動に参加することでウミガメが食害にあっていることや、海岸がゴミで結構汚れているのを目の当たりにし衝撃を受けました。これからは海岸を利用する時に海岸を汚さないよう気を付けるように心がけ、知人などにも注意するよう心掛けたいと思います。

また、産卵のデータを見ると産卵が多い年と少ない年があるのが分かり、それには海の温度も関係している可能性もあるのですが、海岸の環境によるものも大きいと思っています。保護柵などまだまだ改良の余地があると思うのでこれからもどうしたらよりよくなるのかを考えていかないといけないと思いました。

石部広貴 (21123102)

今回、ウミガメ保護啓発活動をテーマに市役所とも協力のもと、多くの人に知ってもらうように計画し実行した。私は、リーフレットや映像作品の作成を担当した。まずは、保護活動や改善点を知らないことには周りに伝達することはできないので、市役所の行う保護活動に参加し、資料収集を行い、知識を増やした。そして、大人から子供まで理解してもらうよう、分かりやすく退屈にならないものを作るように工夫した。リーフレットでは、豊橋の高校にアポをとり、提示させてもらえるようになった。映像作品ではナレーションも担当し、ユニークさも取り入れることが出来た。

人に伝えるには、ユニークさも必要であることが大切だと感じた。外部との交流はとてもいい経験になったと思う。細かく計画を立てて実行出来ず、進行が遅れたことが反省する部分だ。

田中皓也 (21123222)

アカウミガメ保護啓発活動をして、アカウミガメのことが多少わかった。そしてボランティア活動までしている人たちがいることを知ってビックリしました。アカウミガメは絶滅危惧種なので大切にしないといけないと感じた。

白濱祥輝 (21123218)

プロジェクトを遂行するにはまずチームワークが重

要と感じた。自分ひとりの力ではどうにもならないことも、力を合わせれば可能になると学んだ。チームで行動するには、意思疎通や相手がどんな気持ちで行動しているかを察してあげることが必要と思った。メンバーのモチベーションをコントロールするのも大事なのではないかと感じた。

ウミガメ保護プロジェクトでは貴重な体験ができてよかった。数年に一度見ることができるとかできないか分からないウミガメの上陸を間近で観察することができたし、生態も知ることができた。自分たちの住む地域が日本でも有数のウミガメ産卵地域なので今後もこの環境を守っていきたいと思った。

高瀬竜也 (21123614)

私はこのプロジェクトを通して多くのものを学びました。自然を守っていく大変さやみんなで協力しながら一つのことに取り組む大切さがわかりました。今回のプロジェクトで学んだことを生かしていきたいです。

このプロジェクトは海に行ったり、朝早かったり、大変な面もたくさんありましたがそれを踏まえていい経験ができたような気がします。これからも今回で学んだ海を大切にするとする当たり前前を当たり前前にこなせるようにしていきたいと思いました。最後にみんなで頑張った甲斐があり賞をとることができて本当に良かったです。

佐々木勇太 (21123113)

今回、ウミガメ保護啓発活動をテーマに豊橋市役所の協力のもと、多くの人に知ってもらうように計画し実行した。私はリーフレットの台本を作成した。幅広い年代の人達が理解できるよう、言葉遣いに気をつけて作成するのは苦労したが、納得の出来る成果物ができよかった。

ウミガメ保護プロジェクトでは、貴重な体験をたくさん出来た、その中でもチームで行動する際の協調性の重要さを再確認できた。

(2014年2月)

『高校生と学ぶ会計学☆多』

野口プロジェクト

1. プロジェクトメンバー

井手 一希 (21123103)、斉藤 諒祐 (21123111)
曾越 崇史 (21123119)、糸数 隆佑 (21123206)
加藤 国靖 (21123212)、唐沢 龍介 (21123213)
中村 仁哉 (21123230)、
担当教員 野口 倫央

2. 連携先企業・組織

野口プロジェクトにご協力して頂いた連携先組織および担当者は、以下のとおりである。

- ・ 藤ノ花女子高校・朝倉丈徳様
- ・ 犬山高校(商業科)・山口正彦様

3. プロジェクトの背景と目的

現代の企業人は、英語・パソコン・会計を具備しなければならぬと言われて、久しい。英語・パソコンに関しては、義務教育の中において学習する機会がある。しかしながら、会計学に関して学習するのは大学に入ってからである。

企業活動の主たる目的が利益獲得であり、その利益を測定するのは、会計学固有の役割である。多くの者が企業に携わるにも関わらず、企業の目的に関する基礎理論が欠如しているのは、社会全体から考えて、大きな損失である。

そこで、高校生に会計学の学習の場を提供しようと考えたのが、このプロジェクトの背景である。具体的には、高校生に興味のあるディズニーに焦点を当て、ディズニーの財務分析を行い、その結果の報告を通じて、会計学に関する情報を発信することで、高校教育に欠けている会計学に興味を抱き、その重要性に気付いてもらうことを目的として活動を行った。

4. 実施計画

本プロジェクトは、次の図表1で示すようなスケジ

図表1 プロジェクト活動の流れ

月	活動内容
4月・5月	プロジェクトテーマの選定
5月～8月	財務会計・国際会計・経営分析に関する基礎知識の修得 → 伊藤邦雄(2012)『現代会計入門』日本経済新聞出版社の輪読を中心に
8月6日	中間報告会
9月～11月	ディズニーリゾートの財務分析の学習 → 有価証券報告書やアニュアル・レポートの分析を中心に
10月17日	藤ノ花女子高校でプレゼン
12月10日	犬山高校でのプレゼン
12月17日	成果報告会

ュールで活動を行った。4月から5月にかけて、何について取り組むかについて、実行可能性等の面も考慮しながら、検討を行った。その結果、高校生に会計学の学習の場を提供することを、プロジェクト活動として取り組むことにした。

その一方で、自身の会計学に関する知識が他人に教えられるレベルにないことから、8月までは会計学の基礎知識の修得に努めた。主に、指導教授である野口先生からレクチャーを受けることで、会計学の基礎知識を修得した。

中間報告会後は、よりプレゼン対策の活動を行った。ディズニーリゾートの有価証券報告書を読み、そこから、収益性分析および安全性分析を行った。さらに、高校生に興味をもってもらうために、ディズニーの歴史や、舞浜に建設されるまでの話などもまとめた。

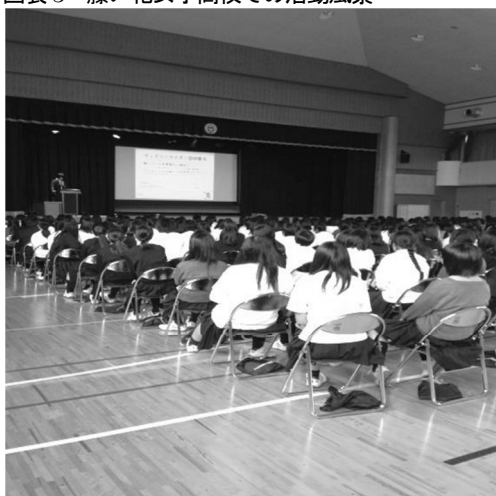
図表2 プロジェクト室での学習風景



10月には藤ノ花女子高校において、約400人の前で、

プレゼンを行った。さらに、12月には犬山高校の商業科の生徒の前でプレゼンを行った。

図表3 藤ノ花女子高校での活動風景



図表4 犬山高校での活動風景



5. 実施結果

次の表は、藤ノ花女子高校および犬山高校でのプレゼンの概要である。

図表5 プレゼン概要

実施校	対象人数	プレゼン内容
藤ノ花女子高校	約400人	<ul style="list-style-type: none"> ・有価証券報告書の記載情報の紹介 ・アトラクションへの投資額の紹介 ・収益性分析 ・財務分析に関するクイズ
犬山高校	約40人	<ul style="list-style-type: none"> ・財務諸表の役割紹介 ・財務分析指標の紹介 ・収益性分析 ・安全性分析 ・財務分析に関するクイズ

本プロジェクトの目的を達成できたか否かの判断は、アンケート分析を通じて行うこととした。

その結果、次のような結果となった。なお、2校合わせた有効回答数は339人であった。

図表6 アンケート結果

質問項目	そう思う	そう思わない
会計学に興味をもったか	206人 (60.8%)	133人 (39.2%)
会計は将来の人生において役に立つと思うか	298人 (87.9%)	41人 (12.1%)
会計学を学びたいと感じたか	209人 (61.7%)	130人 (38.3%)

これをみる限り、約88%に将来における会計の重要性を認識して頂くことができ、さらに60%以上の人に会計学に興味を持ってもらうことができた。さらに60%以上の人々が、会計学を今後学習したいと感じて頂けたのは、大きな成果であった。

6. プロジェクトの成果（自己評価）

今回のプロジェクト活動を通じて、高校生を相手にして、チームの見解を納得させられるような、表現力・コミュニケーション力の重要性を感じた。さらに、役割分担し、自身の担当部分について責任感を持って取り組み、それをチームとして一つのことを作り上げることの重要性を学んだ。そのために、積極的に取り組み、議論を交わすことが重要だと感じた。

7. メンバー各自の所見

井手 一希 (21123103)

初め、プロジェクトで高校生に会計を教えることはとても難しいと思った。なぜなら、会計学の知識が全くなかったためである。約半年ぐらいいは、参考書を使いながら、ゼミ担当の野口先生から会計学を学んだ。会計学の基礎から学び始め、月日が流れていくうちに自分で財務分析を行うことができるようになった。

自分の担当は主に PPT 作りであった。最初は PPT

の作り方が分からず、色々な人に聞き、PPTの見やすい作り方を教えてもらった。

PPT発表練習では、どのように発表したらいいのかなどプロジェクトメンバーの皆で話し合い意見を出し合った。犬山高校では質問担当で大勢の人の前に出たのでとても緊張した。今回のプロジェクト活動は、人生のいい経験になった。

斉藤 諒祐 (21123111)

今回のプロジェクトを通して、通常では経験することのできないことを多く経験できた。野口ゼミでは、藤ノ花女子高校と犬山高校でプレゼンを行ったのだが、私は、藤ノ花女子高校でのプレゼンの際、クイズ担当として、会場を盛り上げた。高校生が400人近くいる中でクイズを出したり、答えを教えることはとても緊張したが、上手く行うことができ、大きな自信となった。

今回のプロジェクトは会計学を高校生に教えることを目的としたものであったが、教えるためには、自分が勉強しなければならず、大変苦勞した。しかし、たくさん苦勞をしたことで、貴重な知識を得ることができた。

曾越 崇史 (21123119)

今回プロジェクトであまり知識のない会計学を学び、プロジェクトの時間会計学に携わり徐々に会計学を身に付けていった。そしてプロジェクトでは藤ノ花高校、犬山高校と行くことがきまった。

校内ではプロジェクト中間発表会があり、プロジェクトの進み具合、今後の日程についてなどを各ゼミでの発表会があった。プロジェクトで役割があり、私は発表者となり、人前で話すのが苦手な私でしたが、何とか震えながらも発表でき、人前で話せることができると自信になりよかった。

そして犬山高校、藤ノ花高校とプロジェクトで行き、私はクイズ担当とパワーポイントを作成しプロジェクト後アンケート結果から評判がよくすごいやりがいのあるプロジェクトでした。プロジェクトで学んだこと

をこれからも生かしていきたいと思います。

糸数 隆佑 (21123206)

今回の社会活性化を目的とした「高校生に会計学を教えよう」を通して、私は会計学の知識を学んだ範囲で自身に取り込めたことはもちろん、約400人の高校生の前で講演した経験から大抵のことでは動じない精神力を身に着けることができた。

しかし、藤ノ花高校で私は発表担当をしたのだが、正直に言えば発表練習の期間が短かったことがネックとなり自身の中では成功したとは思えなかった。そのため犬山高校の講演は犬山高校での発表担当に余裕を持たせるためPPTの作成を早めたり、発表練習に参加したりした結果、成功と思える講演ができた。

犬山高校では講演を聞いた約7~9割の学生が会計学に興味を持ったと配布したアンケートから読み取れた。これは藤ノ花高校での発表、PPTの反省を生かすことができた結果であるともいえるだろう。

加藤 国靖 (21123212)

このプロジェクトで、私は犬山高校での発表を担当した。このプロジェクト活動を通して、人前で物事をいかにわかりやすく教えるかの大変さを知ることができた。準備の段階では、野口先生の指導のおかげもあり、順調に発表の準備ができたが、発表本番となると緊張し、満足のいく発表ができなかった。

しかしこの経験は私にとって有益な体験になったと思う。私は、人前に立って物を話すということはとても苦手で、役割を任された当初は自分にこのようなことができるのかと不安であった。

普段の学生生活では人の前に立って物事を教えるということは滅多にないが、今回の活動では、このような経験をさせていただき、私の人生の中でも良い経験になり、自分なりに成長できたと感じた。今回の経験を生かし、苦手なことも挑戦しようと思えた。

唐沢 龍介 (21123213)

私がプロジェクト活動を通して今回学んだことは、

人に何かを教えるのはとても大変だが、教えることは自分の学びにもなるということだった。まずものを教えるには、当然だが自分が理解していない教えることができない。会計学はただでさえ覚えることが多いのだが、それを他人がわかるように説明できるくらいに覚えるのは勉強が苦手な私には苦痛だった。実際プレゼンで教える内容を自分が理解できているか怪しいまま当日を迎えてしまった。多くの学生を目の前にし、不安や緊張といった感情でとても空気が薄く感じ、苦しかった。それでも、約400名もの大勢の前に立つことは私にとって良い経験になったと思う。

学生の質問の中にも、こちらの想定していないものがあり、学生から学ぶことも多かった。今回のプロジェクトでは私自身がとても未熟だということを思い知った。しかし、それはまだ今回のプロジェクトのように学べることが多くあり、もっと多くのことを経験し学ぶ必要があると感じた。

中村 仁哉 (21123230)

今回のゼミのプロジェクトで高校生に会計学を教えるというテーマで会計学を勉強した。計算が苦手なので会計学は難しかった。犬山高校へ会計学を教えに行き、人に会計学を教えることがすごく難しいと思った。発表前に台本を作るとき、どう話したらいいのか、どうやって会計学を伝えればいいのか、考えるのがとても難しかった。発表してみると台本通りうまくしゃべれず頭の中が緊張でいっぱいになっていた。

しかしながら、クイズをやって犬山高校の生徒も参加してくれて発表の終わりのほうは楽しくできたと自分の中では思えた。初めての発表はこんなにうまくできないのかと勉強になった。犬山高校の先生にもいろいろアドバイスをいただき、いい経験をしたなと思った。

トヨハシ♡(ハート)ヨシプロジェクト

チームみよっキー (三好プロジェクト)

1. プロジェクトメンバー

小濱竜 (21123110)、 夏目祐樹 (21123124)、
森下広樹 (21123133)、 大里将太 (21123210)、
小田康晴 (21123211)、 董立平 (21123226)、
飛田知寿 (21023802)

2. 連携先企業・組織

- ・豊橋観光コンベンション協会 鈴木恵子様
- ・豊橋市(企画部 政策企画課) 鈴木裕二様
- ・豊橋市(産業部 観光振興課) 鈴木誠也様
- ・豊橋鉄道(鉄道部 運輸営業課) 織笠真至様
- ・穂の国とよはし芸術劇場PLAT 飯田幸司様
- ・豊橋生菓子組合事業委員会の皆様

3. プロジェクトの背景と目的

豊橋市は、産業、観光、文化などを広く伝える様々なプロモーション活動に取り組んでいる。本プロジェクトにおいて、学生の目線で行えるシティプロモーションに取り組むことにし、豊橋にある自慢できる施設や取り組みを紹介することを目的とする。「こちよい街」をキーワードにしてテーマを「トヨハシ♡(ハート)ヨシプロジェクト」とした。プロジェクト活動を具体化するにあたって、以下の2つのサブテーマに分離して取り組んだ。

テーマ1：地産地消グルメ開発

テーマ2：ゆるキャラプロモーション

これらのサブテーマで行った事業を表1にまとめる。この事業一覧に沿って、サブテーマごとの実施事業計画を説明する。

4. 実施計画

4.1 地産地消グルメの実施計画と経緯

4.1.1 シティプロモーションの情報収集

プロジェクト全体目標を豊橋市に関するシティプロモーションとして、その具体化を図るためにシティプロモーションに関する情報を収集することになった。そのために5月16日、豊橋市企画調整課鈴木裕二様と

表1 トヨハシ♡ヨシプロジェクトの活動内容

地産地消グルメ開発チーム		ゆるキャラプロモーションチーム	
日付	実施事項	日付	実施事項
5月16日	豊橋市企画調整課鈴木裕二氏よりシティプロモーションに関するヒヤリング・相談		
8月1日	市内洋菓子店にヒヤリング	7月19日	豊橋鉄道㈱営業企画課へ協力依頼
8月23日	豊橋観光コンベンション協会へのヒヤリング・相談	8月8日	豊橋鉄道㈱子供向けイベント取材
10月4日	市内和菓子店にヒヤリング	10月23日	シティプロモーションビデオvol.1をYouTubeにアップ
10月15日	豊橋生菓子組合への企画提案	11月9日	豊川B1グランプリ取材
10月18日	豊橋観光コンベンション協会へのヒヤリング・相談	11月28日	豊橋芸術劇場PLATへの協力依頼
11月26日	豊橋生菓子組合との協議1	12月3日	シティプロモーションビデオvol.2をYouTubeにアップ
12月	1月実施予定の試食会準備	12月10日	シティプロモーションビデオvol.3をYouTubeにアップ
1月16日	スイーツ試食会開催	12月12日	豊橋芸術劇場PLATビデオ取材
2月	セレクションスイーツマップ作成配布	12月20日	宮川彬良主催歌劇のリハール取材(予定)
3月	利用者の集計、まとめ	1月	取材ビデオの編集・アップロードとTwitterによる周知

※ビデオ公開をTwitterで拡散の努力を継続



図1 若杉彰様からの意見聴取の様子

ミーティングを行った。このミーティングでの助言をもとに「カレー」「トマト」「大葉」などの豊橋の名産を使ったアイスクリームを開発する企画を考えた。その後、豊橋観光コンベンション協会の鈴木恵子様とのミーティングで助言を頂き地産地消グルメチームでは、豊橋スイーツマップ作成の企画を進めることになった。

4.1.2 豊橋スイーツマップ作成企画に関する助言

豊橋スイーツマップを作ることに菓子店の協力を得ることができるかなどスイーツマップを作ることのニーズを調査することにした。そのために、8月1日、豊橋生菓子組合の組合員であるパティスリーフランの近藤敏之様に豊橋スイーツマップ作成の企画を説明し、それに対する助言を頂いた。そこでは、他のスイーツ

店からも助言を収集した方が良いなど意見を頂き、学生が企画して広報することは店舗にとっても有意義であるとコメントを得た。また、8月23日に豊橋観光コンベンション協会の鈴木恵子様アイスクリーム開発の企画よりも具体的で実行性があるとの評価を得た。以上の経緯で豊橋スイーツマップ作成の企画を進めることになった。

4.1.3 豊橋生菓子組合とのミーティング

豊橋のスイーツ業界の動向や課題を伺うため10月4日、豊橋生菓子組合の若杉彰様から意見聴取を行い伺った。この意見聴取で「コンビニで手軽にスイーツを購入可能」、「スイーツ専門店への若者の利用が減少」など店舗販売を行うスイーツ業界に課題があることが明らかになった。この若杉彰様からの意見聴取の様子が図1である。10月15日に豊橋生菓子組合事業部会合に参加させて頂き、企画提案・協力要請を行った。ミーティングの内容として、豊橋スイーツマップ作成・企画の説明とスイーツマップにまとめるテーマについての意見聴取を行った。この意見聴取で「和洋を分ける」「手筒などの文化を表した菓子」などの意見を頂いた。また、特徴あるスイーツ調査への協力を快諾して頂き、再度ミーティングを開催することになった。この豊橋生菓子組合事業部会合の様子が図2である。

11月26日、豊橋生菓子組合事業部との意見交換会を開催した。意見交換会の内容として、スイーツマップの4つのテーマ案を提案し、それについての意見交換を行った。この意見交換で豊橋スイーツマップのテーマを和菓子、洋菓子、歴史文化に決定した。また、写真だけではセレクションは難しいのではないかという意見を頂き、豊橋生菓子組合に協力して頂き試食会を開催することを決定した。この豊橋生菓子組合事業部との意見交換会の様子が図3である。

4.1.4 スイーツ試食会の開催

1月16日、豊橋生菓子組合のスイーツ専門店15店舗に協力して頂き、スイーツ試食会を開催した。準備に時間がかかってしまい開始が遅れたが、事前に依頼



図2 豊橋生菓子組合事業部会合の様子



図3 豊橋生菓子組合事業部との意見交換会の様子



図4 豊橋スイーツ試食会の様子

したモニターや当日協力を申出ていただいた50人以上のモニターが参加して試食会を開催でき無事に終わることができた。この試食会の様子を図4にまとめる。

今後は、豊橋スイーツマップを作成・配布し、企画の評価をする。

4.2 ゆるキャラプロモーションの実施計画

シティプロモーションを行うにあたって、どのような方法があるかについての助言や意見を聞くために、5月16日に豊橋市企画調整課の鈴木雄二様とのミーティングを行った。内容は私たちの活動についての方向性や内容などを決定づけていくものとなった。ゆるキャラプロモーションチームでは、豊橋市のゆるキャラを活用し、豊橋市自慢の施設を紹介するプロモーションビデオを制作し You Tube にてアップロードするといった内容で活動を行うことになった。プロジェクトの活動期間を考慮して、5本程度のPVを作成することになった。その題材を検討して、ゆるキャラプロモーションの第1弾として豊橋鉄道の市電を紹介することになった。

ゆるキャラプロジェクト活動を説明し協力をしてもらうため豊橋鉄道(株)の営業企画課、織笠真至様とミーティングを行った。この時の様子を図5にまとめる。このミーティングで8月8日に豊橋鉄道主催の子供向けイベントがあることを聞き、参加させていただくことになった。また、その日には全国的にも珍しい女性運転士の方がいらっしゃるということでインタビューを同時にさせていただくことになった。これらの子供参加型イベントの様子と女性運転士の方へのインタビューの様子を撮影した。この時の撮影の様子が図6である。

完成した2本の動画を YouTube にアップロードする。10月23日にプロモーションビデオ第1段 Vol.1 となるインタビュー編、12月3日に Vol.2 であるイベント編を公開した。

ゆるキャラプロモーション第2弾として豊川で開催されたB-1グランプリの取材を行った。こちらはシティプロモーションとは直接関係はないが豊橋市も協力しているとのことであり、隣の市であることから紹介するプロモーションビデオを撮影することになった。この活動は11月9日に行った。その後撮影してきた動



図5 豊橋鉄道へのプロジェクト協力依頼



図6 豊橋鉄道主催イベントの様子



図7 豊川 B1 グランプリの取材の様子



図8 穂の国とよはし芸術劇場の取材の様子

画を編集し完成、12月10日にアップロードした。

ゆるキャラプロモーション第3弾は、2013年完成した穂の国とよはし芸術劇場 PLAT のプロモーションを行うことにした。企画の説明と協力を得るために11

月 28 日に穂の国とよはし芸術劇場 PLAT の飯田幸司様とミーティングを行う。そこで私たちは 12 月 12 日に館内を撮影するための許可をいただき、また 12 月 20 日に開催される宮川彬良主催である歌劇のリハーサルに参加させていただき実際の舞台を見せていただくことになった。この時の取材の様子を図 8 に示す。

12 月 12 日に PLAT へ向かい、館内の撮影をさせていただいた。こちらのビデオは館内の施設をリポーターが紹介するような作りとなっている。

12 月 20 日、リハーサルの様子を見せていただく。リハーサルを撮影させていただきその一部を本編に活用するつもりだ。Vol4 である PLAT 編を編集しアップロードする日は 2 月の上旬から中旬の予定である。

5. 実施結果

5.1 地産地消グルメ開発の実施結果

5.1.1 豊橋スイーツボーイ&ガールズセレクション試食会

1 月 16 日（木）に豊橋の特産品を使用したスイーツを豊橋のスイーツを若者目線でセレクションしてもらうために和菓子、洋菓子、歴史・文化に関する菓子の 3 つのテーマを決め、その 3 テーマに当てはまる豊橋の各菓子店舗 15 店舗のスイーツを 1 商品提供していただき、豊橋の高校生、大学生、社会人の若者 50 名を対象とした試食会を行った。試食会では、和菓子のテーマでは植田の大まんじゅう（小林堂菓子舗）、花便り（お亀堂）、みたらしだんご（大正軒）、ゆたかおこし（若松園）、とよはしイチゴもち（童庵）が出展された。洋菓子のテーマではうずらプリン（華月）、うずラッキーサブレ（レスポワール）、お茶サブレ（ココット）、大葉パイ（マッターホルン）、豊橋うずらのバターカステリヤ（アンジェリカ）が出展された。レスポワールはうずラッキーサブレの他、うずらのプリンとロールケーキを提供してくださった。歴史・文化に関する菓子のテーマでは、六条潟最中（三ッ葉）、潮満（マルサンパン）、手筒米菓（ボンとらや）、駒曳もなか（松月堂コイケ）、吉田の手筒（絹一）が出展された。試食会企画当初はテーマがそれぞれ振り分けられるか心配だっ



図 9 マップのセレクション図



図 10 豊橋スイーツセレクションマップ図

たが、それぞれ 5 種類ずつ分けることができた。

試食会では試食してもらった方にアンケートを書いてももらった。その内容は、洋菓子（見た目、おいしさ、食感、華やかさ）和菓子（見た目、おいしさ、食感、上品さ）歴史文化に関する菓子（見た目、おいしさ、豊橋らしさ、ユニークさ）で行った。そしてその内容に当てはまる商品の番号を記入し、商品に対するコメントを記入してもらった。そのアンケート結果をエクセルでまとめた結果、全商品がそれぞれの項目に振り分けられ、セレクションにのせることができた。その中で、唯一果物を使ったとよはしイチゴもちは人気があり、若者の果物好きを知ることができた。

5.1.2 豊橋スイーツボーイズ&ガールズセレクション マップ作成

試食会で収集した結果を踏まえ、マップを作成した。出展していただいた15店舗に加え、今回試食会には参加できなかった洋菓子倶楽部ムラオカのシュークリームも掲載した。それぞれ、写真と商品名、店名、住所、電話番号、地図を載せ、大きな地図の周りに情報を掲載する形で作成した。そして、マップの後ろページには試食会で行ったアンケートの結果を利用し、すべての商品のセレクションを掲載した。作成したマップを3000部印刷し、プロジェクト協力店舗16店と創造大学内、高校などに配布していく予定である。このマップの完成図が図9、10である。

5.2 ゆるキャラプロモーションの実施結果

5.2.1 豊橋鉄道 PV

1作目と2作目のPVとして、8月8日に行われた豊橋鉄道主催の豊橋鉄道子供向けイベント「市内電車の営業所見学と運転体験！」に参加させていただいた。このイベントでは営業所の見学、乗務員と参加者との交流や運転体験、ピット体験、洗車体験など参加者の体験の様子などを撮影し、イベントの途中で2チームに分かれ、イベントを撮影している裏側で女性運転士様、営業所長様にインタビューをし、それを撮影させていただいた。

ここで撮影させていただいた動画については、「イベント編」と「インタビュー編」の2つに分け編集し、豊橋鉄道様に何度かチェックしていただいた。

5.2.2 B1 グランプリ PV

3作目のPVは番外編として11月19日に豊川市で開催されたB1グランプリを撮影させていただいた。ここではリポーターが参加者に混じり、「行田ゼリーフライ」、「勝浦担担麺」、「出雲ぜんざい」、「加古川かつめし」、「三崎鮪ラーメン」の以上5つのB級グルメをレポートした。

B1グランプリのビデオ編集では、次回のB1グランプリの際の参考になると考え冒頭でB1グランプリの



図11 YouTube のビデオ表示サイト



図12 編集したビデオの一つの場面

ルールの説明をいれた。また、レポートだけではゆるキャラPVにならないという意見があり、ビデオの途中でB1グランプリに参加しているゆるキャラをビデオ内に挿入する工夫などをした。

5.2.3 PLAT PV

4作目のPVではPLAT内の施設を撮影させていただいた。ミーティング時に事前に施設の下見をさせていただいたので、動画の撮影はスムーズだったが、撮影の終盤でトヨッキーが同伴できないトラブルがあったため予定を変更し、途中からトヨッキー入れずに撮影をした。また、施設紹介のほか12月20日に行

われた、公開ゲネプロにも参加、撮影させていただいたのでビデオに入れる予定である。ビデオについては現在編集中で、完成次第 PLAT の担当者にチェックしていただく。

5.2.4 アップロードした PV の視聴数

現在 PLAT の PV を除いた 3 作を YouTube にアップロードした。PLAT に関するビデオの編集が終わり次第担当者の方にチェックしていただき、許可をいただいた後に、アップロードする予定だ。

現在のアップした PV に視聴状況は

第 1 弾：インタビュー編 再生回数 301 回

第 2 弾：イベント編 再生回数 38 回

第 3 弾：B1 グランプリ 再生回数 25 回

である。ビデオ作製を行ったが、この活動の周知活動がほとんど行っていないため、予想以上に低調である状況である。

6. プロジェクトの成果（自己評価）

6.1 地産地消グルメ開発による自己評価

2013/10/4 豊橋生菓子組合の若杉彰様に訪問することを通して、現在スイーツ業界の問題点と経営者のニーズを認識し、プロジェクトの全体方向と活動対象を決めることができた。2013/10/15 豊橋生菓子組合事業部にプロジェクト計画提案する際、初めて 20 人以上の社会トップの前に自分たちが作った企画を伝えた。このような社会体験できるのが良かった。また、若者の視点からの提案が面白いと組合様に言われて、その時に私たちの活動を認めてもらえたと感じた。2013/11/26 豊橋生菓子組合様とのミティングで、組合の山田享司理事長に若者が生菓子に対してのイメージを深く感じるように試食会を行うと提案された。それが私たちに対して、最大な協力を感じた。2013/1/16 に行われた「豊橋スイーツ Boys & Girls セレクション」試食会で、50 人以上の若者参加者を集めることができ、若者たちは試食する上で豊橋スイーツのイメージを深くつけることができるようになった。プロジェクトを通して私たちは沢山な初めを体験することができた。初めて、

企画書を作ること。初めて、会社に電話すること。初めて、経営者の立場に立って、物事を考えること。今回のプロジェクト活動は目標達成でき、社会体験のいい活動だった。

6.2 ゆるキャラプロモーションによる自己評価

豊橋には他市に誇れるような文化的な施設や祭りなどの文化的活動が多く存在している。これらの施設を豊橋市のゆるキャラであるトヨッキーを活用したプロモーション活動を行い、その活動を動画撮影し YouTube に 5 本公開する計画を立案した。しかし、時間の関係とチームの行動力が少し足りない部分があり豊橋芸術劇場プラットの施設紹介 1 つと豊橋鉄道イベント 2 つ、B-1 グランプリの紹介ビデオ計 4 本の紹介ビデオを作成した。当初の予定数のビデオ作製はできなかったが、複数のビデオ公開できたことは、当初の目的を部分的ではあるが実行できた。また、これらのビデオの認知度を上げるためにツイッターを活用し、我々の活動情報を拡散する活動もおこない、豊橋市のプロモーションに微力ながらも貢献できた。ただし、ビデオへのアクセス数がほとんどなく、ビデオ存在をアピールする活動について今後検討する必要がある。

7. メンバー各自の所見

小濱竜 (21123110)

4 月から始まったプロジェクト活動だったが、始まった当初はなにから始めたらいいか全くわからず、最初企画していたカレーうどんのプロジェクトはなくなってしまった。しかしその後、豊橋の特産品を紹介するスイーツマップを作成・配布するというプロジェクトを始めることになった。最初の反省を踏まえて、実施のための計画とそれをチームで分担して行うことを意識して行動した。実行リストづくりやそれに基づく作業指示がある程度行えた。しかし、プロジェクト後半になるにつれて試食会やマップ作製などの作業が多くなる中で、実行リストの作成が滞り、その結果、試食会の実施についての十分な検討が行えず、バタバタと試食会を開催することになった。この遅れに伴って、

マップ作製では期日ぎりぎりに第1案が完成するなど、完成度が十分とは言えないマップになった。計画の不徹底さが目立ってしまった。今後、社会に出ていく中で企画などを考えるときにこういった反省点を生かしていきたいとおもう。

夏目祐樹 (21123124)

このプロジェクト活動に取り組んで、私は企画を考えることの難しさや外部企業と協力して企画を進めていく難しさを学んだ。

私が所属しているグルメチームでは、若者をスイーツ専門店に誘導するというで企画を進めることになった。その中で豊橋生菓子組合との意見交換会は一つの目標であった新聞に掲載されることが実現できた。また、スイーツセレクションのための試食会では、スイーツ専門店 16 店舗に協力して頂き開催することができた。しかし、ミーティングや試食会の段取りなどの準備が遅れて協力企業に迷惑をかけてしまったことは反省すべき点だと思う。今後は、プロジェクト活動での経験を活かし、周りに迷惑をかけないように責任感を持ち積極的に企画を進めるよう行動していきたい。

森下広樹 (21123133)

ゼミでゆるキャラを活用したシティプロモーション活動をしてきたこの約 10 カ月はとてもいい経験ができた。最初に豊橋には全国でも珍しい市電があるということで豊橋鉄道様と訪問の伺いを電話で行い、企画課の折笠様とミーティングを行った。織笠様の協力の下、プロモーション動画を無事作成しアップロードすることができた。次にプラットの飯田様の協力を得てプラットの内部を動画に撮影できた。様々な企業の方々の協力を得て計画を進めていく中でメンバー同士の意見の違いなどがあったが、話し合いによって方向性を決定しながら活動することができた。そしてゼミ活動の中で自分の長所と短所を認識することが出来た。長所としてはチーム内でアイデアを発言しチームの活動の幅を広げることでチームに貢献できたと自己評価している。他のメンバーから長所として評価された点

を意識して、他者の意見を尊重し、それについて自分の意見を言えるようにしたいと考えている。また、相手の話をしっかり聞く姿勢を今後改善してゆきたいと思う。

大里将太 (21123210)

私はこのゼミを通じて、人とのかかわり方と企業の方々の暖かさについて学んだ。私の活動では豊橋市のゆるキャラを活用したシティプロモーション活動をしており、外部の方との交流は欠かせないものとなっている。勿論、協力していただく企業の方々には我々の活動の趣旨を説明し、メールによる情報交換など多岐にわたって交流をしていかなければならない。このような活動は今まで行ったことがなかったのではじめは不安ではあったが、回数をこなすにつれて緊張や不安は解けていった。普通はこのような申し出があったとしても企業としては面倒がったり相手にしてもらえないことが殆どだ。しかし、私たちの活動を理解し、協力していただいたことと肯定的に評価いただいた企業の方々が多くあったことに驚いた。この様に優しい方々が働く企業に就職したいと感じた。

小田康晴 (21123211)

私はこのプロジェクトに取り組んでみて、企画説明とスケジュール作成の難しさを感じた。企画説明は前提として豊橋の魅力を伝えるということではいかに相手にそれを伝えるかが非常に難しかった。また、スケジュール作成では当日の移動時間や不手際などによる遅延を考慮しなければならず、プロジェクトの最後まで完璧に時間どおりにできることはなかった。

だが、そういった失敗があったからこそ計画することの重要性を学び、プロジェクトを始めた当初に比べ、計画と行動の時間の差を少なくすることができた。

また、企画からミーティング、撮影までの流れまで最初はどうもできないことがあったが、最終的にはスムーズに進めることができるようになったと評価している。それは、チームメンバーの努力だけでなく、三好先生、協力してくださった企業、関係者様のご協

力があってこそここまで進んでこられたと感じる。

董立平 (21123226)

今回のプロジェクトを通して、学生としてできない社会体験をすることができた。2013/10/15 豊橋生菓子組合事業部にプロジェクト計画提案する際に夏目君が企画説明者として、20人以上の社会トップの前に私たちの企画を伝えた。彼は落ち着いて穏やかな声で最後まで順調に説明を終えたが、その姿が立派であった。それを横で聞いていた私は、自分ももっと頑張らなければならないと感じた。また、試食会を行う前に商品、納品時間チェックなどの事項をするために提供者たちに電話をすることを通して、電話で話の流れに一番重要なのはタイミングだと気付いた。相手の顔を見えなく、言葉遣いも非常に注意しなければならない。そして、相手の年齢によって、話のスピード、声の大きさなども気付くようにできた。この体験を今後の活動に活かしたい。

のんほいパーク盛り上げ隊!!～We♥NONHOI～

三輪・山口プロジェクト

1. プロジェクトメンバー

味岡 美沙(21123101), 加藤 綾乃(21123109),
藤田 諭実(21123128), 辻井 友絵(21123225),
長坂 良恵(21123229), 村上 雄也(21123232),
沼倉由香理(21123624), 近藤 智基(21123215),
水藤 圭祐(21123219)

2. 連携先企業・組織

- (1) 豊橋総合動植物公園 (通称: のんほいパーク)
- (2) 公益財団法人 豊橋みどりの協会
- (3) 豊橋市役所企画部シティプロモーション推進室
- (4) NPO 法人 ワライフ

3. プロジェクトの背景と目的

豊橋総合動植物公園 (愛称: のんほいパーク) は、豊橋市のシティプロモーション活動の一環として『のんほいパーク 100 万人プロジェクト』を掲げ、入場者数の拡大に取り組んでいる。パークからは、現状 (公式の取り組み) の問題点として、若い世代、シルバー世代への広報が弱い、という意見が出されている。

本プロジェクトは、昨年度からの継続的な取り組みとして、広報活動による“のんほいパーク”の活性化を目的として活動を行った。

本プロジェクトでは、情報の送り手 (ソース) は“のんほいパーク”であり、情報の受け手は一般の市民である。我々はその仲介役として、ターゲットとして設定した (現状で公式広報の弱点となっている) 若い世代、シルバー世代へ情報を届けるため、様々な検討・工夫を行った。

昨年度はレンタルサーバ上に作成した Web サイトによる情報発信が主体だったのに対し、今年度は特に

- ・ SNS (Social Networking Service) の活用
- ・ ターゲットに対応した効果的な情報発信

の 2 点を新たな試みとして取り入れた。

活動を通して、効果的な広報活動 (より効果的な情報拡散) について理解を深めることを目標とした。

表 1 プロジェクト実施スケジュール

月/日	活動内容
5/23 /30	Facebook, Twitter 稼働開始 協力依頼・取材 ... のんほいパーク
6/21 /27	協力依頼・取材 ... みどりの協会 意見交換 ... 市役所企画部シティプロモーション推進室
7/3 /6 /12 /21 /24 /26	取材 ... 植物園七夕イベント 参加 ... 行財政改革プラン公開レゼンテーション 取材 ... 暑さ対策 (フオグミスト) 掲示 ... 創造大学 (三角柱 POP) 依頼 ... 愛知大学 (ポスター・フレット) 依頼 ... 豊橋技術科学大学 (#)
8/13~18	参加 ... ナイトガーデン
9/27	依頼 ... 学園祭協力依頼 (缶バッジ寄付)
10/17 10/26・27 10/31	取材 ... チラシ・缶バッジ受け取り 創造祭 ... アンケート実施、学内展示 YouTube 稼働開始
11/21 11/28	依頼 ... ワライフ 取材 ... トラ・ライオン
12/06 12/25	依頼 ... ワライフ (みどりの協会) 発行 ... ワライフ

4. 実施計画

本プロジェクトの実施スケジュールを表 1 に示す。

5 月から本格的に活動を開始し、はじめに Facebook ページ作成や Twitter アカウント作成を行った。取材を通じて得た情報を基に定期的に Facebook ページ更新や Twitter でのツイートを行い、若い世代へ継続的に情報を届けた。また、Facebook ページのアクセス状況から動画への関心が非常に高いことが判明したため、秋学期には YouTube のアカウントを作成し動画の配信を開始した。さらに、今年度はインターネットメディア以外の媒体を活用した情報発信にも力を入れ、ポスターや三角柱 POP 等の印刷物を定期的に作成・掲示した。シルバー世代向けの広報活動として、フリーマガジンへの記事掲載 (紙面作成) にも取り組んだ。

8 月には、のんほいパークからの依頼によりサマーイベント (ナイトガーデン) の運営協力を行った。当初の計画では考えていなかった活動についても、メンバー間で役割分担をして対応した。

個々の活動についての詳細は次章で説明する。

5. 実施結果

5.1 打ち合わせ

広報記事作成のための取材（情報収集）、および、活動に関する打ち合わせや意見交換等のため、学外での活動（訪問）を計20回行った。相手方の都合もあり、迅速かつ円滑に進行させるため、前半のアポイントメントの取り付けは主に教員が行った。秋学期の後半には、学生が電話を通して訪問日時等の調整を行った。

訪問前には、メンバー同士で質問事項等の検討を行い、取材に臨んだ。打ち合わせの際には質問担当とメモ担当を分け、先方に余計な時間を取らせないように、かつ、お話いただいた内容を漏らさないように努力した。学外の方との話し合いを通じて、自分の言いたいことを正しく相手に伝え、相手の話すことを理解して正しく受け取る能力の重要性を再認識することができた。図1に学外打ち合わせの様子を示す。



図1 学外打ち合わせの様子（10/17）

5.2 定期的な掲示物の作成

プロジェクト活動の紹介や、“のんほいパーク”の情報を大学内（学生）に向けて発信する目的で、長期休みを除いて毎月、三角柱POPを作成して学内に掲示した。設置場所は、大学内の学生ホール、D棟4Fラウンジ、E棟2Fラウンジ、E棟1F来客スペースであり、学生が休憩したり食事したりする場所を選んだ。

デザインや掲載する文章、素材となる写真等を自分達の手で考え、実際の三角柱POPを作成するのは思ったより大変で、とてもいい経験ができた。

作成した三角柱POPとその内容を図2に示す。



vol.1/07月	Facebook、Twitterの紹介、動物写真
vol.2/07月	ナイトガーデン
vol.3/10月	創造祭の活動（アンケート、等）
vol.4/11月	オータムフェスティバル、YouTube

図2 三角柱POP（左からVol.1, 2, 3, 4）

5.3 イベント等への参加

(1) ナイトガーデン

夜の動物園や植物園、乗り放題の遊園地を楽しむことができるナイトガーデンは“のんほいパーク”の夏のイベントである。今年は8/13（火）～18日（日）の6日間にわたって行われ、我々のプロジェクトは、のんほいパークから依頼を受け、パーク内の巨大迷路の運営協力を行い、迷路の出口で手作りうちわ（先着80名）の配布を行った。

今までは平日の静かな時間の取材ばかりだったが、ナイトガーデンでは実際に動物園に遊びに来ていたたくさんの方々と関わることができ、とてもいい経験になった。図3に示すように、子供に喜んでもらえるように、うちわの表面には塗り絵ができるイラストを掲載した。また、我々の活動を一般の方々に知ってもらえるように、裏面にはFacebookとTwitterのQRコードとアドレスを掲載した。図4は、うちわ配布の様子である。ナイトガーデン期間中に480本（80本×6日）のうちわを配布したが、Facebookページの「いいね」の数は期間中6人ほどしか増加しなかった。

QRコードによる告知で、実際のWebサイトまで閲覧者を誘導するのは、思った以上に大変であることを実感した。



図3 作成したうちわ (裏表)



図4 うちわ配布の様子

(2) 創造祭

10月26日、27日に行われた創造祭において“のんほいパーク”に関するアンケート調査を行った。また、アンケート以外のプロジェクト活動の展示物として

- (1) 学生が撮影した写真
- (2) 〃 動画 (編集有)
- (3) アンケート場所への誘導看板
- (4) 〃 誘導チラシ
- (5) アンケートのお礼の塗り絵
- (6) 公式パンフレット (裏表紙の中間)

の6点を制作し展示した。

アンケートは、“のんほいパーク”にどれだけの人が訪れているか、また、どのような媒体でパークに関する情報を得ているのか、などを調査するために実施した。アンケート用紙は、パークの方と話し合い質問項目を検討・作成した。質問形態は、回答者のフェイス属性を聞き出す質問、のんほいパークに関する質問、盛り上げ隊に関する質問の3部構成となった。子供を連れた母親を主なターゲットとして想定したため、短時間で回答しやすいように選択肢に丸を付ける回答方式とした。作成したアンケート用紙 (表面) を図5に示す。

図5 アンケート用紙 (表面)



図6 塗り絵 (3種類を作成)

なお、アンケート実施にあたっては、多くの人に協力いただけるように、回答者に対するお礼として

- ① プロジェクトで作成した塗り絵 (図6)
- ② のんほいパーク公式の缶バッジ
- ③ のんほいパーク オータムチラシ

を配布した。②缶バッジと③チラシは、このアンケートのためにパークの方から提供して頂いた。

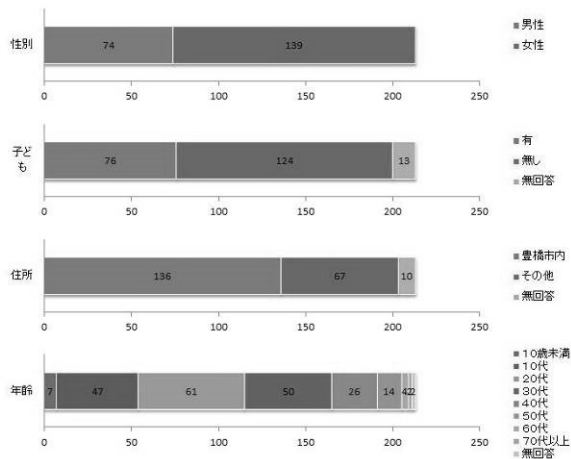


図7 アンケート回答者の内訳

アンケートは計213名の方に回答してもらうことができた。アンケート回答者の内訳を図7に示す。集計の結果、幼児教育・保育科のイベントスペースの隣でアンケートを実施したことから、ターゲットとして想定していた女性から多く回答を得ることができた。20代から30代の方中心に回答を得たが、学内実施ということもあり、想定したより10代の回答者も多かった。

次に、パークに関する質問に関しては、約半数の人が「天才!志村どうぶつ園」や「情報番組(小象のマーラに関するニュース)」を見ているとの結果が得られた。また、TV等を通して情報を得ることで、のんほいパークへ行こうと思った人が約6割もいた。このことから、TVの情報発信効果が非常に高いことが判断できる。しかし、TVによるパークの様子は多くの方に知られているが、入園料やお得な割引券などの情報はあまり知られていないことがわかった。このことから、動物やイベント情報の発信も大切ではあるが、基本的な情報の発信も大事であることに気付いた。

本プロジェクトの認知度を知るために、盛り上げ隊に関する質問も行った。その結果、大学関係者の多くが活動について認知しているものの、約4割の学外の方は「知らない」と回答した。このことから、学外へ向けての活動をより多く行った方が良いと感じた。

アンケート結果は、プロジェクトメンバー全員でExcelへの入力・集計作業を行い、11月にパークの方へ結果を報告した。



図8 ワライフ紙面(2014新年号 No.13)

(3) フリーマガジン

ネット媒体が身近にないシニア層向けの情報発信活動として、NPO法人ワライフが発行するフリーマガジン「ワライフ」への記事の掲載を行った。「ワライフ」は遠州・三河のシルバー世代、身体障害者、等に向けて隔月30,000部発行されている情報誌であり、申込をした個人宛に郵送されているほか、様々な公共施設に設置されている。

ワライフの読者層が“のんほいパーク”のターゲットとするシルバー世代と重複しているため、ワライフ関係者に主旨を説明し紙面を頂けるようお願いしたところ、了解を得ることができた。この記事の掲載については、パークの方々に大変喜んで頂くことができた。掲載する内容は、パークの方からの依頼により、左面に新春フェスティバル(年末年始のイベント)の情報、また、右面には植物園、動物園、遊園地の3つのエリアごとの紹介とした。図8に、作成した「ワライフ」の紙面(見開き2ページ)を示す。

ページの作成にあたっては、高齢者向けということで、文字は大き目に、お年寄りの方に興味をもってもらえるような情報の掲載を心掛けた。

掲載できる文字数に制約のある中で、入稿締切に間に合わせるように紙面を作成する事は非常に大変で、ソフトウェアの操作方法を習得することの重要性を実感した。



図9 飼育員インタビューの様子

5.4 飼育員インタビュー

昨年度の活動の継続として、動物の飼育を担当している方へのインタビューを行った。この活動は、公式Webページ等からは得ることができないオリジナルのコンテンツを制作してWebサイトに掲示することで、本プロジェクトのファンを増やすとともに、一層ののんほいパークに興味を持って頂くことを狙いとしている。図9に猛獣舎（トラ、ライオン）担当の飼育員に対するインタビューの様子を示す。

5.5 SNSの活用

昨年度の活動において、WEBサイトやSNSが情報拡散ツールとして有効であることが明らかとなった。今年度は、積極的にSNS（Facebook、Twitter）を活用し、取材を通じて収集した写真や動画、園内情報、イベント情報等をのんほいパーク利用者または若い世代に向けて発信することに取り組んだ。

図10に、作成したFacebookページを示す。春学期は毎日（平日）、秋学期は一日おき（平日、週3回）に、メンバー全員で分担して記事を作成し投稿した。表2に12月8日時点の結果を示す。活動の結果として、100人を超える固定ファンを獲得することができ、また、週平均で300人以上のユーザに情報を届けること（リーチ）ができた。Facebookインサイトから年齢層別リーチ内訳を調べたところ、18歳～34歳の世代で約74%を占めていた。この結果より、FacebookのようなSNSツールは、若い世代向けの情報拡散に効果的であることがあらためて確認できた。



図10 のんほいパーク盛り上げ隊Facebookページ

表2 Facebookページを利用した広報活動の結果

全投稿数	178
・近況アップデート	10
・写真	124
・動画	11
・リンク	32
・クエスチョン	1
いいね！（ファン数）	102
リーチ数（週間平均）	316
過去28日間のリーチ	471

*12月8日時点

さらに、図11のように盛り上げ隊!! Twitterアカウントを作成して情報発信を行った。Twitterは、主にのんほいパーク訪問時にリアルタイムで動物の様子を伝えるために活用した。また、Facebookへの投稿記事が表示されるように連携機能を有効にして使用した。同時に、のんほいパークに関する他のユーザのツイートをリツイートすることにも努めた。

Twitterを利用した広報活動の結果を表3に示す。Facebookページと同様に100人を超えるファン（フォロワー）を獲得することができた。特に、動物情報を積極的に発信しているユーザ（影響力の強いユーザ）やフォロワー数の多いユーザにフォローやリツイートをされたことは、情報拡散の観点から大きな成果であったと考えている。フォロワーとの直接的なやりとり（@ツイート）で交流できたことも大変有益であった。



図 11 のんほいパーク盛り上げ隊 Twitter



図 12 のんほいパーク盛り上げ隊 YouTube

表 3 Twitter を利用した広報活動の結果

全ツイート数	334
・純リツイート数	89
・リツイート数	108
・Facebook 連携	137
フォロワー数	104
被リツイート数	34
被お気に入り登録	30
@ツイート	6

*12月11日時点

5. 6 動画の公開 (YouTube)

Facebook ページのアクセス状況から、ユーザの動画への関心が非常に高いことが判明したため、秋学期からは動画サイトとして最も認知度の高い YouTube においてのんほいパークに関する動画の公開を行った (図 12)。

動画の制作には、Adobe After Effects や Windowsムービーメーカーなどのソフトウェアを使用した。撮りためたものを繋げた 10 分程度の動画を 5 本制作し、創造祭においてプロジェクターを使用して上映するとともに、それらの動画を YouTube にアップロードした。このとき、動画の説明文として登場する動物名をタグとして登録し、検索にかかりやすくなるように工夫した。

2014 年 1 月 9 日時点で、Facebook ページにアップロードした動画の再投稿を含め、計 13 本の動画をアップロードした。現時点ではまだ再生回数は多くないものの、今後も動画の数を増やして、のんほいパークの広報に繋がるようにしたい。

6. プロジェクトの成果

本プロジェクトは、昨年度からの活動を継続し、広報活動を通じた“のんほいパーク”の活性化を目的として活動を行った。結果として、SNS を利用した広報では Facebook および Twitter で 100 ユーザ以上のファンを獲得することができた。

また、ポスターやリーフレット、三角柱 POP 等の印刷物を利用した広報も行った。リーフレットやポスターについては、一部を豊橋市内の他大学 (豊橋技術科学大学、愛知大学) へ掲示、配布することができた。さらに、フリーマガジン「ワライフ」に記事を掲示することで、シルバー世代への広報を行うこともできた。

活動を通して、Web を利用した情報発信について、ファン数を増加させるには想像以上に労力が必要であることを実感した。例えば、ナイトガーデン中に配布した QR コード (うちわ) は 480 個だったが、それによるファン数の増加は 6 人と 1/80 の効果しか得られなかった。また、定期的に設置した三角柱 POP には全て QR コードを印刷していたが、三角柱 POP から「いいね」を押してくれた形跡は見られなかった。これらは想定より非常に厳しい実態であり、経験しなければわからなかったことである。今後、何らかの広報活動に携わる場合には、今回のことを経験則として大いに役立てたいと考えている。

活動全体を通じて、学内についてはのんほいパークの存在感をアピールでき、また、SNS を通じて様々な情報発信を行うことができたため、微力ながらのんほいパークの活性化に貢献できたと考えている。

7. メンバー各自の所見

21123101 味岡美沙

私は主に動画の撮影を担当した。日中は寝ていたりじっとしていたりと、あまり動かない動物が多い。とくに猛暑時は日陰でぐったりしている動物だらけだ。動画なのに写真のような静止画になってしまうことが多かった。活発に動く動物を撮ることができる機会は意外と少なかったりする。その点、夏に稼働していた植物園のフォグミストは非常に撮影しやすかった。決まった間隔で水が出たり止まったりしてくれてありがたいと感じたと同時に、改めて予測不可能な行動をする動物を撮影するのは難しいなと感じた。

創造祭では、のんほいパークについてのアンケートを実施し、アンケートを実施している横でプロジェクターを使って編集した動物たちの動画を流した。動画の編集には Adobe の After Effects を使用したが、時間不足で使いこなすことができず今まで撮った動画をつなげただけのものしか作れなかった。しかも、枠がはみ出していたり誤字があったりと、しっかり見直せば訂正できるようなミスが多かったことが反省点である。次に同じような機会があったら、十分に時間をかけ、満足のできるものを作りたいと思う。

21123109 加藤綾乃

私は「のんほいパーク盛り上げ隊！！」の活動では主にPOP等の動物のデフォルメのイラスト等を担当した。見てくれた人の目にとまり動物園に行きたくなるようなかわいらしいものを描く事をまず心がけた。自分の描いたものがタイトルやアイコン等に使われるのは気恥ずかしい思いもあったが、ナイトガーデンでうちわを配ったときにもらってくれた人の喜ぶ顔が見られ、達成感があった。そしてカメラが趣味のひとつだったこともあり、毎回楽しく動物の撮影の取材ができていたが、私の日程が合わず何度か取材に出向けなかった事が心残りである。Facebook の更新も行ったが、載せたい写真に合う内容でなおかつ見てくれた人が動物園に行きたくなるような文章を考えたり、他のメンバーの前後の更新内容と

はなるべく違うものを配慮したりと、始めは簡単なように思っていたが案外手間のかかるものだったように思う。それでも私の投稿したものに「いいね！」を押してもらえたときに次の更新はもっといろんな人の目にとまるものにしようという思いが芽生え、毎回編集アプリを使い動物園をいろいろな見せ方ができるようになっていた。そのうちに、以前よりさらにのんほいパークの動物や植物たちの事が好きになっていったと実感している。

21123128 藤田諭実

本プロジェクト活動で最も苦勞した記憶は、外部の方々との打ち合わせである。私は、コミュニケーションをとることが苦手であったが、この1年間外部の方と接する機会が多かった。プロジェクト内で決定した打ち合わせの内容を把握し、自分自身が理解した上で、外部の方に説明や意見交換・インタビューを行う際、相手に分かりやすく伝えることに苦勞した。このような経験から、何度もコミュニケーションをとることで良いモノを作ることができ、外部の方とも良い関係づくりができたことから、コミュニケーションの重要性を学んだ。

また、ラウンジ等に設置する三角柱POPや各イベントのポスターや看板などの作成物に多く携わることができた。始めは、満足のいくものが私たちに作れるのかという不安もあった。だが、メンバーや先生に助けをもらい満足のいくものができ、完成したときの達成感や実際に自分たちで作成したものが掲示され、目にとめてもらえた時は嬉しかった。

他にも、日替わりでの Facebook の更新など大変なことが多かったが、それなりの結果が出たことから本プロジェクト活動に携われて良かったと思う。

21123225 辻井友絵

活動内の殆どの制作物は、Illustrator や Photoshop を活用し制作したものである。Illustrator などのソフトの基本的なことは授業で習っていたが、実際に「人に見せるもの」と考えて制作を行うと、身に付けていたスキ

ルだけでは足りないと感じた。また、スキルの取得具合によっては、「できること」と「できないこと」に差があり、メンバー内での仕事量に差ができてしまった。この2点は、活動において反省しなければならないことであろう。

けれども、「人に見せるもの」と考え制作することで、初めは作ることに重きを置いていたが、段々と「どのような情報が必要か」、「色合いや字の大きさはどのくらいがいいか」など、「制作物を手に取る相手」のことに気を配りながら制作することができるようになった。また、打ち合わせやインタビューなどで外部の方と多く接することで、説明資料などの事前準備の大切さを実感すると共に、相手に「わかりやすい」「見やすい」資料を作ろうと心がけることができ、自分なりに成長できたと感じている。

反省すべき点は多々あるが、活動を通して Illustrator などスキルと「相手を気に掛ける」という心がけが高まったことは確かである。

21123229 長坂良恵

SNS の活用や三角柱 POP の作成、アンケート実施と、様々なことを経験したなかでもフェイスブックなどの SNS を使う事が私は初めてだったこともあり、使う事に戸惑いを感じた。だが、動物の様子や、季節によるイベントの情報もすぐに発信でき、伝えやすく伝わりやすいツールなのだということが知る事が出来た。

広報活動を通して伝える情報が多くの人の目に触れるということや、誤った情報を提示した場合には見ている人だけではなく、協力をして頂いている、のんほいパーク・みどりの協会様にも迷惑をかける事になり、情報を伝える大変さや、情報を慎重に扱う必要性を強く実感することができた。

プロジェクトの活動において私は人に助けられることが多く迷惑をかけてしまった。今後は計画的に動いていきたい。

21123232 村上雄也

私は、今回のプロジェクト活動で、みどりの協会にアポイントメントをとったり、のんほいパーク、NPO 法人ワライフへの取材を行ったりした。取材というのは人生はじめてのことで、とても緊張した。

また、プロジェクトメンバーで分担して、定期的に Facebook を更新した。のんほいパーク盛り上げ隊としてアップロードした記事は Facebook のシェアという機能を使い自分のページでも投稿ができる。自分の友達から教えてくれて「ありがとう」等のコメントをもらうことができ“ロコミ”による広報活動について少し理解が深まったように思う。

「のんほいパークで働いているのか?」「違う。学校のプロジェクト活動だよ!」というやり取りが何回かあったのはいい思い出になっている。プロジェクト活動を通して、web を使って全国に発信するためのツールについての知識、作業をチームで役割分担する大切さがわかった。

21123624 沼倉由香理

私は今回の活動を通じて、情報を伝える難しさを知った。Facebook 更新では、写真選びと、文章を考えることに苦勞した。友達だけに届くわけではないため、言葉の選択や、のんほいパークに行きたいと思ってももらえるような文章をと考えると時間がかかり、難しかった。創造祭のアンケート集計では、アンケートの呼びかけ等に苦戦した。呼びかけても、なかなか立ち止まってくれなかったりして大変だったが、頑張っって声かけをして、なんとかアンケートを集めることができたので、いい経験ができたと思う。

活動の反省としては、Illustrator や Photoshop があまり使いこなせなかったため、制作面であまり役に立つことができなかつたことである。しかし、他の人が Illustrator 等のソフトで制作しているのを見たり、一緒にやったりして教えてもらうことで、知識が増やせたため、私自身良かったと思っている。

今後は、ゼミを通して得た知識を活かしていけるようにしていきたいと思う。

21123215 近藤 智基

今回のプロジェクト活動では、100万人プロジェクト達成のために情報拡散をすることが目的であり、情報を得るために多くの外部団体へ訪問をした。その中で団体の方への提案や打ち合わせ、飼育員さんへのインタビューなどを行ったのだが、自分たちの活動の趣旨や目的を伝えることがきちんと説明できているかが一番不安であった。さらに情報を聞く側なので失礼があってはいけないと思ったが、敬語を使うことが苦手な自分にとっては、話すたびに会話を途切れさせてしまったり、言葉が詰まったりなど言葉を選ぶのに時間がかかってしまった。事前にもっと準備をしておけば会話をもっと広げることができたのではないかと反省している。

プロジェクト活動を通して、相手の人に聞きたい事や伝えたい事を話す際、失礼の無いように会話をしなければいけないことを反省し、自分に足りなかった点を見つけることができた。この経験を今後活かしていきたいと思っている。

21123219 水藤圭祐

今回のプロジェクトでは、他のメンバーより私ができなかったのは多かったが、私ができる精一杯の活動はできたと思う。今回の活動で私が学んだことは、コミュニケーションの大切さである。私は普段、コミュニケーションを取るのが苦手であり、人の前で発表や意見を人任せにすることが多くあった。さらに、他人とコミュニケーションを取るに当たり話術のうまさや相手の気持ちを考えながら情報を引き出すことが重要であることがわかった。今後は、コミュニケーションを積極的に取り、より多くの人と関わっていきたい。

今回のプロジェクト活動を通して、外部の方との意見交換、成果報告会などの大勢の前での発表ができるようになってきた。しかし、人に助けてもらうことが多くあるので甘えることなく、自分の力で解決していきたいよう努力していきたい。

謝辞

本プロジェクト活動を行うにあたり、豊橋総合動植物公園、豊橋みどりの協会、豊橋市役所企画部シティプロモーション推進室、NPO 法人ワライフの皆様には大変お世話になりました。心より感謝申し上げます。

3

社会人基礎力評価の集計結果

The image shows a large area of horizontal lines, likely representing a table or data visualization. At the bottom center, there is a semi-circle shape. The lines are evenly spaced and extend across the width of the page.

社会人基礎力に関する評価結果

本事業では、4つの教育事業を展開し総合的に社会人基礎力の養成に取り組んでいる。社会人基礎力に代表される態度や志向に関する育成においては、学生自身が自らの諸能力に関する状況を内省し改善に取り組む必要がある。そのため、補助事業で展開する教育プログラムにおいては、学生自身が行動しその行動を育成すべき資質と照らして内省する機会を設定している。全体の運営計画を図4.3.1に再掲する。ここでは、育成すべき資質である社会人基礎力に関して、各事業で評価した結果をまとめる。以下に

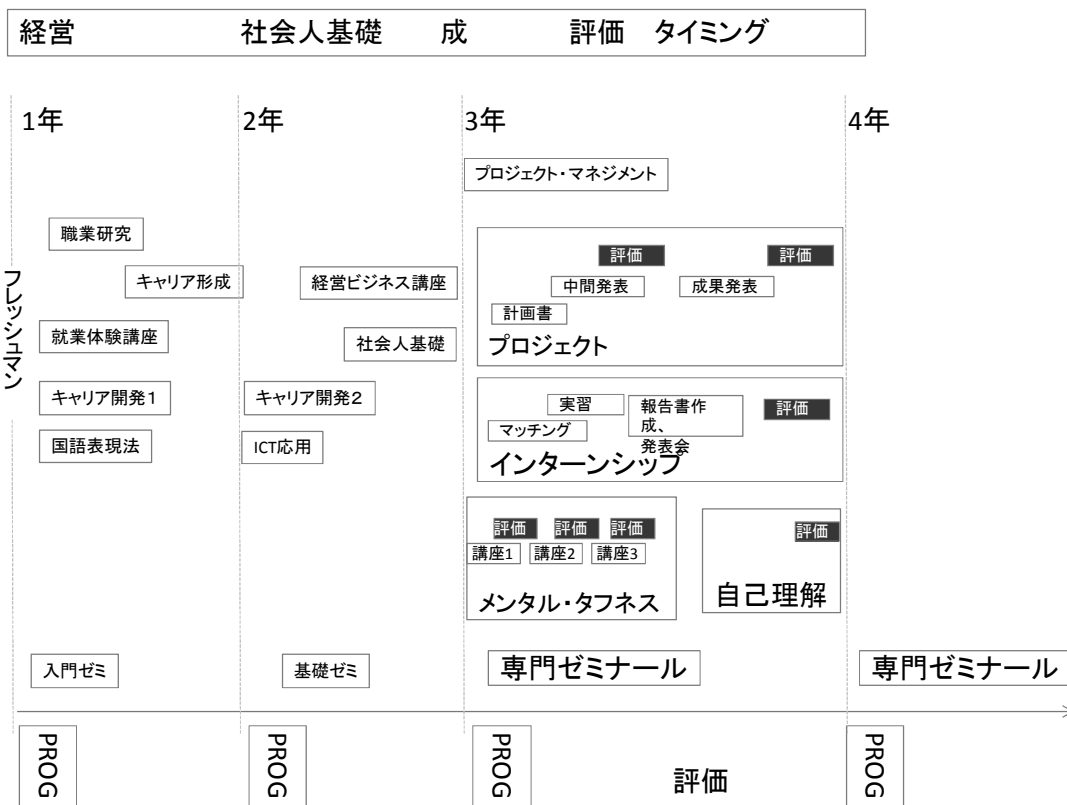
(1) PROGによる評価結果 (平成25年(2013年)3月実施結果の集計)

※平成26年3月実施のため集計は4月以降に取りまとめ予定

- (2) メンタルタフネス講座での評価結果
- (3) 自己理解促進プログラムでの評価結果
- (4) 地域企業連携プロジェクトにおける評価結果
- (5) 3者間共同インターンシップにおける評価結果

を順次示す。

図 4.3.1



(1) PROG による評価結果

補助事業全体の教育効果を経年で評価するために、年度末に PROG を用いた全学年の社会人基礎力に関するアセスメントを実施する計画になっている。平成 24 年度は先行して 3,4 年生のアセスメントを行った。平成 25 年度は年度末（平成 26 年 3 月）に実施することになっており、報告書発行までに集計ができないため、本報告書では、平成 24 年度実施結果のみを報告する。図 4.3.2 に平成 24 年度に実施した PROG の学年別集計結果を示す。学年ごとの経年変化を見ることで、補助事業の教育効果を評価することになっているので本年度実施結果を踏まえて考察する予定である。

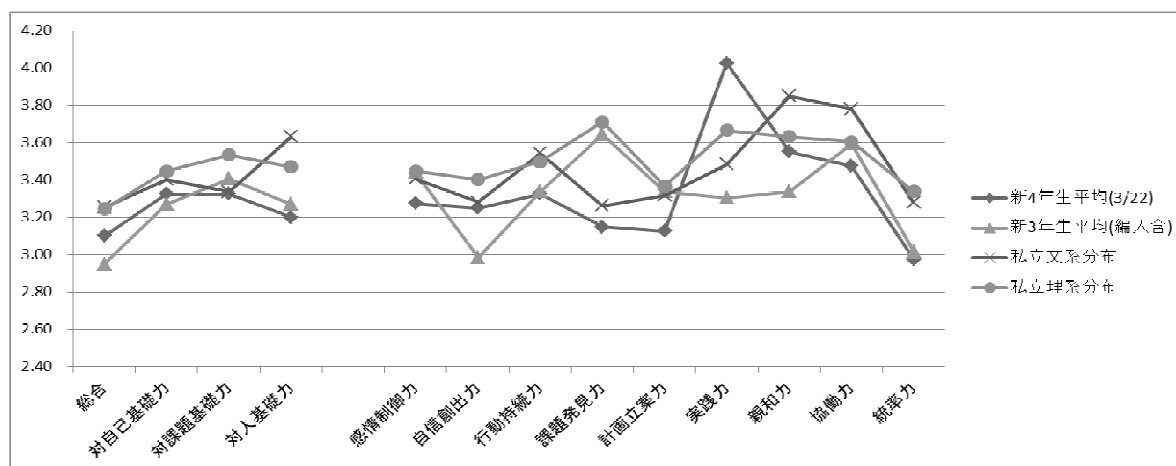


図 4.3.2 PROG による社会人基礎力の評価 (平成 24 年度実施分)

(2) メンタルタフネス講座での評価結果

本年度、第 2 回セルフモチベーション講座(平成 25 年 6 月 8 日実施)、第 3 回メンタルタフネスを活かすビジネス研究講座(平成 25 年 7 月 30 日実施)において、学生アンケートに社会人基礎力に関する項目を追加して事前事後アンケートを実施した。社会人基礎力に関する部分の集計結果のグラフを以下に示す。各回の講座の事前事後アンケートの差異から、講座ごとに効果が高い項目に差はあるものの、社会人基礎力(前に踏み出す力、チームで働く力)に関する押し上げ効果があることが分かる。

また、第 2 回セルフモチベーション講座と第 3 回ビジネス研究講座のアンケートにおいて、第 2 回の事後と第 3 回の事前の比較、あるいは第 2 回と第 3 回の事前アンケートの比較から、時間の経過で元に戻る項目が多いものの、社会人基礎力(前に踏み出す力、チームで働く力)に関連する項目について効果が見受けられる。

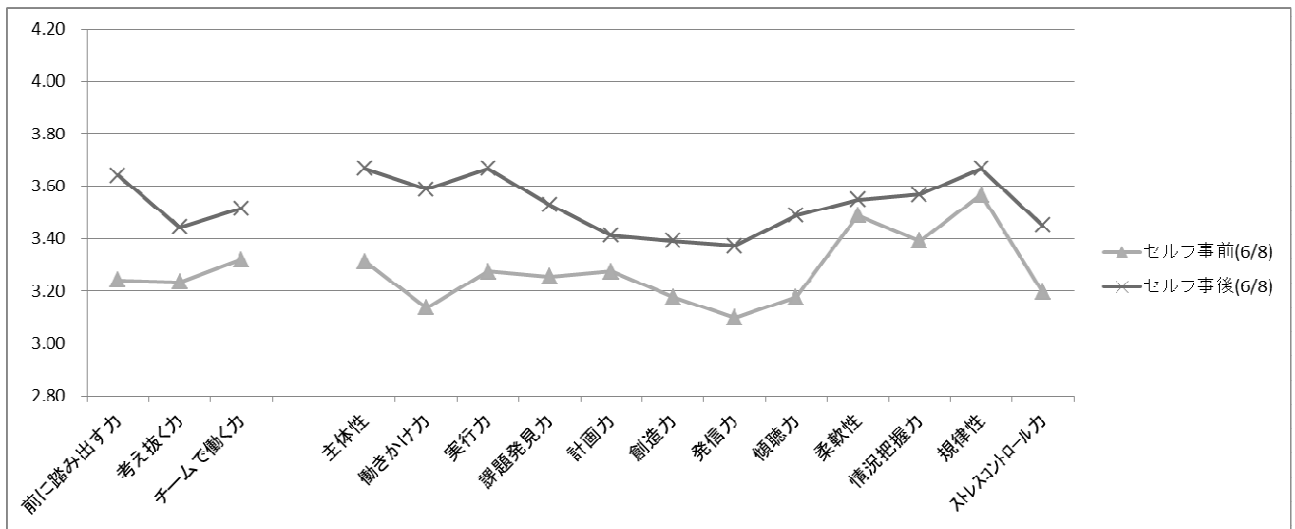


図 4.3.3 社会人基礎力アンケート評価 (セルフモチベーション講座)

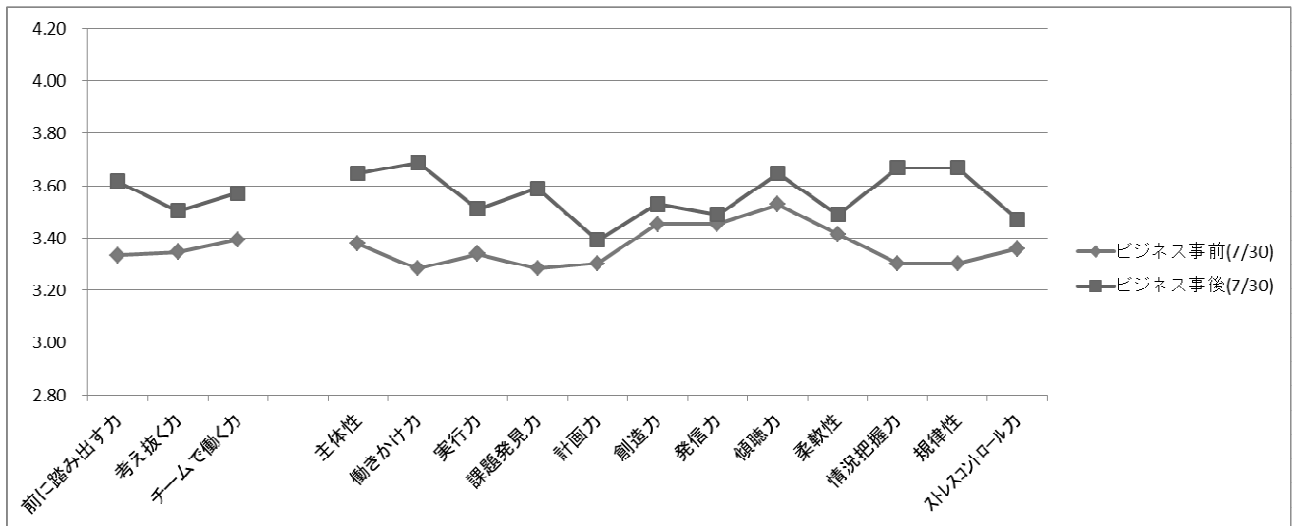


図 4.3.4 社会人基礎力アンケート評価 (ビジネス研究講座)

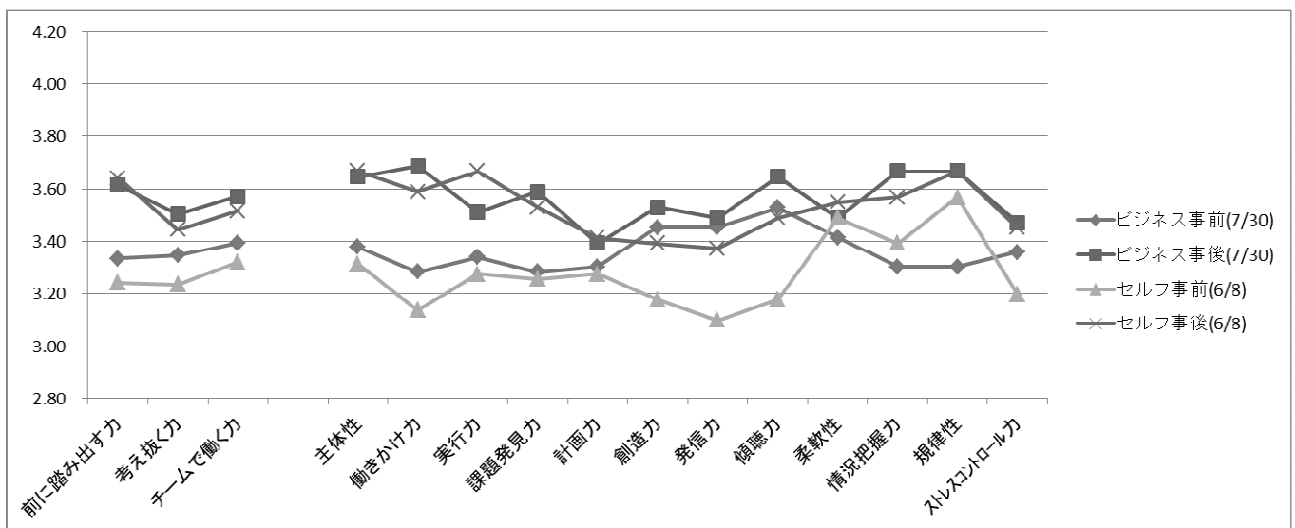


図 4.3.5 社会人基礎力アンケート評価 (ビジネス研究講座)

(3) 自己理解促進プログラムでの評価結果

自己理解促進のための模擬面接講座（平成 26 年 2 月 27 日、28 日実施）においける学生アンケートの社会人基礎力に関する項目の集計結果を以下に示す。各回の講座の事前事後アンケートの差異から、講座の実施によって社会人基礎力に関する項目にも押し上げ効果があることが分かる。各項目をみると、相対的に自己理解促進プログラムの目的に沿った前に踏み出す力に関する項目が押し上げられていることが分かる。

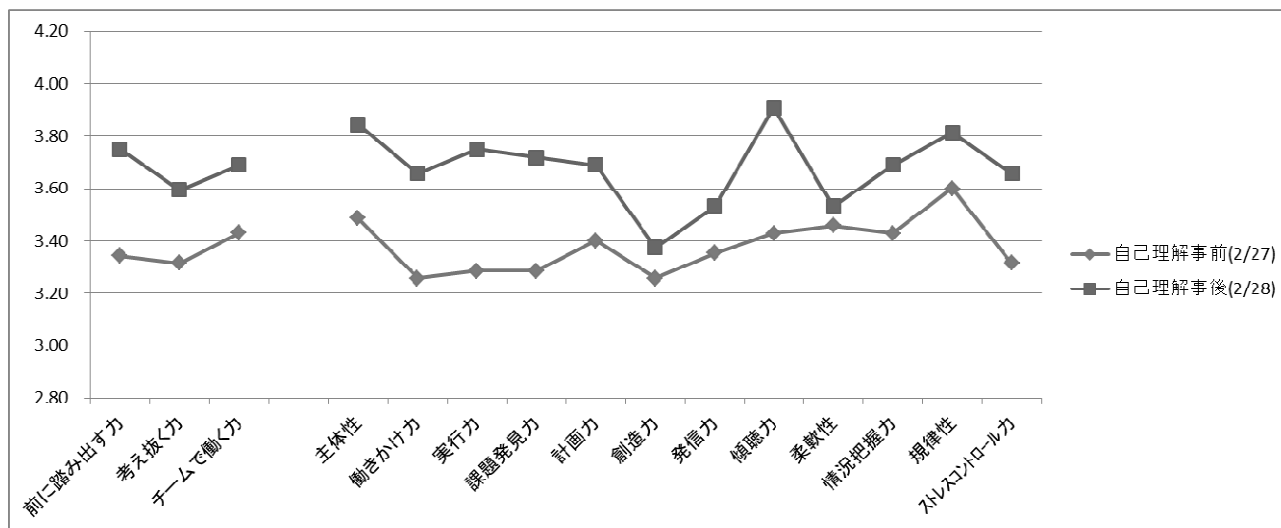


図 4.3.6 社会人基礎力アンケート評価

(4) 地域企業連携プロジェクトにおける評価結果

(a)集計の概要： 地域企業連携プロジェクトにおいては中間と期末の 2 回評価を行い、教員の助言のもと学生が育成すべき資質に関する内省を行うことになっている。平成 25 年度は 2013 年 9 月 27 日並びに 2014 年 1 月 23 日に評価結果を集計した。対象は、情報ビジネス学部 55 人（欠損データのある 2 名を除外）である。評価は、学生による自己評価、メンバー評価、教員評価の 3 者による評価を実施した。

(b) 集計結果：以下の方法で集計した結果を示す。

- ・『中間・期末における自己評価・教員評価・メンバ評価比較』（全体） 図 4.3.7
- ・『自己評価・教員評価・メンバ評価における中間から期末への推移』（全体・ゼミ別） 図 4.3.8
- ・『中間・期末における自己評価・教員評価・メンバ評価比較』（ゼミ別） 図 4.3.9

(c) 集計結果からの考察

①3 者評価の比較に関する考察（図 4.3.7）

・中間・期末ともに 3 者評価が項目ごとに類似した評価になっている。特に、評価の低い項目は今後重点的に指導が必要な力であり、その育成方法や指導方法の検討が課題である。中間・期末の 3 つの評価における下位 3 項目は以下の通りである。

中間	自己評価	計画力	実行力	発信力
	教員評価	計画力	創造力	働きかけ力
	メンバ評価	創造力	計画力	課題発見力
期末	自己評価	創造力	発信力	実行力
	教員評価	創造力	計画力	働きかけ力
	メンバ評価	働きかけ力	創造力	課題発見力 計画力 ストレスコントロール力

・中間・期末の評価において、メンバ評価、自己評価、教員評価の順に評価点が低くなっている項目が多い。このことは、教員が求めるレベルと学生が求めるレベルに乖離があることを示唆しており、学生に求める水準を明示することが今後の改題である。

②3者評価の中間・期末の変化に関する考察 図 4.3.8

・中間から期末への推移は以下の3つの形状パターンがある。要因としては、各ゼミに所属する学生の資質・能力の差、評価基準のばらつき、指導方法の差異等が考えられる。

(A)どの力も中間から期末にかけて大きく向上する	Eゼミ、Fゼミ
(B)多くの力において中間よりも期末の方が低下する	Aゼミ、Cゼミ
(C)全体的には期末にかけてやや向上するが、項目によってばらつきがある	Bゼミ、Dゼミ、Gゼミ、Hゼミ

③中間・期末の3者評価の比較に関する考察 図 4.3.9

・ほとんどのゼミで中間よりも期末の方が、自己評価・教員評価・メンバ評価の形状が似ている。教員の指導により、プロジェクト活動を通じて社会人基礎力に対する認識が共有化されている。

(5) 3者間共同インターンシップにおける評価結果

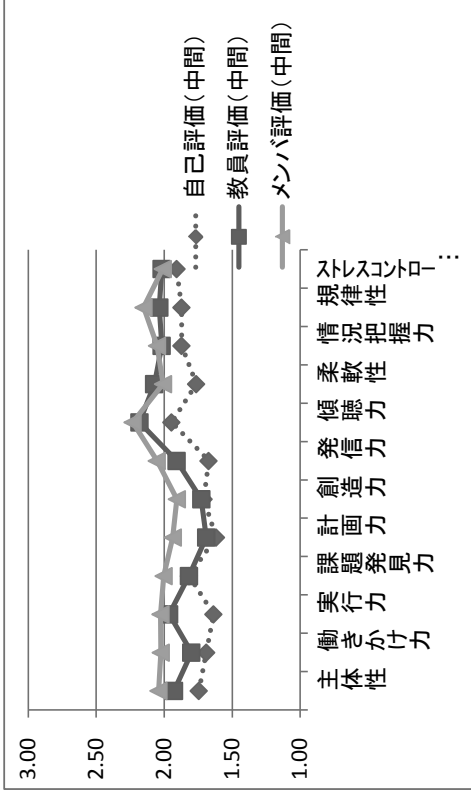
本事業では、インターンシップ実習中の評価として従来より、1 職務規律の遵守、2 取り組み姿勢、3 テーマ取り組みについての学生のレベルを実習先で評価して頂いて来た。平成25年度はこれらの評価に加えて社会人基礎力に関しても実習配属先の指導担当者に学生の到達レベルを評価頂いた。なお、評価に際して基準が必要であるとの企業側からの要望から、今年度は他大学の学生と比較して当該学生の到達レベルを判断頂くこととした。

以上のような取り組みの結果、学生に対して多くの実習先企業から主体性、実行力、課題発見力の強化を望む声が聞かれた。その一方で、傾聴力、柔軟性、状況把握力、規律性については、概ね高い評価が与えられていた。

図4.3.7 中間・期末における自己評価・教員評価・メンバ評価比較(全体)

中間(自己評価・教員評価・メンバ評価比較)

	主体性	働きかけ力	実行力	課題発見力	計画力	創造力	発信力	傾聴力	柔軟性	状況把握力	規律性	ストレスコントロール力
自己評価	1.75	1.69	1.64	1.82	1.62	1.71	1.67	1.95	1.76	1.87	1.87	1.91
教員評価	1.93	1.80	1.96	1.82	1.69	1.73	1.91	2.18	2.07	2.02	2.04	2.02
メンバ評価	2.04	2.03	2.03	2.00	1.94	1.91	2.05	2.23	2.01	2.05	2.15	2.01



期末(自己評価・教員評価・メンバ評価比較)

	主体性	働きかけ力	実行力	課題発見力	計画力	創造力	発信力	傾聴力	柔軟性	状況把握力	規律性	ストレスコントロール力
自己評価	2.036	1.95	1.93	2.04	2	1.8	1.84	2.13	2	2.04	2.15	2.13
教員評価	2.218	2.04	2.25	2.05	1.96	1.95	2.04	2.27	2.2	2.31	2.25	2.07
メンバ評価	2.322	2.14	2.37	2.23	2.23	2.14	2.24	2.35	2.36	2.35	2.36	2.23

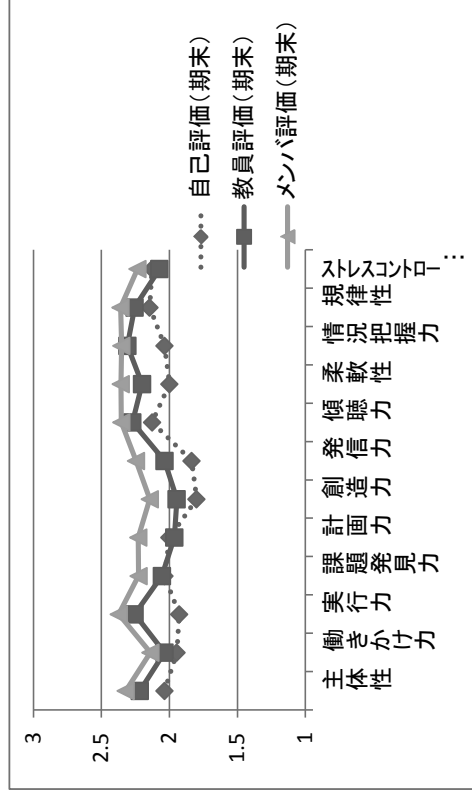
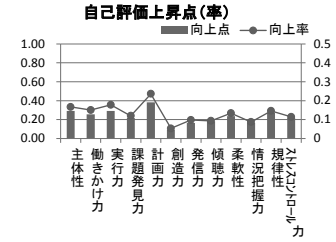
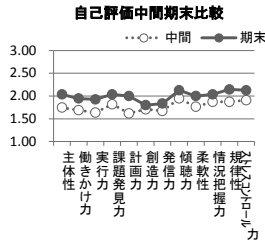


図4.3.8 自己評価・教員評価・メンバ評価における中間から期末への推移(全体・ゼミ別)

全体

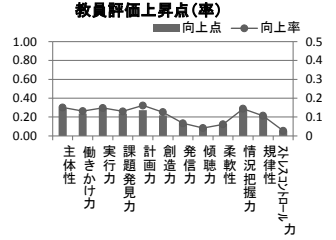
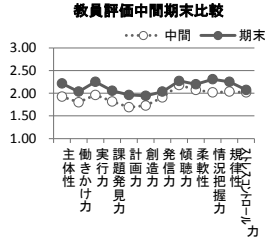
自己評価(中間・期末比較)

	主体性	働きかけ力	実行力	課題発見力	計画力	創造力	発信力	傾聴力	柔軟性	状況把握力	規律性	ストレスコントロール力
中間	1.75	1.69	1.64	1.82	1.62	1.71	1.67	1.95	1.76	1.87	1.87	1.91
期末	2.036	1.95	1.93	2.04	2	1.8	1.84	2.13	2	2.04	2.15	2.13
向上点	0.29	0.25	0.29	0.22	0.38	0.09	0.16	0.18	0.24	0.16	0.27	0.22
向上率	0.167	0.15	0.18	0.12	0.24	0.05	0.1	0.09	0.13	0.09	0.15	0.11



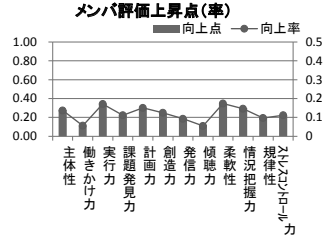
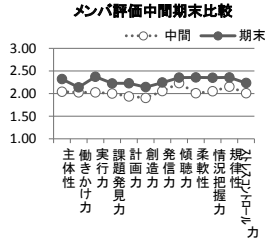
教員評価(中間・期末比較)

	主体性	働きかけ力	実行力	課題発見力	計画力	創造力	発信力	傾聴力	柔軟性	状況把握力	規律性	ストレスコントロール力
中間	1.93	1.80	1.96	1.82	1.69	1.73	1.91	2.18	2.07	2.02	2.04	2.02
期末	2.218	2.04	2.25	2.05	1.96	1.95	2.04	2.27	2.2	2.31	2.25	2.07
向上点	0.29	0.24	0.29	0.24	0.27	0.22	0.13	0.09	0.13	0.29	0.22	0.05
向上率	0.151	0.13	0.15	0.13	0.16	0.13	0.07	0.04	0.06	0.14	0.11	0.03



メンバ評価(中間・期末比較)

	主体性	働きかけ力	実行力	課題発見力	計画力	創造力	発信力	傾聴力	柔軟性	状況把握力	規律性	ストレスコントロール力
中間	2.04	2.03	2.03	2.00	1.94	1.91	2.05	2.23	2.01	2.05	2.15	2.01
期末	2.322	2.14	2.37	2.23	2.23	2.14	2.24	2.35	2.36	2.35	2.36	2.23
向上点	0.28	0.11	0.35	0.22	0.29	0.24	0.19	0.12	0.35	0.30	0.21	0.22
向上率	0.137	0.06	0.17	0.11	0.15	0.12	0.09	0.05	0.17	0.15	0.1	0.11

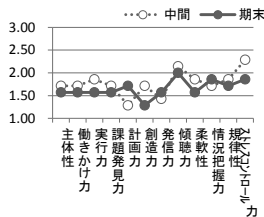


Aゼミ

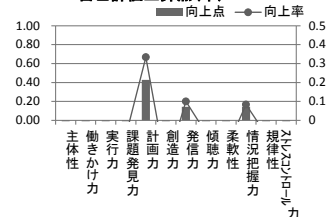
自己評価(中間・期末比較)

	主体性	働きかけ力	実行力	課題発見力	計画力	創造力	発信力	傾聴力	柔軟性	状況把握力	規律性	ストレスコントロール力
中間	1.71	1.71	1.86	1.71	1.29	1.71	1.43	2.14	1.86	1.71	1.86	2.29
期末	1.57	1.57	1.57	1.57	1.71	1.29	1.57	2.00	1.57	1.86	1.71	1.86
向上点	-0.14	####	####	####	0.43	####	####	####	####	0.14	####	####
向上率	-0.08	-0.1	-0.2	-0.1	0.33	-0.3	0.1	-0.1	-0.2	0.08	-0.1	-0.2

自己評価中間期末比較



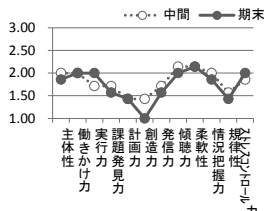
自己評価上昇点(率)



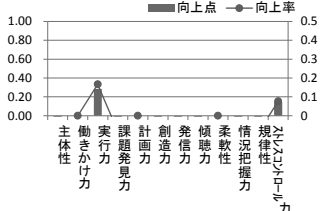
教員評価(中間・期末比較)

	主体性	働きかけ力	実行力	課題発見力	計画力	創造力	発信力	傾聴力	柔軟性	状況把握力	規律性	ストレスコントロール力
中間	2.00	2.00	1.71	1.71	1.43	1.43	1.71	2.14	2.14	2.00	1.57	1.86
期末	1.86	2.00	2.00	1.57	1.43	1.00	1.57	2.00	2.14	1.86	1.43	2.00
向上点	-0.14	0.00	0.29	####	0.00	####	####	####	####	####	####	0.14
向上率	-0.07	0	0.17	-0.1	0	-0.3	-0.1	-0.1	0	-0.1	-0.1	0.08

教員評価中間期末比較



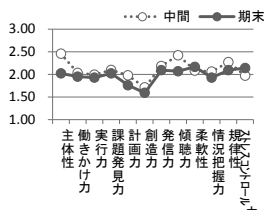
教員評価上昇点(率)



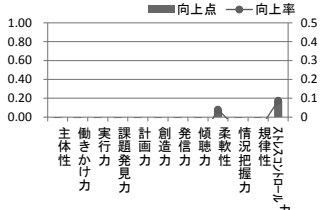
メンバ評価(中間・期末比較)

	主体性	働きかけ力	実行力	課題発見力	計画力	創造力	発信力	傾聴力	柔軟性	状況把握力	規律性	ストレスコントロール力
中間	2.46	2.04	1.99	2.10	1.98	1.71	2.19	2.42	2.09	2.06	2.27	1.97
期末	2.02	1.95	1.93	2.02	1.76	1.60	2.10	2.07	2.17	1.93	2.10	2.14
向上点	-0.43	####	####	####	####	####	####	####	0.08	####	####	0.17
向上率	-0.18	-0	-0	-0	-0.1	-0.1	-0	-0.1	0.04	-0.1	-0.1	0.09

メンバ評価中間期末比較



メンバ評価上昇点(率)

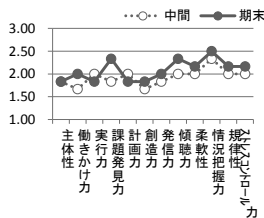


Bゼミ

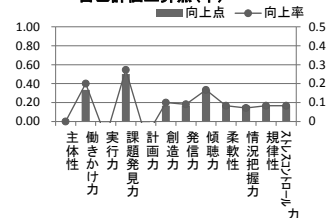
自己評価(中間・期末比較)

	主体性	働きかけ力	実行力	課題発見力	計画力	創造力	発信力	傾聴力	柔軟性	状況把握力	規律性	ストレスコントロール力
中間	1.83	1.67	2.00	1.83	2.00	1.67	1.83	2.00	2.00	2.33	2.00	2.00
期末	1.83	2.00	1.83	2.33	1.83	1.83	2.00	2.33	2.17	2.50	2.17	2.17
向上点	0.00	0.33	####	0.50	####	0.17	0.17	0.33	0.17	0.17	0.17	0.17
向上率	0	0.2	-0.1	0.27	-0.1	0.1	0.09	0.17	0.08	0.07	0.08	0.08

自己評価中間期末比較



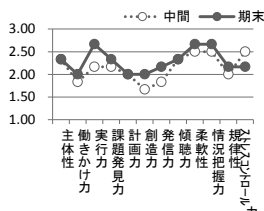
自己評価上昇点(率)



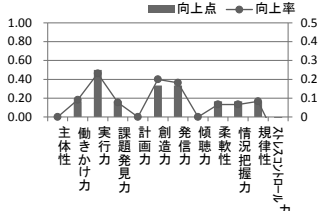
教員評価(中間・期末比較)

	主体性	働きかけ力	実行力	課題発見力	計画力	創造力	発信力	傾聴力	柔軟性	状況把握力	規律性	ストレスコントロール力
中間	2.33	1.83	2.17	2.17	2.00	1.67	1.83	2.33	2.50	2.50	2.00	2.50
期末	2.33	2.00	2.67	2.33	2.00	2.00	2.17	2.33	2.67	2.67	2.17	2.17
向上点	0.00	0.17	0.50	0.17	0.00	0.33	0.33	0.00	0.17	0.17	0.17	####
向上率	0	0.09	0.23	0.08	0	0.2	0.18	0	0.07	0.07	0.08	-0.1

教員評価中間期末比較



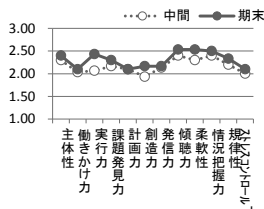
教員評価上昇点(率)



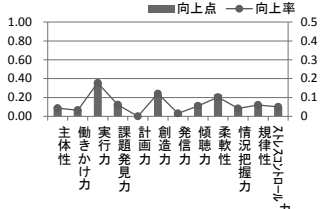
メンバ評価(中間・期末比較)

	主体性	働きかけ力	実行力	課題発見力	計画力	創造力	発信力	傾聴力	柔軟性	状況把握力	規律性	ストレスコントロール力
中間	2.30	2.03	2.07	2.17	2.10	1.93	2.13	2.40	2.30	2.40	2.20	2.00
期末	2.40	2.10	2.43	2.30	2.10	2.17	2.17	2.53	2.53	2.50	2.33	2.10
向上点	0.10	0.07	0.37	0.13	0.00	0.23	0.03	0.13	0.23	0.10	0.13	0.10
向上率	0.043	0.03	0.18	0.06	0	0.12	0.02	0.06	0.1	0.04	0.06	0.05

メンバ評価中間期末比較



メンバ評価上昇点(率)

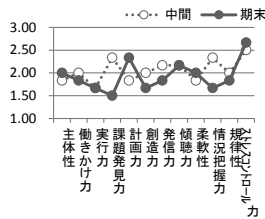


Cゼミ

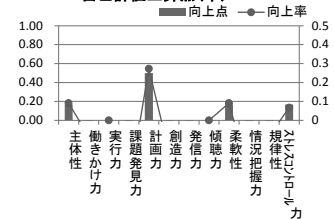
自己評価(中間・期末比較)

	主体性	働きかけ力	実行力	課題発見力	計画力	創造力	発信力	傾聴力	柔軟性	状況把握力	規律性	ストレスコントロール力
中間	1.83	2.00	1.67	2.33	1.83	2.00	2.17	2.17	1.83	2.33	2.00	2.50
期末	2.00	1.83	1.67	1.50	2.33	1.67	1.83	2.17	2.00	1.67	1.83	2.67
向上点	0.17	####	0.00	####	0.50	####	####	0.00	0.17	####	####	0.17
向上率	0.091	-0.1	0	-0.4	0.27	-0.2	-0.2	0	0.09	-0.3	-0.1	0.07

自己評価中間期末比較



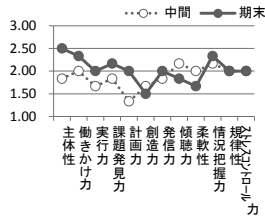
自己評価上昇点(率)



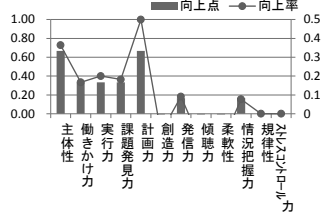
教員評価(中間・期末比較)

	主体性	働きかけ力	実行力	課題発見力	計画力	創造力	発信力	傾聴力	柔軟性	状況把握力	規律性	ストレスコントロール力
中間	1.83	2.00	1.67	1.83	1.33	1.67	1.83	2.17	2.00	2.17	2.00	2.00
期末	2.50	2.33	2.00	2.17	2.00	1.50	2.00	1.83	1.67	2.33	2.00	2.00
向上点	0.67	0.33	0.33	0.33	0.67	####	0.17	####	####	0.17	0.00	0.00
向上率	0.364	0.17	0.2	0.18	0.5	-0.1	0.09	-0.2	-0.2	0.08	0	0

教員評価中間期末比較



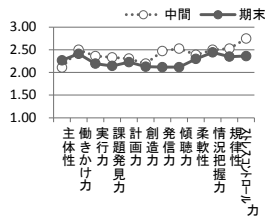
教員評価上昇点(率)



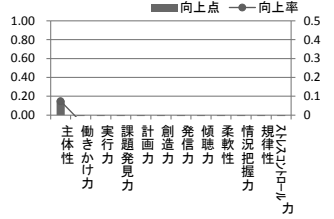
メンバ評価(中間・期末比較)

	主体性	働きかけ力	実行力	課題発見力	計画力	創造力	発信力	傾聴力	柔軟性	状況把握力	規律性	ストレスコントロール力
中間	2.11	2.50	2.36	2.33	2.31	2.19	2.47	2.53	2.39	2.50	2.53	2.75
期末	2.27	2.41	2.19	2.14	2.23	2.13	2.12	2.12	2.30	2.44	2.35	2.36
向上点	0.16	####	####	####	####	####	####	####	####	####	####	####
向上率	0.074	-0	-0.1	-0.1	-0	-0	-0.1	-0.2	-0	-0	-0.1	-0.1

メンバ評価中間期末比較



メンバ評価上昇点(率)

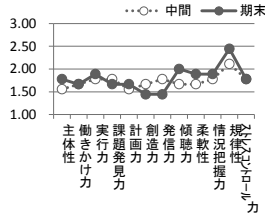


Dゼミ

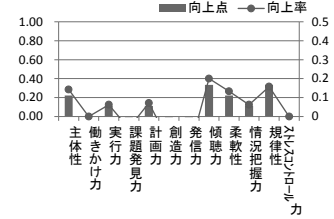
自己評価(中間・期末比較)

	主体性	働きかけ力	実行力	課題発見力	計画力	創造力	発信力	傾聴力	柔軟性	状況把握力	規律性	ストレスコントロール力
中間	1.56	1.67	1.78	1.78	1.56	1.67	1.78	1.67	1.67	1.78	2.11	1.78
期末	1.78	1.67	1.89	1.67	1.67	1.44	1.44	2.00	1.89	1.89	2.44	1.78
向上点	0.22	0.00	0.11	####	0.11	####	####	0.33	0.22	0.11	0.33	0.00
向上率	0.143	0	0.06	-0.1	0.07	-0.1	-0.2	0.2	0.13	0.06	0.16	0

自己評価中間期末比較



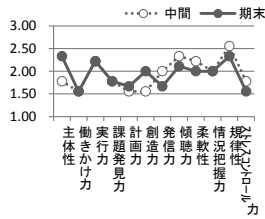
自己評価上昇点(率)



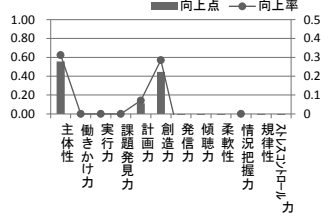
教員評価(中間・期末比較)

	主体性	働きかけ力	実行力	課題発見力	計画力	創造力	発信力	傾聴力	柔軟性	状況把握力	規律性	ストレスコントロール力
中間	1.78	1.56	2.22	1.78	1.56	1.56	2.00	2.33	2.22	2.00	2.56	1.78
期末	2.33	1.56	2.22	1.78	1.67	2.00	1.67	2.11	2.00	2.00	2.33	1.56
向上点	0.56	0.00	0.00	0.00	0.11	0.44	####	####	####	0.00	####	####
向上率	0.313	0	0	0	0.07	0.29	-0.2	-0.1	-0.1	0	-0.1	-0.1

教員評価中間期末比較



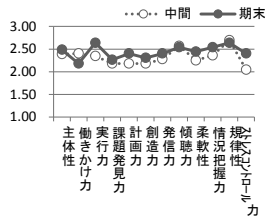
教員評価上昇点(率)



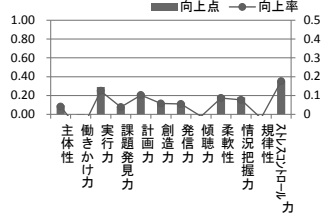
メンバ評価(中間・期末比較)

	主体性	働きかけ力	実行力	課題発見力	計画力	創造力	発信力	傾聴力	柔軟性	状況把握力	規律性	ストレスコントロール力
中間	2.39	2.40	2.35	2.18	2.18	2.18	2.28	2.57	2.25	2.38	2.69	2.04
期末	2.49	2.18	2.64	2.26	2.40	2.31	2.40	2.54	2.44	2.54	2.64	2.40
向上点	0.10	####	0.29	0.08	0.22	0.13	0.13	####	0.19	0.18	####	0.36
向上率	0.041	-0.1	0.12	0.04	0.1	0.06	0.05	-0	0.09	0.08	-0	0.18

メンバ評価中間期末比較



メンバ評価上昇点(率)

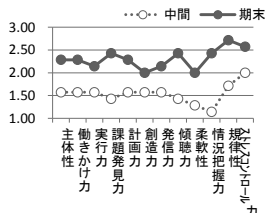


Eゼミ

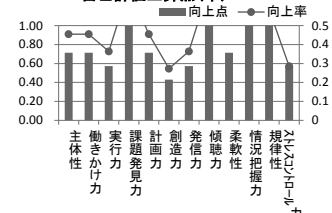
自己評価(中間・期末比較)

	主体性	働きかけ力	実行力	課題発見力	計画力	創造力	発信力	傾聴力	柔軟性	状況把握力	規律性	ストレスコントロール力
中間	1.57	1.57	1.57	1.43	1.57	1.57	1.57	1.43	1.29	1.14	1.71	2.00
期末	2.29	2.29	2.14	2.43	2.29	2.00	2.14	2.43	2.00	2.43	2.71	2.57
向上点	0.71	0.71	0.57	1.00	0.71	0.43	0.57	1.00	0.71	1.29	1.00	0.57
向上率	0.455	0.45	0.36	0.7	0.45	0.27	0.36	0.7	0.56	1.13	0.58	0.29

自己評価中間期末比較



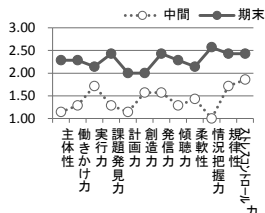
自己評価上昇点(率)



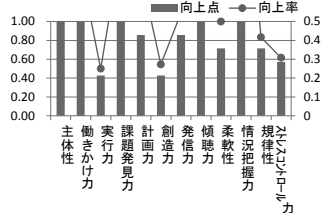
教員評価(中間・期末比較)

	主体性	働きかけ力	実行力	課題発見力	計画力	創造力	発信力	傾聴力	柔軟性	状況把握力	規律性	ストレスコントロール力
中間	1.14	1.29	1.71	1.29	1.14	1.57	1.57	1.29	1.43	1.00	1.71	1.86
期末	2.29	2.29	2.14	2.43	2.00	2.00	2.43	2.29	2.14	2.57	2.43	2.43
向上点	1.14	1.00	0.43	1.14	0.86	0.43	0.86	1.00	0.71	1.57	0.71	0.57
向上率	1	0.78	0.25	0.89	0.75	0.27	0.55	0.78	0.5	1.57	0.42	0.31

教員評価中間期末比較



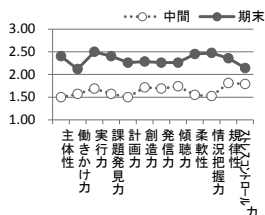
教員評価上昇点(率)



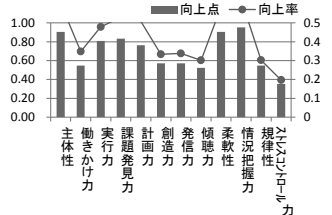
メンバ評価(中間・期末比較)

	主体性	働きかけ力	実行力	課題発見力	計画力	創造力	発信力	傾聴力	柔軟性	状況把握力	規律性	ストレスコントロール力
中間	1.50	1.57	1.69	1.57	1.50	1.71	1.69	1.74	1.55	1.52	1.81	1.79
期末	2.40	2.12	2.50	2.40	2.26	2.29	2.26	2.26	2.45	2.48	2.36	2.14
向上点	0.90	0.55	0.81	0.83	0.76	0.57	0.57	0.52	0.90	0.95	0.55	0.35
向上率	0.603	0.35	0.48	0.53	0.51	0.33	0.34	0.3	0.58	0.63	0.3	0.2

メンバ評価中間期末比較



メンバ評価上昇点(率)

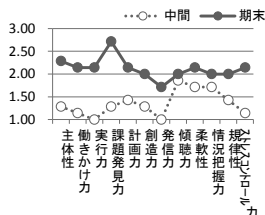


Fゼミ

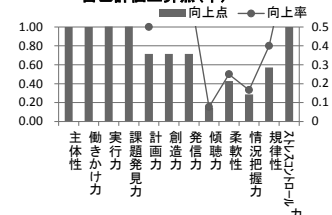
自己評価(中間・期末比較)

	主体性	働きかけ力	実行力	課題発見力	計画力	創造力	発信力	傾聴力	柔軟性	状況把握力	規律性	ストレスコントロール力
中間	1.29	1.14	1.00	1.29	1.43	1.29	1.00	1.86	1.71	1.71	1.43	1.14
期末	2.29	2.14	2.14	2.71	2.14	2.00	1.71	2.00	2.14	2.00	2.00	2.14
向上点	1.00	1.00	1.14	1.43	0.71	0.71	0.71	0.14	0.43	0.29	0.57	1.00
向上率	0.778	0.88	1.14	1.11	0.5	0.56	0.71	0.08	0.25	0.17	0.4	0.88

自己評価中間期末比較



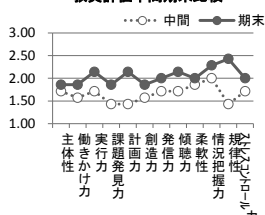
自己評価上昇点(率)



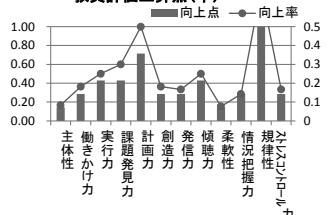
教員評価(中間・期末比較)

	主体性	働きかけ力	実行力	課題発見力	計画力	創造力	発信力	傾聴力	柔軟性	状況把握力	規律性	ストレスコントロール力
中間	1.71	1.57	1.71	1.43	1.43	1.57	1.71	1.71	1.86	2.00	1.43	1.71
期末	1.86	1.86	2.14	1.86	2.14	1.86	2.00	2.14	2.00	2.29	2.43	2.00
向上点	0.14	0.29	0.43	0.43	0.71	0.29	0.29	0.43	0.14	0.29	1.00	0.29
向上率	0.083	0.18	0.25	0.3	0.5	0.18	0.17	0.25	0.08	0.14	0.7	0.17

教員評価中間期末比較



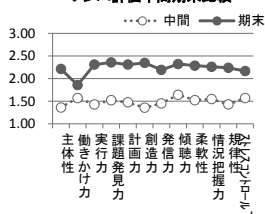
教員評価上昇点(率)



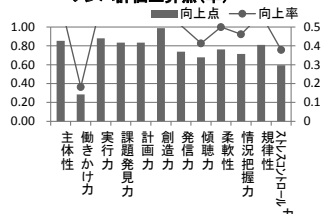
メンバ評価(中間・期末比較)

	主体性	働きかけ力	実行力	課題発見力	計画力	創造力	発信力	傾聴力	柔軟性	状況把握力	規律性	ストレスコントロール力
中間	1.36	1.57	1.43	1.52	1.48	1.36	1.45	1.64	1.52	1.55	1.43	1.57
期末	2.21	1.86	2.31	2.36	2.31	2.35	2.19	2.32	2.29	2.26	2.24	2.17
向上点	0.85	0.29	0.88	0.83	0.83	0.99	0.74	0.68	0.76	0.71	0.81	0.60
向上率	0.626	0.18	0.62	0.55	0.56	0.73	0.51	0.41	0.5	0.46	0.57	0.38

メンバ評価中間期末比較



メンバ評価上昇点(率)

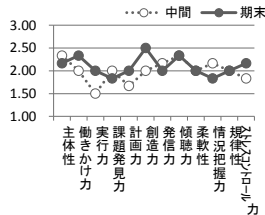


Gゼミ

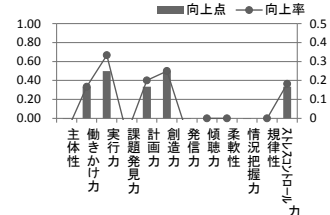
自己評価(中間・期末比較)

	主体性	働きかけ力	実行力	課題発見力	計画力	創造力	発信力	傾聴力	柔軟性	状況把握力	規律性	ストレスコントロール力
中間	2.33	2.00	1.50	2.00	1.67	2.00	2.17	2.33	2.00	2.17	2.00	1.83
期末	2.17	2.33	2.00	1.83	2.00	2.50	2.00	2.33	2.00	1.83	2.00	2.17
向上点	-0.17	0.33	0.50	####	0.33	0.50	####	0.00	####	0.00	0.00	0.33
向上率	-0.07	0.17	0.33	-0.1	0.2	0.25	-0.1	0	0	-0.2	0	0.18

自己評価中間期末比較



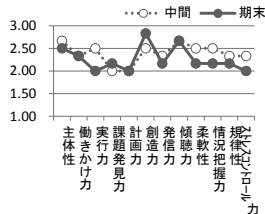
自己評価上昇点(率)



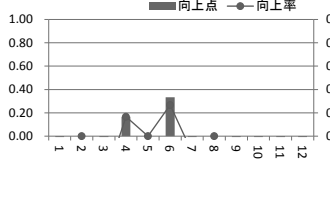
教員評価(中間・期末比較)

	主体性	働きかけ力	実行力	課題発見力	計画力	創造力	発信力	傾聴力	柔軟性	状況把握力	規律性	ストレスコントロール力
中間	2.67	2.33	2.50	2.00	2.00	2.50	2.33	2.67	2.50	2.50	2.33	2.33
期末	2.50	2.33	2.00	2.17	2.00	2.83	2.17	2.67	2.17	2.17	2.17	2.00
向上点	-0.17	0.00	####	0.17	0.00	0.33	####	0.00	####	####	####	####
向上率	-0.06	0	-0.2	0.08	0	0.13	-0.1	0	-0.1	-0.1	-0.1	-0.1

教員評価中間期末比較



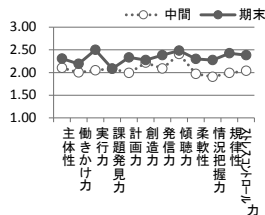
教員評価上昇点(率)



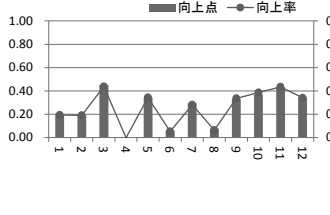
メンバ評価(中間・期末比較)

	主体性	働きかけ力	実行力	課題発見力	計画力	創造力	発信力	傾聴力	柔軟性	状況把握力	規律性	ストレスコントロール力
中間	2.10	2.00	2.05	2.08	1.99	2.22	2.09	2.41	1.97	1.91	1.99	2.04
期末	2.31	2.19	2.50	2.08	2.33	2.28	2.38	2.48	2.30	2.28	2.43	2.38
向上点	0.20	0.19	0.45	0.00	0.34	0.06	0.29	0.08	0.33	0.37	0.43	0.35
向上率	0.097	0.1	0.22	-0	0.17	0.03	0.14	0.03	0.17	0.19	0.22	0.17

メンバ評価中間期末比較



メンバ評価上昇点(率)

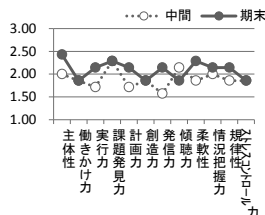


Hゼミ

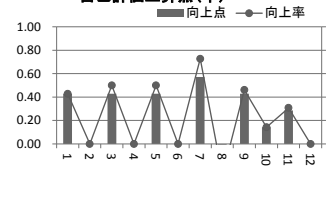
自己評価(中間・期末比較)

	主体性	働きかけ力	実行力	課題発見力	計画力	創造力	発信力	傾聴力	柔軟性	状況把握力	規律性	ストレスコントロール力
中間	2.00	1.86	1.71	2.29	1.71	1.86	1.57	2.14	1.86	2.00	1.86	1.86
期末	2.43	1.86	2.14	2.29	2.14	1.86	2.14	1.86	2.29	2.14	2.14	1.86
向上点	0.43	0.00	0.43	0.00	0.43	0.00	0.57	####	0.43	0.14	0.29	0.00
向上率	0.214	0	0.25	0	0.25	0	0.36	-0.1	0.23	0.07	0.15	0

自己評価中間期末比較



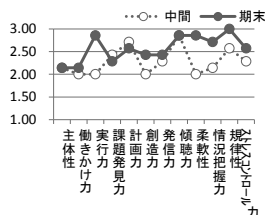
自己評価上昇点(率)



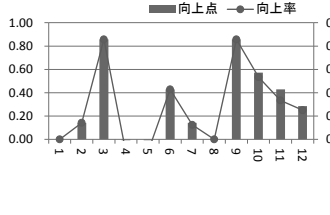
教員評価(中間・期末比較)

	主体性	働きかけ力	実行力	課題発見力	計画力	創造力	発信力	傾聴力	柔軟性	状況把握力	規律性	ストレスコントロール力
中間	2.14	2.00	2.00	2.43	2.71	2.00	2.29	2.86	2.00	2.14	2.57	2.29
期末	2.14	2.14	2.86	2.29	2.57	2.43	2.43	2.86	2.86	2.71	3.00	2.57
向上点	0.00	0.14	0.86	####	####	0.43	0.14	0.00	0.86	0.57	0.43	0.29
向上率	0	0.07	0.43	-0.1	-0.1	0.21	0.06	0	0.43	0.27	0.17	0.13

教員評価中間期末比較



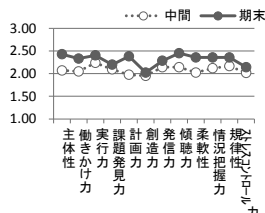
教員評価上昇点(率)



メンバ評価(中間・期末比較)

	主体性	働きかけ力	実行力	課題発見力	計画力	創造力	発信力	傾聴力	柔軟性	状況把握力	規律性	ストレスコントロール力
中間	2.07	2.05	2.24	2.10	1.98	1.95	2.14	2.14	2.02	2.12	2.17	2.01
期末	2.43	2.33	2.40	2.20	2.38	2.02	2.29	2.45	2.36	2.36	2.36	2.14
向上点	0.36	0.29	0.17	0.10	0.40	0.07	0.14	0.31	0.33	0.24	0.19	0.13
向上率	0.172	0.14	0.07	0.05	0.2	0.04	0.07	0.14	0.16	0.11	0.09	0.06

メンバ評価中間期末比較



メンバ評価上昇点(率)

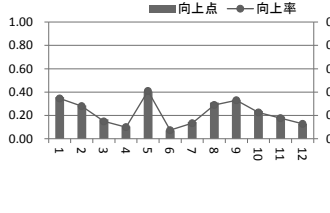
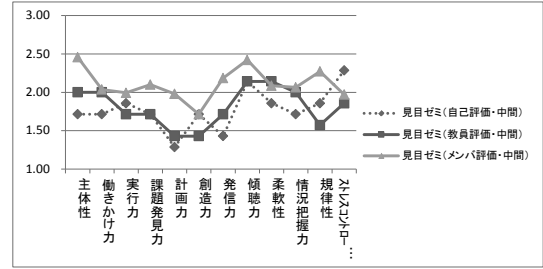


図4.3.9 中間・期末における自己評価・教員評価・メンバ評価比較(ゼミ別)

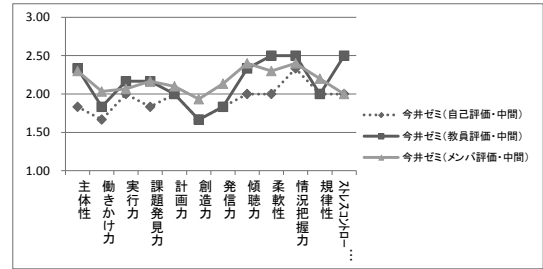
中間 (Aゼミ)

	主体性	働きかけ力	実行力	課題発見力	計画力	創造力	発信力	傾聴力	柔軟性	状況把握力	規律性	ハイレースコントロール力
見目ゼミ(自己評価・中間)	1.71	1.71	1.86	1.71	1.29	1.71	1.43	2.14	1.86	1.71	1.86	2.29
見目ゼミ(教員評価・中間)	2.00	2.00	1.71	1.71	1.43	1.43	1.71	2.14	2.14	2.00	1.57	1.86
見目ゼミ(メンバ評価・中間)	2.46	2.04	1.99	2.10	1.98	1.71	2.19	2.42	2.09	2.06	2.27	1.97



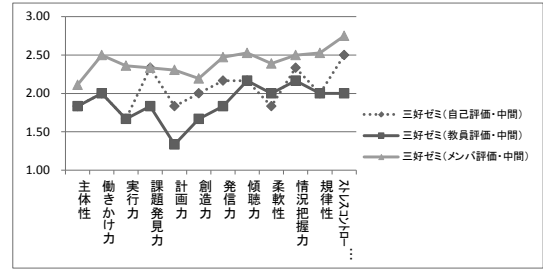
中間 (Bゼミ)

	主体性	働きかけ力	実行力	課題発見力	計画力	創造力	発信力	傾聴力	柔軟性	状況把握力	規律性	ハイレースコントロール力
今井ゼミ(自己評価・中間)	1.83	1.67	2.00	1.83	2.00	1.67	1.83	2.00	2.00	2.33	2.00	2.00
今井ゼミ(教員評価・中間)	2.33	1.83	2.17	2.17	2.00	1.67	1.83	2.33	2.50	2.50	2.00	2.50
今井ゼミ(メンバ評価・中間)	2.30	2.03	2.07	2.17	2.10	1.93	2.13	2.40	2.30	2.40	2.20	2.00



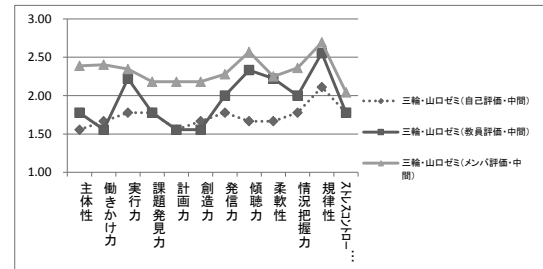
中間 (Cゼミ)

	主体性	働きかけ力	実行力	課題発見力	計画力	創造力	発信力	傾聴力	柔軟性	状況把握力	規律性	ハイレースコントロール力
三好ゼミ(自己評価・中間)	1.83	2.00	1.67	2.33	1.83	2.00	2.17	2.17	1.83	2.33	2.00	2.50
三好ゼミ(教員評価・中間)	1.83	2.00	1.67	1.83	1.33	1.67	1.83	2.17	2.00	2.17	2.00	2.00
三好ゼミ(メンバ評価・中間)	2.11	2.50	2.36	2.33	2.31	2.19	2.47	2.53	2.39	2.50	2.53	2.75



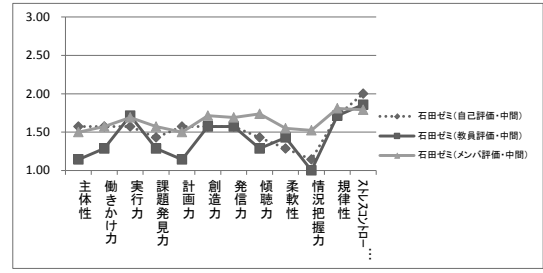
中間 (Dゼミ)

	主体性	働きかけ力	実行力	課題発見力	計画力	創造力	発信力	傾聴力	柔軟性	状況把握力	規律性	ハイレースコントロール力
三輪・山口ゼミ(自己評価・中間)	1.56	1.67	1.78	1.78	1.56	1.67	1.78	1.67	1.67	1.78	2.11	1.78
三輪・山口ゼミ(教員評価・中間)	1.78	1.56	2.22	1.78	1.56	1.56	2.00	2.33	2.22	2.00	2.56	1.78
三輪・山口ゼミ(メンバ評価・中間)	2.39	2.40	2.35	2.18	2.18	2.18	2.28	2.57	2.25	2.36	2.69	2.04



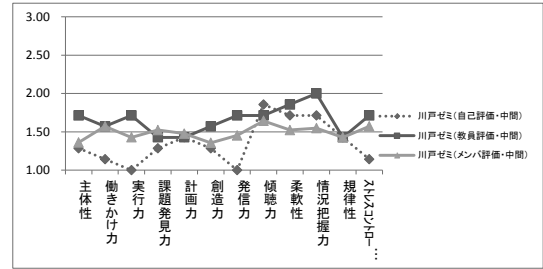
中間 (Eゼミ)

	主体性	働きかけ力	実行力	課題発見力	計画力	創造力	発信力	傾聴力	柔軟性	状況把握力	規律性	ハイレースコントロール力
石田ゼミ(自己評価・中間)	1.57	1.57	1.57	1.43	1.57	1.57	1.57	1.43	1.29	1.14	1.71	2.00
石田ゼミ(教員評価・中間)	1.14	1.29	1.71	1.29	1.14	1.57	1.57	1.29	1.43	1.00	1.71	1.86
石田ゼミ(メンバ評価・中間)	1.50	1.57	1.69	1.57	1.50	1.71	1.69	1.74	1.55	1.52	1.81	1.79



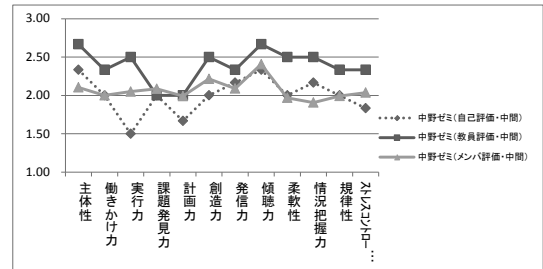
中間 (Fゼミ)

	主体性	働きかけ力	実行力	課題発見力	計画力	創造力	発信力	傾聴力	柔軟性	状況把握力	規律性	ハイレースコントロール力
川戸ゼミ(自己評価・中間)	1.29	1.14	1.00	1.29	1.43	1.29	1.00	1.86	1.71	1.71	1.43	1.14
川戸ゼミ(教員評価・中間)	1.71	1.57	1.71	1.43	1.43	1.57	1.71	1.71	1.86	2.00	1.43	1.71
川戸ゼミ(メンバ評価・中間)	1.36	1.57	1.43	1.52	1.48	1.36	1.45	1.64	1.52	1.55	1.43	1.57



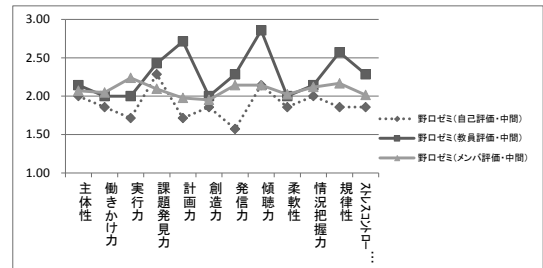
中間 (Gゼミ)

	主体性	働きかけ力	実行力	課題発見力	計画力	創造力	発信力	傾聴力	柔軟性	状況把握力	規律性	ハイレースコントロール力
中野ゼミ(自己評価・中間)	2.33	2.00	1.50	2.00	1.67	2.00	2.17	2.33	2.00	2.17	2.00	1.83
中野ゼミ(教員評価・中間)	2.67	2.33	2.50	2.00	2.00	2.50	2.33	2.67	2.50	2.50	2.33	2.33
中野ゼミ(メンバ評価・中間)	2.10	2.00	2.05	2.08	1.99	2.22	2.09	2.41	1.97	1.91	1.99	2.04



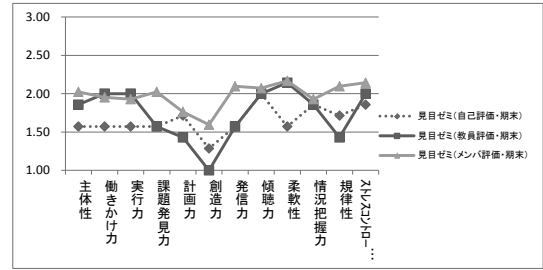
中間 (Hゼミ)

	主体性	働きかけ力	実行力	課題発見力	計画力	創造力	発信力	傾聴力	柔軟性	状況把握力	規律性	ハイレースコントロール力
野口ゼミ(自己評価・中間)	2.00	1.86	1.71	2.29	1.71	1.86	1.57	2.14	1.86	2.00	1.86	1.86
野口ゼミ(教員評価・中間)	2.14	2.00	2.00	2.43	2.71	2.00	2.29	2.86	2.00	2.14	2.57	2.29
野口ゼミ(メンバ評価・中間)	2.07	2.05	2.24	2.10	1.98	1.95	2.14	2.14	2.02	2.12	2.17	2.01



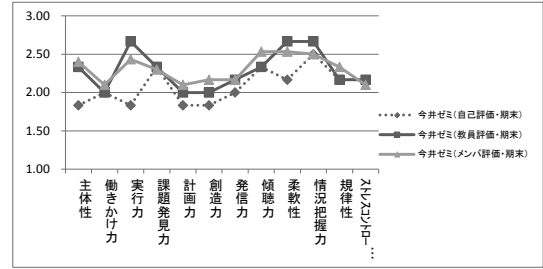
期末 (Aゼミ)

	主体性	働きかけ力	実行力	課題発見力	計画力	創造力	発信力	傾聴力	柔軟性	状況把握力	規律性	トレスコントロール力
見目ゼミ(自己評価・期末)	1.57	1.57	1.57	1.57	1.71	1.29	1.57	2.00	1.57	1.86	1.71	1.86
見目ゼミ(教員評価・期末)	1.86	2.00	2.00	1.57	1.43	1.00	1.57	2.00	2.14	1.86	1.43	2.00
見目ゼミ(メンバ評価・期末)	2.02	1.95	1.93	2.02	1.76	1.60	2.10	2.07	2.17	1.93	2.10	2.14



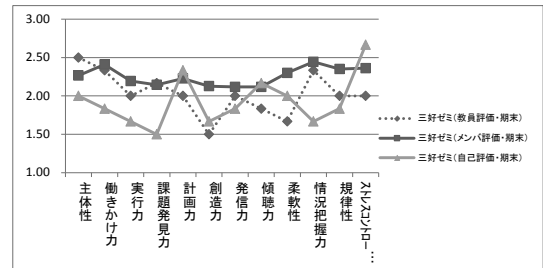
期末 (Bゼミ)

	主体性	働きかけ力	実行力	課題発見力	計画力	創造力	発信力	傾聴力	柔軟性	状況把握力	規律性	トレスコントロール力
今井ゼミ(自己評価・期末)	1.83	2.00	1.83	2.33	1.83	1.83	2.00	2.33	2.17	2.50	2.17	2.17
今井ゼミ(教員評価・期末)	2.33	2.00	2.67	2.33	2.00	2.00	2.17	2.33	2.67	2.67	2.17	2.17
今井ゼミ(メンバ評価・期末)	2.40	2.10	2.43	2.30	2.10	2.17	2.17	2.53	2.53	2.50	2.33	2.10



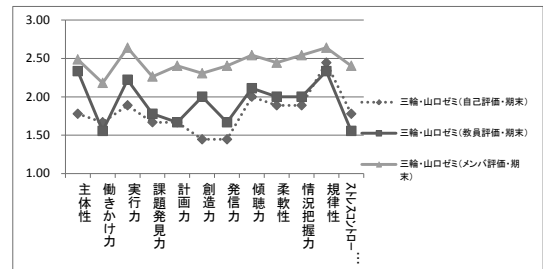
期末 (Cゼミ)

	主体性	働きかけ力	実行力	課題発見力	計画力	創造力	発信力	傾聴力	柔軟性	状況把握力	規律性	トレスコントロール力
三好ゼミ(教員評価・期末)	2.50	2.33	2.00	2.17	2.00	1.50	2.00	1.83	1.67	2.33	2.00	2.00
三好ゼミ(メンバ評価・期末)	2.27	2.41	2.19	2.14	2.23	2.13	2.12	2.12	2.30	2.44	2.35	2.36
三好ゼミ(自己評価・期末)	2.00	1.83	1.67	1.50	2.33	1.67	1.83	2.17	2.00	1.67	1.83	2.67



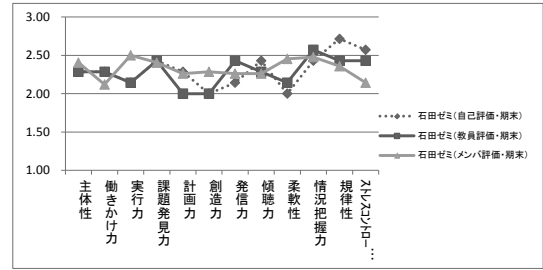
期末 (Dゼミ)

	主体性	働きかけ力	実行力	課題発見力	計画力	創造力	発信力	傾聴力	柔軟性	状況把握力	規律性	トレスコントロール力
三輪・山口ゼミ(自己評価・期末)	1.78	1.67	1.89	1.67	1.67	1.44	1.44	2.00	1.89	1.89	2.44	1.78
三輪・山口ゼミ(教員評価・期末)	2.33	1.56	2.22	1.78	1.67	2.00	1.67	2.11	2.00	2.00	2.33	1.56
三輪・山口ゼミ(メンバ評価・期末)	2.49	2.18	2.64	2.26	2.40	2.31	2.40	2.54	2.44	2.54	2.64	2.40



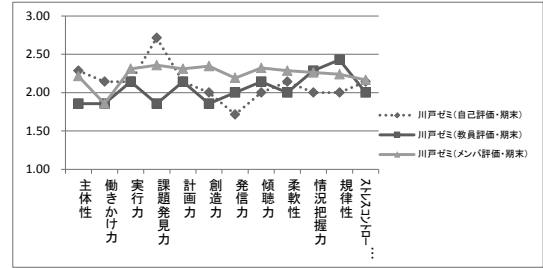
期末 (Eゼミ)

	主体性	働きかけ力	実行力	課題発見力	計画力	創造力	発信力	傾聴力	柔軟性	状況把握力	規律性	ハイレースコントロール力
石田ゼミ(自己評価・期末)	2.29	2.29	2.14	2.43	2.29	2.00	2.14	2.43	2.00	2.43	2.71	2.57
石田ゼミ(教員評価・期末)	2.29	2.29	2.14	2.43	2.00	2.00	2.43	2.29	2.14	2.57	2.43	2.43
石田ゼミ(メンバー評価・期末)	2.40	2.12	2.50	2.40	2.26	2.29	2.26	2.26	2.45	2.48	2.36	2.14



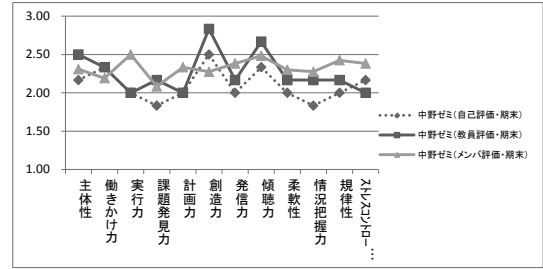
期末 (Fゼミ)

	主体性	働きかけ力	実行力	課題発見力	計画力	創造力	発信力	傾聴力	柔軟性	状況把握力	規律性	ハイレースコントロール力
川戸ゼミ(自己評価・期末)	2.29	2.14	2.14	2.71	2.14	2.00	1.71	2.00	2.14	2.00	2.00	2.14
川戸ゼミ(教員評価・期末)	1.86	1.86	2.14	1.86	2.14	1.86	2.00	2.14	2.00	2.29	2.43	2.00
川戸ゼミ(メンバー評価・期末)	2.21	1.86	2.31	2.36	2.31	2.35	2.19	2.32	2.29	2.26	2.24	2.17



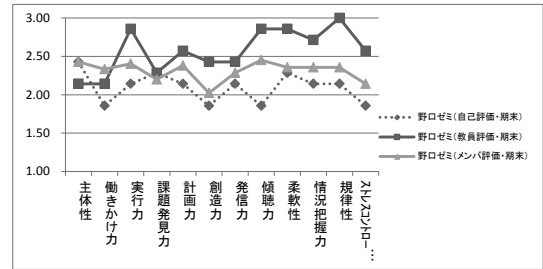
期末 (Gゼミ)

	主体性	働きかけ力	実行力	課題発見力	計画力	創造力	発信力	傾聴力	柔軟性	状況把握力	規律性	ハイレースコントロール力
中野ゼミ(自己評価・期末)	2.17	2.33	2.00	1.83	2.00	2.50	2.00	2.33	2.00	1.83	2.00	2.17
中野ゼミ(教員評価・期末)	2.50	2.33	2.00	2.17	2.00	2.83	2.17	2.67	2.17	2.17	2.17	2.00
中野ゼミ(メンバー評価・期末)	2.31	2.19	2.50	2.08	2.33	2.28	2.38	2.48	2.30	2.28	2.43	2.38



期末 (Hゼミ)

	主体性	働きかけ力	実行力	課題発見力	計画力	創造力	発信力	傾聴力	柔軟性	状況把握力	規律性	ハイレースコントロール力
野口ゼミ(自己評価・期末)	2.43	1.86	2.14	2.29	2.14	1.86	2.14	1.86	2.29	2.14	2.14	1.86
野口ゼミ(教員評価・期末)	2.14	2.14	2.86	2.29	2.57	2.43	2.43	2.86	2.86	2.71	3.00	2.57
野口ゼミ(メンバー評価・期末)	2.43	2.33	2.40	2.20	2.38	2.02	2.29	2.45	2.36	2.36	2.36	2.14



4

2013年度中部圏大学 人材育成チャレンジ報告



2013 年度中部圏大学人材育成チャレンジ報告

1. 大学名 豊橋創造大学

2. 事業を遂行するうえで現在達成しようとしている目標

社会人基礎力養成のための教育改善体制の確立

3. 分類（該当する項目すべてに☑）

- | | | |
|---|--|---|
| <input checked="" type="checkbox"/> アクティブラーニング | <input checked="" type="checkbox"/> インターンシップ | <input type="checkbox"/> 産業界ニーズの把握 |
| <input type="checkbox"/> 地域・産業界との連携 | <input checked="" type="checkbox"/> 学内コンセンサス | <input checked="" type="checkbox"/> 教育組織・体制整備 |
| <input checked="" type="checkbox"/> FD・SD・教職員研修 | <input checked="" type="checkbox"/> 評価 | <input type="checkbox"/> 基礎学力 |
| <input type="checkbox"/> 学生の質の変化 | <input type="checkbox"/> 初年次教育・研修 | <input type="checkbox"/> リーダーシップ |

4. 目標を達成するための課題

社会人基礎力養成に係る教育効果測定（評価）・指導方法を確立し、その実践内容の共有化による整合性ある教育を展開する。また、大学に対する社会的要求を実現するために必要な継続した教育改善を行う体制を確立する。

5. 課題の分析

- ①社会人基礎力養成について組織的な実施方法が未確立である
 - ・現状把握と整理
 - ・評価と指導方法のあり方についての原案作成
- ②社会人基礎力養成の必要性に対する教員意識のばらつきが大きい
 - ・評価と指導方法、および課題の共有
 - ・教育技量の向上
 - ・整合性のある教育の展開
- ③大学に対する社会的要求を実現するための継続した教育改善を行う体制に対する理解・認識不足
 - ・大学教育と社会的要求とのギャップ
 - ・社会的要求の理解と学内共有
 - ・社会的要求を実現するための教育改善に関する知識・情報・経験不足

6. 課題を克服するチャレンジ事項

- ①社会人基礎力養成に係る評価と指導のあり方検討ワーキンググループの設置
 - ・評価と指導方法の現状整理と原案作成（課題①、②、③への対応）
 - ・PROGを用いた定量的評価と具体的活動における学生自身・教員・プロジェクトメンバー間の評価との相違に関する調査、分析（課題①への対応）
 - ・1，2年次のキャリア形成科目における社会人基礎力育成の展開（課題①、②、③への対応）
- ②教育力向上研修会の実施
 - ・事例を中心として育成すべき資質と指導方法の共有（課題②、③への対応）
 - ・主体的学習を引き出す指導方法を実施する上での課題の共有と解決策の検討（課題②、③）
（アクティブラーニングの展開方法やプロジェクト活動の運営方法に関する情報・意見交換）

- ③大学に対する社会的要求を実現するために必要な継続した教育改善を行う体制の確立
- ・社会的要求の把握（課題②、③への対応）
 - ・社会的要求を実現するための教育改善に関する研修会等への参加（課題②、③への対応）
 - ・連携大学における取り組みや効果に関する学内共有（課題②、③への対応）

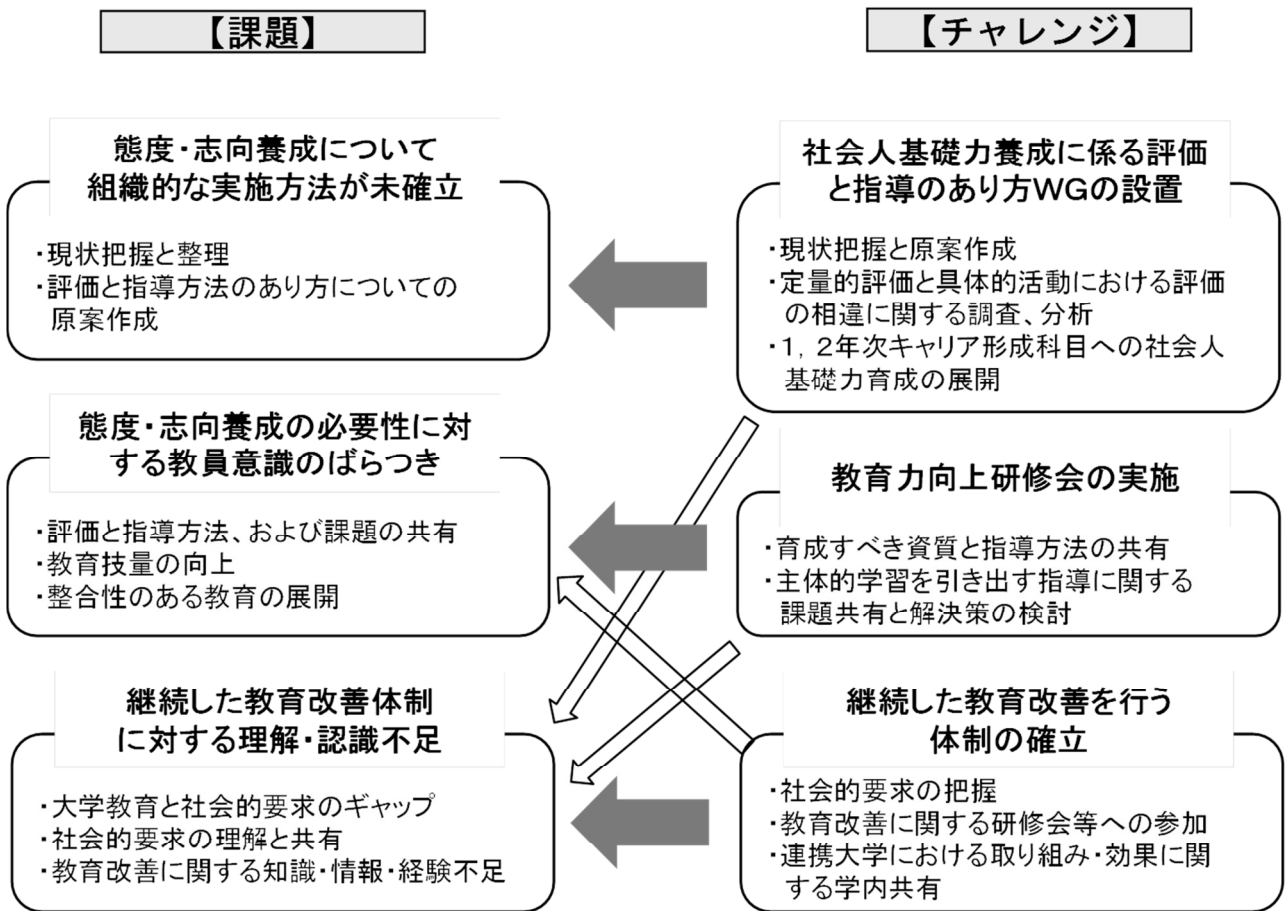
7. 現時点でのチャレンジ実績

- ①社会人基礎力に係る評価と指導のあり方検討ワーキンググループの設置
- ・評価と指導方法の現状整理と原案作成（課題①への対応）
⇒前期に検討し、今後実施、実施結果に基づき内容改訂の予定
 - ・PROGを用いた定量的評価と具体的活動における学生・教員・プロジェクトメンバー間の評価との相違に関する調査、分析（課題①への対応）
⇒継続中
 - ・1, 2年次のキャリア形成科目における社会人基礎力育成の展開（課題①、③への対応）
⇒秋学期に実施予定
- ②教育力向上研修会の実施
- ・事例を中心として育成すべき資質と指導方法の共有（課題②、③への対応）
⇒6月7日に学内で開催した『教育力改革フォーラム』（第1回教育力向上研修会）にて実施済
 - ・主体的学習を引き出す指導方法を実施する上での課題の共有と解決策の検討（課題②、③）
（アクティブラーニングの展開方法やプロジェクト活動の運営方法に関する情報・意見交換）
⇒10月および2月に開催予定の第2回・第3回教育力向上研修会にて実施予定
- ③大学に対する社会的要求を実現するために必要な継続した教育改善を行う体制の確立
- ・社会的要求の把握（課題②、③への対応）
⇒10月および12月に産業界ニーズ把握のための座談会を実施予定
 - ・社会的要求を実現するための教育改善に関する研修会等への参加（課題②、③への対応）
⇒連携FDや研修会に随時参加
 - ・連携大学における取り組みや効果に関する学内共有（課題②、③への対応）
⇒連携FDや研修会参加後に随時学内共有
⇒10月および2月に開催予定の第2回・第3回教育力向上研修会にて共有予定

8. 中部圏産学連携会議等を通して、地域・産業界とともに検討したい課題

社会人基礎力に係る教育効果測定（評価）と指導方法について本学の取り組みを提示し、社会人基礎力のような態度・志向の育成や評価方法はどうあるべきか、ともに考えご意見をいただきたい。

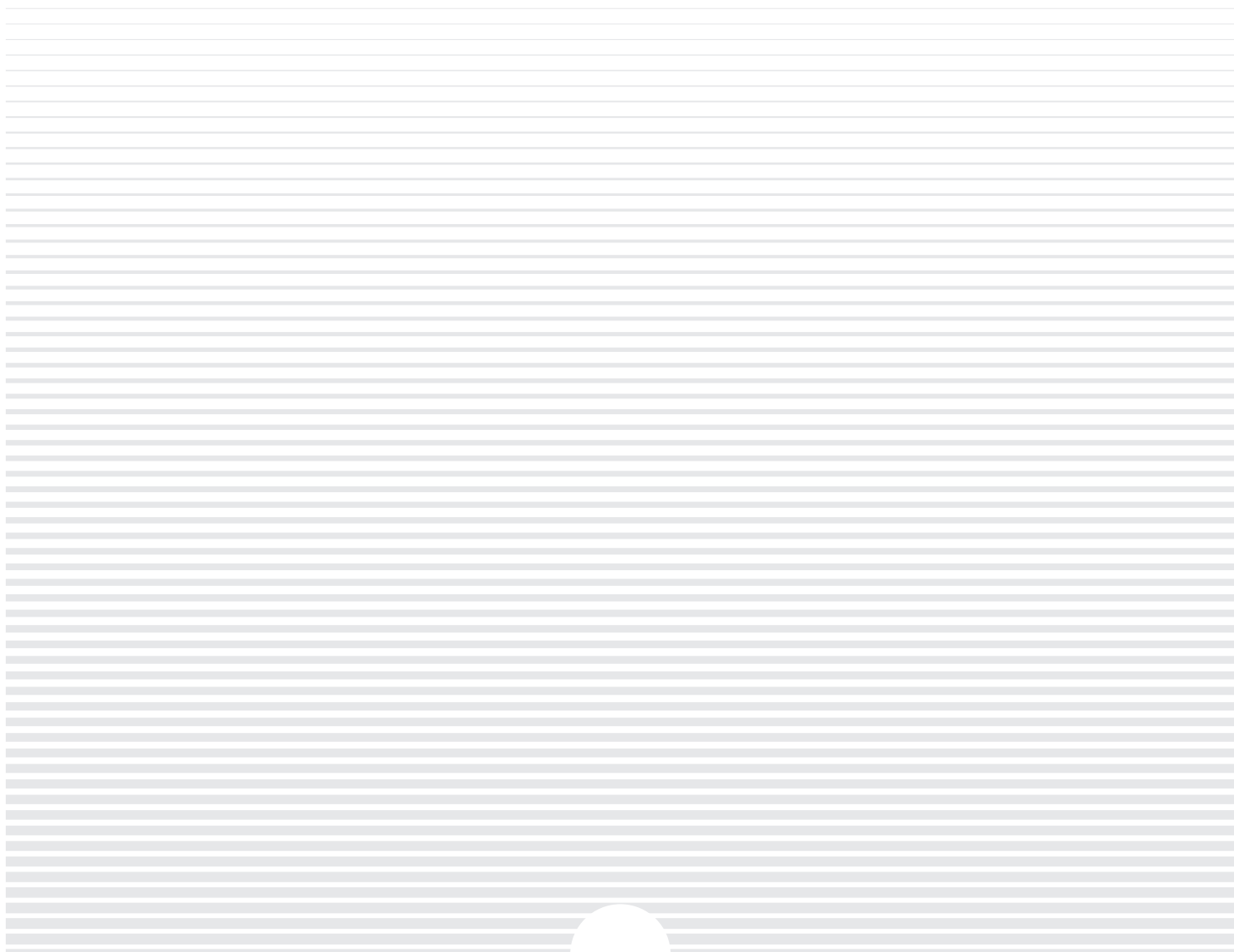
目標：社会人基礎力養成のための教育体制の確立



以上

5

大学教育改革フォーラム
in東海2014 発表資料



大学教育改革フォーラム in 東海2014 発表資料

～ 社会人基礎力養成に係る教育効果測定(評価)と
指導方法のあり方に関する事例発表 ～

豊橋創造大学 経営学部
○森田佐知子/今井正文/山口満/見日喜重/三好哲也

2014/3/18

豊橋創造大学の沿革と教育理念

- * **開学**
- * 昭和58年4月1日 豊橋短期大学開学
- * 平成 8年4月1日 豊橋創造大学開学(経営情報学部)

* 現在の構成

- * 大学院 経営情報学研究科, 健康科学研究科
- * 大学 保健医療学部, 経営学部(情報ビジネス学部)
- * 短期大学部
 - * 幼児教育・保育科, キャリアプランニング科
 - * 専攻科

* 教育理念

- * 「勤・儉・譲」: 創造性豊かで人間味あふれる人格の形
- * **実用的な知識・技能を修得し、実践できる能力育成**

本日のアジェンダ

1. 豊橋創造大学、経営学部の紹介
2. 産業界ニーズに対応した教育改善・充実体制整備事業について
3. 本学における産業界ニーズ事業の取り組み
4. 社会人基礎力養成の教育効果測定(評価)について
5. 社会人基礎力養成の評価実績紹介
6. 社会人基礎力養成に係る教育効果測定(評価)と指導方法のあり方に関する考察

2014/3/18

経営学部の教育目的

◎教育目標

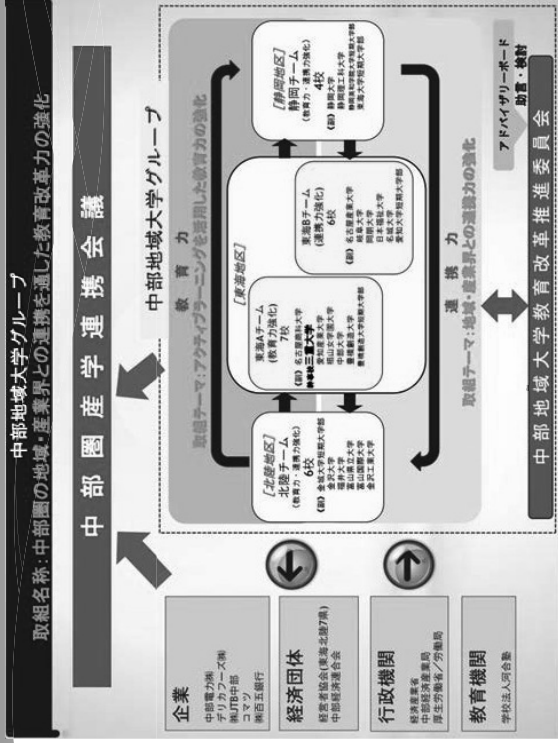
生涯にわたったでの高い就業能力を身につけさせるため、健全な職業観と就業意識を涵養し経営学と情報学の専門知識とスキルを持つ**専門的職業人の育成を目標とする。**

◎ディプロマポリシー

- 1 (知識・理解)
経営、会計・財務についての基礎的専門知識の修得
情報活用に関して基礎的情報処理技術を理解し、活用できる能力の修得
- 2 (思考・判断)
現状を正しく把握し、直面する問題解決のための必要な知識修得
- 3 (意欲・態度)
自律的・積極的に知識探求する意欲と能力
健全な就業観や職業観を持ち、組織の中で協調して活動できる能力

2014/3/18

産業界ニーズに対応した教育改善・充実体制整備



2014/3/13

1. 本学における産業界ニーズ事業の取り組み

(1) 産業界ニーズ事業に取り組む目的

これまでの知識学修に加えて、社会人基礎力に代表される諸能力の評価・指導方法のあり方を検討し、それを定着・継続・改善する教育体制を整備すること

(2) 社会人基礎力養成に対する考え方

社会人基礎力等の態度・志向養成は、独立した科目で養成できるものではなく、入学年次からの不断の教育により実現できる能力であり、カリキュラムとして配置された科目間の連携を通して資質育成に取り組む必要がある。

2014/3/13

1. 本学における産業界ニーズ事業の取り組み

(3) 産業界ニーズ事業実施体制

以下の3つの機能を実行するグループを組織化し、これらの担当教員と事務職員で「地域産業界連携教育力改革プロジェクト(CKP)」とその運営のための委員会を設置して、事業を実施している。(図1参照)

(I) 4つの教育事業

- ①メンタルタフネス講座、②自己理解促進プログラム、③地域企業連携プロジェクト、④三者間協働によるインターンシップ

(II) 教育体制整備・産業界ニーズ把握体制の整備

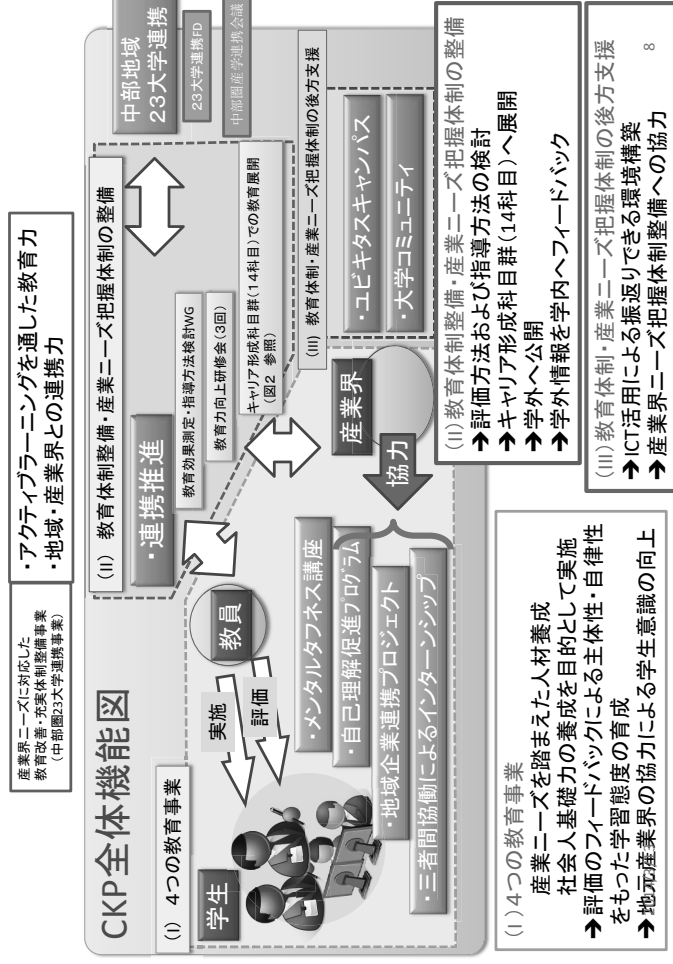
- ①社会人基礎力育成体制の整備
キャリア形成科目群での教育展開、教育効果測定・指導方法検討WG、教育力向上研修会
- ②他大学との連携事業による教育方法の改善

(III) 教育体制・産業界ニーズ把握体制の後方支援

- ①ICT環境整備による学生のICT能力育成と各事業内省環境の整備
- ②大学コミュニティ形成による学生支援

2014/3/13

図1. 地域産業界連携教育力改革プロジェクト(CKP)全体機能図



8

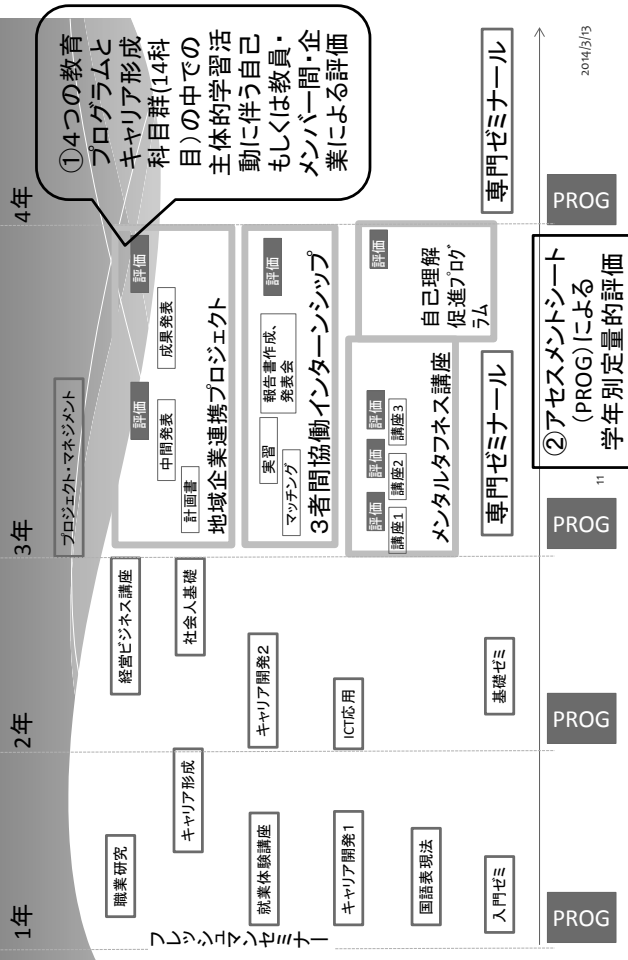
1. 本学における産業界ニーズ事業の取り組み

図2. 社会人基礎力養成のための学習マップ ～キャリア形成科目群(14科目)と4つの教育プログラム 他～

	1年	2年	3年	4年
職業観・就業観養成	職業研究(春学期) キャリア形成(秋学期) 就業体験講座 (企業見学3回)	経営ビジネス講座 (秋学期)	インターンシップ	
就業基礎能力	キャリア開発1 (春学期) 国語表現法 (春学期)	キャリア開発2 (春学期) 社会人基礎 (春学期)	メンタル・タフネス講座 (年3回)	
協働活動力 (グループ活動)	フレッシュマン セミナー	ICT応用(秋学期)	プロジェクト・マネジメント	
意気形成力 (少人数教育)	入門ゼミ (通年)	基礎ゼミ (通年)	プロジェクト実習 (通年)	専門ゼミ (通年)
キャリアセンター 学生支援	進路就職面談		インターンシップのサ ポート 就職ガイダンス	就職活動支援

※赤字はキャリア形成科目群(14科目)

図3. 経営学部における社会人基礎力養成の過程
(評価のタイミング)



3. 社会人基礎力養成の教育効果測定 (評価)について

(1) 評価の目的

- 社会人基礎力に代表される態度・志向を養成する教育体制を確立すること。
- 評価を学生にフィードバックし、内省する機会を通して資質育成を行うこと。
※学生の態度・志向に対する対外的評価を行うことを目指しているわけではない。

(2) 評価方法

- ① 4つの教育プログラムとキャリア形成科目群(14科目)の中の主体的学習活動に伴う自己もしくは教員・メンバー間・企業による定性的・主観的評価と②アセスメントシート(PROG)による学年別定量的・客観的評価

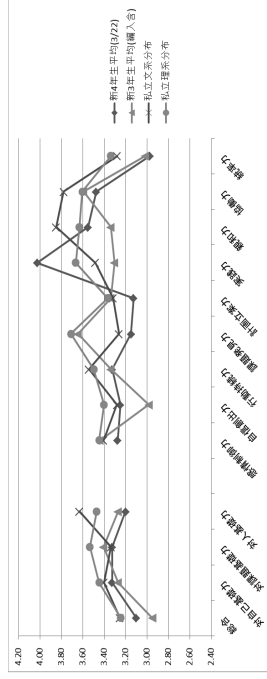
(3) 評価の時期

図3. 経営学部における社会人基礎力養成の過程(評価のタイミング)参照

4. 社会人基礎力養成の評価実績紹介

(1) 平成24年度の評価結果と考察

- ① 4つの教育プログラム受講後の4年生は実践力が高い。
⇒ 活動を伴う学習による教育効果と考えられる。
- ② PROGの項目間における相関が高い。
⇒ 社会人基礎力が高い学生は総合的によりの項目も高い。
- ③ 平成25年度の評価は3月末のため、教育効果測定は今後実施予定。



4. 社会人基礎力養成の評価実績紹介

4-2. 地域企業連携プロジェクトにおける評価

(1) 概要

地域企業連携プロジェクトにおける評価は、評価シートを利用した4者による多面的・定量的な評価を実施している

(学生+指導教員+プロジェクトメンバ+企業)

※平成25年度より、プロジェクトの中間発表後、成果発表後の2回実施

(2) 実施方法

- 自己、教員、メンバが評価を記入
- 評価結果を見て学生が内省する
- 学生と教員の面談(気づきの促進)
- 評価結果・面談結果を踏まえた行動計画を作成

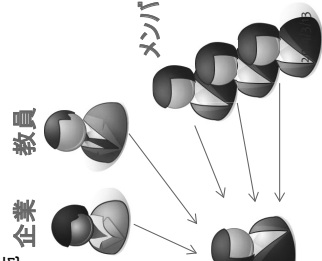
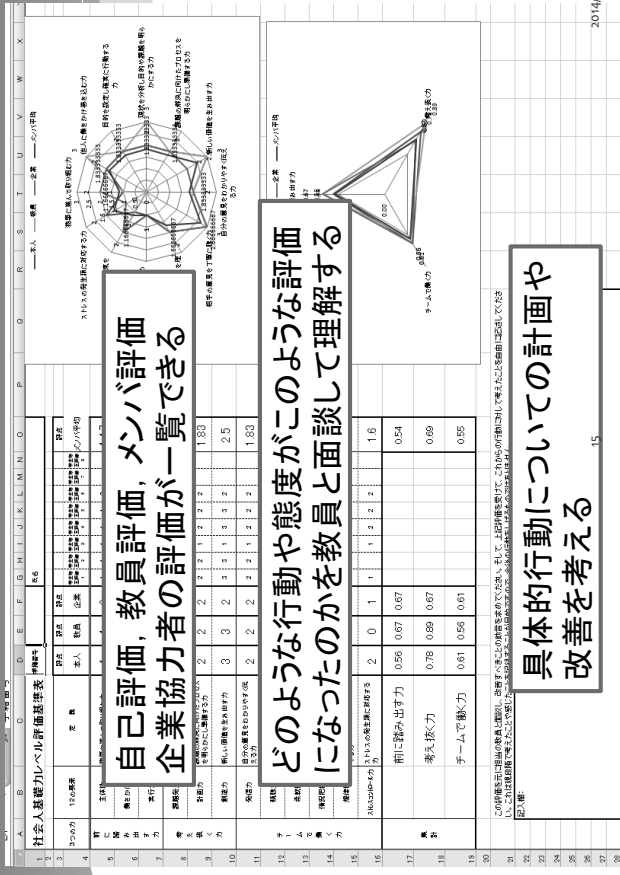


図4. 社会人基礎力評価シート①

12の要素	定義	自己評価	企業	教員	メンバ平均
主体性	物事に進んで取り組み力				
働きかけ力	他人に働きかけ巻き込む力				
実行力	目的を設定し確実に行動する力				
課題発見力	現状を分析し目的や課題を明らかにする力				
計画力	課題の解決に向けたプロセスを明らかにし準備する力				
創造力	新しい価値を生み出す力				
発信力	自分の意見をわかりやすく伝える力				
傾聴力	相手の意見を丁寧に聴く力				
柔軟性	意見の違いや立場の違いを理解する力				
情況把握力	自分と周囲の人々や物事との関係性を理解する力				
規律性	社会のルールや人との約束を守る力				
ストレスコントロール力	ストレスの発生源に対応する力				

3段階評価
1 : できなかった
2 : なんとかできた
3 : できた

図5. 社会人基礎力評価シート②



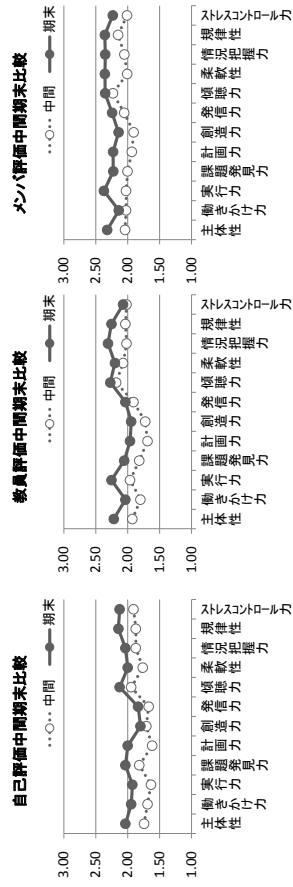
4. 社会人基礎力養成の評価実績

4-2. 地域企業連携プロジェクトにおける評価

(3) 平成25年度の評価結果と考察

①どの力も中間から期末にかけて向上している。

⇒プロジェクト活動を中心とした教育の効果が認められる



4. 社会人基礎力養成の評価実績

4-2. 地域企業連携プロジェクトにおける評価

(3) 平成25年度の評価結果と考察

②相対的な向上の程度を比較すると、効果が出やすい能力とそうでない能力がある。

3者の評価における向上率の上位3つは以下の通り。

評価者	1位	2位	3位
自己評価	計画力	実行力	主体性
教員評価	計画力	主体性	実行力
メンバ評価	実行力 柔軟性	計画力 状況把握力	主体性

17

2014/3/18

4. 社会人基礎力養成の評価実績

4-2. 地域企業連携プロジェクトにおける評価

(3) 平成25年度の評価結果と考察

③教員間で評価のバラツキが見られた。

中間から期末にかけての評価の推移には以下の3つの形状パターンが見られた。

パターン (A)	どの力も中間から期末にかけて大きく向上する
パターン (B)	多くの力において中間よりも期末の方が低下する
パターン (C)	全体的には期末にかけてやや向上するが項目によってばらつきがある

⇒ 教員にフィードバックすることにより、各教員が客観的に自らの評価の振り返りができる

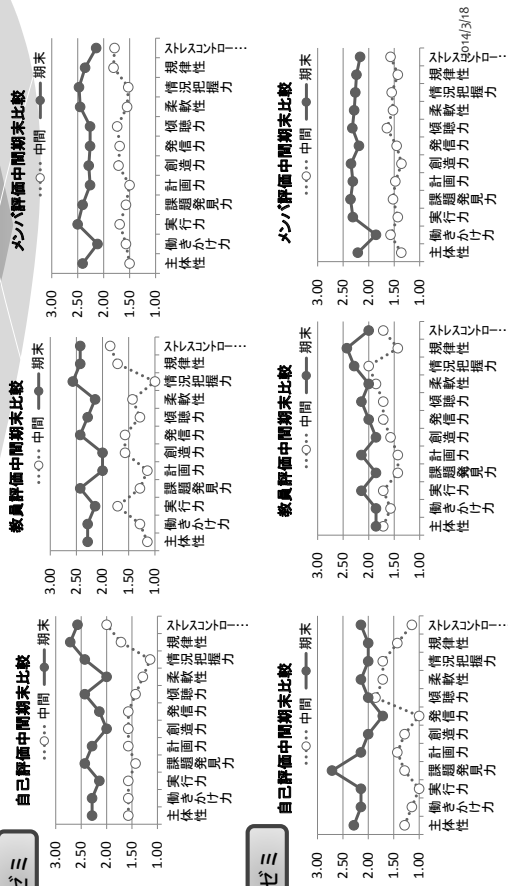
2014/3/18

4. 社会人基礎力養成の評価実績

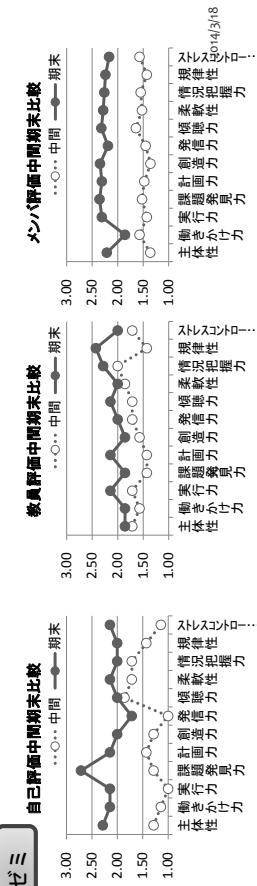
4-2. 地域企業連携プロジェクトにおける評価

パターン(A) どの力も中間から期末にかけて大きく向上する(Aゼミ、Bゼミ)

Aゼミ



Bゼミ

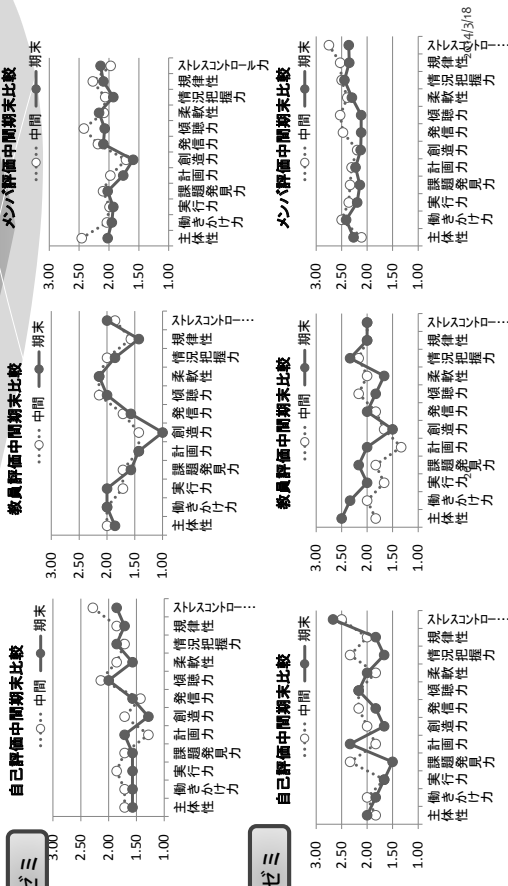


4. 社会人基礎力養成の評価実績

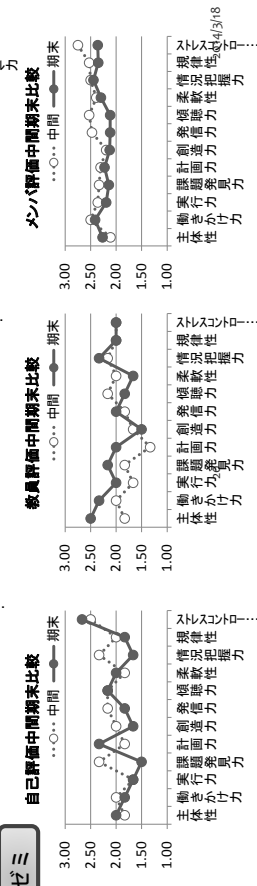
4-2. 地域企業連携プロジェクトにおける評価

パターン(B) 多くの力において中間よりも期末の方が低下する(Cゼミ、Dゼミ)

Cゼミ



Dゼミ

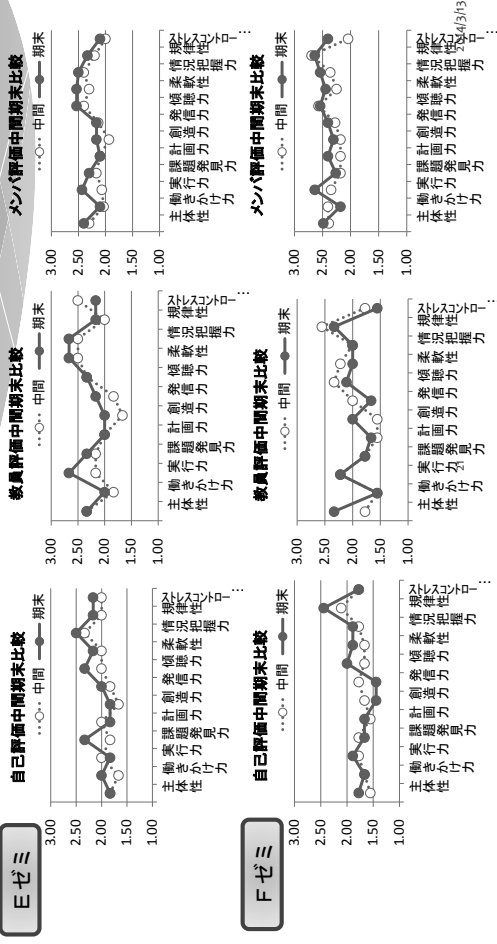


4. 社会人基礎力養成の評価実績

4-2. 地域企業連携プロジェクトにおける評価

パターン(C) 全体的には期末にかけてやや向上するが

項目によっては期末にばらつきがある(Eゼミ、Fゼミ、Gゼミ、Hゼミ)

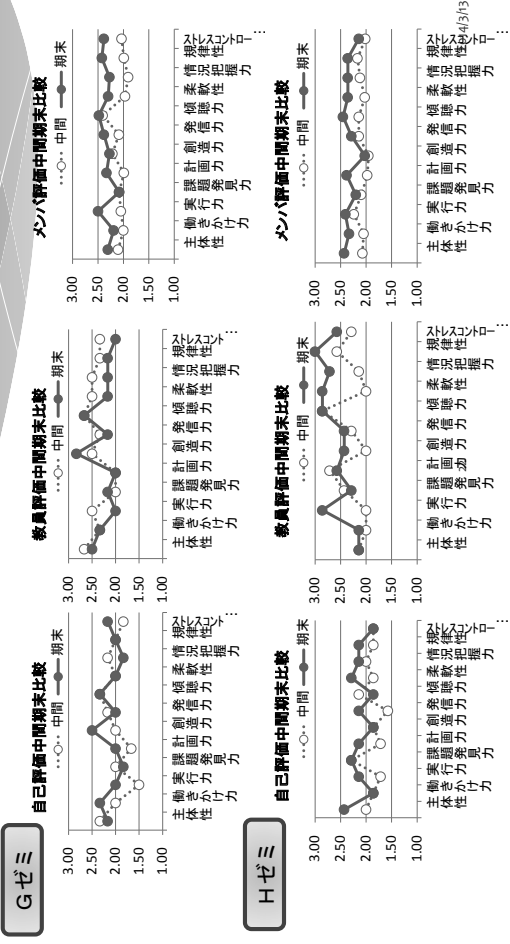


4. 社会人基礎力養成の評価実績

4-2. 地域企業連携プロジェクトにおける評価

パターン(C) 全体的には期末にかけてやや向上するが

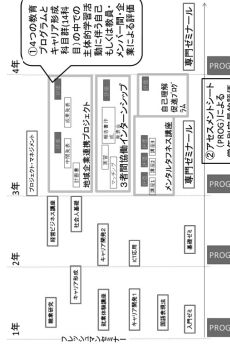
項目によっては期末にばらつきがある(Eゼミ、Fゼミ、Gゼミ、Hゼミ)



5. 社会人基礎力養成に係る教育効果測定 (評価)と指導方法のあり方に関する考察

(1) キャリア形成科目群(14科目)と4つの教育プログラムによる入学年次からの養成について

- ✓ 各科目における育成および評価方法については、担当教員により異なっている。
- ✓ 各科目における評価は期末に実施されているが、社会人基礎力養成体系全体の定量的・客観的評価指標としているPROGについては平成25年度の実施が3月のため経年推移については今後分析予定。



考察と今後の課題

平成25年度の各科目の評価結果およびPROGの経年推移(平成24年から平成25年)を調査分析し、現在の学習カリキュラムの教育効果を確認する必要があります。

5. 社会人基礎力養成に係る教育効果測定 (評価)と指導方法のあり方に関する考察

(2) 各科目・プログラムにおける定性的・主観的評価とPROGによる学年別定量的・客観的評価について

- ✓ PROGの結果と、地域企業連携プロジェクト活動における評価結果について相関関係を調査したところ、2つの評価の間に相関関係はなかった。
- ✓ PROGの評価結果の項目間および地域企業連携プロジェクト活動における社会人基礎力評価結果の項目間には高い相関がみられた。

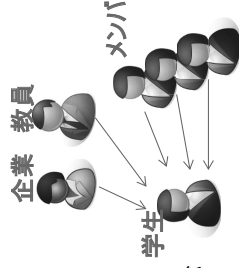
考察と今後の課題

学生に対して、フィードバックされたそれぞれの評価結果がどのような意味合いを持つのか十分に説明し、評価結果を以降の自己成長につなげるよう促すことが重要。

5. 社会人基礎力養成に係る教育効果測定 (評価)と指導方法のあり方に関する考察

(3) 他者評価も含めた評価のフィードバックと内省の 効果について

- ✓ 他者評価も含めた評価を学生にフィードバックすることにより、不足している点を学生が自分自身で認識し、具体的な行動改善に繋げることができた。
- ✓ 評価をフィードバックすることにより、学生と教員間での「社会人基礎力」に対する認識を共有化することができた。
- ✓ 学部全体の評価結果を教員にもフィードバックすることにより、教員自身も評定の付け方について振り返りを行うことができた。

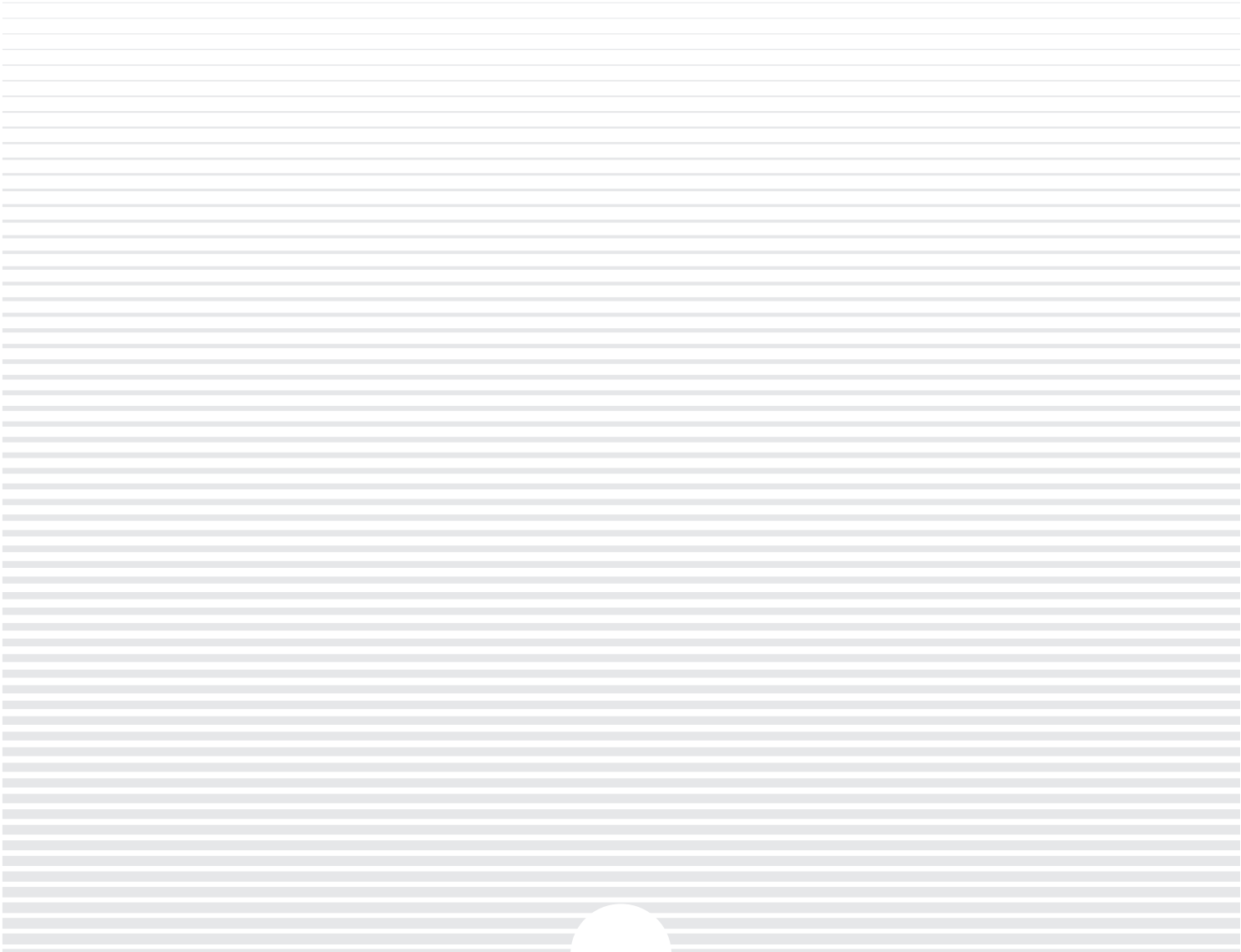


考察と今後の課題

教員間の評価基準・方法のばらつきをどう捉えるか、また養成が難しい力の育成方法について検討していく必要がある。

6

プロジェクト活動 協力企業・団体一覧

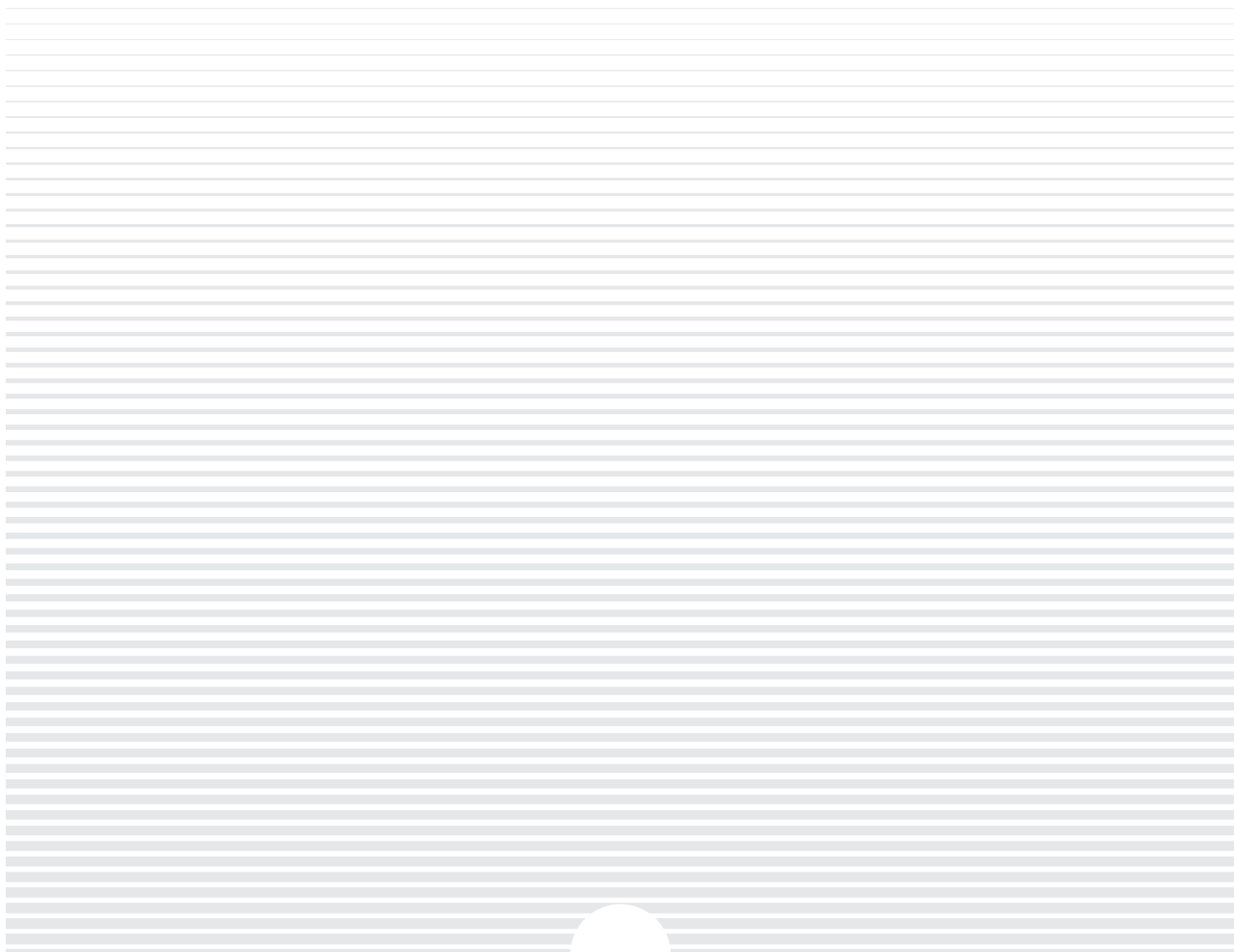


(株)アイエスエル
愛知県立犬山高等学校
(株)S R A 中部事業所
お亀堂
絹一製菓(株)
ココット
(株)サンヨネ
J A豊橋
大正軒
高橋農園
豊橋観光コンベンション協会
豊橋市教育委員会
豊橋市環境部環境保全課
豊橋市企画部政策企画課
豊橋市企画部シティープロモーション推進室
豊橋総合動植物公園
豊橋みどりの協会
豊橋市立松山小学校区子ども会
豊橋鉄道(株)
特定非営利法人 ワライフ
藤ノ花女子高等学校
(株)ほの国百貨店
ボンとらや
マッターホーン
若松園
ワルツ

(敬称略順不同)

7

各種発行パンフレット



プロジェクト活動報告

豊橋市の「下町」の活性化と地域産業の発展を促進する

地域産業界連携 教育力改革プロジェクト

地域産業界連携 教育力改革プロジェクト

事業推進責任者 佐藤勝尚

「産業界のニーズに対応した教育改善・充実体制整備事業」は、三重大学を代表校とした中部圏23大学による「アクティブラーニング」を通じた教育力および「地域・産業界との連携力」を通じて、教育改革力を強化する取組である。本学経営学部ならびに短期大学部キャリアプランニング科は、東海4チームに属して幹事校と副幹事校からなる中部圏地域大学教育改革推進委員会の調整のもと、連携FDを通じて教育改革の実践進捗で生まれる成功と失敗を共有しつつ教育力向上、中部圏産業界連携会議を通じて大学が育成しようとする資質・地域・産業界のニーズに関する対話を進め、また、その地域・産業界のニーズに対応した能力を育成するため、学生参加型授業、共同学習、課題解決学習やPBLなどを教育現場に取り入れ、就業力に関わる学生の能動性を高める改革を進めるとともに社会現場での実践教育としてのインターンシップを高度化するものである。

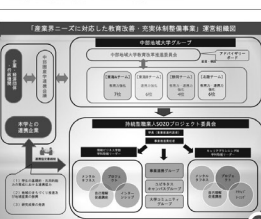
現在、大学における人材育成と産業界のニーズとのギャップについて、最も指摘される点の1つは「学生の主体性・創造性の欠如」である。これは、企業人として求められる仕事に出来ず、仕事上の問題点を自ら発見し、目的を設定し、仮説を立て、創造的に解決していくという社会人として必要な姿勢が欠如している状態である。この問題は学生の能力が欠如しているのではなく、彼らがこれまでの人生経験において目的を持って主体性と創造性を発揮する機会が十分に獲得できなかったことと考えられる。大学全人時代において各大学の学生ポテンシャルに厚みのある中、学生が「自らの力」で主体的に活動する機会や、創造的に物事を解決する経験が減少していることが原因として推測される。この問題に対応するため、本学では「大学生の教育力向上支援事業」として、これまで情報ビジネス学部・経営学部と短期大学部キャリアプランニング科が共同で取り組んできた「持続型職業ASOZOプロジェクト」を発展させ、右記①～④を柱とした事業展開を進め、学生の総合的な「就業力」の育成を図るものである。

今回のプロジェクト活動報告書では、本事業のうち平成25年度に下記③にある「地域企業・組織と連携したプロジェクト体験」に実施した学部・短大それぞれがプロジェクト活動の内容について報告する。最後に、この事業にご理解・ご協力いただいた地元団体企業各位をはじめ、関係各位に御礼を申し上げます。

豊橋創造大学・豊橋創造大学短期大学部

地域産業界連携教育力改革プロジェクト

- ①メンタルケア講座の正規科目化への取り組み
- ②自己理解促進のための採用面接の疑似体験（バーチャル人事体験）
- ③地域企業・組織と連携したプロジェクト体験
- ④学生・連携大学、地元企業を含めた3者間の協働によるインターンシップ実修（学）とアクティブラーニングの手法を使った教育実践の共有（共有）



- ①メンタルケア講座の正規科目化への取り組み
- ②自己理解促進のための採用面接の疑似体験（バーチャル人事体験）
- ③地域企業・組織と連携したプロジェクト体験

- ④学生・連携大学、地元企業を含めた3者間の協働によるインターンシップ実修（学）とアクティブラーニングの手法を使った教育実践の共有（共有）

プロジェクト活動報告 ～プロジェクト活動を通じた社会人基礎力の育成～

経営学部経営学科長 三好哲也

社会人基礎力は、「職場や地域社会で多様な人と仕事をし、必要な基礎的な力」として求められる能力要素である。主体性、課題発見力、発信力、傾聴力などの能力要素を「前向きな姿勢」「考え抜く力」「チームで働く力」の3つの能力要素としてまとめられている（下表参照）。これらの能力要素は、社会での活動を通じて醸成されるものであるが、産業界のニーズとして大学や短期大学の卒業時に基礎的な能力を持つ人材が求められている。

地域産業連携プロジェクトでは、企業をはじめとする外部組織と学生がプロジェクトチームを組んで、独自性と有期性のあるプロジェクトに取り組んでいる。企画・進捗管理・報告といった4段階のプロセスを踏まえた実践を通じて、社会人として必要とされる主体性、計画力、状況把握力、発信力の諸能力を養成する。参加する学生は、プロジェクトメンバーとして企業から仕事の水準での助言や指示を受けて役割を担い、それに基づいて主体的に行動できる力の育成を目的に教育を展開し、H25年度は大学および短期大学部でそれぞれ8つのプロジェクトを実施。地元団体企業各位をはじめ関係各位にお礼申し上げます。今後も、ご協力をお願い申し上げます。

図表 3つの能力 / 12の能力要素

3つの能力	12の能力要素	内容
前に踏み出す力 (アクション)	主体性	物事に進んで取り組む力
	働きかけ力	他人に働きかけ巻き込む力
	実行力	目的を設定し、果敢と行動する力
考え抜く力 (シンキング)	課題発見力	現状を分析し、目的や課題を明らかにする力
	計画力	課題の解決に向けたプロセスを明らかにし準備する力
	創造力	新しい価値を生み出す力
チームで働く力 (チームワーク)	発信力	自分の意見をわかりやすく伝える力
	傾聴力	相手の意見を丁寧に聴く力
	柔軟性	意見の違いや立場の違いを理解する力
	状況把握力	自分と周囲の人々や物事との関係性を理解する力
	規律性	社会のルールや人との約束を守る力
	ストレスコントロール力	ストレスの発生源に対応する力

出典：経済産業省「社会人基礎力」

SOZO 豊橋創造大学

●情報ビジネス学部 キャリアデザイン学科 ●経営学部 経営学科 ●短期大学部 キャリアプランニング科
〒440-8511 豊橋市豊橋町中町1丁目20-1 地域産業界連携教育力改革プロジェクトセンター (外部部キャリアセンター内)
TEL 050-2017-2104 (直線) FAX 050-2017-2112 (直通) インターネット [URL] http://www.soza.ac.jp/ [E-mail] gpa@ml.soza.ac.jp



プロジェクト活動

1 食の伝達「大学生コックさんのクッキング教室(こどもクッキング)」プロジェクト活動報告

担当教員: 朝倉 由美子 協力: 豊橋市こども未来課、ココロ

近年の食環境の変化で加工品や中食、外食が増え、家庭で食事を作ることが減り、家庭での料理の伝承(食育)も薄れていると思われる。そこで、子どもの頃から食事を自分で作る楽しさや必要性を学び、技術を身につけて家庭で調理した食事を家族と共に楽しみたい。そこで、調理師コースの本プロジェクトの学生は学んだ調理理論や技術と料理を作る際の段取りを外部に発信することを通じて、料理の楽しさを伝えるとともに、コミュニケーション、技術指導力、全体に気を配る心を育成するために、小学生対象のクッキング教室を実施している。本年度は14回実施することができ、毎回担当する部門を変えて常に緊張感の中で主体性を発揮して実行する力を育成することができた。今後も継続して行う予定である。

2 女子力を活かした路面電車の企画提案

担当教員: 伊藤 圭一 協力: 豊橋鉄道株式会社、豊橋市役所都市交通課

路面電車の企画には女子学生の参加できる企画がないのはなぜかという疑問から始まった企画です。変な企画でも構わないので、企画の企画を自分で行う楽しさや必要性を学び、技術を身につけて家庭で調理した食事を家族と共に楽しみたい。そこで、調理師コースの本プロジェクトの学生は学んだ調理理論や技術と料理を作る際の段取りを外部に発信することを通じて、料理の楽しさを伝えるとともに、コミュニケーション、技術指導力、全体に気を配る心を育成するために、小学生対象のクッキング教室を実施している。本年度は14回実施することができ、毎回担当する部門を変えて常に緊張感の中で主体性を発揮して実行する力を育成することができた。今後も継続して行う予定である。

3 豊橋の特産品「うすら」をキーワードとしてプロジェクト活動を展開する

担当教員: 今泉 仁志 協力: 豊橋市農産部農業課

プロジェクト活動のテーマ選定は、毎年恒例行事である。iPadで、あれこれ検索するも、現在の「ゆるキャラ」ブームの中、豊橋市のゆるキャラを見つけた学生がいた。なかでも「うすら」は、自らも、誰かにも知られていない、これを取り上げようという話になり、「うすら」を中心に、どんな活動ができるのか議論を進めていった。具体的活動は、「ゆるキャラ」や「うすら」について学習し、動画で「うすら」の魅力を伝える動画を制作し、「うすら」を大学構内に設置することとした。学内での水戸展開として、調理師コースの学生に「うすら」を使ったレシピを提案してもらった。「ココロ」で開催している「大学生コックさんのこどもクッキング教室」(うすら)を使った料理を採り上げてもらった。

4 お茶入門プロジェクト

担当教員: 木下 賢律子 協力: ココロ茶業、茶園茶舗

調理師フードコーディネーターの資格取得を目指す学生として「茶の知識」を身につけることは、今後社会人になってからも、役立つと考えるのでこのテーマを選択した。活動内容は「豊橋市内の茶園農家が開催する「お茶作り体験」に参加して、茶摘みから製造までの工程を体験する。②おいしいお茶の淹れ方を学ぶ。③日本茶の専門店に足を運び、煎茶・抹茶等についてレクチャーする。④学園で、茶葉を使った作品展示及びカフェを開催する。」などである。学生達は、茶の歴史や健康効果も学ぶと共に、煎茶・抹茶・紅茶の3グループに分かれて、それぞれの茶園についての研修やお茶を使ったお菓子作りにも取り組むことができた。今回は、本プロジェクトで得た知識をコミュニケーションツールとして役立てながら、豊かな人間関係を築いていく。

防犯プロジェクト

5 防犯プロジェクト

担当教員: 中島 剛・細谷 邦夫 協力: 豊橋警察署生活安全課

働く意欲と意欲の向上を目指して、「人と人のつながり、絆を大切に、社会に貢献する学生生活を送るために、自分たちが何ができるか」を考え、先輩たちが発足したボランティアチームCTS(Clean Team SOZO)の活動を継承した。活動は、月に一度の地域巡回と豊橋警察署と連携した駅前のキャンペーン活動が主であったが、学内の自転車検閲点検や、少年立ち寄り支援行事などにも参加した。地域巡回やキャンペーン活動は、最初戸惑っていたが、大きな声を出して活動する姿が見られた。活動の中で、行事に参加したボランティア団体の方との交流も積極的に行われた。また、CTS防犯活動に対し、豊橋警察署から感謝状をいただき、学生たちも自分たちの活動に自信を持つことができた。(中島 剛)

細谷 邦夫は、CTSでの活動を広報する目的でCTSホームページを作成しました。当初は東三河でのイベントを盛り込むつもりでしたが、まずは自分たちの活動を知ってもらうことから始めました。授業で習ったことを思い出しながら作成しましたが、いざ作ると意外と難しく、ブラウザで出た上り方を確認してみるとイメージと違ったりして悪戦苦闘の末出来上がりになりました。プロが作る物は程よい出来栄でしたが、私たちの活動を知って貰うきっかけになると嬉しく思います。(細谷 邦夫)

秋葉道・木の駅プロジェクトへの企画・調査協力

6 秋葉道・木の駅プロジェクトへの企画・調査協力

担当教員: 花岡 朝明 協力: 特定非営利活動法人 穂の国森林療育事務所

本プロジェクトは新城市野地区で行われている秋葉道・木の駅プロジェクトの企画調査協力をテーマに1年間活動してきました。この木の駅プロジェクトとは、日本国内の様々な地域で展開されており、広域で森林の整備やこれら地域資源を活用した地元経済の活性化を目的とした事業(社会実験)です。今回、花岡先生プロジェクトでは、①新事業等の企画提案、②地域連携(アキハル)の利用実験への参加、③プロジェクト発信(木の駅ニュース)の記事作成とそのための商店街調査と1つ3つの活動を行いました。新企画としては、学生提案のアイデアが採用され、11月に地元小学生を対象とした森林教育の体験事業としてスタートしました。また、地域資源の利用実験や「お店紹介」記事の取材で地元商店街の方々との交流も進められました。

We ♥ Rose プロジェクト ～バラ生産農家と提携した青いバラの制作と販売～

7 We ♥ Rose プロジェクト ～バラ生産農家と提携した青いバラの制作と販売～

担当教員: 村松 史子 協力: Watanabe Rose Nursery 浜島農園

地域産業界連携教育力改革プロジェクトの取り組みは、田原市の花農家と連携して実施しました。花農家の方との顔合わせを行い、常に情報交換できる体制を学生が考えました。花農家の見学を実施してからメンバーの取り組みに変化が現れました。学園における「バラ」の販売に向け、自ら行動する取組が開始されました。しかし、学園祭目前に花農家から台風被害に会い、毎年作成される「青いバラ」の制作が出来ませんでした。一時は、販売できると楽しみにしていたが、花農家のご尽力で美しい「青いバラ」が作られました。利益が得られるように販売価格を設定し、販売利益と学園祭で集められた方からの義捐金を加え、連携先の「農家」にプロジェクトを締めくくりました。

文部科学省の平成24年度新事業「産業界のニーズに対応した教育改善・充実体制整備事業」(本事業は、産業界のニーズに対応した人材育成の取組を行う大学・短期大学が地域ごとに関連の企業、経済団体、地域の団体や自治体等と産学連携のための連携協議を形成し取組を実施することにより、社会的・職業的に自立し、産業界のニーズに対応した人材の育成に向けた取組の充実が図られるよう、国として財政支援を行うことにより、幅広い職業人材育成に比重を置く大学の機能分化に資することを目的としています。)において、豊橋創造大学及び7都府県産学連携推進協議会(中部圏)の23大学が連携し取組む「中部圏の地域・産業界との連携を促進した教育改善力の強化」が決定されました。

大学グループと地域・産業界との連携の趣旨

中部圏23大学(短期大学を含む)以下(中部圏大学グループ)は、これまで大学独自で学生の社会的・職業的自立を目指して、入学から卒業までの間を通じた全学的かつ体系的な取組を行う体制整備を進めるとともに、教育の質保証を目的として教育理念に基づいた学力の検定を進めてきました。この過程で、大学間で、キャリアデザインが整備され、教育改善を本格的に進める体制が整ってまいりました。一方で、従来の教育改善の議論が、大学内における教職員間にとどまっていたために、「育成すべき資質」が、真に地域・産業界のニーズに合ったものであるか、大学側の十分な教育で育てる状況であったか、検討されていませんでした。

そこで、中部圏大学グループは、上記の共通認識のもと、相互に連携し、地域・産業界と積極的に対話を進めることを通じて、大学の教育理念を尊重しつつ、地域・産業界が学生に求める資質として提示している「前に踏み出す力」、「考え抜く力」、「チームで働く力」に合致する人材を送り出すための現実的な教育改善力の強化を図ることを目標に定める連携することになりました。



大学グループの構成

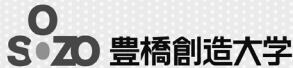
中部圏大学グループは、大学が教育改善のチャレンジを行う過程で失敗も財産であるとし、中部圏の地域・産業界のもの質を追求する姿勢を、教育現場に適用するために、積極的な対話と連携をすすめています。各大学が、地域に根ざしつつ「チームで働く力」を発揮するためには、より小さな単位による相互作用が機能的です。これらのチームは、地域に根ざした連携FDの企画単位であり、成果や失敗を共有する単位と見られ、動機付けは、中部圏大学グループが一体となって実施するものです。

東海Aチーム	東海Bチーム	静岡チーム	北陸チーム
アクティブラーニングを活用した教育力強化に取組を行う。	地域・産業界との連携力強化に取組を行う。	静岡圏を軸として教育力・連携力の強化を図る。	北陸地方を軸として教育力・連携力の強化を図る。
<ul style="list-style-type: none"> *名古屋経済大学 *三重大学 *豊田大学 *岐阜学院大学 *中部大学 *豊橋創造大学 *豊橋創造大学短期大学部 	<ul style="list-style-type: none"> *名古屋産業大学 *岐阜大学 *西田大学 *日本福祉大学 *名城大学 *愛知大学短期大学部 	<ul style="list-style-type: none"> *静岡大学 *静岡理工科大学 *静岡法科大学 *東海大学短期大学部 	<ul style="list-style-type: none"> *金城大学短期大学部 *金沢大学 *福井大学 *富山県立大学 *富山国際大学 *金沢工業大学

*大学グループの幹事校は三重大学。下欄はチームを代表する副幹事校

●経営学部 経営学科

〒440-8511 愛知県豊橋市川町1-20 F201 教務部教課
TEL.050-2017-2102(直通) FAX.0532-55-0803
インターネットURL http://www.sozo.ac.jp/



平成25年度「キャリア形成」活動報告

産業界ニーズの把握と学生の就業観育成

事業推進責任者/経営学部長 佐藤 勝尚

「産業界のニーズに対応した教育改善・充実体制整備事業」は、三重大学を代表校とした中部圏23大学による「アクティブラーニングを通じた教育力」および「地域・産業界との連携力」を通して、教育改善力を強化する取組である。本学情報ビジネス学部/経営学部は、東海Aチームに属して幹事校と副幹事校からなる中部圏大学教育改善推進委員会の調整のもと、連携FDを通して教育改善の実践過程で生まれる成功と失敗を共有しつつ教育力を高め、中部圏産学連携会議を通して大学が育成しようとする資質と地域・産業界のニーズに関する対話を行うものである。また、その地域・産業界のニーズに対応した能力を育成するため、学生参加型授業、共同学習、課題解決学習やPBLなどを教育現場に取り入れ、就業力に関わる学生の能動性を高める改革を進めるとともに社会現場での実践教育としてのインターンシップを高度化するものである。

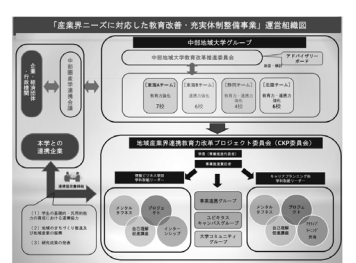
現在、大学における人材育成と産業界のニーズとのギャップについて、最も指摘される点の1つは「学生の主体性・創造性の欠如」である。これは、企業入社後において、与えられた仕事が出来ない、仕事上の問題点を自ら発見し、目的を設定し、仮説を立て、創造的に解決していくという社会人として必要な姿勢が欠如している状態である。この問題は学生の能力が欠如しているのではなく、彼らがこれまでの人生経験において目的を持って主体性と創造性を発揮する機会が十分に備わっていないことにあると考えられる。大学全入時代において各大学の学生サポートが非常に手厚くなる中、学生が「自らの力」で主体的に活動する機会や、創造的に物事を解決する経験が減少していることが原因として推測される。この問題に対応するため、本学では「大学生の就業力育成支援事業」として、これまで情報ビジネス学部/経営学部が取

り組んできた「特種型職業人SOZOプロジェクト事業」を展開させ、以下の4事業を柱とした事業展開を進め、学生の総合的な「就業力」の育成を図るものである。

今回の「キャリア形成活動報告」では、本事業のうち産業界ニーズの把握と学生の就業観の育成を目的として実施している新課科目「キャリア形成」の講義をダイジェストして報告する。「キャリア形成」は、本学の卒業生を含むさまざまな分野で働く先輩たちを教室にお招きし、仕事の楽しさや難しさ、就職時の思いなどを語っていただく講義形式の授業であり、今回の活動報告では、平成25年度に実施したゲスト講師8名の講義内容について報告する。

「地域産業界連携教育力改革プロジェクト」

- ①メンタルタフネス講座の正規科目化への取り組み
- ②自己理解促進のための採用面接官の疑似体験(バーチャル人事体験)
- ③地域企業 相触れと連携した プロジェクト体験
- ④学生、連携大学、地元企業を含めた3者間の協働によるインターンシップ実施



1年次開講科目「キャリア形成」のねらい

担当教員/経営学部 准教授 加藤 尚子

1年次開講科目「キャリア形成」は、様々なキャリアを知ることで、学生1人ひとりの選択の幅、物の見方が更新されることを目的として運営されている。ここでは、さまざまなキャリアを歩んできている人材と接する機会として外部講師による講演を提供し、彼らがどのようなキャリアを歩んできているのか、キャリア発達という輪のもと、提示している。



外部講師による講演前にはキャリアとは何か、キャリア発達に関する授業を受けること、学部長によるキャリアに関する講演を受ける。また外部講師と学生が名刺を交換するために名刺を作成する目も設けられている(それぞれの名刺には学生自身のキャッチコピーを入れることが求められている)。

外部講師の依頼にあたっては、学生にとって身近な存在と感じることが可能な年代とし、基本的に10歳代から30歳代とした。実は、外部講師をお願いするにあたり、譲れなかった点が一つだけある。それは仕事について語るときに、目がきらきらしている人を選ぶという点であった。聞くことで何を、何を学びとるか、また働くということは日々何が起きているのか、この点について学生たちに生の声を届けようことが本科目の目的であると同時に、学生にとって「モデル」となりうる存在であることが本科目にとって重要な点としたからであった。

学生にとってモデルとなる人材に接する機会を提供すること、学生らが選択の幅や物の見方を更新していくこと、本科目の目的はここにある。この科目設置の目的はキャリア発達について自ら考える機会を持つことと同時

にBandura(1971,1977)の観察学習の考え方に基礎を置く。また学生全員がこの機会を提供するため、必修科目という形を取っている。

学生時代は予期的社会化の段階にあたる。本学では、仕事そのものに接する機会はいくつか存在する。しかしながら、学生らにとって「モデル」となりうる存在を中心に設置された授業は経営ビジネス講座(旧総合講座)²以外、設置されていない。彼らにとってのモデルとなりうる人材に接する機会が身近に存在するのだろうか。それほど多くはないのではないだろうか。この科目を立ち上げたきっかけはこの疑問から始まったのであった。

参考文献

- Bandura A.[1971] Psychological Modeling : Conflicting Theories.Aldine-Athlton.(原野広太郎・福島修英訳[1975]「モデリングの心理学-観察学習の理論と方法」金子書房)
- Bandura A.[1977] Social Learning Theory. Prentice-Hall.(原野広太郎監訳[1979]「社会的学習理論-人間発達と教育の革新」金子書房)

¹ 本科目は外部講師の方々のご尽力により実現できております。この場をお借りして、感謝申し上げます。
² 経営ビジネス講座とは、経営に携わる方々から直接お話を聞く機会を持ち、企業経営や業界の問題について理解を深め、生きた経営を学ぶ授業であり、2年次に設置されている。

「キャリア形成」を振り返って

担当教員/経営学部 准教授 山口 満

平成18年度より豊橋創造大学情報ビジネス学部の講義としてスタートした「キャリア形成」は、今年度で8年目を迎えることとなった。この間、様々な業界で活躍されている社会人の方々(主に20代~30代の若手を中心に)に講師としてご協力いただいた。平成25年度は計10名・8組の講師をお迎えすることができ、これまでご講演いただいた講師の人数はのべ75名となった。ご多忙の中貴重な時間を割いて本学の学生ののためにご準備にご講演くださった皆様には、あらためて心より感謝申し上げる次第である。



本講義の大きな目的は、「社会で活躍する人生の先輩たち(本学の卒業生を含む)」の多様なキャリアに触れ、その中から学生自身が自分のキャリアを組み立てるためのヒントを見つけ出すことにある。教員が講師の方々に講演を依頼する際には、これまで歩んできた自身の人生を振り返っていただきながら、学生と社会人を比べたときのギャップや、現役の大学生に対して伝えたいことを自由に話していただくようにお願いしている。

講師の方々の仕事は多種多様であり、講演内容や講演方法も様々であった。しかし、講師から寄せられたメッセージの大部分は因らずとも共通しており、およそ次のこと-人間関係(出会い、ネットワーク)、コミュニケーション能力、態度、姿勢、自己理解、専門知識-が重要であることに言及されていた。講師の方々に仕事の実情や本音をざっばらんに

語っていただくことで、大学教員の立場からは伝えることが難しい「社会で働く人」のリアルを学生に届けられたと考えられている。

さて、この講義をより実りあるものにするためには、講演者による一方的なメッセージ伝達の講義で終わるのではなく、講演を聴講した結果として学生自身がそれをどのように受け止め、何を感じたのか、気付いたのか、をまとめることが重要である。本科目では、講演後に感想レポートを作成するよう学生に課題を与え、意見形成と表出を促した。これは、「社会人基礎力」における傾聴力(相手の意見を丁寧に聴く)・柔軟性(意見の違いや立場の違いを理解する力)、さらには発信力(自分の意見をわかりやすく伝える力)の育成も目的としている。学生から提出された感想レポートについて、部分的に抜粋して本紙面で紹介させていただいた。感想レポートの内容から、大部分の学生において自分なりの「気づき」があり、自分の意見や感想として発信できていることを確認できた。



高校を卒業して目の違いの大学一年生を対象とした講演であり、卒業後の職業人生をイメージしつつ授業もいよいようであるが、本科目を通じて受け取った講師のメッセージを忘れることなく、残りの学生生活に有意義に活かされることを願っている。

	①メンタルタフネス講座	②自己理解促進プログラム	③地域産業連携プロジェクト	④三者協働によるインターンシップ	⑤連携推進	⑥ユビキタスキャンパス	⑦大学コミュニティ
通年			・プロジェクト管理システム開発支援			・学内IT環境の維持・管理・監視 (状況に応じて改善活動) ・ポータルサイトの運営・改善 ・Sozo Platz追加開発と運用 ・HandbookおよびSozo Platzの 活用推進策の検討 ・プロジェクト管理システム開発支援	
4月	・メンタルタフネス講座の結果測定・評価 ・ベーシック講座の結果測定・評価 (～5月)	3(水) PROG実施 (対象:1年生) 20(土) PROG実施 (対象:2年生) ・スチューデントプロフィールシステム開発支援(4月～8月)	16(火) キックオフ講演会 ・プロジェクトメンバーの決定		26(金) 第1回 東海A(教育力チーム)会議 参加	9(火) プロジェクト管理アプリ導入支援 11(木) “ ・プロジェクト管理システムの情報更新 ・各種システムのユーザーアカウント作成 ・スチューデントプロフィールシステム開発支援 (4月～8月)	・前年度卒業生就業状況調査の集計・分析 (～5月)
5月	・セルフモチベーション講座の企画 (～6月)	18(土) セミナー「動き始めたジェネリックスキルの育成と評価」(主催:学校法人 河合塾、株式会社リアセック) 参加	17(金) プロジェクトテーマの決定 プロジェクト計画書の作成 ・プロジェクト計画の策定 (目的・協働企業選定・確定)		18(土) ワークショップ「教育改革の壁を破るチャレンジ」(主催:中部地域大学教育改革推 進委員会) 参加 23(木) 第2回 東海A(教育力チーム)会議 参加	・携帯情報端末の配布準備	
6月	8(土) セルフモチベーション講座 ・セルフモチベーション講座の結果測定・評価 (～7月)			水曜日 キャリアセンター事前指導 (各週) (実習先マッチング) (自己紹介書作成指導)	7日(金) 教育力改革フォーラム(第1回教育力向上研修会)実施 17(月) 教育効果測定・指導方法WG 第1回ミーティング	12(水) 携帯情報端末の配布と 25(火) 利用説明会 (対象:1年生)	・卒業生就職企業訪問(求人開拓等) (～3月)
7月	30(火) ビジネス研究講座			水曜日 科目担当教員による事前指導 (各週) (自己紹介書の校閲指導)	1(月) 教育効果測定・指導方法WG 第2回ミーティング 8(月) 教育効果測定・指導方法WG 第3回ミーティング 30(火) 第1回就業体験講座 実施		
8月	・ビジネス研究講座の結果測定・評価		6(火) 中間発表会 ・パワーポイントによる発表 ・配布資料(A4用紙1枚2段組)の作成	※2参照 実習(1～2週間) 実習先訪問 (キャリアセンター) (就職委員会教職員) (専門ゼミナール担当教員)	26、27 (月、火) 東海A(教育力)チーム 連携FD合宿研修 参加		
9月			27(金) 社会人基礎力評価シートによる評価 (教員面談・助言と自己行動計画作成) (社会人基礎力評価シートを基に実施)	※3参照 報告会資料の作成指導・発表練習 (科目担当・専門ゼミナール担当教員)	3、4、5 (火～木) 平成25年度 教育改革ICT戦略大会(主催:公益社団法人私立大学情報教育協 会) 参加 12(木) 第2回就業体験講座 参加 10(火) 東海A(教育力)チーム連携FD 「社会のニーズに対応した教育改革に向けて」参加 17(火) 産業界ニーズに対応した人材育成研修会(主催:中部経済産業局) 参加 ・キャリア形成の科目展開 (～12月) ・経営ビジネス講座の開催 (～12月)	11(水) 教員向けスチューデントプロフィールシステム(Sozo Passport)利 用説明会 13日 学生向けスチューデントプロフィールシステム(Sozo Passport)利 用説明会 17日 16日(月) スチューデントプロフィールシステム(Sozo Passport)本稼働開始	
10月	・就職ガイダンス (～2月)	・就職ガイダンス (～2月)	・プロジェクトの推進 (～12月)	21(月) インターンシップ報告会 インターンシップ座談会 ※4参照 報告書作成指導 (科目担当・専門ゼミナール担当教員) (学内校関係、企業担当者校閲)	2(水) 「産業界ニーズ事業特別セミナー」(主催:中部大学) 参加 21日(月) インターンシップに関する 企業担当者との座談会 (※1参照) 24(木) 第3回 東海A(教育力)チーム会議 参加 28(月) 第2回教育力向上研修会 実施		26(土) 卒業生就業状況調査 27(日) “ 28(月) 学内企業説明会 (OBによる説明の実施)
11月				※4参照 報告書作成指導 (科目担当・専門ゼミナール担当教員) (学内校関係、企業担当者校閲)	14日(木) 平成25年度 第1回中部圏産学連携会議(主催:中部地域大学教育改革推進委 員会) 参加 27(水) 教育効果測定・指導方法WG 第4回ミーティング 28(木) 産学協同就業力育成シンポジウム2013(主催:Future skills project研究会) 参	19日(火) プロジェクト管理アプリ ver.2.3 公開(iOS 7 対応)	
12月			17(火) 成果発表会 ・パワーポイントによる発表 ・配布資料(A4用紙1枚2段組)の作成 ・ポスター形式	※4参照 報告書作成指導 (科目担当・専門ゼミナール担当教員) (学内校関係、企業担当者校閲)		携帯情報端末の物品確認 (対象:情ビ3年)	
1月			23(木) 社会人基礎力評価シートによる評価 (教員面談・助言と自己行動計画作成) (社会人基礎力評価シートを基に実施) 30(木) 成果報告書(学生)作成 30(木) 学生座談会	※5参照 報告書作成指導 (科目担当・専門ゼミナール担当教員) (企業校関係の修正)	31(金) シンポジウム「産業界ニーズに対応した初年次教育のチャレンジ」(主催:東海A (教育力)チーム) 参加 31(金) 平成25年度達成目標に係る評価報告提出	携帯情報端末の物品確認 (対象:経営1年・2年)	・卒業生就業状況年次調査の実施 (～2月)
2月		27、28 模擬面接講座の実施 (木、金) 22(土) PROG実施 (対象:1年生、2年事前)	5(水) 成果報告書(教員)作成 第3週 プロジェクト活動総括ミーティング 協力企業座談会 ・次年度計画の策定 プロジェクト実施に関する改良 自己内省支援方法の検討	8(土) シンポジウム「インターンシップを通じた人材育成の成果」 (主催:東海Bチーム) 参加 9(日) 「教育的効果の高いインターンシップ普及推進シンポジウ ム」(主催:経済産業省) 参加	3(月) 第3回就業体験講座 実施 6(木) 第4回 東海A(教育力)チーム会議 参加 上旬 プロジェクト活動報告会 プロジェクトに関する 企業担当者との座談会 (※1参照) 18(火) シンポジウム「PBLで育む教・職・学 ー同志社大学プロジェクト科目の事例から ー」(主催:東海Bチーム) 参加 上旬 第3回教育力向上研修会	携帯情報端末の回収 (対象:情ビ4年)	8(土) 学内企業説明会 (OBによる説明の実施)
3月	27(木) ベーシック講座(2年生)	6、10 PROG実施(3年事後) (木、月)		20(木) 報告書の完成・印刷	7(金) 本年度報告書提出 8(土) 大学教育改革フォーラムin東海2014(主催:大学教育改革フォーラムin東海201 4実行委員会、名古屋大学高等教育研究センター) 参加		・卒業生就業状況追跡調査 (～4月)

※1 インターンシップ座談会に際し、参加企業より学生に求める資質等の産業界ニーズをヒアリング
 ※2 8/1～9/6の間で実習先ごとに日程を調整
 ※3 9/9、10および9/18～10/30の各週水曜日
 ※4 11/4～12/20の各週水曜日
 ※5 実習先企業からの校閲原稿の返却状況に応じて、学生ごとに個別に指導

平成 24 年度採択「産業界のニーズに対応した教育改善・充実体制整備事業」
『地域産業界連携教育力改革プロジェクト』成果報告書 平成 25 年度版

平成 26 年 3 月 26 日 発行

編集発行 豊橋創造大学
地域産業界連携教育力改革プロジェクト委員会
(渉外部キャリアセンター内)

〒440-8511 愛知県豊橋市牛川町松下 20-1

TEL 050-2017-2104

FAX 050-2017-2112

<http://www.sozo.ac.jp/>

